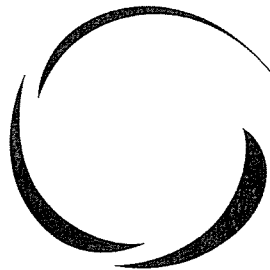

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

扇 一 登

〔元海軍大佐〕

オーラルヒストリー



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト
扇 一登 オーラルヒストリー

〈目次〉

[扇一登・略歴]／2

《第1回》

海軍兵学校入学／5 英語が役に立つ／10 任官—航海術を磨く／14 海軍大学校時代／21 米内艦長の思い出／28

《第2回》

懲罰処分／33 満洲事変から二・二六事件／34 軍令部部員時代／40 「三六年の危機」と特別大演習／44 日中戦争勃発／47 海南島を確保—汪兆銘との交換公文／50

《第3回》

「謀略綱要」の作成／57 須賀武官との関係／62 国民政府軍事委員会顧問として／68 高木惣吉の下で—調査課課員／73 松前重義の役割／80

《第4回》

「総合研究会」の顔ぶれ／87 避けられない対米戦争／92 「蟻作戦」の遂行／98 ドイツ駐在／105

《第5回》

矢部貞治宛の書翰／113 ベルリンに赴任する／116 小野寺武官との出会い／125 スウェーデン公使館の内情／130 ベルリン脱出／136

《第6回》

スウェーデン幽閉／157 敗戦の報を聞く／163 復員／167 「扇矢資材」の設立／172 海軍から海上自衛隊へ／178

《第7回》

海軍の戦略・作戦思想／187 海軍調査課「研究会」／190 ミッドウェーでの敗北／191 南洋群島の状況／193 平時封鎖作戦／194 軍令部の権限拡大／196 総力戦体制に対する認識の違い／197 「海軍反省会」と「霞会」／199 戦後を生きる／202 未公開の「日記」について／204

《第8回》

「反省会」の趣旨／211 「反省会」の顔ぶれ／215 ネイビーを残すために／219 「我が党」の士たち／223 私的な人間関係の中で／226 「日記」の評価をめぐって／231 [あとがき] 政策研究大学院大学教授 伊藤 隆／233

〈速記〉ペンハウス・神門恵子、戸部芳珠子

〈文中敬称略〉

扇一登（おうぎ・かずと）略歴（奉職履歴より抜粋）

明治34年5月24日生まれ（本籍：広島県）

大正12年 7月：海軍兵学校卒業後、少尉として『扶桑』『薄』乗組

15年12月：海軍中尉、『呂号第19潜水艦』乗組

昭和 2年 4月：『八雲』乗組（第一遣外艦隊）、その後『伊勢』『榛名』乗組

3年12月：海軍大尉、運用術練習艦航海学生、同4年11月：卒業後、『綾波』
艦装員を経て、同航海長

6年 5月：第二艦隊参謀兼副官として、旗艦『妙高』乗組、旗艦『鳥海』に転乗

7年12月：海軍大学校甲種学生、同9年7月：卒業

8年 6月：特別大演習審判補佐官、同12月23日～9年1月8日まで満洲国へ出張

9年 7月：海軍大演習部隊編成中第四艦隊参謀兼副官、その後『出雲』航海長
兼分隊長を経て、『磐手』航海長兼分隊長

10年10月：連合艦隊司令部付、連合艦隊参謀兼副官・第一艦隊副官、同11月：
旗艦『山城』乗艦

10年11月：海軍少佐、その後、旗艦変更で『長門』に転乗

11年 9月：特別大演習観艦式参謀

11年12月：軍令部出仕兼部員、対南洋方策研究委員会委員、第一部勤務

12年 4月：軍令部部員、同10月：内閣情報部情報官

12年11月：大本営海軍参謀兼海軍報道部部員、参謀部第一部兼報道部第一課勤務

13年 1月：海軍軍事普及部委員

13年12月：第五艦隊参謀〔13年12月19日～14年7月18日：南支（漁山群島
以南海南島二至ル支那沿海）沿岸封鎖交通線破壊及軍事施設ノ攻撃ニ従事
——14年1月30日～2月18日：海南島攻略作戦、6月17日～6月
25日：汕頭攻略作戦、6月26日～7月18日：南支沿岸閉塞作戦〕

14年 7月：軍令部出仕兼支那方面艦隊司令部付第三艦隊司令部付上海在勤海軍武
官付

15年 4月：中華民国派遣特命全權大使随員、同6月：国民政府軍事委員会顧問

15年11月：海軍中佐

16年 1月：海軍省調査課課員兼軍務局局員（第二課）

16年11月：対南洋方策研究委員会委員、同12月：南方政務部部員

18年10月：独国駐在仰付

19年 7月：独国在勤帝国大使館付武官補佐官、同10月：海軍大佐

20年 4月：瑞典国在勤帝国公使館付武官

21年 3月：予備役、第二復員省総務局局員、同6月：復員庁第二復員局総務部

22年 4月：依願免本官

扇 一 登

オーラルヒストリー

第 1 回

[2000 年 11 月 17 日 13:30～16:10]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

海軍兵学校入学

高橋 この間、伊藤先生と一緒にお目にかかった時に、「扇」という姓の由来についてお聞きしました。非常に面白かったのですが、テープレコーダーを持っていなかったので、記録が取れませんでした。そこで、そのあたりのお話からしていただけませんでしょうか。

扇 これは、先祖のことから言わなきゃ分かんのですが、「扇屋」という商人だったんですよ。祖父^{じい}さんは私が九歳の時に死んだから、祖父さんまではつきりしとるですけど、そのまた祖父^{ひいじ}さんとか曾祖父^{ひいじ}さんとかになると、これは商人です。商人と言っても、田舎の村では珍しい商売をやつてね、大名の長老の屋敷に出入りしていました。何を商売していたかと言うと、私の家は太田川の本流の直ぐ傍にあったのですが、釣り道具を商売して、侍の所に売りに行っていた。

だから、私の母親が、よく言っておりました。私の祖父は元平（もとへい）と言うのですが、「元平なら通せ」と。古老の侍で、よく知っていたのです。私は中学校が浅野大名の藩校だったので、同級員にそういう侍の息子さんが二、三人おりましたが、学業はあまり出来なかった（笑）。私の母親が、よく私に言っておりましたが、そういう商売をしておったのです。

扇元平、文政三（一八二〇）年—明治四十二（一九〇九）年。

高橋 手広くやっていたんですか。

扇 手広くではないでしょうが、特定の範囲と思われる。祖父は大

工の棟梁をしていた。広島神社とか寺とか、そういうものをいろいろ建て、今でも残っている。そんなようなことで、「扇」というのは「扇屋」から来たのですな。そのくせ、広島には「扇」というのはあまりないですよ。私が子どもの時によく遊びに行っていた他の村にはあったのですが、本家も後が続かなくて、今でも「扇」を生来^{なま}の姓としている家は、非常に少ないですな。

藤岡泰周「海軍大佐扇一登 昭和海軍側面史断章原稿（一一二九頁）」
〔「扇一登氏関係文書」一一—一二二〕には、扇一登氏の曾祖父（祖父ではないか？）が浅野家出入りの建築士で、手掛けた神社や屋敷などで残っているものについて、母から聞かされたことがあると書かれている。なお、「扇一登氏関係文書」の中には、藤岡氏の手になる一連の草稿の他、扇氏との確認のためのやり取り、またこれらが基になって最終的に公刊された「扇一登海軍大佐と和平工作」（雑誌『丸』別冊『戦争と人物』一三 人物・太平洋戦争）一九九五年二月、潮書房）のコピー（「扇一登氏関係文書」一一—一四六）が含まれている。

ただ、東京に來まして、田園調布の外れに住んでおったんですがね。これ（長男・暢威）の生まれたところですが、そういう頃に珍しく、「扇」という昔の子爵の家があつたんです。

伊藤 「扇」という子爵がいたかな……。

扇 それから、くだらんことですが、せつかく聞かれたから。広島大名・浅野の娘が、韓国の済州島の宗家と言いましたかな。あれに片付いて済州島に渡つたんですよ。

伊藤 対馬でしょう。

扇 対馬か。対馬に渡りまして、その当時ですけど、一族に商才があるのが多くて、今でも、あの島の実業界の大立者というのは、みんな

扇 姓なんです。私がそういうことを詳しく知ったのは、台湾の総督だった海軍の……。

伊藤 いつ頃ですか。小林さんですか。

扇 私が大尉の頃ですから。

伊藤 じゃあ、小林躋造じゃないかな。

小林躋造、海兵二六期、海軍大将。昭和十一年九月から十五年十一月まで台湾総督を務めた。扇氏が大尉時代に連合艦隊参謀を務めたのは、昭和十年十月から翌十一年十二月初めまでなので、この話は十一年秋のことと思われる。

扇 私は連合艦隊参謀をしていたので、キールン（台湾・基隆）に入港すると、総督が司令部の人たちを招待するんですよ。それで、私もその末席に何回か呼ばれとる。その席に、台湾総督府の調査課にいた役人がいて、それが「扇」と言ったのです。彼が、「扇」というものの由来を、私にずっと説明してくれて、今でも対馬では実業界を支配している大物は、みんな扇姓だという話をしていました。従って、長崎県にもおるのです。その当時は長崎の天下ですから、そんな関係で長崎にもおる。少ないけれども、その島に一番多いということを知っていました。そんなようなことで、他愛もない話ですよ。

伊藤 屋号だったんですか。

扇 屋号です。「扇屋」と言っていました。

伊藤 じゃあ、お祖父さんは、そういう仕事をしていたんですか。

扇 祖父さんは、私が九つの時に死んだんですが、九十四、五歳まで生きたですな。

高橋 かなりの長命ですね。

扇 長生きなんです。祖父さんは別に……。

伊藤 商売をしていたんじゃないのですか。

扇 （曾祖父は）商売をしとった。詳しく知らんですよ、私はね。忘れもせん、大きな農家ですからね。何枚も写真がありますが……。

伊藤 商売と言っても、農家ではあるんですね。

扇 農家ですよ。農家で商売をしとった。大きな三百坪ぐらいある家ですよ。それで、私の村でも二軒しかないんですが、あそこは堤防が切れて、毎年のごとく大洪水……。それで、一般の家は、みんな水が天井につかえるのです。私の家——これは私の二番目の家なんです、それと隣の家だけが、地面から六尺の高さに石垣を積み上げてある。

だから、私は何遍も経験しているのですが、大水の時に、畳の下、これぐらい（五センチ）まで水が上がって来るんですね。ここで止まって、上がった下がつたりするのですが、昔から畳に届いたことはない（笑）。そういう珍しいことを、私は何遍も経験しているんですよ、小さい時からね。そんなようなことでした。

「扇」という姓については、本が出ていますよ。部厚い専門書ですが、私には関係ない。

伊藤 お父様は、何をなさっていたんですか。

扇 私の父親は、養子に来てね。広島の人によく知っていますが、可部というところの、ちよつと川下に有名な八木の梅林があつて、名所なんです。梅林で、ずっと広いんです。その次男坊か何かで、私の母親のところに養子に來たんです。それが私の父親ですが、くだらん家なんです（笑）。

高橋 扇先生は、ご兄弟の中で一番下ですか。何人兄弟ですか？

扇 子どもは八人ぐらいおつて、私が最後の男ですよ。私の兄は、私より十一歳多いんです。間が、それだけ離れていたんです。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）には、明治三十四年五月二十四日、広島県安佐郡三川村字東野、農業・扇玉吉の子として生まれ、「三男二女」の三男とある。兄弟の数の違いは、病没その他で早世した兄弟がいたということか。

伊藤 八人で十一年じゃ、間がずいぶん混んでいますね（笑）。

扇 しかし、こんな奴が農家から出て来たのは、やっぱり私の兄の指導ですな。私の兄は、私は未だに非常に尊敬しておる偉い奴ですよ。独学でやってきた。兄は高等小学校から、県立職工学校というのがありましてね、それを卒業したんです。そんなのを勉強した奴は、私の村には他に一人もいないのですがね。そのぐらいの大きな村だったんですけど……。私も、高等小学校まで行っているのですよ。高等小学校に行くというのがせいぜいで、これは八カ町村の高等小学校ですから、遠いところから一時間以上歩いて高等小学校に集まっていた。八百人……。

高等小学校は、沼田高等小学校。

兄について、前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）は、次のように記す。長兄・多市は高等小学校を優秀な成績で卒業後、アメリカ・カリフォルニアに渡米。父も若い頃、アメリカに短期間渡ったことがあるという。次兄・礼市は、広島県立工業学校（乙種、建築科）卒業後、陸軍技手として岡山師団管下の建築部に入ったが、二年でやめ、広島明道中学四年に編入。その後、名古屋高等工業へ進学、卒業後は陸軍技師となり、敗戦時には勅任官待遇にまでなった。戦後、大蔵技官となり、国有財産の管理処理に従事した。

伊藤 何郡ですか。

扇 安佐郡。今、広島市の安佐区になっていますよ。この間も行つて

来たんです。そんなような環境で、その兄が私を指導してくれた。

高橋 お兄さんは、独学で職工学校まで行かれたんですか。

扇 その当時の県立職工学校を出たんです。

高橋 お仕事は、何をやっていたんですか。

扇 仕事は、建築家。後の名大を卒業しましたが、こいつを独学でやったんですよ。私を非常に可愛がってくれて、私は兄が取った中学校の講義録で勉強しました。ですが、私が幸せだったのは、寺と非常に昵懇だったことで、その坊さんがまた偉い人でした。この坊さんが宮前無涯（みやまえ・むがい）と言うんですがね。

高橋 お寺は、三川村にあるんですか。

扇 三川村。彼と小学校時代に一番、二番を行ったり来たりしていた相手が、後に軍令部総長になった谷口尚真海軍大将ですよ。その坊さんが私を育てたというか、私は兄の講義録や、兄が勉強したいろいろな材料で一所懸命やとつた。やつとるのを、その坊さんが見て、「私が教えて上げるから、家に来なさい」と言うて、その寺に行つたですよ。一週間に二回か三回行つた。その寺で坊さんが教えるのは、英語と言つたら、『ナショナルリーダー』を、方言を交えて説明してくれた（笑）。それから、『十八史略』『日本外史』……。

宮前師は、善教寺の住職（前掲、藤岡氏原稿「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）。

谷口尚真、海兵一九期、明治三年広島生まれ。

高橋 それは、小学校の頃ですか。

扇 高等小学校です。

高橋 高等小学校に通いながらですか。

扇 高等小学校。

高橋 はあ、大したものだな。

扇 この人は寺の坊さんですけども、非常な才能を持つとる人だった。後に崇徳中学という私立中学校の漢文その他の先生を、ずっと通したですな。私の村で、そういう偉い人に私は出会ったのですよ。

高橋 そうすると、中学に進むのにも、そのお坊さんが指導してくれたんですか。どの中学へ行けとか？

扇 私が行った中学というのは、大名の藩校で、修道学園という中学でした。その前、私の親父がたまたま二階から落ちて、足が立たなくなつて入院したんですよ。そうすると、私の母親は夜昼、ずっと病院に付きつ切りで、これが一年半ぐらい続いたのです。どうしても治らなくて、とうとう立てなくなつた。

こういう話も、聞いていて良いですよ。それがね、ひよつとしたことから、田舎の珍しい素人治療者がおりまして、八幡大菩薩を信仰しているとか何とかいうことで、手を当てるだけです。ただ、毎日手を当てていただけで、それで一年半で立つことが出来たですよ（笑）。こういう事実がある。

高橋 奇跡が起こつたんですね。

扇 世の中は、いろんなことがあるですよ。立てた。立つて、私が海軍兵学校に入つた時や卒業式に、みな来てくれました。私の母親と一緒に、小さな爺さんが全部来てくれて……。私が兵学校二年生の時に亡くなりましたがね。

高橋 ずいぶん早く……。

扇 しかし、私は、その親父を尊敬しとつたですよ。知恵があるわけでも何でもないですよ。

高橋 そうすると、扇先生のお父様は地主だったんですか。

扇 土地は、兵学校の入学前に、兵学校がずっと身元を詳しく調べますから、それに計算して書いた。とにかく、その当時、財産一万円です。土地が一町歩ですよ、昔の……。兵学校は、全部身元を詳しく調べますから。入学前に、それでチェックするんですから。七千人受けたんですから。半分は体格で、「耳だ」「目だ」と言つて、落とされるでしょう。残り三千五百人か三千人ぐらいの中から、海軍の拡張時代で三百人採つたですけども、私は海軍兵学校に六番で入つたですよ、独学で……。自分でも驚いた。三年終了で入つたんです。

高橋 それは立派。先生は、何故海軍にお入りになつたんですか。

扇 それは、何でもないんですよ。兄が、「試しに試験を受けてみないか」と。一番難しいのは、一高か海軍か……。一高よりも難しかったんです。だから、私のクラスに一高に通つた奴は、何人もおるんですよ。その当時、教官が言つとりました。「諸君は、とにかく選ばれた者たちで、天下の秀才ばかりが集まつとる。このうちの半分か四分の三が——その数字は忘れたんですが——全国中学校の五番以内だ」と言われた。それを、はつきり覚えとる。ただ、半分以上と言つたか、四分の三までと言つたか、それぐらい秀才が集まつとるんですね。

その一番の秀才が——今でも、その息子が京都に生きておりますが——樋端（といばな）と言いまして、明治以来の海軍切つての、山本権兵衛に相当する男だった。山本権兵衛は政治的な辣腕家だったが、この樋端という奴は学者ですよ。これは、海軍兵学校で、講義は聞いちゃおらんのです。聞いちゃおらんと言つても、講義は聞くんだけれど、ろくに記録なんかしてない。それで以て一番ですよ。飛び抜けた奴。高木惣吉さんが海軍のことに詳しいが、全海軍を通じて一番偉い奴は

誰かということをし、しばしば問題にして話をしたことがある、お互いに……。その時に、「樋端という男は、海軍切つての秀才だ」と。私と同じ農家ですよ、四国の大きな農家。徳島県じゃなくて……。

樋端久利雄、海兵五一期、海軍大佐、香川県出身。

高木惣吉、海兵四三期、海軍少将、熊本県出身。

伊藤 高等小学校から、どういう経路で行ったんですか。

高橋 修道中学にいらして……。

伊藤 高等小学校を出たら、中学の何年なんですか。また一年から入るんですか。

高橋 先生は、安佐郡の三川村の小学校を出て、それから祇園の高等小学校にいらつしやったんですね。修道中学は一年生から入ったんですね。

扇 いや、二年に入った。二年に飛んだのです。

扇（暢威）今で言う編入でしょうかね。

扇 私の高等小学校の心ある同級生は、みんな卒業すると、中学に行くんですよ。私も行かせてもらおうと思って、親に哀願したりしとったんです。しかし、そういうわけで、親父が足が立たないようになって……。兄は、ちょうどその時に名大の——その当時、名古屋高等工業と言ったんですが、その建築科を出て……。

高橋 一番上のお兄さんですか。

扇 いや、私の十一歳上の、次の兄ですよ。陸軍の岡山師団司令部に就職も決まっていたんですが、赴任できないんですよ。家で、私と二人で留守番しなきゃならんから。その間に、兄がいろいろ教えてくれたり、指導してくれたんですね。それで、どうしても私が上の学校に行きたいと言ったら、「二年に受けてみる」と言われて、二年に受け

た。十六人受けて、三人採られたうちの二番で入ったんです。だから、運も良かったんですね。それで自信を付けたですよ。独学というものは偉いものだ、と思つてね、実力的に……。

この時、次兄が就業しようとしていたのは、陸軍の岡山師団司令部ではなく、大阪造兵廠（前掲、藤岡氏原稿「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）。

高橋 どうして海軍兵学校を選んだんですか。

扇 海軍は冷やかして、運試しに受けてみる、と。そうしたら六番で入ったら、これも後に代議士になったりした有名な江藤栄吉という偉い校長だったんですが、それが全校生徒を集めて、私を表彰してくれて……。というのはね、その前の年の海軍兵学校の首席卒業生が修道の出身だったんですよ。材木屋の長男で、高橋繁二郎と言いまして、これがまた飛び抜けた秀才だった。一番で海軍兵学校を卒業した。ところが、少尉の時に艦内のボートを引き揚げろブロック台で足を撥ねられて、引つ繰り返つて、そのまま直ぐ死んだんです。惜しい人だったですね。そんなようなことがありましたよ。

受験のきっかけは、同級の熱心な友達と一緒に受験しようと誘われたこと。

また表彰云々は、扇氏が合格者の中で唯一、四学年修了者だったためとい

う（前掲、藤岡氏原稿「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）。

伊藤 結局、受かったから行つたわけですか。

扇 受けたら入ったんだ。せっかく入ったんだから、入れ、と（笑）。私の近い親戚や遠い親戚は、みな陸軍ですよ。広島は大体、陸軍の地盤ですから、みな陸軍だ。陸軍では相当な、有名な人になつとるです。自慢話でも何でもないんだけど、その一人は寝た切りの私の婆さん（妻・幸子）——いま九十歳ですよ——の姉が、雨宮の陸軍士官の所に嫁に行つて……。

高橋 雨宮巽ですか。あつ、そうですね。

雨宮巽、陸士二六期、山梨県出身、大正三年十二月少尉・歩四九連隊（山梨）付、同十四年十一月陸大卒・歩七三連隊（羅南）中隊長、昭和二十年二月参本付仰付（支那駐在）、その後参本部長（支那課）、南京駐在武官、大本営報道部企画課長、北支那方面軍司付（天津特務機関長）等を歴任、昭和十八年十月中将（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』一九九一年、東京大学出版会、八頁）。

扇（暢威） あれはだけど、山梨の出身でしょう。今は、広島陸軍の話をしていなかった？

扇 広島にも、おるんだ。広島には航空兵団長なんかやった、偉い奴もおる。だから、みな陸軍で、相当の所に行った奴がおるし、雨宮巽なんていうのは特殊な奴で……。

高橋 同じ修道中学から海軍兵学校に行ったのは三人と言いましたね。扇 いや、五人入った。それで、修道中学の名前がグンと上がった。

しかも、私が六番で入ったと、新聞にも出て……。

高橋 先生が、五人のうちの一番ですね。

扇 だから、修道は格が上がったんですよ。今は大学ですが、この間も最後の墓参りに行った時、見に行ったんです。

英語が役に立つ

高橋 海軍に入って、最初は如何でしたか。

扇 海軍に入ったら、私は出来損ないですから。あそこは、幾らでも

……。写真帖がありますが、修道中学の二年生の頃から、広島女学院という大きなクリスチャンの学校——今でもあります——のアメリカ人の婦人教授が来て、英語ばかりで授業をやるんですよ。幼稚な会話ですが……。

高橋 それは、修道中学ですか。

扇 修道中学で……。私は二年、三年、四年と、三年おったんですが、それで英語の会話に興味を持ち出してね。多少、それで実際にも通用するような会話が出来たんです。それで、しょっちゅう宮島に、自転車で遊びに行きよった。宮島に行くと、宮島ホテルの綺麗な海岸があって、宮島ホテルには、外人がいつもおるわけですね。その小さい子どもたちが、砂浜に行つて遊んでおる。そいつの所に行くんです。自転車に乗つて行つて、掴まえて、これは何を言つてもいいから、私のボロクソの英語でも通じるんですよ（笑）。会話が出来るんですわ。それが楽しみで、やったもんですよ（笑）。そんな育ち方をしてね。

高橋 宮島までは、自転車で直ぐだったんですか。

扇 うん、宮島まで自転車で一時間。だから、しょっちゅう行つたんです。大部分は一人で行くけど……。私は級長だったんですが、友達の副級長がやっぱり面白い奴で、和歌を作るし、英語も好きだった。そいつと一緒に走つたんです。

高橋 それは、アメリカ人が多かったんですか、イギリス人が多いんですか。

扇 国籍なんかは分かんが、とにかく英語民族ですよ。英語民族ばかりじゃないんだけど、そういう子どもを掴まえて……。

そんなようなことで、兵学校時代の英語の教官の一人はケンブリッジ出身、一人はオックスフォード出身。……やれやれ、（我ながら）

また面白いことをやって来たですな。海軍兵学校というのは、そういうところは自由で、兵学校の幹部が、「お前たち、日曜・休日にはフラフラしないで、外人の教授の所に遊びに行け」と。それで、私の上のクラスに一人か二人、行つとる奴がいる。それはクリスチャンで、やっぱり英語に興味を持った奴。それに誘われて、一遍行つたんですよ。両方へ行くんですよ。午前は「ケンブリッジ」に行き、午後は「オックスフォード」に行つて、それが逆になったり……。片一方はロード・テニソンの後裔で、海軍兵学校の教官に採り上げられた話はしましたかな。

高橋 いいえ。

扇 これはオックスフォードの学生で、志願して第一次大戦の前線に出たんです。出たら、負傷したんですよ。負傷して、ロンドンの陸軍病院に帰されて、そこで治療したんだけど、その看護婦に付いて来たのが、ロード・テニソンの何代か後の娘。ロード・テニソンという有名な詩人がおるでしょう。その何代か後の娘。ヴィクトリア女王から貰った大きな領土を持つとるんですよ。日本で言えば、県に相当するような広さでしょう。それで、大きな城郭がありましてね。その結婚式は、大したものだった。その写真が新聞に出とるのを、みんな見せて貰つておつたんです。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一八二）によれば、「オックスフォード」というのは、ランダル氏。夫人と一人娘、白系露人の女中一人という家族構成だった。日本滞在中に胸を病み、帰国の折には呉から江田島へお別れに行つたという。

高橋 その時は、奥様も日本に来ておつたんですね。

扇 うん。結婚して、新婚旅行のために東京へ来たんです。それを日

本の海軍に押さえられたと言つて……（笑）。「海軍兵学校の教官になつてくれ」と頼み込まれて、とうとう江田島へやって来たわけです。そこへ、私が行き出した（笑）。他愛もないけれど、こんな大きなパウンド・ケーキを、こうやって（切り分けてくれて）ね。

高橋 海軍兵学校の生徒は、何人ぐらい一度に先生に会いに行つたんですか。

扇 一人で行くのです、私は。上のクラスのクリスチャンの奴が、私を初めて連れて行つてくれた。「ここへ行つてみよう。貴様、英語が好きなんだろう」と言つて……。そう言つちやなんだけど、「あいつは英語が得意だ」というのは、教官から何からみんな知つとつたんです。そういうわけで、連れて行つてくれた。

それから、病み付きになつてね。そのうちに娘が生まれたら、バーバラという名前を付けて、可愛い娘でした。テニソンの何代目かの後裔でね。私が娘を抱っこして、その夫婦も一緒に兵学校の中を、あちこち散歩をしたり……。そして、これ（パウンド・ケーキ）だ（笑）。それで、後にはダンス。一番簡単なツー・ステップで、家族みんなでダンスをやる。それが「オックスフォード」でした。

それから、「ケンブリッジ」の所に行くと、「ケンブリッジ」がまた、どうもこうもなんののですよ。娘が二人おるんですよ。上は十八歳ぐらいだったか……。二十歳ぐらいかな。年は、よくは分からのんだけど、その妹が「ジョニー、ジョニー」と言つとつた。これが十六歳ぐらいでしょうか、可愛いんですよ。写真が、何ばでもある（笑）。マザーも立派で、（私の）好きな人だね。大事にしてくれて、御馳走してくれて、ダンスを教えてくれて、ピアノを弾いてくれてね。私は弾きませんけど、娘が弾く。そういう途方もない暮らし方をして、（私

とは）長い付き合いになった。とうとう、その「ケンブリッジ」は日本に帰化して、学習院の教授になったりして……。その娘は、それぞれ結婚して、私は戦後、スウェーデンから帰って来た時も、また遊びに行ったんです。

高橋 「オックスフォード」と「ケンブリッジ」の先生の名前は、覚えていらっしゃいますか。

扇 書いてある。下（の娘）はジョニー……。向こうも、私を「ファニー」と呼んだ（笑）。

海軍兵学校卒業前後のものと思われる写真帖には、「Joan Lee」と書き込みのある女性の写真があり、これが話題の、ケンブリッジ出身教官の令嬢と思われる。前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一―一八二）によると、このリーさんは戦後、市ヶ谷に住んでいたという。

高橋 「ファニー」と言ったら、女性の名前ですね（笑）。

扇 上の娘は、何と言ったかな。今、ちよつと出て来ない。だから、私は変な育ち方をした。だから、海軍兵学校に行っても、勉強なんかない。

高橋 当時の海軍兵学校の校長先生は、どなたでしたか。

扇 校長は、初めが鈴木貫太郎さん。

鈴木貫太郎、海兵一四期、海軍大将。大正七年十二月〜同九年十二月海兵校長。

高橋 何か思い出はありますか。

扇 それから、貫太郎さんが来て、ビンタを禁止したんですよ。それまでは、みんな一人残らず、やられたんだ。上級生が喧しい所だったんですよ。それをやるのは、みな三年生ですよ。二年生も、やらんことはないけど、滅多にやらん。三年生です。それで、私が入ってか

らは、ビンタは禁止された。ここ（頬）が腫れるぐらい、やられるんですからね。酷いんですよ。

ところが、これ（ビンタ）は禁止したけど、これ（張り倒す）を、やるんですよ。パーツと、転がされる。これは、何遍もやられた。私は、級長（部長）をしとったんです。一部長、二部長、三部長、四部長、五部長で、私は六番目の一番後任の級長をしとったから、クラス五十人を率いて、先頭に立って、ラッパで行進していた。教室に向かって生徒館から……。だけど、何かと言うと、五十人の部員の中で、誰かが雑巾の干し方が悪いとか、敬礼の仕方が悪いとか、非常に細かいことで、「扇部長、〇〇へ来い！」と、拡声器で、大きな声で呼び出されるんですよ。八時頃、真つ暗なグラウンドの、どこそこの木の下に来い、と。たった一人で行くんですよ。行くと、周りに……。

高橋 三年生が……。

扇 上級生が、大体二〜三十人以上ですね。そうして、これ（ビンタ）はやらんけど、これ（張り倒す）だ。ダーツと後ろに下がると、「そんなへつぱり腰で、どうするんだ」と、またやられる。何遍も、やられました。

高橋 それは、扇先生のしたことに対してじゃなくて、扇先生の下にいる人が？

扇 部下というか、班の人。「お前は、どこそこの、誰々の部長だろう。監督が悪いッ」と言われて、やられる。

高橋 堪ったものではない（笑）。

扇 それで、私はボロボロ涙を流して、自分の分隊に帰って行くんですよ。そうすると、「どうしたんだ？」というわけで、またそこで説教を食らうわけ。野蛮と言えば、野蛮ですがね、それで育てられたん

です。

しかし、そういう両方の家族とも、私は本当に外人惚れしたですよ。立派なもんだな、と。愛情細やかで、とてもとても……。

高橋 当時の海軍兵学校では、外国人の教師というのは外国語を教えていたと思うんですけれども……。

扇 他に日本人の英語の先生も、三人か四人おるんです。それぞれに特徴がありましてね。一切を英語でやって、英語以外は話さない人とか。その他の人は、いろいろ文法だ何だという英語自体の勉強をさせるんですな。

高橋 いずれも、若い先生が多かったですか。

扇 いや、そう若い人じゃないですよ。一番若い人はアメリカに留学しとった先生ですが、終始、英語だけで教える教授でした。

高橋 英語以外の学科は、如何でしたか。

扇 私？ 英語以外は、だんだん下がったんですよ。私は六番から、卒業する時は三十六番ですよ。

高橋 でも、上位ですね。

扇 二年生の時に、父親が死んだですからね。それで、がっかりしまして、もう兵学校ボロクソ、兵隊なんてボロクソで……（笑）。「兵隊になるような俺じゃなかったんだ」と。私は、小学校の時から絵が好きだったんです。それで、小学校の校長さんから——お嬢さんの小さな小さな写真しかないの、「これ（娘）を描いてくれ」と言われて、小学校の時に三カ月ぐらいかかって（肖像画を）描いたんですよ。よく出来たんですよ、それがね。自分ながら、よくここまで描けたな、と。そっくりで、写真なんかより、よっぽどはつきり特徴が出て……。その校長さんが喜んでね、自分の家の座敷に掛けていた。それがどう

なったかと思つて、戦後、私はその遺族を探して、京都にいたから電話して、「あの絵は、どうなったか」と尋ねたけど、とうとうどこへ行ったか分からず、今はもう諦めていますかね。

東野尋常小学校校長・小田弥市先生に頼まれ、早世した娘さんの絵を描いたとのこと（前掲、藤岡氏原稿「扇一登氏関係文書」一一—一二二）。遺族というのは、扇氏の二歳年上の友人で、モデルの弟であった小田美奇夫氏、同志社大学学長。

私の祖父さんの肖像も描いて、こんな大きな額に入れて飾りました。これは、戦災で焼けたです。

高橋 じゃあ、海軍兵学校があまり面白くなかったということですか。扇 いや、私は別の世界を持っていた。もう楽しくてしょうがなかったですよ。

高橋 兵学校にいらつしやった頃は、ずっと海軍に残ろうと思つていたんですか。

扇 うん。それは、もうしょうがないです、やり直すわけにもいから。また、兄も、「お前には向かんだろうけれども、まあ、もうそれで行け」と言ってくれて……（笑）。

ところが、英語が役に立ったんだ。私は、旅順に一年勤務しましたが、旅順の勤務の間に、支那の内乱で蒋介石と毛沢東がやっとなでしよう。そうすると、こっちはそれに巻き込まれた居留民の保護で行ってるんだから、あっちこっち、支那の沿岸を縦横に歩き回って……。

高橋 旅順は、いつのことですか。

扇 私が少尉になったばかりで、小さな駆逐艦の航海長。駆逐隊というのは、駆逐艦四隻で出来ておるんです。その四隻のうちの一隻の航海長をやった。

高橋 『五十鈴』ですか？

扇 いえ、駆逐艦『薄』（すすき）。それが幸いなことに、霧の中、雪の中、吹雪の中、あらゆる困難な中を、航海長がスーッと良くやって、奇跡というぐらいに安全な航海をやったですよ。それで、また目がいものだから、誰にも見えないものが見えるのね（笑）。そういう例が、二つ三つあるんですよ。みんな写真があるんです。吹雪になると、渤海湾の吹雪というのは、たった一本の無線の針金が、こんなに（直径十センチぐらい）になるんですよ、雪が付いて。それが全艦で……死に物狂いの航海だったです。写真がありますよ。それが後日、天覧に上ったそうです。

それで私は、いつでも大事な支那側との交渉と言うと、「扇少尉、いま短艇を迎えにやる」と、司令駆逐艦から信号が来る。そうすると正装して短艇に乗って、直ぐ行くんですよ、長剣を握ってね。「あそこへ行って、これこれこれのことを、抗議して来い。話を付けて来い」と言われる。

高橋 どんな問題が起こるんですか。

扇 撃たれるんですよ。停泊しとる支那の軍艦から撃たれて、司令が負傷したこともあった。そういう時に、直ぐ私の所へ信号が来る。「行つて来い」と。

高橋 うまく交渉できるんですか。

扇 そう。行つて、艦長に抗議して、直ぐ上海における艦隊の司令部へ報告するんですよ。

伊藤 それは、英語でやるわけですか。

扇 英語でやる。

伊藤 じゃあ、向こうも英語で？

扇 それは向こうも……。英語は、私よりうまいですよ（笑）。艦長相手にやるんですが、艦長は英国で勉強して来とるですからね。

高橋 支那側は、簡単に自分たちの間違いを認めたんですか。

扇 認めることもあれば、認めんこともある。両方言い合いで、終わる。それを、そのまま日本の艦隊司令部へ報告する。

高橋 何故、日本の艦隊に対して撃つたりするんですか。

扇 それはね、霧がかかるとるでしょう。よく分からんのですよ。反対の（敵の）支那軍が攻撃に來たと思う場合も、しばしばあるわけ。

影山 大正十四、五年ですね。

扇氏が少尉だったのは、大正十三年十二月一日〜同十五年十二月一日。また、『薄』乗組は、大正十四年十二月一日〜同十五年十二月一日。

扇 話し出したら切りがない。それで、艦隊司令部が（私を）認めてくれたのよ。何かと言うたら、直ぐ「扇を出せ」と言ったから……。海軍司令部へ報告が、みな行つとるからね。

その翌年は、年に一回、みんな考課表というのを出すんですよ。司令が自分で書いて、人事局へ出す。だから、人事局は（私が）やったことを、全部知つとる。記録が全部残つとる。

任官——航海術を磨く

高橋 少尉の頃の思い出は、他にございますか。

扇 少尉の頃の一番大きな思い出は、旅順ですね。あとは別にないですな。うかうかした学生生活ですから。それから砲術学校、水雷学校、

航海学校、航空隊に入って、そこでみんな勉強するんです。

伊藤 それは、内地に帰って来て、そういう学校に入るわけですか。

高橋 そうですね。内地に帰って来て、大正十四年に砲術学校に入っていますね。それから、水雷学校は三カ月後に入って、それから五カ月ぐらい教育を受けて、また船に乗るといふ……。

扇 自分で言うのも何だけど、私は海軍大学は二番で入っとる。勉強もしないんだけど、二番で入っとる。それから、私は航海長になるために、航海術を自分の専門としたので、航海学校は二十八人かなんかが卒業しているけど、そこを一番で出て、恩賜の銀時計を貰いました。

高橋 航海学校は、いつ頃いらつしやったんですか。

扇 大尉の時です。大尉の時に、自分の一生の専門を決める。

高橋 それから、中尉になられてから、潜水艦に乗っていらつしやいますね。これは、どういふことなんですか。

扇 あらゆる艦種に、みんな乗っとるですよ。

伊藤 潜水艦の思い出はありますか。

高橋 呂号潜水艦。

伊藤 呂号だから、大した潜水艦じゃないでしょう。

扇 これは、潜水学校の練習艦だったですからね。だから始終、宮島沖なんかまで学生を乗せて、将校を乗せて行って、実習させたわけですよ。これは、期間が短いんです。四カ月ぐらいしかなかったですな。それでも、ヨーロッパへ行く時の潜水艦生活と合わせると、潜水艦には嫌というほど乗った（笑）。

高橋 それから、『八雲』に乗り組みますね。

扇 『八雲』は練習艦隊になる予定で、『八雲』に寄せられて、練習艦隊の編成前に上海に行つとつたわけです。あれは、航海士だったん

です。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一―一八三）によると、着任直後、第一次山東出兵が始まり、『八雲』陸戦隊として上海警備の任に就く。

伊藤 上海に行つて、船は停泊しているわけですか。

扇 ずっと停泊ですよ。各国の船が停泊しておる。

伊藤 その時の仕事は、どういふことなんですか。

扇 その時は、航海士……。『八雲』ではキャプテン・ガンスルムの士官——中尉以下の部屋の室長ですね。その次の年に、高松宮様が『八雲』に乗つて、遠洋航海に行かれるんですけど、その予備（予行）のために、高松宮様と一緒に（艦の）指導官付というのを予想しての配員なんですよ。

ところが、私はそこで赤痢をやつちまつた。赤痢は、上海におる間に治したんです。治つただけけれども、「長江赤痢」というのは質が悪いですよね。あと腸が荒れて、しばしば下痢したりするんです。そういう状況になったものだから、とうとう高松宮様が乗られる寸前に、艦長が、「残念だけれども、宮様が来られて、赤痢を移したらどうにもならんから、艦長としては、どうしても君には交代してもらわなきゃ仕方ない」と。

高松宮宣仁親王は、昭和二年十二月～四年二月『八雲』乗組（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇七頁）。

伊藤 上海の時は、上陸することがしばしばあるんですか。

扇 毎日の如く上陸する（笑）。行つて、何でも食うんですよ。支那料理は、どこが旨いとか（笑）。みんな、そうですよ。それでね、ほかの士官どもは、ダンスをしに行くんですよ。支那人のクニニヤン（姑娘）と、ダンスをしに行く。私は、それには行ったことがないで

すがね。

伊藤　せっかくダンスを習ったのに……（笑）。

扇　まあ、そういう……。海軍士官というのは、フリーですからね。本当に、切りがないぐらい。

高橋　上海では、中国の軍人とは積極的に交わられましたか。

扇　中国人とは、後ですよ。中国の有名な人とは全部会いましたが、それは私が梅機関という影佐陸軍少将と一緒にやった、あの間ですよ。

影佐禎昭、陸士二六期、昭和八年七月～九年八月参謀本部支那課支那班長、十二年八月～十三年六月参謀本部支那課長（第二部第七課長）、十四年六月梅機関長、十五年四月支那派遣阿部大使随員、十五年十一月汪政府軍事顧問、その後第七砲兵司令官等を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』四二・三〇二頁）。

梅機関は、昭和十四年五月の汪兆銘来日後に進められた汪政権樹立工作の日本側実務を担当したが、第三回聞き取り（六六頁）によれば、扇氏はこれに直接関与してはいない。扇氏が関与したのは、その後、昭和十五年四月から十一月まで行われた汪政権との条約交渉。条約交渉の際、影佐は陸軍首席随員（昭和十五年四月七日付『東京朝日新聞』「扇一登氏関係文書」三一四）。

伊藤　この時は、まだ遊んでいるだけですか。

扇　うん、この時は遊んでいるだけ。上海は、目の前に見る如く覚えていきますよ。

高橋　それから、大尉になられますね。大尉になられてからは、練習艦隊の航海学生の仕事をされるんですか。

扇　はい、大尉の時に……。

伊藤　遠洋航海に行くんでしょう？

高橋　大尉になられてから、直ちに遠洋航海に行くわけですか。

扇　『八雲』を降ろされたんですね、赤痢の前歴があるというので……。

高橋　治ってから、先生は『伊勢』に乗り組みますね。

扇　『伊勢』は、予備艦ですよ。

高橋　昭和三年。それから、三ヵ月後に『榛名』に……。

扇　『榛名』は、御召艦。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一―一八三）によると、『榛名』は御大札特別観艦式の際の御召艦。

高橋　そして、大尉になられたのは昭和三年十二月ですね。

扇　『榛名』では、皇族の山科宮が少尉でガントリームに入られたから、その指導というような意味で、キャプテン・ガントリームにされたわけですよ。

高橋　練習艦の航海学生を仰せ付けられて、遠洋航海に行かれたわけですか。

扇　遠洋航海と言っても、外国じゃなくて、内地航海をずっと……。上海にも行かなかったですよ。青島までは行っただけで、大連とか、内地の各港を回って……。その時のことで、北樺太に有名なオットセイの棲む島がありますよ。それを、真上から視察できました。何十匹、何百匹と、オットセイが集まっているんです。それを、全部見ました。樺太町の専門家の説明を聞きながら、見た。これは忘れられません。この時は、軍令部総長の伏見宮様が乗られて……。

扇氏が遠洋航海に出たのは、昭和三年三月三十一日～四年五月四日。当時、伏見宮は軍事参議官（大正十四年四月～昭和七年二月）で、軍令部長（のち軍令部総長）は昭和七年二月～十六年四月に務めた。

高橋 それで、ずっと航海学生を一年間ぐらいやられますよね。

扇 はい、一年間。それで、南洋方面も航海してね。

高橋 南洋も行ったんですか。

扇 はい。

高橋 どの辺まで、いらつしやったんですか。

扇 南洋の、戦略的に重要な各島を回ったんです。

高橋 フィリピンなどは、行かなかったんですか。

扇 フィリピンは行かない。上海まででした。

この前後で話が矛盾するが、「奉職履歴」によれば、昭和三年一月に『伊勢』乗組に補せられ、三月末に小笠原二見港を発して、翌四年五月に佐世保へ帰着するまで、南洋航海（サイパン、ロタ、トラック、モートロック、メレヨン、ウルシ、ヤップ、アンガウル、パラオ）に出ている。そして、この間、昭和三年十二月に運用術練習艦航海学生に補せられ、翌四年十一月末、同教程を卒業している。

高橋 航海学生をやつて、航海術がご専門ですから、それを自分で実践で勉強するというところに……。

扇 航海学を……。それで、やつぱり勘が良かったんでしょうか、恩賜の銀時計を貰ったんですよ。

伊藤 これは、航海学校の頃の成績なのかな。

高橋 いや、「運用術練習艦航海学生を仰せ付けらる」となっているんです。

伊藤 学生だから、やつぱり学校のあれが続いているんじゃないの？

高橋 これは、学校に行ったんですか。

扇 軍艦『春日』が、学校になった。海上が学校になった。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一八三）によると、従来は

海軍大学校乙種学生として行われていたが、扇氏入学の前年から実習に重きを置いて、軍艦『春日』を舞台とするようになった。

高橋 なるほど（笑）。要するに、陸に揚がるんじゃないくて、船の上で勉強したわけですか。なるほど、そういうことか……。

扇 船の上でずっと……。学校が、そのまま移動して、ずっと。

伊藤 それは、理論もあるわけですか。

高橋 つまり、座学もあるわけですか。

扇 座学が難しいんですよ（笑）。高等数学、あれは難しい。物理とか気象学をやるでしょう。相当突っ込んでやりますよ。ほとんど専門家が来て、教えるんですから。

伊藤 先生は、そういうのはお好きでしたか。

扇 好きも嫌いもない、やらされるんだから（笑）。艦長以下、みんな、その筋の達人たちですから。教官が、みんな囲んでおるんだ。一人で責任を持つて、軍艦『春日』を動かして行く。それが、今日は誰、今日は誰というふう……。それを、教官が全部、評点を付けるんでしょうな。

高橋 その航海学生だった時に、先生の上司、あるいは艦長でもいいんですけども、海軍軍人で有名な方はいらつしやいましたか。

扇 『春日』の、その前の艦長は太田質平、それからその前は中村良三——中将で終わったですが、青森県の生んだ最高の秀才ですよ。頭がいい。しかし、私はその人が第二艦隊司令長官の時に、小参謀副官としてずっと一緒に行動したから、よく知っております。それで艦隊が港に入ると、「おい、飲みに行こう」と言つて、他にも若い幕僚二、三人と、「中村良三さんは酒が好きだからなあ」と言つて、当時の軍港のカフェに入って、酒を飲むんですね。

しかし、(中村さんは) 学問があつたですなあ。何でも、よく知つとつた。偉かつた。その参謀長が小楨和輔と言つて、これも国際会議には必ず行つていた偉い人ですよ。前に、海軍省副官をした人です。一度聞いたり読んだりしたことは、絶対に忘れない。偉い人がおるものですわ。私は、特急の展望車に乗つたのは、たった一回で、その長官と一緒に乗つただけですがね。展望車の中で、たつた二人、飲みながらずっと話をして……。海軍には逸材がおつたですよ。

太田質平、海兵三二期、大正十四年八月『富士』特務艦長、同十二月十五年十二月・兼『春日』艦長(上法快男監修・外山操編『陸海軍将官人事総覧(海軍篇)』一九八一年、芙蓉書房、一一四頁)。

中村良三、海兵二七期、昭和五年十二月〜六年十二月第二艦隊長官。なお、昭和九年三月に大将となつていたので、中将で終つたというのは、扇氏の錯誤(前掲『陸海軍将官人事総覧(海軍篇)』八九頁)。

扇氏は昭和六年五月十二日、第二艦隊参謀兼副官に補せられているが、「小参謀副官」という名称は不明。

小楨和輔、海兵三三期、大正十二年六月駐独武官、十五年十一月出仕兼東郷元帥副官、昭和二年三月〜四年五月海軍省先任副官、五年十二月〜六年十月第二艦隊参謀長(前掲『陸海軍将官人事総覧(海軍篇)』一一九頁、前掲『日本陸海軍総合事典』四四三頁)。

伊藤 先生は、お酒はだいぶ好きでしたか。

扇 朝から飲んだ(笑)。

伊藤 若い頃?

扇 嫌いなじゃないけど、お酒飲みじゃないですよ。幕僚時代でも、幕僚室で、大体八時過ぎると、「おい、一本やろうか」と言つて、みんな一本ずつ飲みよつたです(笑)。

伊藤 一本ずつ!

高橋 海軍の飲み方は違う(笑)。

扇 その当時は、ですよ。

高橋 それから、昭和四年十二月に横須賀の海軍人事部長の命を受けて……。これは何ですか。結婚前の、あれでしょう。

扇 それはね、後で続いて大阪に赴任して、駆逐艦『綾波』の航海長になつたんです。卒業した直ぐ翌年ですよ。横須賀は、そのための足留りですよ。

影山 昭和三、四、五年の頃は、どういう船でも、「艦隊は中国に行つたら、中国の警備情報を収集せよ」という命令はありませんでしたか。

扇 情報収集は、特別にやらなくても……。ただ、警備に必要な報告は電報で打ちますからね。それは、艦長が打つんですよ。

影山 じゃ、中国に行つたら、どこでも艦長は、その警備の情報を必ず送るという、それはあつたわけですね。

扇 だから、自分の本分を一所懸命やつて、それを艦長はジーツと見ておつて、評価してくれるんですよ……。

伊藤 『綾波』の機装員というのは、場所はどこですか。

扇 『綾波』というのは、その当時としては一番最新式の、一番大きな……。今でもそうです。大きな駆逐艦ですよ。これは、幾らでも話がありますが、サンフランシスコの沖まで行つて、出て来る船を——パナマ運河から出て来る船を沈めるとか、「通商破壊」を果せる性能を持っていた。それを考えた艦ですよ。それから、伊号潜水艦も飛行機を積んでおる。

伊藤 『綾波』は、どこで造つていたんですか。

扇 大阪の港に近いところの、藤永田造船所で……。

伊藤 そうすると、大阪に行っていraftしやるわけですか。

扇 造船所。

伊藤 じゃあ、大阪に行っているんですか。

扇 大阪に行ったのです。

伊藤 監督しているわけですか。

扇 そうそう。造るところから、もう「こう造れ、こう造れ」と、細かいところをね。自分が航海長になるんだから、航海に係のあるところを……。

高橋 航海に係のあるところと言うと？

扇 艦橋とか、トップであるとか、いろいろあります。

影山 船の構造も、全部やるわけですね。

高橋 それから、航海長兼分隊長になりますね。

扇 航海係の信号兵とか、兵隊はそれぞれ信号員、探信員とかね。

航海に係のある分隊ですよ。その分隊長になるわけです。

高橋 それから、第二艦隊の参謀兼副官というのは、大学に入る前ですか。

扇 これは、大学に入る前です。第二艦隊の時は、南洋の各島をずっと回ったですね。その後、二・二六事件という大事件に遭遇したわけです。これが、私の若き血を燃やしたところですよ。「何くそ！」と思ったんだ。

伊藤 だいぶ話が先に飛んじやった（笑）。後で戻ろう。

高橋 「二・二六」の話は、後でたつぷり話していただくとしまして……。

扇 私は、陸軍はボロクソですから。さっき言ったようなあれで、陸

軍との関係は深いんだけど、ボロクソですよ。こんな奴が国を滅ぼしたんだと思つて……。海軍は、もちろん一半どころじゃない、同じような責任がある。これは、はっきり告白しておきたいと思う。私は、自分たちのグループで二世、三世、親族を集めて会をやつて、今、その長老としてトップの幹事をやっていますが、そこでは一切、オフ・レコードで話をしています。

ボロクソですよ、私は陸軍に対して……。それは、今までもお話ししたかと思いますが、私は一番の顕著な実証を握つておるから……。若干の、付き合つとる陸軍の人はいますがね。付き合つとるといふほどじゃないですが、（彼らも）気の毒だと思う。陸軍も、ちゃんとした日本人ですよ。日本人であるが故に、こうなつたんだ、と。そうすると、日本人というのは、何が正体なのかというところまで、私は強く感じとるもんだから、この議論は拭うべからざるところになる。それ、もし必要なら、お話ししますが……。

伊藤 二・二六事件より前に、陸軍と何かお付き合いがありましたか。

扇 海軍は、いつも陸軍と逆の立場に立つていたし、競争的立場に立つていた。それは、艦隊を拡張するためには、海軍は予算が要るんですよ。予算で対立しているから、陸軍には決して好意は持たないし、矮小で襟度のない、あるいは常識を外れた片端者だと、どうしても考えざるを得ない。

その大本は何かと言うと、ここにあると言うんです。これは、私が調査課へ来て一年ぐらいたった時でしょうか。海軍の軍令部、海軍省、参謀本部、陸軍省という主なところの責任者、主務者が集まりましてね。水交社という大きな海軍の将校クラブで、会議や宴会をやつたんですよ。……会食、昼ですよ。その時の話だ。海軍省、軍令部からは

課長以下ですね。向こう（陸軍）は二部長——情報部長で、海軍で言えば三部長ですがね。それから、二課長で、これは謀略、作戦だ。石原莞爾さんが一部長だった。しかし、石原莞爾さんは、その日は来なかったんです。しかし、二部長の橋本ワタル（？）じゃない、名前はちよつと思ひ出さんが、橋本少将（？）です。

石原莞爾（陸士二期）が陸軍参謀本部第一部長（代理含む）を務めたのは、昭和十二年一月七日〜九月二十七日。これに重なる時期の第二部長としては、昭和十一年三月二十三日〜十二年七月二十一日の渡久雄（陸士一期、陸軍中将）と、昭和十二年七月二十一日〜十三年七月二十五日の本間雅晴（陸士一九期、陸軍中将）がおり、話題になっているのは前者か。

第一部第二課長は、昭和十一年六月五日〜十二年三月一日・石原莞爾、十二年三月一日〜同年十一月一日・河辺虎四郎（陸士二期）なので、該当するのは河辺。エピソードの時期は石原、渡の在任期間と照らし合わせて、十二年三月〜七月ではないかと考えられる。

そして、懇談に入るわけですけどね。その時、こう言っただけですよ。海軍と対立しとるんだよ、議論も考え方も……。『海軍は、アメリカ力だ、イギリスだと言つて、無闇に恐れている。何で、そんなに恐れるのか。およそ戦争というものは、魂と魂が戦をするんだ。アメリカを見てみる。五百万人のユダヤ人や、黒人が、またたくさんいる。これは、雑然たる精神構造である。魂を以て戦う戦争に、こんな者が何の役に立つか。これに比べれば、日本という国は豊葦原の瑞穂国で、食料は一切自給できるんだ。それから、細（くわ）し戈の千足（ちた）るの国だ』と、我々が覚えてもいないようなことを言う。

また、「もう一つ、大和魂だ。要するに、大和魂が戦の勝敗を決するんだ」と。それで、「生産力資源があるのかないのかということとは、

問題じゃないんだ」と言うんですよ。その通り言うんですよ。『だから、海軍がアメリカやイギリスを恐れているのが分らん』と、少将が言うんです。その部下たち、あるいは他の作戦課の連中が、みな同じことを言うんです。そこへ石原莞爾さんが来とつたら、仲が対立するですよ。石原莞爾は、私も好きですからね。

秩父宮様は、平生から接しとるからね。私は参謀本部の部員を兼ねとつたから、私の話し相手は秩父宮様ですよ。私は参謀本部に行つた時に、秩父宮様と昼休みに、窓から外を見ながら議論したことが何遍もある。で、いつも同じ結末になる。秩父宮さんは、「陸軍としては、北支・蒙疆を物にする。そうすれば、ここに経済圏が確立する。国力は心配ないんだ」ということを、強く言われるんです。それで、いつでも、そこで物別れです。私は遠慮しないんだから、秩父宮さんに言うんです。「何ですか、それは。それなら、タングステンとかモルブデンとか、どうしても戦争になくちやならん金属が、北支の、どこから出ますか。ある程度出るかも知らんけど、そんなもので足りるか。経済圏として、北支がどれだけの価値があるか。僅かに大豆だ、何だという雑穀が、多少はあるかも知らん。あるいは、塩はあるけど、それじゃ戦は出来ないんですよ。どうしても、南方から取らなきゃならん。南方から取るのには、取る方法が必要なんだ。南方と戦をしちゃならんのだ。商売によつて買い込むより、他ないんだ」と。海軍は、それで苦心をしとるんですけどね。それを言うんですよ。そしたら、「見解の違いだ。陸軍は強く、必ず北支を物にする」と、極論するんですよ。秩父（宮）さんは……。

それで、私は軍令部へ帰つて来て、高松宮様とじつくり話をする。「私は、今日はこれこれのことを話した。秩父（宮）さんは、どうし

でも譲られないんです」と言った時、高松（宮）さんが言われた言葉は、私は今でもはつきり生で覚えている。「兄貴は、駄目ですよ。あれは、陸軍に成り切っていますから」と言われた。私は、軍令部一部の部長直属だったから、高松（宮）さんとは日頃、海軍省の食堂で飯を一緒に食べていたんです。その日、帰って来て、直ぐ言われたことは、「兄貴は、駄目ですよ。あれは、陸軍に成り切っていますから」と。そのことは、私はよく覚えています。

秩父宮雍仁親王は昭和十一年十二月参謀本部付、十二年三月～十月まで英国王戴冠式参列のため渡欧、十三年一月～十六年三月大本営参謀（戦争指導班）仰付（前掲『日本陸海軍総合事典』九三頁）。同時期、高松宮は軍令部諸部員を務めた。

というのは、高松宮様と、近衛文麿総理との間の連絡係が細川護貞さん——後の細川護熙総理の父親——で、高木さんが総理のブレーンだったというか……。『磐手』の艦長——私が（乗り組んだ時の）艦長は嶋田繁太郎じゃなくて、その前の……。

高木惣吉は、昭和十一年十二月に臨時調査課課員を命ぜられ、翌十二年十月同課長、十四年四月調査課長となり、調査課にいた扇氏の上司であった（高木惣吉「奉職履歴（写）」扇家文書）。

高橋 米内さんですか。

扇 そうそう、米内光政。あれは、私の艦長だったんだ。

米内光政、海兵二九期。大正十二年三月『磐手』艦長、十三年七月『扶桑』艦長であり、扇氏が『磐手』乗り組みの際の艦長を務めた（前掲『日本陸海軍総合事典』二四六頁）。

伊藤 遣外艦隊ですね（扇氏註・練習艦隊）。

米内は、昭和三年十二月十日～五年十二月一日まで、第一遣外艦隊司令官

を務めるが（前掲『日本陸海軍総合事典』四四六頁）、扇氏の同艦隊勤務とは時期がズレている。
扇 当時は、（東條英機の）暗殺計画までやったでしょう、高木さんがね。

海軍大学校時代

高橋 話をぐっと戻しまして、昭和四年三月の頃のお話ですが、先生は海軍大学校に入る前に結婚なさいますね。

扇 あれは卒業した時、航海学生の中に結婚したんです。

伊藤 これは、どういう経緯で結婚なさったんですか。

扇 私の田舎の家の、隣の田村という旧家の内儀さんが持ち込んだ話ですよ。持ち込んだ話が、雨宮という陸軍の……。

高橋 確か、雨宮巽だと思いました。海軍の将校が結婚する場合には、届出もうるさいですし、いろいろ調べたものを出さなきゃいけないでしょう。

扇 うるさい、うるさい。ああ、出さなきゃいけない。向こうが調べるんですよ。役場へ行ったり、近所で聞いたり……。

高橋 噂とか、どういう人柄であるとか……。

扇 もう、詳しいものを出さなきゃいけない。そうでないと、許可はしないですよ。それは、海軍士官も当時、若気の至りで芸者と結婚したり、いろいろなケースが——たくさんはないんだけど——たまにはあるわけです。だから、海軍省は健全なる者を求める。それは、貧乏

だから、どうこうと言うことじゃない。ただ、いわゆる社会的な体面を保つのに、傷付くようなことは許さない。そういうことらしいですよ、僕の想像だけ……。

高橋 海軍の士官が結婚なさる場合、上司とか海軍の偉い方の娘さんを貰ったりするということは、よくあるんですか。

扇 それは、押し付けられて(笑)。たくさんあるですよ。

高橋 先生は、押し付けられなかったんですか。

扇 ……られた。……られたのを、蹴った(笑)。

高橋 それで、よろしいんですか。

扇 やっぱ若い時で、そういうことは嫌だ、と。ワイフのお蔭で、どうこうということは嫌だ、というのが先入観にあったです。

それは、私ばかりじゃない。しかし、私のクラスには、たくさんいるんですよ。少なくとも、三人ぐらいは……。一人は、私の無二の親友で、山本祐二。豊田貞次郎という外務大臣をやったり、軍需大臣になったりした人——あれの娘を押し付けられた。これはね、山本祐二の所は立派ですよ。鹿児島出身だけど、親父は銀行の頭取か何かで、ちゃんとした家であって、フェース・マークが綺麗ですよ(笑)。それで、豊田さんの娘を押し付けられた。

山本祐二、海兵五一期、鹿児島出身、鹿児島貯蓄銀行頭取・山本平吉の次男、妻は豊田貞次郎海軍大将(海兵三三期)の娘(前掲『日本陸海軍総合事典』二四四頁)。豊田は昭和十六年四月商工大臣(第二次近衛内閣)、同年七月〜十月外務兼拓務大臣(第三次近衛内閣)、十九年十月〜二十年四月内閣顧問(小磯内閣)、二十年四月〜同八月軍需大臣(鈴木内閣)を務めた(前掲『日本陸海軍総合事典』二二四―二二五頁)。

高橋 ワッ、大変だ。

扇 これは、親類付き合いをやっているんだ。(山本には)私の息子と疎開を一緒にの所でやった息子が二人いて、みなエール大学か何か外国の大学を出て、弟の祐義は現在のヴィクトリア女王から(勲記に)サイン入りで勲三等を貰っている。

扇(暢威) エリザベス女王ね。

扇 自分が勤めている会社の、ロンドンの店長を十年ぐらいやった。

高橋 押し付けるのを断るというのは、大変なことじゃないんですか。

扇 山本五十六の姪御さんか何かだった(笑)。

高橋 あら、それを断って問題なかったんですか。

扇 いや、それを持って来たのは、大佐の内儀さんだ。誰だったかな。それが私の所に持って来たけど、「いや、まだ結婚を考えておりません」と言った。それは、私の上のクラスの、海軍大学で一緒だった奴の内儀さんになって行った。どこかに持ち込むんですよ。うっかりしちゃおれない(笑)。まだ他に、二人ぐらいおります。

高橋 それから先生は、海軍大学校に学生で入るのが昭和七年の十二月で、九年七月に海軍大学校を卒業なさっていますけれども、海軍大学校の頃の、よく覚えている思い出はございますか。

扇 ありますよ、ある。

高橋 校長先生は、どなたでしたか。

扇 校長は、井上継松さんでした。中将で終わったでしょうか。その前が中村良三さんだったね。

海軍大学校長は、大正十五年十二月一日から昭和四年十一月三十日まで中村良三(海兵二七期)、昭和四年十一月三十日から七年二月八日まで高橋三吉(海兵二九期)、昭和七年二月八日から十月一日まで百武源吾(海兵三〇期)、昭和七年十二月一日から八年十一月十五日まで加藤隆義(海兵三一

期)、昭和八年十一月十五日から十年十二月二日まで井上繼松(海兵三二期)で、扇氏が学中の校長は加藤と井上(前掲『日本陸海軍総合事典』四二九頁)。

高橋 「海軍大学校に行くように」という推薦は、誰が、どこが推薦してくれるんですか。

扇 学術試験と、論文ですよ。

高橋 誰が「受ける」と言うんですか。自分が「受ける」と言つて、海軍大学に入るんですか。それとも、誰かが?

扇 志願するんです。

高橋 海軍大学校に行く前は、いわゆる『綾波』の航海長ですね。

扇 前は、二艦隊参謀。

高橋 そうすると、二艦隊の一番偉い方が、「お前、受けてみる」と言うんですか。どういう形で?

扇 それは、艦隊では身上一切の責任者は参謀長なんです。私の時の参謀長は小楨和輔さんと言つて、これは学者ですよ。私も、この人を尊敬します。

小楨和輔については、一八頁の註を参照。

高橋 そういう人が、「扇、お前受けてみる」と言うんですか。

扇 いや、志願は、みな個人がやるんです。みんな受けたいんですよ。高橋 陸軍とは、ずいぶん違いますね。

扇 それはもう、みんなが受けたい。受けたいが、筆記試験が難しいんですよ。

高橋 じゃあ、ずいぶん門戸は開かれているんですね。

扇 高等数学でも何でも、学問(試験)です。それと、実地の海軍そのものについての論文。例えば、私の時は、「如何にして太平洋戦争

で、米国に勝つことが出来るか」ということが表題ですよ。それに ついて、論文を書け、と。だから、とても大尉やなんかで、そんな大きな論文は書けないですよ。戦術戦略の「目」があるわけじゃないんだから……。

高橋 そういふのは、海軍大学の想定問答集みたいなものはあるんですか。

扇 いやいや、そういうものはない。

高橋 誰かが教えてくれるんですか。

扇 幕僚は、みな海軍大学を出ているから、平生でも話してくれるんです。「太平洋戦略というものは、こういうものだ」ということを、平生から話してくれる。それで、今度は自分でまとめて、一つの論文にして、それを出す。それは、一人で書かされるんですからね。もちろん、何を見てもいいんだし、自分の下宿で書いてもいい。そういうものを出す。

それから、最後の時には口頭試験。海軍省の大広間に、主なる海軍省の課長以上、関係者、教育局の連中、それから海軍大学校の教官など、二十人ぐらいがずらりと並んでいる。その真ん中へ立たされて、口頭試験をやられる。私をやつたのは、井上成美さんですよ。これは頭の切れる偉い人で、いろいろあるんですよ。(質問を)捻られて、「それでも、ええのか」「それでも、ええのか」「この反対は、どうなんだ」と、次々と突き付けられる。それで、それに対する切返しをやる。やつて、とうとう行き詰まって、「いや、今のは根本において間違っております。自分の言いたいことは、本当はこうです」と言つて切り返すか、そうじゃなくて、間違つておるのを知りながら、それを通すか(笑)。そこらは見る人によつて……。その反応を見るわけ

です。長いですよ、三十分ぐらいやられるんです。もみくちゃにされて……。

井上成美、海兵三七期、昭和五年一月海軍大学校教官、七年十一月軍務局一課長（前掲『日本陸海軍総合事典』一六五頁）。

高橋 陸軍ですと、奇問とか珍問と言われるような問題を出して、相手をへこますんですけど、海軍の場合も考えられないような奇問とか珍問というのはあるんですか。禅問答みたいな質問はあるんですか。

扇 いや、大体、大きな問題です。どうにでも言えるような問題が多いですな。私も、もみくちゃにされたけど、一つの筋だけは主張した。そして最後に、井上さんに、「よし」と言われた。「よし」というのは、通ったのか、通らんのかが分からん（笑）。

高橋 「太平洋戦争は、アメリカと戦うことになったら、どうしたらいいか」という論文には、どういうふうにお答えになったんですか。

扇 それまで、ずっと体験として、もう伝統的に、代々そういう頭の人を考え抜いてきて、通り相場になっている考え方があって、それをみんながいろいろな場合場合に教えてくれるんだから……。大学出の幕僚が……。

高橋 その場合、例えば日本が真珠湾などに先制攻撃を加えるということは、前提になっていたんですか。

扇 その時は、そういうものはない。

高橋 そうすると、アメリカの艦隊がやって来るのを待つて……というんですか。

扇 だから、日本の海軍の「製艦（建艦）方針」は大型潜水艦で、サンフランシスコ、パナマの付近で海岸に攻撃を加え、出て来る艦隊に対して先制攻撃を加えるというような筋ですよ。それから後は、向こ

うが艦隊を西に向けて進んで来る。その間、ずっと後になり先になりして、好機あれば魚雷攻撃をするというような筋で、そういう長年通つておる筋がある。その筋を書いたんです。

それを言つとる間に、「これだったら、どうなる？」「こうやったら、どうなる？」と、もみくちゃにされるのですよ。出て来た時には、もう冷や汗です。誰でも、そうなんです。だけど、その中で意志が堅確か、確信があるのか、あるいは頭がひらめいて、それを変更していく決断が出来るのか、というようなことをマークされて……。

高橋 海軍大学は何人ぐらい受けて、何人ぐらい通ったんですか。

扇 何人受けるかは、私も分からんですがね。五く六十人、一緒に受けとるでしょうね。大体、その時期になると、みんな受けるんですから。自信のない者は別としてね。

伊藤 何人入るんですか。

扇 合格は二十四、五人です。これは何番で入学できたかということ、人事局が一切言わないです。

伊藤 言わない？

扇 ええ、海軍省は……。ただ、人事局におった先輩がいますから、それが聞いて来るんですよ。私は、他の参謀が人事局に行ったら、「君は、二番だよ」と。卒業の時は、八番ぐらいだったです。

影山 在学期間は、一年半なんですね。

高橋 昭和七年十二月に入つて、九年の七月下旬に卒業なさっています。

扇 それはね、何か特別大演習があつて、早く卒業になった。その代わり、あと何カ月かを、また後で講習として海軍大学に行つたです。

高橋 昭和九年の特別大演習。

卒業は昭和九年七月十九日。同日、昭和九年海軍大演習部隊編成中、第四艦隊参謀兼副官（七月二十日編成、同月二十二日編成解除）。同年十月二十四日から十一月六日まで、海軍大学校での臨時兵術講習に従事している。

扇 まあ、普通は二年ですよ。特別大演習があつたでしょう。

伊藤 教官の中で、印象深い人はいますか。

扇 まあ、宇垣纏さんよね。連合艦隊の参謀長をやったでしょう。私は二回、あの人の下で働いたんですよ。最初は、あの人が第二艦隊の先任参謀で、私は初めての大尉参謀……。『神童』と言われた彼が長官ですよ、よく酒を飲みに行った中村良三中将。

宇垣纏、海兵四〇期、昭和六年十二月第二艦隊参謀、七年十一月海軍大学校教官、十年十月連合艦隊参謀。連合艦隊参謀長は昭和十六年八月十一日〜十八年五月二十二日（前掲『日本陸海軍総合事典』一七一・四四二頁）。

中村良三が第二艦隊司令長官を務めたのは、昭和五年十二月一日〜六年十二月一日（同前書、四四三頁）。

その次（の第二艦隊司令長官）は、末次信正。末次さんに可愛がられた。末次さんは、今でも好きですわ。好きですがね、またこの人ほど出来上がった人も少ないと思う。いわゆる統帥者として、海軍第一ですよ。それは、私もあちこちに話したり書いたりしとるんですが、私が大学に入った年の十二月末に、末次さんが「扇参謀！」と言って、艦隊幕僚全員で送別会をやってくださったんですよ、呉で。その送別会に長官も来られて、呉でゆっくり飲んで食べて、賑やかだったんですよ。

末次信正、海兵二七期、昭和六年十二月一日〜八年十一月十五日第二艦隊司令長官（前掲『日本陸海軍総合事典』四四三頁）。

最後の時に、「ちよつと来い」と。席を外して、片隅へ行った。こ

れは、もう忘れ難い。末次さん曰く、口を開いた途端、「人間、十知れば十迷うんだ」と。「自分は、大学に行って何を勉強するかについて言おう」と。「人間、十知れば十迷うんだ。十迷つておつては、戦は出来ないんだ。自分の前任者の中村良三は、神童と言われておつた。一度聞いたたり、読んだりしたことは、絶対忘れない。神童だ。ところが、演習をやると、いつでも負けておる。十知することは、必要だ。必要だけど、十迷つておつたんでは、統帥は出来ない」と。「だから、我々は主体性を持たなきゃいかん。自分ならどうするということを、いつでも考えていなければいけない。問題が出る度に迷つておつたんじゃ、統帥者の価値はない」と。これは、いいことを言つた。今でも、私はそれをはつきり覚えておるし、海軍でも何でも、何遍人に話をしたか分からん。書いてもおります。

高橋 末次さんは、ワシントン軍縮会議とかロンドン軍縮会議の頃の話をしたことがあるんですか。

末次は、大正十年九月から十一年三月、ワシントン会議全権委員随員（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇二頁）。

扇 私は、末次さんの家にも何遍も行つとるから。末次さんは、後にその人柄、機才、素質において貴重な存在になられて、海軍では尊敬する人は、非常に尊敬する。ところが、そうじゃない海軍省側は、「あれは、固過ぎて自由が利かん」と。ところが後に、私が大学に入ってからですが、末次さんは内務大臣になった。私も、新聞やいろいろなものを読んだけど、末次さんは相当な人気なんですよ。

それで、私は大学の学生の時、国会に傍聴に行つたんですよ。そうしたら、あの人の衆議院の演壇に登つて来て立つまで、その挙措、姿を見ることが出来たんですが、「ああ、さすがだな」と思った。あの

人は内務省に入って、内務省の中堅所をギョツと握ったので、その中に末次派がだいぶ出来た。その翌日の朝日新聞を見たら、「天声人語」の冒頭に、「末次長官が演壇に立って、施政（方針）演説をやった。その風を切るがごとき非凡な態度に、まず皆、魅せられた」と。「天声人語」の書き出しが、そうなっている。それが、あの人の性格なんだ。

末次は、昭和十二年十二月十四日から十四年一月五日まで、第一次近衛内閣の内務大臣を務める（秦郁彦編『日本官僚制総合事典 一八六八―二〇〇〇』二〇〇一年、東京大学出版会、一八頁）。扇氏は、このとき既に海軍大学校を卒業、大本営海軍参謀等を務めている。

私は、平生見とるんですよ。艦橋の前に、こうやって立って、黙って見とる。そして、（長官が）命令を出す。命令を出す時は、一言で言い切るんですよ。「信号兵、命令！」と。艦隊司令長官命令ですからね。全艦隊に出す時は、手旗でやる場合もあるし、「Z」というような旗流信号——旗二く三枚でやる場合もある。それは、信号書に文言が書いてある。それが、全艦隊にバツと、一瞬にして伝わるんですよ。その状況を見とった。

ところが、その時の中村参謀長は末次さんの真似が出来ないんだ。「信号兵、信号、艦隊命令！」と、その文句がなかなかまとまって一言で出ない。「〇〇、〇〇、いや、△△」と言い直したりして。そうしたら、長官が怒ってね。「参謀長、艦隊命令を出す時には一口で言え！ そんなに吃ったり、ぐずぐずしたりしたら、みつともないッ」と。少将が怒られるんですよ（笑）。こういう経験を持つとる者は、他におらんですよ。私は、後ろにおった。長官だから、見事です。これこそ統率者の、将帥としての全価値だよ。

末次第二艦隊司令長官の下の参謀長は中村亀三郎、海兵三三期、任期は昭和六年十月十日〜八年十一月十五日（前掲『日本陸海軍総合事典』四四三頁）。

高橋 末次中将は、加藤寛治大将に対して、ものすごい信頼感というか、尊敬の念を持っておったというのは、本当ですか。

扇 そうです、そうです。私は、加藤寛治さんの所にも行っただす。他にもう一人、加藤寛治のファンが私のクラスにおりましてね。そいつは、平生から行っとなるんですよ。同郷か何かですよ。それと三人ぐらいで夜、行っただすよ。奥さんも出て来られて、夕飯を御馳走になつて、酒を飲んだ。

加藤寛治、海兵一八期。扇氏の海大在学の頃は、昭和五年六月軍事参議官、十年十一月後備役（前掲『日本陸海軍総合事典』一八〇頁）。

末次さんのことで、一番印象に深いのは、そういうことですよ。凛としておる。自分が、百七十隻の陣形運動を指揮している。信号一つで、ダーツとやるんですよ、百七十隻が……。艦橋の、その真ん中におつて見とる。「いや、よくぞ、海軍士官になった」と、私も思いましたね。私は、ただ下っ端で、こうやつとるだけなんだ。そういうことです。

それで、話がズレてくるけど、私は御召艦の乗組になつてね。

伊藤 それは、いつの話ですか。

扇 特別大演習の時、「二九三六年の危機」と言われた年ですよ。

高橋 大演習の時、お乗りになった船は何ですか。

扇 御召艦『榛名』——これですよ（写真を見せる）。この中に、私が海軍大学の一年生でおるんですよ。海軍大学から御召艦の統監部の部員になったのは、三人しかいないんですよ。審判官ですよ。三人のう

ちの一人は、後に侍従武官長になった野田という男で、兄さんが昭和天皇の扶育係をやった。皇室系のね。もう一人は山本祐二で、豊田大將のお嬢さんと結婚した奴。その三人が、これ……。

「奉職履歴」によると、海軍大学校一年目に当たる昭和八年六月一日に、昭和八年特別大演習審判輔佐官を仰せ付けられている。また、昭和十一年にも、特別大演習観艦式参謀を仰せ付けられている。

野田六郎、海兵五一期、昭和二十年二月一日から十一月三十日まで侍従武官（前掲『日本陸海軍総合事典』二七五頁）。侍従武官長というのは、扇氏の錯誤。

野田氏の兄については、不明。

それで、少佐以上は陛下と一緒に、食卓で陛下の御陪食に連なることが出来る。大尉は駄目なんだ。大尉は上甲板で……。陸海軍の大臣や大將が、みんな来ていますから、陛下のお声が掛かるあれはないんです。だから、私には、そういう機会が一遍もなかった。

高橋 加藤寛治さんについての思い出はありますか。

扇 寛治さんは、そうないんですよ。寛治さんのところへ時々、その友達と一緒に伺っただけで……。

高橋 それは、海軍大学校の時ですか。

扇 大学校の時。

高橋 海軍大学校の頃、そういうふうにして大先輩をお訪ねするということとは、よくやるものなんですか。

扇 そうですね。これは、思い思いです。いろいろ私も行ったりしますが、まあ、これというあれはないですな。

高橋 鈴木貫太郎さんのお宅に伺ったことはありますか。

扇 お宅に伺ったことはない。

高橋 豊田副武さんは？

扇 副武さんも、ない。副武さんはないけど、あれは私が軍令部の部長直属でおった時の軍務局長ですから、毎日毎日のことを、みな知っています。

私と同じように、海軍省で国策・戦争指導を担当している者に藤井茂という人がおられた。対支政策の主任（主務）者です。それから神重徳、これは滞独で、ドイツから帰って来たばかり。この人は、ファッシヨ的な考えですよ。性格的にはつきりしとつて、政策もヨサリ（？）と言っているくらい立案した。しかし、その人（豊田）が政策問題の重大問題の原稿を書く時、あるいは訓令、命令を出す時には、必ず私のところに来とつたです。それで、「あいつらは海軍省の事務で忙しいから、おい、お前書いてくれ」と、私に言うんですよ。私は（藤井、神の）二年、三年後輩なんです。兵学校時代から後輩で一号・三号でやられるものだから、私に任すんですよ。だから私は、参謀本部と相談して、海軍の案をことごとく筆にしておる。海軍大臣の答弁から、議会における演説から、総理大臣のものまで書きました。

豊田副武、海兵三三期、軍務局長は昭和十年十二月二日から十二年十月二十日まで務める（前掲『日本陸海軍総合事典』四一〇頁）。

藤井茂、海兵四九期、昭和九年五月アメリカ駐在、十一年九月軍務局一課局長、十五年四月軍令部出仕（中国出張）、十五年十一月軍務局二課局長（前掲『日本陸海軍総合事典』二二八頁）。

神重徳、海兵四八期、昭和八年十二月ドイツ駐在、十年四月ドイツ大使館付武官補佐官、十一年三月軍務局一課局長、十四年五月第五艦隊参謀（前掲『日本陸海軍総合事典』一八三頁）。

高橋 それは、米内さんの頃ですか。

扇 嶋田さんの時ですよ。嶋田さんの変節なんていうのは、苦々しいことだったんですがね。米内さんについても、みな書いたですから……。

嶋田繁太郎は昭和十六年十月十八日から十九年七月十七日まで、米内光政は昭和十二年二月二日から十四年八月三十日まで、および十九年七月二十二日から二十年十二月一日まで海軍大臣を務めた。なお、米内は昭和十五年一月十六日から七月二十二日まで総理大臣を務めた（前掲『日本官僚制総合事典 一八六八―二〇〇〇』一八一―二〇頁）。

米内艦長の思い出

伊藤 書いてあってもいいですから、米内さんの思い出を話してください。

扇 たくさんありますよ。私は、あの人の艦長で指導を受けたんだから、何ほでもありますかね。一番いま思い出に残っているのは、遠洋航海の時、あの人が艦長で、私が候補生……。私ばかりじゃない、候補生はみんな可愛がられて、大きく米内さんの影響を受けているんですよ。

米内光政が『磐手』の艦長（当時、大佐）だったのは、前出のように大正十二年三月―十三年七月（前掲『日本陸海軍総合事典』二四六頁）。

戦後、緒方竹虎さんが海軍省調査課の政治懇談会で、一番の長老だったでしょう。私も研究会でしょっちゅう会って、あの人の意見を聞いたり、議論を戦わせたりしました。それで、緒方竹虎さんが自分で

言い出して、米内さんについて『一軍人の生涯』という本を書いた。それを書く時に、私も海軍出身の委員として選ばれた。緒方竹虎さんの書いた本の中に、「最も短い英語演説」という表題だったと思うんですが、その項は私が書いたんですよ。緒方さんはそれを見て、「これは面白い」と。その本は、文藝春秋社から出しました。それは文藝春秋の主筆でもなかったと思いますが、出版部員の方が（原稿を）まとめて、本を出したんです。その中の、米内艦長と候補生との関係の一例は、私が書いたんです。緒方さんはそれを読んで、「これは面白い、ぜひ載せてもらいたい」と文藝春秋に言って、そのまま出ています。

緒方竹虎『一軍人の生涯―回想の米内光政―』一九五五年、文藝春秋社。
伊藤 本を持っていますよ。

扇 その中に書いてある話で……。練習艦隊がニュージーランドのウエリントンに入った時に、ある日曜日に米内さんが自分で言い出して、「せっかくニュージーランドに来たんだから、町のバターやチーズなんかをつくっている工場を見に行きたいな。誰か候補生の有志、付いて来い」と言って、自分で先頭に立って上陸したんです。そして、汽車に一時間ぐらい乗って田舎に行っただんです。田舎へ行って、日曜日だったけど、工場に予め「見せてくれんか」と言うといったら、日曜日でも出勤してくれていて、ちゃんとチーズやバターをつくっているところを見ることが出来た。そして、サンプルを貰ったりして……。何人ぐらいおったかな。三十人ぐらいなものでしょうね、米内さんと一緒に行ったのは。それからトラックに乗って、その当時の世界的な流行歌を――私なんかも、他の港で覚えて知ったことから、それを歌いながら町を回ったです。米内さんも、くつろいでね。

それで最後に、これも予め言うといて、小学校に入っただすよ。日曜日にも拘わらず、小学生がみんな集まって、先生たちもみんな集まって、グランドの真ん中へ階段をつくって、艦長をそこに立たせて……ということにしてあったんです。そこへ行った。で、校長が子どもたちに、いろいろ長い話をしたですよ。「日本から来た練習艦隊の艦長・米内さんだ」と。これは、第一次大戦が済んだばかりだったです。「戦争中、日本の海軍は豪州の艦隊を守って、兵隊を守って、ヨーロッパとの間を護衛してくれた。非常に大恩がある日本海軍が戦後初めて、ここへ来られた」ということを長々と話して、「今、ここに艦長がおられるから、艦長から皆さんに話をして貰う。よく聞くように。東京の大震災が済んだばかりの時だから、たぶん大震災の話も出ると思うから、みんなよく覚えておきなさい」と。かなり長い間、前置きを言うて、米内さんに「どうぞ」と。米内さんは、ニヤリとしながら階段の上上がったですよ。

その時、私は直ぐ傍におったんです。米内さんは、何ほ長い間、外国におったからと言っても、この小さい子どもに対して、英語で演説なんか出来るはずがないがな、どうするんだろうと思って、こっちは冷や冷やしとる。本当に、冷や冷やだった。そしたら、米内さんは少しも騒がず、ニヤリとしながら立って、しばらく見て、「I am very glad to see you. Thank you.」(笑)。それで、またニヤリとして、こうやった(手を挙げた)。そうしたら、子どもたちはワイワイ言い出して、「キャプテン、キャプテン」と言って、みんな取り囲んでしまった。

それが、後があるんだ。あそこに、私のクラスメートのお嬢さんがおるんですよ。二人姉妹の妹のほうで、音楽家なんですが、ウエリン

トンにおるんです。どうしてそこへ根を下ろしたかと言うと、戦争後(第二次大戦後)に豪州軍が——あれは連合軍だから、日本へ呉より入ったんです。米英仏……。

伊藤 豪州の軍隊は、中国地方に行ったんですね、広島とか……。扇 (練習艦隊がウエリントンに行った時に) ニュージーランドの陸軍の少佐で、日本語を勉強した人が連絡将校としておるんですよ。その人は日本語が上手いんですが、『磐手』に來ましてね。米内さんに、「自分の家に招待したいから、候補生を四、五人寄越してくれ」と、頼んだんです。そしたら米内さんが、まあまあ英語の好きな奴を見て、「お前たち、あそこへ行つて招待を受けて、パーティをやつて来い」と言われたんです。行っただすよ。それは、ウエリントン郊外で、電車に三十分乗って行かなければならないところだった。その家の官舎に行っただす。その家の親戚と、隣の家の人なんか五、六人集まって、飲みながら御馳走になったり、ダンスをしたりして……。

(少佐の名前は)「ブラザ」と言っただか、その奥さんがヴァイオリンが巧いんですよ。生徒を自分の家に呼んで、教えたりしとる。行ったら、ダンス曲だろうが、何だろうが弾くわけです。たまたま一緒に行った奴が、『越後獅子』の軽快な日本の歌があるでしょう、あれの楽譜を持っていたんですよ。何のために持ったか知らんけど、たまたま持っていたので、「これ、日本の歌だ」と言ったら、その奥さん、直ぐ弾き出したです。それは速い歌なんですが、直ぐやったんです。私は感心したですよ。演奏しとるところを、写真も撮つてある。その少佐が、今度は豪州の占領軍の司令官として、戦後(第二次大戦後)直ぐ日本に來た。呉の鎮守府司令長官の官邸に入つて、一年半か二年か、おっただす。そのことは、私は知つたんですよ。

「プラザが来た」ということは……。その奥さんとは、当時、手紙の往復なんかしてるんです。だから、「直ぐ行ってみたいな」と思ったけれども、負けた奴がね、何だか嫌だね（笑）。とうとう行かなかったです。当時、手紙で往復してるんですから、今では残念に思うとるんですがね。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一八二）によると、「プラザ」ではなく、ポラード陸軍少佐。日本への進駐時には、ポラード將軍。

そうしたら、私のクラスメートのお嬢さんの妹さんが、ウエリントンに住み着いて……。それは、（占領軍として）呉に来たニュージランドの士官と恋愛になって、結婚をしてウエリントンへ行ってしまったんだ。行ってしまったたら、主人が亡くなった。あと、どうして食おうかということになった。その時に、彼女は日本の使い古した古い自動車を輸入して、それにちよつと手を加えて、ニュージランドに向くような車にして、それを売り出したんです。売れるんですわ、これが（笑）。大金持ちになった。今でもおられるんですよ。

この間、我々の会に来て、私はもう「この野郎！」と思って、抱き合ったですよ。「あんたは、私のクラスメートの娘さん——二人姉妹の妹だよ」と。私のことなんか、知りやさんのだからね。「こうこうだ」と言ったら、また来るんです。正月には、必ず来る。金持ちだから。その彼女が、レビンという今の町へ行つて、小学校に行つて、記念碑をグラランドの端に建てた。——小学生が「キャプテン、キャプテン」と言つて、集まつて来た。それで、米内艦長が「一番短い演説」をやつた、と。そういう記念碑を建てたんです。

そこへ、いま海上幕僚監部の副長をしとる山田海将が練習艦隊の司令官として、数年前に行つたんです。

高橋 海上自衛隊ですね。

扇 その前に、阿川弘之さんが行つとるんです。私の記事を見て、ぜひ自分で行つてみたい、と。阿川弘之さんが、いろんなものに書いておる。それから、『米内光政』（新潮社、一九七八年）の中にも、そのまま出ていますよ。練習艦隊が行つて、帰つて来て「レビン会」というのを、二人でつくつたんです。今、幕僚監部の副長をしている人で、山田海将は必ず幕僚長になりますよ（呉地方総監を経て、平成十四年三月退官）。

高橋 影山さん、ご存知の方ですね。

扇 この間も電話をしたんだけど、忙しいのに、こんなつまらん話をどうかと思つて……。練習艦隊の写真も、私のところに来ておる。そこへ行つて、確かめて来た。自分の艦隊をウエリントンまで率いて行つたんだから……。

伊藤 それは、今の海上自衛隊の話ですね。

高橋 今日は、ご結婚の前から、海軍大学校に行つたところまで……。また、機会を改めて、「二・二六」の話とかをお聞きたいと思ひます。

扇 「二・二六」——これは喋りだすと、熱がこもるんだ。

高橋 その話を次回に……。

扇 「誰が日本を守るんだ！」と言つて、私は地団駄踏んだんですから。「この美しい日本を、この国民を誰が一体守るんだ！」と言つて、地団駄を踏んで、そして「連合艦隊に訓示」というのを書いたんだ。短いあれですけれどね。

伊藤 じゃあ、次回もよろしくお願いします。

（以上）

扇 一 登 オーラルヒストリー

第 2 回

[2000 年 12 月 22 日 14:20～16:20]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

懲罰処分

高橋 前は、海軍大学校の頃のお話で終わりました。今日は、二・二六事件のあたりからお聞きしたいと思いますが、その前年——昭和十年十一月に、先生は旗艦『山城』に乗っておられます。それから、直ちに海軍少佐に昇進されています。その後、旗艦が替わったので『長門』に転乗なさって、昭和十一年六月三十日に懲罰を受けておられます。大したことはないと思いますが、何があつたんでしょうか。

扇 ああ、懲罰、懲罰（笑）。

高橋 謹慎中という……。

扇 どうして懲罰になったか。当時は、機密書類というものについて、非常に嚴重だったですからね。これは、私が『磐手』の航海長をしている時のことで、航海長である私が機密書類の全責任者ですよ。

高橋 これは、どこの船でも航海長が？

扇 ええ、制度としてそうなっているんですが、如何なることがあつても、全部、航海長がその責任を取らなきゃならない。『磐手』は、自分で言うのもおかしいけれども、私は選ばれて行つたんです。それは、遠洋航海に行く前の年のことですが、（遠洋航海には）高松宮殿下が『磐手』の指導官付かな、とにかく『磐手』にお乗りになつて、遠洋航海に行かれるわけですよ。その前触れとして、私が『磐手』に乗せられたんです。練習艦隊に乗るということは、その当時としては選ばれた人が行くんですよ。候補生の指導に当たるわけですからね。

そんな意味があつて、私は前の年に『磐手』に乗つたんですが、航海長である私の補佐をする航海士は少尉です。少尉ですが、クラス・ヘッドだつたんです。名前は……。

伊藤 ここ（奉職履歴）に、小山田正一と書いてあります。

扇 優秀なんです。クラス・ヘッドでしたが、この時、暗号書の訂正が来たわけです。たつた一文字の訂正だつたと思いますね。実際、その仕事をするのは航海士ですが、最後に航海長に、「ここを、こう直しました」と説明に来て、責任者である航海長が判子を捺すわけです。それをやつたんですよ。やつたところが、貼るところを間違えとつた（笑）。その間違つたところへ判子を、たつた活字一字の小さいやつを捺しとつた。それを、本人はもちろん、航海長も気が付かないでね。

小山田正一、海兵六〇期、優等生として恩賜品拝受（前掲『日本陸海軍総合事典』六三四頁）。

それが過ぎて、翌年、私は連合艦隊の参謀になつたら、後から『磐手』の艦長に来た人が見付けたのか、誰が見付けたのか、どうして発覚したのか分からんが、問題になつたんですよ。結局は、その優秀な航海士が間違えたのを、私が盲判を捺したんです。盲判ということは、貼つてあるんだから……。ところが、他のところへ貼つておつた（笑）。たつた小さい活字一つですよ。

それで、角田覚治さんという人が、後で『磐手』の艦長で来られて、高松宮さんに乗せて、翌年、遠洋航海に行かれるわけです。その人の知るところとなつて、大問題になつたわけです。これは全部、航海長の責任です。それで、私が連合艦隊参謀になつてゐる時に、突然、それが来たわけです（笑）。

角田覚治、海兵三九期、昭和十年十一月〜十一年十二月『磐手』艦長。そ

の後、第三航戦司令官等を務め、十八年七月第一航艦長官、十九年八月テニアン島で戦死（前掲『日本陸海軍総合事典』一八〇頁）。

扇氏は「どうして発覚したのか」と話しているが、同年は「一九三六年の危機」と称して、年初から海軍省、軍令部が大キャンペーンを張っており、春頃、艦隊に特命検閲が行われたことが後段、話題にされている。ミスの発覚は、その関係ではないか。

高橋 なるほど、びっくりしましたね。

扇 参謀長が「弱ったな」と言われましたが、これは非常に嚴重な懲罰で、謹慎一日です。

伊藤 それは、軍法会議みたいなもので決められるわけですか。

扇（私は）連合艦隊の小参謀ですからね。しかも、連合艦隊の教育参謀だ。その責任だから、懲罰は参謀長が決めるんです。

伊藤 会議を開いて？

扇 幕僚の人事は全て参謀長の担当で、その参謀長が小楨和輔さんです。それで、「懲罰は仕方がないから」と言うので、謹慎一日。

高橋 謹慎一日ですから、大したことはないと思いますが、経歴に傷が付く？

扇 ああ、これは、もう一生涯、付き纏います。後に大赦がありました、大赦になって消えるんですよ。消えるんですけど、履歴にはちゃんと残っている。あと、進級には、ずっとそれが付き纏う。

昭和十三年二月十一日の大赦。勅令第七八号により、昭和十三年二月十一日、前の所為につき、懲罰処分を受けた者に対しては、将来に向かってその懲罰が免除された（「奉職履歴」）。

満洲事変から二・二六事件

高橋 前回、あまり聞いていなかった問題で、満洲事変が起こった頃の海軍内部の動きについて……。あるいは、扇先生がいらつしやった場所では、こういう反応をしましたか。

伊藤 満洲事変の頃はね……。

高橋 昭和六年ですから、履歴には「第二艦隊参謀兼副官」と書いてありますね。

伊藤 満洲事変は、あまり印象がないですか。

扇 満洲事変……。もう陸軍と、こうやつとった時ですからね。予算の取り合いで……。

伊藤 あまり印象がないみたいですね。

高橋 第一次上海事変も、あまり印象はないですか。あれでもって、欧米が怒り狂った。アメリカやイギリスなどが、日本に対して激昂したという……。

伊藤 待てよ、第二艦隊だったら、上海事変の時はあつちのほうにいるんじゃないですか。

扇 いつの時代だったかな……。

伊藤 第二艦隊の参謀ですから、上海での戦争の場合は、多少関係があつたんじゃないかなと思いますが……。

扇 前後が朦朧として……（笑）。第二艦隊参謀時代？

影山 末次長官の時代に、先生は七了江まで行かれたことがありまし

たね。先生は、その時に参謀でおられたんですけど……。

末次信正が第二艦隊長官だったのは、昭和六年十二月一日から八年十一月十五日まで。

伊藤 別のきつかけで思い出してくださいるかも知れないから、二・二六事件に行きましょう。

扇 前後しますが、秩父宮さんが南支閩東軍司令部(?)の参謀になって、参謀本部から転任されたんですよ。その時に、秩父宮さんは、私の参謀本部——私は参謀本部の部員もしておったから——に、毎日電話をしてきた。それで、昼休みに行つては陸海軍問題、何らかの国策や国防方針、渉外事項関係、国際条約関係について議論していた。秩父宮さんが私の相棒だったんですよ。私も、しょっちゅう参謀本部に行つておりましたし、陸軍とは全く反りが合わんですが、そうは言っちゃおれないので、議論は議論で……。この前も話したかも知れませんが、何でも議論しておる。昼休みには行つて議論して、帰つて来たら、その都度、高松宮殿下に、「今日は、こういう話をしましたよ。物別れでした」と。それは、「陸軍の主たる狙いは、北支を物にすることだ」と言うんですからね。北支・蒙疆を、自分の経済圏の依つて立つべき地盤として、国策的にも猛烈に侵略している。

秩父宮雍仁親王については、第一回聞き取り(二二頁)の註を参照。

こつちは、そうじゃないんです。そんなものじゃ、戦は出来ないんだ、と。アルミは、どうするんだ。タングステンは、どうするんだ。これが無くては、戦争をどうしてもやれないようなレア・メタルは、ほとんど出ないんですよ。食塩とか大豆とか食料が、それも十分じゃないんだけど、まあ出る。それを、とにかく陸軍の、その時の一切を挙げての野望として、「北支・蒙疆を我が物にする。これを経済圏に

する」という強い主張なのです。

この前も申し上げたでしょうけど、帰つて来て、高松宮殿下にそれを話すと、殿下はこういう言葉で言われました。「兄貴は駄目ですよ。あれは、陸軍に成り切つとるから」と。その当時は、高木惣吉さんなんか、ずっと宮中関係や政界の上層部の情報を毎日取っていたでしょう。あの人が言つとられたですけどね。「陸軍は、どうにもならん」と。海軍は「八・八艦隊」を完成するということと、それと航空部隊を南方の各離島に充実しなきゃならん、と。「不沈航空母艦」というような意味で、(航空部隊を)強く要求していたんですが、陸軍もやっぱり飛行機を要求するし、そして開戦論ですからね。これは、対立が激しいものだった。

それで、高松宮様とは海軍省食堂で昼食卓が一緒だったので、軍令部の作戦課や横井・扇の戦争指導班では、宮中の事情も大体分かつていたんです。(高松宮様によると)陛下は、兄貴(秩父宮)の言うことは、一切お聞きにならなかった、と。いつでも会食の時には、高松宮さんとは別にやつておられたということも分かつていたし、高木さんなんか、それを全部知っていました。そういう状況であつたわけで、陸海軍というのは、本当にどうにもならない格好になつていったわけです。

「八・八艦隊」は、大正期に構想された戦艦八隻、巡洋戦艦八隻を基幹とする艦隊計画のこと。

横井忠雄、海兵四三期、昭和八年十二月ドイツ大使館付武官補佐官、九年六月ドイツ大使館付武官、十一年十二月大佐・軍令部一部員、十四年十一月『千代田』艦長、十五年九月ドイツ大使館付武官、十八年十二月帰朝、十九年三月横鎮参謀長(前掲『日本陸海軍総合事典』二四四頁)。

それで、陸軍はどうなっているかと言うと……。私は石原莞爾さんを尊敬していたし、毎日（参謀本部に）行っているから、石原さんとは何回か話していました。あの人は卓見を持っている人でした。だけど、他の人はどうにもならん。何遍も繰り返して言いましたが、話にならんですよ。雲を掴むようなことを言つて、それなら、そういう人たちはアメリカのことを知らないのかと言うと、そうじゃないですよ。あの「黙れ！」の少将（佐藤賢了）なんかは、補佐官でアメリカに二年か三年行っているんですからね。それから、陸軍省でも中央にいる人は、みんなアメリカに行つて、アメリカの事情を知っているんです。ただ、全体の空気として「アメリカ、何するものぞ。こんなものは、戦力ではないぞ。精神論で行く」と。これは、今までにも話したと思いますが、そういうわけですよ。

昭和十三年三月、国家総動員法案を審議していた衆議院の委員会で、法案について説明していた佐藤賢了陸軍中佐（当時、軍務局軍務課国内班長）が、宮脇長吉議員のヤジに対して、「黙れ！」と一喝した事件は有名である。佐藤は、昭和五年五月から七年七月まで、米・野砲一二連隊付としてアメリカに駐在している。

高橋 二・二六事件に入つてよろしいですか。

伊藤 二・二六事件が起きた時は、連合艦隊の『長門』に乗つていらしたんですね。ニュースは、どこで聞いたんですか。

扇 もう、これぐらいショックを受けたことはないですよ。佐伯湾で訓練していました。どうして佐伯湾で訓練するかと言うと、佐伯湾は、ちよつと豊後水道を南に下がれば、いつでも大波、大うねりですよ。で、実戦的な海の状態の中で、演習が出来る。それで、艦砲射撃、魚雷発射、飛行機の発着訓練……。何もかも、ちよつと出れば、それで

出来るんです。だから、訓練場としては佐伯湾と志布志湾、それから四国側に中村という小さな町がありましてね。佐伯湾から出て、岬をちよつと回れば、太平洋の荒波ですよ。だから、演習場と称して、毎年、連合艦隊がこれらの湾を根拠にして、半年ぐらい訓練をやるんですよ。上陸は、何もしやしないんです。

伊藤 全く上陸しないんですか。

扇 いや、一遍や二遍は兵隊を上陸させますよ。しかし、我々は、ほとんど上陸したことはないですな。

『長門』乗艦前後については、「原稿ノート」（「扇一登氏関係文書」）に断片的ながら記載がある。昭和十一年一月二十九日に佐世保を出港、「第一期訓練／巡航八青島へ／早春霧島山二初メテ登山ス／二・二六事件 全軍二対スル訓示ヲ起草シツ、感極マル 第二期訓練／七月二十日（？）寺島水道二於テ七二〇ミリノ低気圧二遭遇シ間 呂潜水艦二隻坐礁／七月末ヨリ八月初二カケテ基隆、厦門、馬公二行動シ台湾南方ヨリ伊勢湾二至ル長途航海訓練」、また、この間の出入港記事として二・二六事件関連での三月四日から約三日間の横須賀泊、同月二十一日頃呉入港、六月二十八日出港、三十日に納谷口入港が確認できる。話題の太平洋上の訓練は、ここに挙がつた第一、第二期訓練の合間に行われたものか。

伊藤 土佐じゃないかな。

高橋 土佐に中村つてありますね。

扇 そういうことで、あそこは訓練場になっていた。それと、伊勢湾もその一つですが、伊勢湾よりは豊後水道のほうが多いです。半年ぐらいは、あそこにおります。

伊藤 豊後水道で、無線が何かで連絡があつたわけですね。

扇 ええ。中央から直ぐ、「第一艦隊は東京湾へ、第二艦隊は大阪湾

へ至急回航せよ」という無線電報があつたわけです。

伊藤 連絡があつたのは、朝ですか。

扇 夜中だったでしょう。とにかく百七十隻の全艦隊中、高速部隊全主力が第一戦闘速力、船速二一ノットで慕進、翌朝、潮岬通過……。

伊藤 だって、どの艦も、みんな同じ速度というわけにはいかないでしょう。

扇 いや、二一ノット。それは、艦隊で決まっている。第一戦速です。第二戦速、第三戦速……最高戦速というのは、三〇ノットぐらいですからね。

伊藤 二一ノットだと、揃えられるんですね。

扇 それで、ダーツと行ったわけです。

伊藤 豊後水道から東京湾まで、どのぐらい時間がかかるものですか。扇 明くる朝、我々は、まず横須賀に行きました。第二艦隊は、直ぐ大阪湾に入る。これは警備ですからね。世の中が、でんぐり返っているんだから……。

それで、私のことを言いますと、私は憤慨しましてね。艦橋へ上がる途中の人のいない所で、「何くそ！」と言つて、四股を踏んだんですよ。「くそつたれ！」と。泣きながら、「何をしとるんだ。正規の軍隊が二・二六事件を起こすなんて、何事だ」と、憤慨してね。誰もいなかったの、見られてはいないんですよ。

私は、教育参謀ですから。教育参謀であり、戦務参謀であり、連合艦隊長官の一切の、それらに関することは、命令から何から全部、私が毎日書いている。そういう時に、そういうことが起こつたものですから、私は地団駄踏んで、「何くそ！」と。それから、直ぐ自分の部屋に戻つて、書いたですよ。「連合艦隊は、いま何をしなきゃならん

か。この美しい国土を、誰が一体守るんだ」と、憤慨しましてね。もう涙が止まらないですよ。それで、ずっと書いた。長い文章じゃないんです。「連合艦隊に訓示」という文章を、情熱を込めて書きました。それを、直ぐ艦橋に行つて、長官に見せたら、「うん、直ぐ打て」と言われて、直ぐ電報を打ちました。それは、全海軍に傍受されている。もちろん、中央にも報告された。とにかく、私は情熱を掛けました。今は覚えてはおらんですが、趣旨は要するに、「この美しい国を誰が守るんだ。連合艦隊、ここにあり。何物でも向かつて来い」と、高らかに叫び上げる気持ちの吐露であつたと思います。

高橋 「二・二六」で、具体的に何が起つたかということは、直ちに分かつたんですか。

扇 それは分かりますよ、謀叛を起こしておるんだからね。電報で来とるからね。

それで、眼前の美しい山野を見ながら、「この日本を、誰が守るんだ」と。もう泣けて泣けてしょうがなかつた。短いですよ、長い文章ではない。それが、全海軍にダーツと衝撃を与えた。名文句だったらしいですよ。それを、いま探しても、どうしても見付からん。でも、そのことは、海軍の人はみんな知っていますよ。

伊藤 横須賀に入つて、それからどうしたんですか。

扇 横須賀では鎮守府へ行つた。まず、横須賀を救わなきゃならない、と。

高橋 守らなければならぬ、と。

扇 横須賀へ入つて、それで直ぐ東京湾に行きました。

伊藤 それは、上陸する海兵隊（陸戦隊）を乗せて？

扇 乗せたでしょうな。警備兵を、何人か乗せたに違いないですよ。

陸戦隊ですな。細かなことは知らんですが、一六インチの主砲を、こ
うやりながら、芝浦沖に入った。参謀二、三人は、直ぐ海軍省に行き
ました。その間、主砲を何とか言うホテルに向けて……。

伊藤 山王ホテル。

扇 あそこへ向けて、照準を合わせて……（笑）。飛行機は飛ばすし、
一切のことをやって、「主砲の艦隊が来とるぞ、大丈夫だよ」という
ことを知らせるわけですよ。

高橋 兵は、たった千五百ですよ。反乱軍は千五百名ですね。

扇 あんなに憤慨したことはなかった。

高橋 いつでも戦闘に入れる、と。戦争になるんじゃないかという予
測はしていたんですか。陸軍と？

扇 戦争になるということは、その当時は……。しかし……。

高橋 武力衝突？

扇 あれは、一九三六年でしょう。「最大危機」と言われた年なん
です。

伊藤 「陸軍の青年将校が何かやるかな」ということは、予め感じて
いませんでしたか。

扇 いや、それは感じていなかったですね。ああいうことをやるとは、
あれほど大きなことをやるとは、感じてはいなかったですよ。

伊藤 陸軍の中に不穏な空気があるというのは、知っていたわけでは
よ。

扇 それは知っていますよ。陸軍は何をするか分からん、ということ
ですよ。

伊藤 「とうとうやったか」という感じですか。

扇 そういうことですね。

高橋 三月事件とか十月事件という、クーデターの未遂事件がありま
すね。あのあたりは、海軍ではよく知られていたんですか。

扇 海軍省としては知っていたでしょう。

伊藤 だけど、例えば海軍の青年将校だって、五・一五事件をやった
でしょう。

扇 あれは、私は関係深いですよ。非常に関係深い。あれをやった奴
が、私のガントリーにいたんです（笑）。少尉の古賀清志は、私のガ
ントリーにいた。同じガントリーの部下だった。平生は、おとなしい
ですよ。私も、あんなことをしでかすとは思ってもいなかった。

古賀清志、海兵五六期、昭和三年三月海兵卒、四年十一月少尉・『妙高』乗
組、五年十二月第一九駆逐隊付（『敷波』）、六年十二月中尉・練習航空隊飛
行学生（霞ヶ浦）、七年五月待命（五・一五事件参加）（前掲『日本陸海軍
総合事典』一九一頁）。古賀の少尉任官後の履歴と、扇氏の「奉職履歴」を
見る限り、両名が同じ船に乗り組んだことはない。古賀が少尉候補生の時
の乗組が、『伊勢』『榛名』『春日』であれば、同乗の可能性があるが……。

あるいは、扇氏の記憶違いか。

伊藤 そういうのは、監督不行届きになりませんか。

扇 それは、ありますよ。だけど、おくびにも考えちゃいなかった
（笑）。毎日飯と一緒に食べて、一緒に生活をして、同じ部屋なんだ
から、それは責任はありますよ。しかし、感じるものは何もない。平
生、黙っているんですよ。黙っている奴が危ない（笑）。

高橋 五・一五事件の時は、海軍関係者は一国の首相を真つ昼間に暗
殺しながら、死刑にもならず……。

扇 あれが、また海軍の変な所ですよ。変な所というのは、そういう
一派と言っちゃ悪いけれども、そういうファッショ的な傾向の奴がい

て、石川信吾もそうですからな。石川信吾が入れた軍務局員がいるんですよ。つまり、ファッショ的な傾向の……。ファッショじゃないんだけど、そういう傾向です。そういう奴は頭が優れているし、石川信吾も頭は鋭いです。鋭いが、『マイン・キャンプ』（わが闘争）に、ちょっと向いとるんですね（笑）。性格的に、そういう傾向の優秀な人もいるんですよ。

石川信吾、海兵四二期、昭和三年十二月第三戦隊参謀、四年五月艦本部員、六年十月軍令部二班三課参謀、七年十二月中佐、八年十一月第六戦隊参謀

（前掲『日本陸海軍総合事典』一六八頁）。

伊藤 石川さんの系統ですか。

扇 そう、石川が軍務局員に入れたんです。

伊藤 誰ですか。

扇 性格的に、そういう傾向がある。「氣違いと大秀才とは、隣り合わせ」と言うじゃないですか。

伊藤 今のは、石川さんの話ですか。

扇 石川じゃない、石川の部下です。まあ、名前は……。何も（私の）キズじゃないんだけど……。

高橋 もう一つ、質問させてください。天皇陛下が「二・二六」の時に、自分の股肱たる重臣が殺されたことに対して、「自分が近衛師団を率いて討伐する」と言ったというような話は、当時、海軍では知られていたんですか。

扇 うん。耳にしたことはありますが、誰から聞いたか知りません。まあ、憶測でもないですけど、そういう見方というのは、高木惣吉さんがあらゆる情報を集めていた。それは、後で分かるんですがね。

高橋 「二・二六」の時、参謀本部の作戦課長だった石原莞爾は、最

初から討伐するという方針でしたね。先生は連合艦隊にあって、参謀本部の作戦課と、特別に何か連絡を取っていたということはあるんですか。

扇 石原さんは、建川美次と言いましたかな、あれを派遣したですよ。満洲へやっただけですが、宥めるために……。

建川美次、陸士一三期。満洲事変（昭和六年九月十八日）の際、参謀本部一部長。

高橋 止め男ですね。

扇 あれは、中央も出先も同じような謀略家じゃなくて、「支那班」とかなんとかいう奴は、いわゆる大陸派ですな。それが、相通じているんですからね。意思が共通なんです。建川美次さんが奉天に行ったでしょう。行っても、その晩は会つたらんのですから……。

高橋 それは、満洲事変の時ですね。

伊藤 やつと満洲事変が出て来たな（笑）。

扇 中央も外（関東軍）も相通じて、同じ考え方で進めているんだから……。

高橋 永田鉄山軍務局長が、白昼殺されますね。永田鉄山刺殺事件。あの頃は、ああいう事件が陸軍の中で起きてもおかしくないような雰囲気だったんですか。これは、昭和十年八月十二日です。

扇 同じようじゃないでしょうか。

高橋 「二・二六」の時、叛徒になった陸軍の連中は、いわゆる「昭和維新をやるんだ」ということで、自分たちの気に入った陸軍大臣あるいは首相を選んで、「新しい国をつくるんだ」というようなことを言っているんですね。しかし、連合艦隊は、「海軍を守るんだ、日本を守るんだ」ということで、最初から一貫した陸軍不信の中で、自分

の本分である防衛ということに準拠したんでしょうか。あるいは、政治的なことについては、海軍は陸軍に対して厳しく迫るというようなことはやっただんですか。連合艦隊参謀という立場から、ご覧になっていて、「二・二六」への海軍の対応の仕方、何か覚えていらつしやいますか。

扇 私は、末次サイドですからね。末次さんを頭に置いて、こんな純然たる……。末次さんは非凡と称されておりますけれども、私は毎日、非凡な人の統帥の中に溶け込んでいますから、末次さんの気持ちは全部分かっている。自分では、そう思うけれども……。末次さんは可愛がってくださったですよ。

高橋 「二・二六」の一つの結果として、陸軍による軍部独裁に近いような状況が生まれるわけです。いわゆる皇道派が追いやられて、統制派というグループが実権を握る。そして、第一次世界大戦の教訓から、今後の戦争は、こういう状況になるであろうということで、「トータル・ウォー」と言うんですか、そういうことになるからということで、皇道派とはずいぶん違った国の運営の仕方を出して来るんですね。産業あるいは経済の進め方、あるいは政治体制における、そういうグループを統制派と言っておりますが、二・二六事件をきっかけに、統制派の時代になるわけですね。海軍は、そういう陸軍の中の権力交代を、どのようにご覧になっていたんですか。統制派とか皇道派というのは、海軍軍人の中では強く認識されていたのでしょうか。

扇 私は、皇道派とか何とかと、そういう特殊化したあれでは見ていなかったですよ。ただね、毎日毎日、百七十隻の艦隊をギョツと握って、「自分が指揮して、これを動かしたるんだ。運命を背負っているんだ」という意識、これは強いですよ。「いやしくも……」というこ

とは、一つもない。「末次さんは、もう完璧だ。統帥の神様だ」と思っていました。私は、毎日傍におるんですから……。

その例は、この前も話したでしょう。参謀長を目の前で叱り付けたと言ったでしょう。ああいう主体性の強い人ですから、私は尊敬し切っていましたからね。

軍令部部員時代

伊藤 昭和十一年の暮れに、軍令部出仕兼部員になっていますが、今度は陸に揚がったわけですか。

扇 陸に揚がるんですよ。

高橋 軍令部に入るわけですね。

扇 これで、陸上に揚がるということです。

伊藤 軍令部出仕兼部員というのは、どういうことですか。

扇 これは、行ったら、直ぐ職務に就けるということですね。軍令部出仕というのは、「揚がつて来い」ということですよ。兼部員というのは、「行ったら、直ぐ仕事に就け」ということでしょうね。

伊藤 具体的な仕事は、直ぐその後「第一部勤務ヲ命ス」と。

扇 十二月一日……。

高橋 同日じゃないですか。

扇 その日に就いたということになる。就いた上で、第一部勤務を命ず、と。補軍令部部員というのは、軍令部部員という正式の職名でしょうね。兼補参謀本部部員（昭和十二年四月十五日）、兼補海軍省出

仕（同年十月五日）。

伊藤 全部、兼補なんですね。

扇 国策・戦争指導ということから、内閣情報部情報官を仰せ付けられる（十月九日）。

伊藤 「海軍省軍務局長ノ命ヲ承ケ服務スベシ」（十月十一日）。

扇 だから、両方を跨いで……。

伊藤 軍令部と海軍省と……。

扇 戦争指導というのは、元々は軍務局長の所掌なんですよ。国策というのも、みんな軍務局の仕事なんです。軍令部は、その埒外だったんですね。それで、私の時から、軍令部も同じようにやる、と。これは、互渉規程によつて軍令部が物を言い出したんです。戦争指導、国策、条約渉外事項というのを、みんな……。

昭和八年十月一日、海軍省軍令部業務互渉規程（内令第二九四号）の實質化を指すものと思われる。

伊藤 それを兼務されますが、デスクはどこにあるんですか。

扇 その初代に、私は行ったわけです。

伊藤 そのデスクはどこにあるんですか。

扇 机は、作戦部の中に。

伊藤 軍令部の？

扇 軍令部に作戦部の部屋が一つあって、その隣に衝立みたいなもので動かせるようになっていて、別席に私と横井忠雄さんが……。横井さんは、ドイツ駐在武官から……。

高橋 軍令部甲部員ですね。

扇 大使館付武官から帰ったばかりです。それが軍令部甲部員で、私が乙部員。それまでも、甲部員というのはあったんですよ。あったけ

れども、乙部員というのは、なかったんです。私が初めてその乙部員になって、職責がそこに出来て、私が就任させられたわけです。それから、軍令部一部というのは作戦部で、私たちは一部長直属なんですよ。

伊藤 甲部員と乙部員は、職務が違いますか。

扇 いや、同じです。二人で……。今までは中原義正という人が、一人でやっていたんです。

中原義正、海兵四一期、昭和九年十一月大佐・軍令部一部員、十一年十二月『名取』艦長（前掲『日本陸海軍総合事典』二一七頁）。

高橋 南方の石油王（南洋王）ですね。

扇 その後任に私が加わつて、二人で戦争指導、国策、国際条約、そういうものを受け持たされたんです。

伊藤 それと、対南洋方策研究委員会委員というのは、関係があるわけですね。

扇 これは、前から対南洋方策研究委員会というのがあって、私が参加させられたわけです。

伊藤 中原さんが中心になっていたわけですか。

扇 今までは、中原さん一人でやっていた。これが、軍令部次長直属で、天皇——その当時は摂政宮に対する……。

伊藤 いや、もう昭和天皇です。

高橋 昭和十一年ですからね。

伊藤 昭和十一年ですから、もう昭和天皇です。

扇 それに対するご進講ですな。話をして、天皇様に容れていただく立場です。それを軍令部次長がやるんですよ。その原稿を書いたり、資料を揃えたりすることを、中原義正さんが一人でやっていたので、

そこを強化したんです。それは、参謀本部が国策・渉外事項という強い課を成している、課長がおつてね。それは、「参本」は、遙かに強いんですよ。海軍は、その後を付いて行つて、ただ一人で軍令部次長を助けて、ご進講の原稿を作ったり、そういうことをやっていたわけです。それで、軍令部が強くなって、国策・戦争指導を、海軍省とみんな同じように持ったわけです。だから、軍務局長がやる仕事に、軍令部が入っていったわけです。一緒にやろう、と。だから、「海軍省軍務局長ノ命ヲ承ケ服務スベシ」と。

陸軍参謀本部は昭和十一年六月の編成替えて、第二課を戦争指導、国防国策等の担当として、独立に設定した（前掲『日本陸海軍総合事典』四八一頁）。

むしろ、今度は軍令部のほうが強くなって……。というのは、私の相棒になる軍務局の局員というのは藤井茂で、ドイツから帰つて来た柴勝男と私は一緒に、三人で……。藤井茂は、私の兵学校時代の一号で、私は三号ですから、三学年と一学年。私は、藤井茂と同じ分隊にいたんですよ。分隊というのは一号、二号、三号一緒に、五十名ずついるわけね。私は、その三号のヘッドで……。

藤井茂については、第一回聞き取り（二七頁）の註を参照。

柴勝男、海兵五〇期、昭和十年十二月ドイツ大使館付武官補佐官、十二年七月帰朝、十二年十一月海大教官、十三年一月軍令部一部員、十四年三月軍務局一課付、五月軍務局一課局員、十五年十一月軍務局二課局員、十九年二月『大井』艦長（前掲『日本陸海軍総合事典』一九九頁）。

扇氏の「今度は軍令部のほうが強くなって……。というのは、私の相棒になる軍務局の局員というのは藤井茂で、ドイツから帰つて来た柴勝男と私は一緒に、三人で」という発言は、扇氏が第五艦隊参謀に転出する十三年

十二月までの間、柴・扇の両名が、同じ軍令部員として、三名中の多数派を占めたことを指していると思われる。

高橋 ……部長だった。

扇 入学した成績が良かったものだから、私は五十名のクラスの部長になった。平たく言えば、級長ですね。それになっていたから、藤井さんとは本当に親しかった。お互い気心も分かつていたし、それから……。

伊藤 柴さんですか？

扇 柴勝男は千葉県出身で、井上成美さんが軍務局長時代に、その下に付いて、その渉外主務者だった。軍務局一課の課員ですよ。柴勝男と私は、大学（海軍大学校）が一緒なんです。藤井茂とは、海軍兵学校で一緒だった。お互いに親しく、よく知り合っている。だから、いつでも三人集まると、直ぐ話題が最高政策ですね。支那問題、日独関係問題、国策から何でもかんでも、グループ一緒に、三羽ガラスだった。

井上成美の軍務局長在任期間は、昭和十二年十月二十日～十四年十月十八日（前掲『日本陸海軍総合事典』四一〇頁）。

だから、（藤井、柴の両名は）海軍省の出す命令に、「おい、お前書け」と言つて、私のところに来るんです。そして、「軍務局長は、こう言うんだ」と言つて、軍務局長から叱られてきたことを、みんな私に言うんです。局長に、コテンコテンにやられるんですよ。それをみんな私のところへ持つて来て、「お前、書け」と。そう言われて、私はしおしおと、一所懸命頭をひねつて書いて、それを持つて行くんです。その書類が、海軍省全体を回るんです。起案者は藤井であり、柴であるわけで、ただ私の判子が必ず入るんです。それが、内情です。

伊藤 その仕事は、陸軍との交渉もあるんですか。

扇 ありますよ。毎日のことがある。

伊藤 その時の相手は誰ですか。

扇 相手は、秩父宮さん。秩父宮さんは、ちょっと後からでしょう。

その前は、堀場一雄ですよ。秩父（宮）さんになっても、秩父（宮）さんとは、ただそういう関係というだけで、相手が秩父（宮）さんであるというのも、（秩父宮さんが）主務者ということになっていたからね。しかし、その下には堀場が付いているんです。

堀場一雄、陸士三四期、昭和九年七月中国・ソ連駐在、十二年三月参謀本部員（戦争指導班）、十三年十二月〜十四年九月同班長、十四年十二月支那派遣軍参謀、十六年六月軍務局御用掛（総力戦研究所員）、十八年十月第二方面軍参謀、十九年三月南方軍参謀、十九年六月第五航空軍参謀副長等を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』一二九・三〇一頁）。

なお、藤岡泰周氏の「扇一登海軍大佐と和平工作」（最終的に、雑誌『丸』別冊『戦争と人物二三 人物・太平洋戦争』一九九五年二月、潮書房に掲載）の草稿では、「参謀本部の交渉相手は石原少将直属の戦争指導班で、川辺虎四郎課長以下、秩父宮殿下を含む五名位」とある（「扇一登氏関係文書」一一一―一八五）。草稿段階で、扇氏から聞き取り、原稿チェックを受けており、信頼できる内容。

伊藤 堀場さんというのは、どうですか。

扇 堀場はいいですよ。

伊藤 頭の切れる人ですか。

扇 ああ、頭は切れるし、信念がね。架空的な議論をする陸軍少将、情報部長なんて人とは、丸っ切り違うんです。あれは、大局の見える男だった。堀場は、広島私の隣の村に、緑井という大きな村があった

て、その産婦人科の息子ですよ。だから、お国柄的にも、堀場とは親しかったんです。その後へ、秩父宮さんが来られて……。

前掲『日本陸海軍総合事典』一二九頁には、堀場の出身は愛知県、父は警察署長・堀場司馬次郎とある。

高橋 同じ広島で、陸軍の参謀本部の作戦課にいらつしやった方で、今岡豊さん——彼は陸士三七期ですけど、先生とは親しかったはずですよ。

今岡豊、陸士三七期、広島県出身、昭和十一年二月参謀本部付勤務（三課作戦班）、十二年九月参謀本部員、十四年十二月関東軍参謀（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇頁）。

扇 ああ、今岡、参謀本部の大尉でした。

高橋 そうでしたね、ずっと作戦課にいらつしやって……。

扇 それで、これは言えないけど、陸軍は中が真つ二つに割れていて、関東軍と大陸派というのは一緒ですからね。北支・蒙疆を擁護するという、その一派ですから。だから、（これと一線を画す）堀場とは、私は気持ちの上では一緒だったです。堀場は大局を論じるし、大局から物を見る。彼は、大きいですよ。

高橋 堀場さんは、石原莞爾に私淑していたんじゃないですか。

伊藤 石原莞爾と堀場は一緒ですよ。さっきのお話の中に、レア・メタルのことが出たでしょう。あれは、日本の海軍はどこから獲得していたわけですか。

扇 これは、海軍に対南洋方策研究委員会というのがあって、平生から、ずっと突っ込んでるんですよ。突っ込んでると言っても、そんなに現地に（情報源を）持っているわけじゃないですが、極力情報を集めていた。それから、政策的な推移というようなものがある。後で調

査課のブレン・トラストが五十何人——各大学の専門学者がおりまして、その人たちの力を借りて、ずっと研究しているんです。だからオランダがインドネシアに対して採っていた植民地化の政策の推移なんか、ずっとそういう人たちから聞いて、我々の研究会の一番大きな問題にしていたわけです。

伊藤 レア・メタルは、南方にあるんですか。

扇 インドネシアにあるんです。第一、アルミがあるでしょう。アルミは北支なんか、ほとんどありません。それから、タングステンだの、モリブデンだの、爆弾を防ぐ軍艦のデッキなんかの硬さをつくるには、レア・メタルがどうしても必要で、なくちゃ戦は出来ません。それを、海軍は切実に感じているわけ。陸軍は、そういうことは、あまり考えちゃおらんのです。三八銃でやっているんだから（笑）。丸つ切り着眼が違っているんです。それはね、調査課の高木さんが力を入れてつくった、大学の偉い先生たちのブレン・トラストが五十何人いるんですから……。

伊藤 それは後のことになりますが、（扇さんが）軍令部に行かれる前から、そういう調査は元々やっているわけでしょう、高木さんより前に……。やつぱり商社の人とか？

高木惣吉は、前出のように昭和十一年十二月臨時調査課課員、十二年十月同課長、十四年四月調査課課長、十四年十一月海大教官、十五年八月軍令部兼海軍省出仕、十五年十一月調査課長、十七年六月舞鶴鎮守府参謀長（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇六頁）であり、調査業務に従事したのは、扇氏の軍令部出仕と、ほぼ同時期である。

扇 商社の人を、みな集めて……。南洋興発という大きな会社があったですよ。それが、貿易です。そして、南のほうの各離島でサトウキ

ビの畑を大きくして、それが将来、飛行場になるわけです。そういう含みで、南洋興発なんていうのは、大きな海軍の支援の下にやったわけです。

「三六年の危機」と特別大演習

高橋 一つお聞きしたかったのは、昭和十一年九月の特別大演習ですね。御召艦の『榛名』で大演習をやったんですが、海軍の条約が無条約時代に突入していたということが一つと、もう一つは「二・二六」が終わって直ぐだったことです。国内つまり陸軍に対する「二・二六」の問題と、もう一つは英米、特にアメリカに対してですね。ロンドン海軍軍縮条約も、なくなっちゃう。それから、年末にはワシントン海軍軍縮条約も、なくなっちゃう。つまり、この時点で軍縮条約が無条約状態になりますね。そうした中での大演習というのは、どういう位置付けで行われたんですか。

扇 これは、非常な意気込みですよ。もう、その年は初めから、「今年こそは、危機の年だ」と定義付けて、軍令部から、海軍省情報部から猛烈な圧力というか、負担を掛けられたんです。曰く、「特命検閲」。検閲と言ったら、艦隊は縮み上がるほど怖いものなんです。東京から、中央の人がみんな来ましてね。

高橋 大演習の場所は、どこですか。

扇 その年の行事は、一年中通してですから。最初が「特命検閲」ですよ。春頃だったでしょうか。艦隊はビリビリするほどで、隅から

隅まで艦隊を検閲して、みな暴き出すんですよ。書類をみんな出して、中央から来た偉い人たちが、艦隊を洗いざらい批判するわけです。「ここが悪い、ここが悪い」と。穴だらけ……。

前掲、藤岡氏原稿（「扇一登氏関係文書」一一一八五）には、「その秋の特別大演習は大元帥陛下御統監の下に大規模に行なわれ、それに続く特別観艦式は連合艦隊が神戸沖に集結して壮大至厳に行なわれた」とある。

高橋 どういう批判が行われましたか。

扇 批判は、最後の評価というものに出ます。覚えちゃおらんですけど、それはもう至れり尽せりの、隅から隅まで、大小、山ほど出されるんですよ。それで、艦隊は反省して、直すべきは直して、どんどんやるのは大変な忙しさなんですね。

高橋 やっぱり、「アメリカは敵」という意識でやっていたんですか。扇 そうです。アメリカと戦うということを前提として、その年から「一九三六年の危機」と銘打ってあるわけです。連合艦隊に対して、最大の圧力を掛けて、それを目標に艦隊の一切を指導してくるわけですね。で、まず「特命検閲」……。

前述したように、『警手』航海長時代の書類取扱い上のミスが発覚し、謹慎処分を受けたのは、同年六月末のことである。時期からして、この「特命検閲」絡みで発覚、処分となったのではないか。

それから、特別大演習です。それは陛下が軍艦に乗られて、特別大演習をやる。海軍の中央の偉い人が、みんな来るんですよ。それで、艦隊のやり方を隅から隅まで批判して、評価するわけです。

高橋 具体的に、どういう問題が現れていたか、覚えていらつしやいますか。例えば、潜水艦の問題とか、戦艦の運用の問題とか、あるいは航空部隊の問題とか……。

扇 私どもは、予算を取る関係がありますからね。国会で、軍務局長が説明するわけです。それで、「海軍の予算は、これこれ要るんだ。どうしてもなくちゃならない」ということが、もう戦艦以下出ているんですから……。『八・八艦隊』というのがね。それに応じる戦争の仕方があって、大型潜水艦だとか、大型駆逐艦だとか、向こうが西へ向かって来る間の毎日毎日の行動を……。

高橋 追尾する、と。

扇 戦のやり方というようなことが、ずっと中心になるわけです。

高橋 特別大演習の時は、『武蔵』とか『大和』を造るという計画は出来ていたんですね。

扇 出来てはおらんんです。出来てはおらんけれども、もう計画を作りつつある時ですよ。

昭和十一年六月八日、帝国国防方針・用兵綱領の第三次改訂。

影山 具体的な演習の項目は、どういうものがありましたか。例えば、アメリカが西のほうに、ずっと出て来ますね。

扇 大きな構想としては、みんな、大体共通の考え方をしていたんです。それは、海軍大学で毎年毎年、学生が演習をしたりして、筋が決まっているわけです。まず、アメリカの西岸まで大型潜水艦なら行けるわけです。行って、「通商破壊」をやるんですね。パナマ運河を出て来るやつとか、サンフランシスコを出て来るやつは、軍艦はもちろん攻撃するけれども、そうではなくて「通商破壊」をやるわけね。そういう艦種を、どんどん造っていく。大型潜水艦ですね。

それから、大型駆逐艦を造る。これは、夜昼ずっと（アメリカの艦隊に）付き纏って、向こうが西へ向けて進んで来る間、間を縫って攻撃するんです。それで、総括的には「漸減作戦」と称してやるんです。

が、これはしかし、決戦にはならないんですよ。ただ、その間に向こうの士気を壊し、勢力を減じていくわけです。

高橋　そして、機会があれば、その時に艦隊決戦と？

扇　そうして、東洋に來た時には、もう向こうはだいぶ士気も乱れているし、勢力も落ちていく。それと、艦隊決戦をやるといふ道筋ですね。大体、そういうことで、ずっと競争が激しくなってきたから、後に続いているんです。それを、末次さんが平生、「こうはやっていけないけども、これだけじゃいけない。もつと別の考え方をしなきゃいけないんだ」ということを言っておられたですよ。「定規で決まったような行き方では、戦にはならんのだ」ということを言っておられました。

「ずっと競争が激しくなってきたから、後に続いているんです」とは？　競争というのは、海大での学生間の競争のことか。あるいは、駆逐艦等の建造競争のことか。

高橋　アメリカは、ルーズベルトの下で、海軍拡張政策をやりますね。第一次ヴィンソン案、第二次ヴィンソン案。そういうことは、海軍ではよく知られていましたか。

ヴィンソン海軍拡張法は、三次にわたる海軍建艦法。法案成立に尽力した下院海軍委員長ヴィンソンの名に因む。第一次ヴィンソン法（一九三四年三月議会通過）は、満洲事変に刺激されて、ロンドン海軍軍縮条約範囲までの建艦を承認するもので、八カ年計画で補助艦約百隻の新造、航空機的大量増勢を認めた。第二次ヴィンソン法は日中戦争勃発を受けた一九三八年五月成立。既定の条約制限兵力を二割上回り、主力艦を含む六十九隻を追加した。第三次ヴィンソン案は一九四〇年六月に成立（外務省外交史料館日本外交史辞典編集委員会編『新版　日本外交史辞典』山川出版社、一九九二年、六九―七〇頁）。

扇　非常に真剣でして、軍務局長が国会の予算委員会で、その状況を説明するんですよ。私なんか、その原稿を書かされたんですが、何遍も書いたり、図表を作ったりして、付いて行って、国会の中でやりましたよ。そういう状況です。

だから、末次さん自身も一方では、「こんな古びた考え方はいかん」ということを言っておられましたね。

予算委員会でヴィンソン案が話題になった時期は、第二次ヴィンソン法成立後のことか。あるいは、その前の、扇氏が軍令部に勤務していた昭和十一年十二月から十三年十二月までの間か。

この頃の軍務局長は、豊田副武（昭和十年十二月二日～十二年十月二十日）、あるいは井上成美（昭和十二年十月二十日～十四年十月十八日）（前掲『日本陸海軍総合事典』四一〇頁）

末次信正は、前出のように昭和八年十一月連合艦隊兼第一艦隊長官、九年十一月横須賀鎮守府長官、十年十二月軍事参議官、十二年十月予備役、十二年十月内閣参議、十二年十二月～十四年一月内務大臣を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇二頁）。

影山　いま先生がおっしゃった昭和十一年の大演習は、前後の演習と比べて、どこが違うんですか。

扇　どこと言つて、それは私にも分かりませんが、とにかく全力を尽くして勝つということ……。

影山　演習の規模が、ものすごく大きいとか？

扇　規模は大きいですよ。

影山　特定の潜水艦を造るとか、作戦のやり方を急に変えたということとはありましたか。

扇　その頃から（出て來たのが）、いろいろな水中潜行艇ですね。一

人で行くとか、ああいう際どいやり方で——海軍は一体、死ぬことが決まった行動はやらないということであって来ているんですからね。こっちの味方が一人や二人で行って、初めから命を捨てて、水中で敵のあれ（艦）にぶつかって行くというような戦法は、一切考えられもしなかったし、そういうことを考えてはならないことになっていた。それが、もう「三六年の危機」となると、そんなこと構っちゃおれないということに、だんだん来て来た。それで、ああいう水中行動の、いろいろな戦法が出て来たわけです。また、訓練も始まった。人員も採った。だから、必ず死ぬることでした。

日中戦争勃発

伊藤 「中華民國へ出張ヲ命ス」（昭和十二年十月三十日「奉職履歴」というのは、何をしに行かれたわけですか。

中華民國発着は、それぞれ十一月三日、同月十七日で、期間は約二週間。

高橋 支那事変勃発後ですね。

扇 これはね、遠洋航海の司令官から帰って来た軍令部次長が……名前が出ないんだけど、あれが、「いま大陸で戦争しとるんだから、戦線を、ずっと一巡して……」と。

影山 嶋田繁太郎さんですか。

扇 古賀峯一さん。あれが練習艦隊司令官から、軍令部次長を予定して東京に帰って来て、そうだった。それで、現在、支那で戦争をしている。その戦争の現地を、二週間かけてずっと回る。それについては、

私が戦争指導を乙部員としてやっているでしょう。「お前、付いて行け」と。それで、支那の主なところを、ずっと回りました。

古賀峯一、海兵三四期、昭和十一年十二月練習艦隊司令官、十二年十二月軍令部次長、十四年十月第二艦隊長官（前掲『日本陸海軍総合事典』一九一頁）。

伊藤 陸地ですか。

扇 上陸して、現場をぐるっと回った。どこから行ったかな、奥地から行ったですよ。北京に行って、その陸軍の最高司令官や、もちろん海軍の武官など、みんな会ってね。そして、一つ所に泊したり二泊したりして、現在の戦線の状況を詳しく見て回る。その付き添いが、私なんです。命令で付いて行きました。だから、至る所で、現在の戦線の状況を、つぶさに見たわけです。私も初めて見た所、行った所がたくさんある。北支・蒙疆から、青島から、上海、海南島のほうまで行く予定だったんですが、それは行かなかった。南京、漢口、みな見ました。

伊藤 どういう、ご感想でしたか。

扇 これは、まあ何ですね。片一方の我々のほうは、対米戦争ばっかりしか考えちゃおらんで……。「北支に、いつまで八十万の軍隊を繋ぎ止めておくのか。こんな馬鹿なことがあるか」と、石原莞爾さんは言っていた。あの人は平生から、「北支に付いているのは、最高五個師団」と言っていました。「それを八十万も注ぎ込んで、どうするんだ」ということですよ。まあ、そんなようなことで、現地の状況をずっと見て、戦争をやっている所まで行きました。上海あたりの戦線を潜りながらね。

伊藤 じゃあ、危ない所にも行ったわけですね。

扇 ああ、危ない所も行ったですよ。地下を行ったり、防空壕の中から、敵を狙い撃ちするような姿も見ましたよ。それで、ずっと回ったホテルでも、みな古賀さんと同じ部屋で、先生は大軒をかくんですよ。一晩中、寝られないんだね（笑）。私は、枕を抱えて外のベランダで寝たこともありました（笑）。大軒ですよ。寝たと思ったら、もう軒で、あれには弱ったですな（笑）。

それから、海軍次官から機密費を貰って、私がみんな持っているんです。そして、最後に帰って来たら、「お前、これ使え」と言われて、何ぼあつたか覚えてないですが、おそらく十万円ぐらいあつたでしょう。

当時の海軍次官は山本五十六、海兵三期か。次官在任は昭和十一年十二月一日〜十四年八月三十日（前掲『日本陸海軍総合事典』四〇六頁）。

伊藤 残りがですか？

扇 ええ（笑）。五万か十万の大金を、「お前、これ使え」と言われた。そんなことがありました。

伊藤 乙部員の時に、日独防共協定の問題には関係ありませんでしたか。

扇 乙部員の時は……。待てよ、あれは後の梅機関の当時じゃなかったですか。

伊藤 いえいえ、防共協定のほうです。

高橋 昭和十一年。

扇 どことやった？

伊藤 ドイツ。後で、いろいろ問題になりますけれども、出発点はここです。

扇 あれは、陸軍に騙されたわけですからね。何やら將軍というのが

ドイツから帰って来て……。

伊藤 それは、防共協定の強化問題です。一番最初に防共協定というのを作るわけですけども……。

高橋 その前に、コミンテルンの第七回大会（一九三五年七月〜八月）でしたか、ファシズムに対して、人民戦線をつくる、と。それに対応して……。

扇 私は、南京時代じゃないかな。

日独防共協定は、昭和十年十月にドイツ側から陸軍の態度打診があり、翌十一年十月二十三日仮署名、十一月未発効。この間「奉職履歴」によれば、扇氏は昭和十年三月一日第三艦隊に編入され、同十月二十五日連合艦隊司令部付、同月三十一日連合艦隊参謀兼副官・第一艦隊副官、翌年十二月一日軍令部出仕。この間、南京滞在か。

伊藤 あんまり、ご記憶がないみたいですね。

高橋 支那事変のニュースを聞いた時に、「また、陸軍がやったな」と。陸軍の謀略だと思いましたが。支那事変は、どこでお聞きになりましたでしょうか。支那事変が勃発した昭和十二年七月七日は？

扇 支那事変が起こった時？

高橋 はい。先生は軍令部の部員で、参謀本部にも顔を出していらつしゃいますから、おそらく陸地で聞いたと思うんですけどね。

扇 防共……。私は、南京事変だという気がするんだけど……。

伊藤 たぶん盧溝橋事件は、最初は小さいでしょう。だんだん大きくなって……。

扇 現地から陸軍の大佐が帰って来たでしょうが……。

高橋 「陸軍が、またやった」というか、陸軍の謀略だという印象は全然なかったですか。満洲事変と同じじゃないかという……。

扇 それは、ありますよ。それはありますが、どここの配置の時に防共協定……。

伊藤 防共協定じゃなくて、支那事変の話です。

扇 支那事変……。近衛内閣？

伊藤 近衛内閣が出来て、直ぐ後です。

扇 その直ぐ後、ベルリンから陸軍の大佐か何かが帰って来て……。

伊藤 いやいや、それは第二次近衛内閣の話です。

扇氏が言っているのは、防共協定強化問題を交渉中の昭和十三年八月、滞独中の笠原幸雄少将が三国同盟ドイツ案を携えて帰国したという話と推測される（前掲『新版 日本外交史辞典』六九八頁）。

扇 違う？ 防共協定……。

伊藤 さっきの見に行った話になっているから……。

扇（暢威）盧溝橋事件を、どこで聞いたか、と。支那事変の始まりを、どこで聞いたか……。

扇 盧溝橋事件……。昭和六年でしたか。

伊藤 いえいえ、十二年。

扇 近衛内閣の……。

伊藤 そうです、第一次近衛内閣で、昭和十二年七月七日。

扇（暢威）中華民国へ出張を命ず……。

伊藤 それは、さっきお話を伺いました。

扇（暢威）だけど、「ずっと回った」と言っています。そこまで拡大してないんじゃないかと思うんだけど……。

伊藤 いえいえ。

扇（暢威）もう拡大しているんですか。

高橋 はい。

扇（暢威）たった三カ月後ですけどね。

高橋 そうです。じゃあ、第二次上海事変が起こった時は？ これも謀略だったんですけどね。

伊藤 あれは、海軍でしょう。

扇 あれは、何とかいう陸軍の少佐や田中隆吉……。

伊藤 それもあるんですけど、それは第一次上海事変です。

田中隆吉、陸士二六期。第一次上海事変（昭和七年一月）の際は、参謀本部付として上海駐在中。

扇 第一次上海事変？

影山 今、お話ししているのは、二次のほうです。昭和十二年八月です。大山事件とか……。

大山事件、昭和十二年八月七日、上海海軍特別陸戦隊の大山勇夫中尉搭乗の自動車が虹橋飛行場内に達した時、中国保安隊員と衝突、中尉は射殺され、運転していた斎藤一等水兵も拉致された後、殺害された事件。このため、当時進められていた和平交渉が失敗した（前掲『新版 日本外交史辞典』三八八頁）。

扇 昭和十二年……。私は、十一年が連合艦隊参謀だったんだから。

十一年の暮れに、軍令部に入ったからね。第一次近衛内閣が七月頃ですか？

高橋 六月四日の成立ですね。

影山 第二次上海事変は八月からですが、そのとき先生は、そのニュースをどこで受けられましたか。

扇 ……。

伊藤 また後で、思い出した時に……。上海での戦争は、ご記憶がありますか。

扇 上海の戦争は、今の古賀さんと一緒に、防空壕の中からこうやって見た。

伊藤 それが、そうですか。それも、十月になつてからですからね。上海事変が終わってから……。

高橋 十月に行っているわけですから、上海の戦いはもう終わつて、まっしぐらに走っているところですね。

伊藤 南京陥落は、いつだったかな。

影山 十二月十三日です。

高橋 あと、パネー号事件がありますね。

パネー号事件、昭和十二年十二月十二日、南京付近で、アメリカ大使館の臨時事務所が置かれていた同国砲艦パネー号を、日本海軍機が爆撃、沈没させた事件（前掲『新版 日本外交史辞典』八三七頁）。

扇 上海の印象は——末次長官と一緒に、上海の最前線に行った記憶は、はつきり残っています。

伊藤 それは、いつの話だろう？

影山 第一次上海事変です。

扇 七了江へ行く。これは印象深いです。末次さんと一緒に、敵がこっちに向けて大砲を撃つのを見た。上海の楊樹浦という所……。

伊藤 第二次上海事変の時は長谷川清中将が司令長官ですが、支那軍の航空部隊が旗艦『出雲』を攻撃しますよね。あの時は、ずいぶんシヨックだったという話ですね。

長谷川清、海兵三一期、昭和十一年十二月一日～十二年十月二十日第三艦隊司令長官、十二年十月二十日～十三年四月二十五日支那方面艦隊兼第三艦隊司令長官（前掲『日本陸海軍総合事典』二二三・四四四・四四六頁）。

影山 先生は、陸におられましたから。

扇 上海事変では、私は手柄をしたから。末次長官が、徳山から一個師団半ぐらいかな、第二艦隊に満載して上海へ運んだ。七了江に上陸というのをやった。

第一次上海事変（昭和七年一月二十八日～三月三日）での陸軍派兵は二度にわたり行われた。第一回は昭和七年二月の混成第二四旅団・第九師団の派兵で、それぞれ二月七日、二月十四～十六日に上海に上陸した。しかし戦局は停滞、これを打開するため二月二十三日に第一一、第一四師団の派遣が決定され、三月一日に上陸進撃した第一一師団の働きによって中国軍は後退、三日には事実上、戦火が収拾された（前掲『新版 日本外交史辞典』三八八～三八九頁）。扇一登「上海戦線視察記」（『五一』第七号、昭和八年九月、四三～四八頁）によれば、扇氏は二月十六、十七の両日、揚子江口沖の待機錨地から『夕霧』に乗船して、呉松付近の第三艦隊司令部に向い、そこから上海市街や楊樹浦等を視察、第九師団司令部や陸軍混成旅団司令部を慰問して、再び錨地に戻っている。当時、扇氏は第二艦隊参謀兼副官、同艦隊長官が末次信正であった（前掲『日本陸海軍総合事典』四四三頁）。

海南島を確保——汪兆銘との交換公文

影山 七了江の話に行きますか。

伊藤 第五艦隊の時の話まで行ってもいいけど、ちよつとその前に、海軍の軍事普及部の部員をやっておられますね。あれは、何をやっていたんですか。

扇 何もしやせんですよ。ただ、目付です。「勝手なことを言うといかんから」というような意味で、部員にされたんです。しかし、直接自分でやったことは、あんまりないですよ。たった一遍、テレビで喋らされたことがある。

伊藤 ラジオでしょう。

扇 テレビじゃない、ラジオです。喋らされた。

伊藤 何を喋ったんですか。覚えていますか？

扇 いや、あまり重要なことじゃないな、覚えちゃおらんから。覚えてるのは、ラジオ局から……。

高橋 愛宕山まで行ったんですか。

扇 ええ、大きな果物籠を貰って来たことだけ覚えている（笑）。あとは、何を喋ったかは覚えちゃおらん。

伊藤 それは、お礼ですか。

扇 お礼。それとか、ちよつとした飾り棚の敷物とか、手厚いお礼を貰ったことだけは覚えてる。何を喋ったか……。やっぱ、海軍としての考え方だと思いますよ。

高橋 軍事普及部というのは、対外宣伝ですか。

伊藤 いやいや、対内もね。いろいろなパンフレットを作ったりね。

影山 三五年、三六年と、危機を煽った頃ですからね。

伊藤 だけど、この時は、もう違うでしょう？

じゃあ、第五艦隊の話……。

高橋 補第五艦隊参謀ですが、職種は作戦ですか、情報参謀ですか。

昭和十三年十二月十五日第五艦隊参謀。翌十四年七月十五日には、軍令部出仕兼支那方面艦隊司令部付第三艦隊司令部付上海在勤海軍武官付に補せられている（「奉職履歴」）。

扇 これは、私は自慢することが多いですよ、海南島問題は……。

伊藤 じゃあ、どんどん話してください。

扇 つまり、度々話に出るけど、軍令部として、アメリカとどう戦争をするかという、根本の決まったものはないんですからね。それで私は、予てから考えておった南方作戦を仮にやったとしても、あるいはやらなかったとしても、海南島というところに一歩、海軍の地歩を築いておくことは、どうしても必要であるという強い信念を持っていた。それで、五艦隊参謀にされて、行ったんですよ。

その当時の次長が近藤信竹さんでした。あれは、次長じゃない、一部長か……。近藤信竹さんが行くに当たって、軍令部や海軍省の主務者を幕僚として、ごっそり連れて行ったんです。軍令部から私、海軍省から藤井茂、柴勝男——この三人とも、長官の幕僚で行ったんです。南支に行つて、三竈島（さんそうとう）という所に根拠地をおいて、これが新基地だったですよ。

近藤信竹、海兵三五期、軍令部参謀、連合艦隊参謀、海大教官等を経て、昭和十年十二月軍令部一部長、十三年十二月第五艦隊長官、十四年十月軍令部次長、十六年九月第二艦隊長官、十八年八月軍事参議官、同十二月支那方面艦隊長官、二十年五月軍事参議官、同九月予備役（前掲『日本陸海軍総合事典』一九三頁）。

伊藤 それは、どこにあるんですか。

扇 香港の、ちよつと南のほう……。香港に近いところです。何にもないところですよ。静かな湾です。

伊藤 港になつていないんですか。

扇 港になつちゃおらん。港になつちゃおらんけれども、西や北の風は防ぐことの出来る湾ですよ。そこへ半年ぐらいおりましたかな。私

は、渉外関係と封鎖作戦の主務者だったんです。

伊藤 沿岸封鎖ですか。

扇 支那沿岸封鎖。事変に適應する海軍の一番の前進基地、そこで封鎖作戦の主務者だったんです。それで、しばしば香港にも入ったし、あの沿岸を走り回って「通商破壊」をやったんです。外国の船にストップをかけて臨検して、兵隊を乗せたり軍需品を乗せたりしているやつは、みな捕獲して、内地へ送るんです。その船もろともに……。それは、第三国の船です。たくさん通ったですよ。そういうことをやっておったので、私は支那事変から後の日米戦争なんかを予想して、海南島に海軍の地歩を築くことを、どうしてもやっておかなきゃいかんと。それが私の念願であって、どういう形でやるかということが問題でね。これは、藤井さんなんかも、よく話をしておったんです。

最後の決断（交渉）を、汪兆銘とやりました。汪兆銘は重慶から出て来て、ハノイへ来た。ハノイから——私の作戦に従って——上海へ上陸させたんです。こういうことをやったんですが、最後の結論に行きますと、汪兆銘も海軍に対しては、非常な親しさと特別な考え方を持っておってくれたんです。海南島を開発すれば、海軍の思うようなことが出来る、と。資源開発にしろ、防衛にしろ、何でも出来るということ、と。とうとう汪兆銘に認めさせたんです。これを、私は誇りと考えております。海南島が重要なものになったのも、私の信念を認めて、海軍を非常に評価してくれたんです。

どういう形でそれを結んだかと言うと、汪兆銘との交換公文で決まりました。その交換公文の文章は、私が一晩中考えて作った、その通りの文句で出来ているんですよ。本国海軍省、軍令部がこれを評価してくれて、実際に太平洋戦争が起った時には、これをフルに活用しま

した。その主たる文句は、藤井茂さんに頼まれて、私が一晩考えた「軍事上の要求を充足するものとす」という、たった一言です。「海軍の軍事上の要求を充足するものとす」——これに一切を含むんです。主権的なことも、みな含む。資源開発であれ、海南島を守る援護であれ、海軍のことは何でも聞くといい意味をも含んで、「軍事上の要求を充足するものとす」という、たった一言です。これが、このまま交換公文になって残ったわけです。

汪兆銘は昭和十三年十二月二十日に重慶を脱出、ハノイに向かっており（前掲『新版 日本外交史辞典』一〇四頁）、扇氏は同月十九日から南支沿岸封鎖交通線破壊及び軍事施設の攻撃に従事していた（奉職履歴）。一方、「最後の結論」である交換公文は、昭和十五年十一月締結の「日本国中華民国間基本関係に関する条約」に附属したもの（次頁の註を参照）。

伊藤 これは、どこどこが交換公文を交わすわけですか。

扇 汪兆銘政府と日本政府との条約で、外務省を通じてやりました。そういう交渉を、梅機関でやったんですよ。私が説明して、陸軍もさんざん口説いて……。これは、海軍の首席代表・須賀彦次郎少将——私の上長ですが——と、二人でやったんです。

須賀さんという人は、中国のどこへ行っても非常に評判のいい人なのです。それは、自分の俸給をみなぶちまけて、親日的な支那の地方軍閥や財閥を支援したり、親日家遺児の教育費を全負担したりしてきたことが、隠れもない事実なので、その人物が広く買われているのです。須賀さんのこうした人柄は、支那関係の人はみな知っており、汪兆銘政府要人も、みな夙に十分承知なのです。この長年にわたる背景は、外交交渉の時には大きく物を言うのです。「軍事上の要求を充足するものとす」との強大な要求が吞まれた、一つの背景として挙げる

所以です。

それから、外務省の、その当時の何とかという書記官です。

ここで話題となっている交換公文は、昭和十五年十一月三十日、日本と汪兆銘の南京「国民政府」との間に結ばれた「日本国中華民国間基本関係に関する条約」に附属した秘密協約のことと推測される。この秘密協約では、日本艦船の揚子江沿岸、華南沿岸などへの駐留と軍事資源開発および両国の軍事協力が規定された（前掲『新版 日本外交史辞典』七四六頁）。

条約交渉の日本側全権大使は陸軍大将阿部信行。その「随員の顔触れ」を報じた（昭和十五年）四月七日付『東京朝日新聞』によれば、海軍側筆頭随員の須賀少将は、明治四十三年海兵卒業後、昭和十四年に少将に昇任するまでの、大半二十数年というものを支那で隠れた活躍を続け、大尉の頃から「揚子江の主」と呼ばれ、蒋介石の北伐を助けたこともあったという（「扇一登氏関係文書」三三四）。なお、同氏の略歴は次の通り。海兵三八期、『椿』艦長等を経て、昭和五年一月、中佐の時に漢口武官となり、以後断続的に、南京、福州、天津、北京に駐在。昭和十三年二月北支特務部長代理、十四年三月中国駐在、十五年四月南京駐在、十六年一月南京政府軍事顧問となり、翌二月南支における飛行機事故で死去（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇一―二〇二頁）。

高橋 矢野征記ですね。

矢野征記、大正十四年十一月外交官試験合格、昭十五年四月中華民国大使館一等書記官（前掲『新版 日本外交史辞典』一〇一〇頁）。前述の新聞記事「随員の顔触れ」では、「興亜院書記官（華北連絡部）」という肩書き。

扇 矢野征記、そういう連中も、みんな知っているんです。それが交換公文になって、ピシャッと、何でも出来ることになった。三亜（港）の近くに、鉄山があるんです。その鉄山に藤井茂が行って、そ

こらにゴロゴロしている鉱石を拾って来て、「鉄分が五三パーセントある。このまま金槌になる」と言うたんですよ。それなんか、日本で直ぐ、どんどん開発した。それと、ゴムですね、海南島で……。

高橋 海南島でゴムが採れるんですか。

扇 ゴムが採れる。さらに、どんどんゴムの木を植え込んだり、一切の勝手なことが出来たんですよ。

高橋 鉄道を敷いたり……。

扇 その元の、「軍事上の要求を充足するものとす」という、たった一言に、一切を含んでいた。

伊藤 それは、五艦隊の参謀としてやったんですか。

扇 そうです、封鎖作戦の作戦上……。汪兆銘は、蒋介石に対して封鎖をした。私は汪さんのところに、それを口説きに何遍も行っているんです。一緒に酒を飲んで口説いて、最後に汪さんが、ある晩、私の所に電話を寄越して、「私自身は、シャン・シャオツォ——中国語で扇少佐——の言うことを了解した。ただ、どうしても、いくら口説いても了解しないのが、陳公博だ」と。国務長官ですよ。「これが、どうしても承知しないから、あなたが直接、陳公博を口説いてくれ。陳公博が承知したら、私は、もういいから」と言った。

陳公博は、前掲『新版 外交史辞典』（六〇九頁）によれば、「日中戦争では訪伊使節、軍事委員会初代宣伝部長、ついで汪政権に参加し立法院長」とある。

それから、私は須賀さんと相談して、陳公博を口説きにかかろう、と。直ぐ陳公博と連絡を取った。彼はオックスフォード出身だから、英語はよく分かるんです。それで、「明日から、その話をしよう」と言って、何と言ったかな、上海の一番大きな料理屋があるんですよ。

その大きな部屋を借りて、三人で泊り込んで三十六時間、陳公博を口説いた。そのことで、有名になった。その間に、一緒に寝るんですよ。両方とも、もう同じことを繰り返すわけ。これを、英語でやるんです。それを繰り返したら、最後に陳公博が「イエス」と言ったんですよ。酒——ウィスキーです——を飲んでグロして、「ちよつと休もうや。三十分寝ようや」と言って、枕を並べて座敷に寝るんですよ。寝て、また起きてやる。それを三十六時間やったら、とうとう「参った。もついい、分かった」と言うた。

陳公博は、北京大学卒業後、コロンビア大学で修士を取っている（前掲

『新版 日本外交史辞典』六〇九頁）。

その時、陳公博と私は抱き合いました。支那では、「義兄弟」という社会的な制度があるんですね。これは、喧しいものなんです。書類を交わしてやる。その代わり、一生を通じて、一切のことを兄弟としてやる、そういう社会的な一つの仕来りがある。「義兄弟になろう」と、私が言うたんです。そしたら陳公博が、「やろう」と言って抱き合いながら……。しかし、書類までには至らなかったんですが、言葉では結んだわけです。

そういうことがあつて、そのことを料理屋から汪さんに電話したら、「ああ、それは良かったな。その文句で、自分もいいから」と言った。

伊藤 艦隊の参謀というのは、かなり自由に動けるものなんですか。

扇 それは動けるんですよ。艦隊の参謀で、封鎖作戦というのが、私の主務だから……。

伊藤 中国側と交渉する際、向こうは英語で来ますからね。

扇 向こうも英語、こちらも英語。須賀さんは不十分な中国語。

伊藤 英語でコミュニケーション出来る人というのは、当時少なかつ

たということもあるんじゃないですか。

扇 英語の会話は、この前も話したけど、私は宮島の子どもを相手にして練習をしたし、中学校でも広島女学院のアメリカ人の婦人教授が来て、これが英語ばかりで授業をしたり……。

影山 陳公博と交渉された時、先生は少佐でいらつしやいますね。

扇 少佐——シャン・シャオツオと言ってね。

伊藤 そろそろ二時間経ちましたので、また次にしたいと思います。

（以上）

扇 一 登
オーラルヒストリー
第3回

[2001年2月1日 14:00～16:30]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

「謀略綱要」の作成

高橋 前は、汪兆銘のことで終わりましたが、そもそも先生が「汪兆銘工作」に関わられたきっかけは、どういったことでしょうか。

扇 関わりと言いますか、それは海南島の問題ですよ。私は戦争指導班に第一部長直属で入りましたが、着任した時は南方作戦といったことは、軍令部の書類上はないんですよ。それと、謀略という問題で痛感したのは、海軍は全く（謀略には）無頓着だったことです。ですから、着任した時に、これは空白状態になっていると思ってね。海南島というものに、軍令部として、どういう地位を欲しているのか……。そのことについて、今まで考えられていなかったのでしょうか。

当の戦争指導班も、それだけの余裕がなかったのか。戦略的・戦術的な、いろいろな意味における海南島の認識というものは、極めて低かったんですな。……ないことはないでしょうけれども、極めて低かった。特に、それが文章になっているとか、規範に入れられているようなものは、何もなかったんです。私は、連合艦隊勤務の後、直ぐ戦争指導班に初代乙部員として入れられましたが、その時に、「はあ、これは何とか、一つきつかけをつくらなきゃいかん」と、もうその時から感じていました。国策、戦争指導、条約、涉外関係、いろいろな施策の全体を見て、見当違いだ、と。これは、この際、はつきり自分がやらなきゃ駄目だと思いました。

それから、しばらくして、たまたま福留（繁）さんが作戦課長だった

んです。この福留先生が私に、「日本海軍は、謀略は全く素人だ。それについての研究も着意も、何もない状況だ。扇君、ひとつ海軍としての謀略というものを、半年ぐらいの余裕を持って考えてくれんか」と言われたんですよ。福留さんが私に、直接、作戦課長としてね。私自身、謀略ということが何にも分らないから、それから考え抜きました。陸軍は、全部謀略ですからね。それに対して海軍は、何にも考えてない。これはひとつ抜本的な、基礎的なものを、自分で考えてみようと思って、じっくり考えました。夜に昼に、三カ月くらい考えた。そして、「謀略綱要」という、海軍の一番の基本になる規程というか、内規というか、そういう原案を作り上げ、省、部の要処、要員、大臣、総長に全部回して、全員の判子が捺されて帰って来ました。意見は、誰からもありませんでした。

扇氏が連合艦隊勤務の後、軍令部出仕兼部員に補せられたのは、昭和十一年十二月一日のこと（奉職履歴）。その後、十二年十月五日に海軍省出仕兼補、同月九日に内閣情報部情報官を仰せ付けられる。国策、戦争指導関係での配置については、第二回聞き取りを参照（四二―四三頁）。

福留繁、海兵四〇期は、扇氏が軍令部に転じる前年の昭和十年十月より軍令部一部一課長。十三年四月支那方面艦隊参謀副長に転出（前掲『日本陸海軍総合事典』二二七頁）。

「謀略綱要」の作成は昭和十二年前半か。

高橋 それは具体的に、どういう内容ですか。

扇 これは、海軍の極秘中の極秘、それを「謀略綱要」と称していました。ほんの数枚に過ぎませんが、海軍が謀略としてやれることを一々、平素はどう、戦時になったらどう、と。海軍として介入し得る、利用し得る謀略には、こういうものがあるかを広い範囲から考えて、

それをまとめて、海軍省の枢要な所に全部回しました。誰も一言も、意見や修正を書いておらん。そのまま戻って来ました。

戻って来たということは、もうこれで承認されたということですから、直ぐそれを活版にして数部作り、それを大臣や総長に渡した。私の手許にも二、三部残して、金庫へ入れておいたので、本当の海軍の中心部の人だけにしか分からないです。そういうことで、「謀略綱要」は海軍としての、たった一つの謀略対策の基本になったわけなんです。

高橋 海軍が海南島の重要性を認識していなかったので、扇先生はそれをばつきりと、「日本の海軍としては、海南島は取らなきゃいかん」と？

扇 そうです。どういう内容にしたか、その例をお話ししてもいいんですがね。

高橋 お願ひします。

扇 それまでの海軍には、戦争指導班というものはなくて、官房調査課の阿部大佐が主としてやっておられたと思います。天皇陛下に、海軍のことを御進講申し上げる行事が年に何回かあるんですが、その時は原稿や図表などを作ったり揃えたりして、進講者に渡します。軍令部では次長が進講しますので、その資料や原稿の準備は第一部長直属の中原義一郎大佐が担当しておられたのです。また、軍務局長は海軍予算を請求するために、両院の予算委員会で入念な説明をしなければなりませんから、その資料等の準備・援助も同様で、力を入れたものでした。しかし、省部互渉規程成立以後は、これを戦争指導班の甲乙部員が全面的に担当して、一層力を入れて、終始、説明現場にも立ち会いました。

阿部嘉助、海兵三九期、昭和十年五月内閣調査局調査官、十一年十二月海軍省臨時調査課長、十二年十月『山城』艦長に転出（前掲『日本陸海軍総合事典』一六一頁）。

影山氏より、「実際には阿部氏ではなく、横井忠雄（海兵四三期）が担当していたのでは」との指摘があったが、横井が軍令部一部員として活動した昭和十一年十二月と十四年十一月（その後、『千代田』艦長に転出、前掲『日本陸海軍総合事典』二四四頁）は、後述の中原の担当時期と入れ替わりであり、また扇氏の着任時期と重なっているため、両名の前任者として阿部大佐の名を挙げているのは、問題ないと思われる。

中原義一郎は、中原義正の誤り。中原義正は海兵四一期、昭和五年一月、少佐の時に軍令部一班一課参謀、同年十二月中佐、六年九月軍令部出仕（一班）、同年十二月から七年八月ジュネーブ出張、七年十二月人事局一課局員を経て、九年十一月大佐、軍令部一部員、十一年十二月には『名取』艦長に転出（前掲『日本陸海軍総合事典』二二七頁）。なお、第二回の聞き取り（四一頁）の際には、正確に中原義正と言っている。

「省部互渉規程」は、前出の昭和八年十月一日（内令第二九四号）の海軍省軍令部業務互渉規程のこと（前掲『日本陸海軍総合事典』四九五頁）。

議会の予算委員会での軍務局長説明には、政府委員たる高木課長と説明員たる私が付いて行って、世話を焼くわけです。私の時には、いい部下がおりましてね。部下というのは、文官たる補佐役です。別室に何人かいて、資料を平素からずっと集め、それを私の所に持ってきて来ます。それをまとめたり、説明原稿を作ったりしているうちに、私は海南島の重要さを、つくづく考えました。それまでは、海軍が会社をつくって……。

高木惣吉が（臨時）調査課長であった昭和十二年十月から十四年十一月当

時の軍務局長は、井上成美少将（昭和十二年十月～十四年十月在任）。

高橋 南洋興発ですか。

扇 南洋興発をつくって、マリアナ方面の各離島にサトウキビを植えさせたんです。それは、砂糖をつくるのも、もちろんいいんだけど、後で全部飛行場に出来るような地積を求め、地表を整えて……。サトウキビを切って除けさえすれば、直ぐそのまま各地を守る飛行場になるという構想でつくりました。

そうして、潜水艦、高速駆逐艦、大型駆逐艦なんかを利用して、「通商破壊」をやる。パナマからサンフランシスコ方面、あるいは奥地まで、およそやり得る方法を全部並べております。逐一説明してもあれですが、参考までに申し上げれば、南洋委任統治領には軍備施設禁止の国際条約があつて、表向きには何も出来ない状況です。

一九一九年六月締結のヴェルサイユ平和条約、第四編ドイツの海外利権（一一八～一五八条）部分が、該当か。ここでドイツの海外権益は、戦勝国が委任統治の受任国という資格で分割することになり、日本には山東省における旧ドイツ権益と赤道以北旧ドイツ領諸島が譲渡された（前掲『新版 日本外交史辞典』七六頁）。

高橋 そうすると、海南島は、そうした南方作戦の前進基地ということですか。

扇 ええ。私は戦後、外国から帰って来て、戦争中に実際に実行されたことを当たってみると、戦争前に私が書き並べたことは、大小全部やっているんですが、それ以外のことはなさそうでした。

例えば、爆弾を積んだ風船を、西風に乗せて飛ばす。これは、着想は陸軍です。陸軍は、その実験までしているんです。青島あたりから風船を上げて、それが日本本土の上を通り、米本土に流れて行くのを、

陸軍は実験までして……。それほど、謀略を立ち入って研究していたわけです。それは一つの着想として私も採用し、それ以上に考え得ることを、たくさん並べておいたら、戦争中、日本の海軍はその大小全部を実行しているんですよ。全部やって、大小全部に成功しているんです。大変な実績だと思います。

話のついでに、それがどうして分かったかと言いますと、陸軍の真似をして風船を飛ばすということをやって、効果を上げています。どうしてその効果が分かったかと言うと、松前重義さんがよくアメリカへ行つて、アメリカのことを調べているんですが、私に話してくれたことがあります。——自分がロサンゼルスに行ったら必ず泊まる、非常に昵懇にしていたホテルがあつて、そのホテルの主人とは仲が良かった。戦後、そのホテルに行ったら、主人がいなかったと言うのです。そこで、松前さんは彼を探し出し、訪ねて行って話をしてみたら、「冗談じゃない。太平洋付近——西海岸はパナマに至るまで、日本の潜水艦や飛行機から、いろいろなものが飛んで来て、みな震え上がっていた。（日本に）何をされるか、分からん。（日本は）後方の補給路を絶つし、『アメリカの、どこへでも行くぞ』という、強い恐怖心を起こさせていた。それで、『通商破壊もやる』というようなことが全部広がって、みな奥地へ逃げてしまった」と。だから、ホテルを売り飛ばして、全く関係のない遙かの奥地に入っていた、と。そういう状況であつたことを、松前さんが帰って来て、私に話してくれました。

調べてみると、私が挙げたことは、あらゆることを、みな実行しているんです。それで、西海岸は一時、恐怖のどん底になった。後から（西海岸に）帰って来た人もあるらしいですが、何しろ財産を捨てて逃げるんですから。後がどうなろうと、それどころじゃなかったんで

すね。ほぼ、そういう結果になっていたわけだ。

松前重義、大正十四年三月東北帝大工学部電気工学科卒業後、通信省入省、工務局調査課長等を経て、昭和十六年十二月通信省工務局長、十八年十一月通信院工務局長、十九年四月兼通信院防衛通信施設局長、同七月二等兵として召集され南方軍總司令部付、同十二月陸軍兵器学校、二十年一月帰国し通信院技師・工務局、同五月召集解除、技術院参技官、同年八月通信院総裁、二十一年五月東海大学創立。なお、昭和十五年十月から十六年四月まで大政翼賛会総務部長を務める（前掲『日本近現代人物履歴事典』四八三頁）。

高橋 話を戻してよろしいですか。支那事変が、正に拡大していく中で、海軍は海南島を狙って、先生の計画によって海南島を押さえますね。そういう時点で、海軍としては支那事変の解決方法として、どんなことを考えていたんでしょうか。いつまでも戦争をやっていくわけにはいかない。片方、アメリカとの関係が……。

扇 それは、高木惣吉さんが言ったんですが、「もう陸軍には歯が立たん。陸軍をどうしていいか、自分にも分からん」と。彼は、西園寺公望の秘書官・原田熊雄（当時、貴族院議員）と非常に親しくて、宮中の話から何から全部擷んでいるんです。

それは、どうして分かるかと言うと、近衛（文麿）さんのブレーンになっていた熊本の細川護貞さんが、高松宮様と近衛さんとの間の密使になって、両方の間を行ったり来たりしていたんです。そして、その間に高木さんがいて、「原田情報」を全部握っているんです。もちろん、そればかりではないでしょうが、彼は宮中のことや政界上層部のことがよく分かるんです。終始、それでやったんですがね。（その後）細川さんは、近衛さんから離れて、高松宮様との間の連絡使にな

っていた。それで、高松宮様に会いに行く前に、高木さんのところに必ず来ていました。高木さんの机の右脇、私の席との間に細い通り抜けがあつて、いつでもそこへ来て、ヒソヒソ話をしていた。もちろん、一部は聞こえるけれど……。それで私も、その間が密接であるということ、よく心得ていました。

細川護貞は、昭和十二年四月、近衛文麿の娘・温子と結婚、企画院嘱託・財務部勤務を経て、十五年七月く十六年十月近衛首相秘書官、十七年二月く十七年七月企画院調査官・一部一課、十八年十月く二十年八月高松宮御用掛を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』四五八頁）。

それは、先代の細川で、その息子（細川護熙）が、後を継いでいて、私も息子さんとは何回か話をしました。（先代の護貞は）私が上海工作をやっている間に、よく来ましたよ。だから、相当親しくなっていたんですが、戦後になって松前さんから聞いて、そういう一時期のことが、すっかり分かったわけなんです。

高橋 分かりました。

汪兆銘の引き出し工作については、先生は最初から関わっていたんですか。

扇 これは、引き出し工作を一番熱心に行ったのが、影佐禎昭です。ここで、参謀本部が二つに割れていることの実証を、私も擷みました。端的に言うと、参謀本部は支那課というのが強いんです。満洲事変以来の大陸派ですね。それから、そうじゃない知英米者（派）は地方に流されて、ほとんど中央には来ないんですよ。例えば、スウェーデン公使館付の陸軍武官だった小野寺さんの例が、よく示しているように……。あるいは、もう一人、和平工作をちよつとやろうとしたトルコの武官だった人とか、パリの沼田大使館付武官など……。そういう人

たちはいるのですよ。いるのだけど、彼らは中央には近付けないんです。来ても、直ぐ出されてしまう。しかし、陸軍の中央にいた人で、アメリカを知らない人はあまりいませんよ。みんな一遍ぐらいいはアメリカに行ったり、あるいは駐在武官を二、三年やっている。

影佐禎昭については、第一回聞き取り（二六頁）の註を参照。

スウェーデン公使館付武官は小野寺信大佐、陸士三二期で、在任期間は昭和十五年十一月（十六年一月着任）〜終戦、二十一年三月復員。フランス大使館付武官は沼田英治大佐、陸士二九期で、在任期間は昭和十四年七月一日〜終戦。当該期のトルコ大使館付武官は立石方亮中佐、陸士三二期で、在任期間は昭和十三年十二月十日〜終戦、二十一年三月復員（前掲『日本陸海軍総合事典』二八、三六九―三七〇頁）。

「黙れ！」の彼（佐藤賢了）なんかも、アメリカ力で補佐官をやっておるんですからね。米国大使館付武官補佐官というのを何年かやっているんです。アメリカを知り抜いていて、アメリカが物質的に、生産力的に、あるいは資源的に、（日本が）抜くべからざる力を持っているということとは、よく分かっている。分かっているんだけど、中にいわゆる革新青年士官としての陸軍独自の歩みをやろうとした連中がいるでしょう。そういう連中に流されて……。だから「黙れ！」さんなんかも全部知っているんだけど、知らん顔ですよ。何にも知らんと。そして、精神力一方で、大和魂で戦をするんだ、と。「ユダヤ人五百万人や黒人など、あらゆる人種を抱え込んだアメリカが、戦をやるはずがない」という議論で、ずっと通しているんですね。それで、行動派と精神力派とに分かれまして、行動派は三八銃を持って戦をするだけですから、どうにもなんなんです。高木さんが、「手が付けられん」と言っていた、その通りなんです。

佐藤賢了は、前出のように昭和五年五月〜七年七月までアメリカ駐在（米野砲二連隊付）。補佐官の経験はない。

高橋 当時の海軍としては、アメリカとの戦争を一応、頭の中に置いて行動したと思うんですけれども、しかし出来れば、何とかアメリカとの戦争は避けたい、と。一応手は打っておくけれども、と。そうになると、いま目前に戦われている支那事変を、何とか解決しなきゃいけない、と。陸軍のほうも手を焼いているんですけれども、当時、先生のいらつしやった軍令部の中では——海南島の占領もあります——支那事変を、どのようにして解決しようと考えておられたんですか。そういう中で、汪兆銘工作というのが出て来るんですけれども、そのあたりのことを、お聞きしたかったです。

扇 いま言ったように、陸軍がいろいろに分かれていて、一番強いのが支那班で、影佐です。それから、強くなって、本当の良心的な判断を下しているのが石原莞爾さんで、作戦部長ですね。堀場一雄も石原派なんです。石原さんに心酔しておった。心酔と言いますか、石原さんと一番近い。彼は、ちゃんとした考えを持って、視野が広がった。私は、堀場が好きだったです。私の相棒なんです。

堀場一雄については、第二回聞き取り（四三頁）参照。

その次に、秩父宮様が参謀本部の私の相役に来られたんですよ。それで、秩父宮様とは、ありったけの議論をしました。私は、昼休みには参謀本部によく行きました。石原さんは偉い人だから、私も尊敬しているし、好きだったし、話が分かるんですよ。それで、私は参謀本部の部員を兼務していたから、いつでも自由に入れるんです。だから昼休みにしょっちゅう行って、「陸海軍クラブ」というのが、ちょうど中間ぐらいのところにあるので——参謀本部の跡に、今の劇場があ

りますが——あそこで、よく会ったりしていたんです。

「劇場」は、国立劇場（三宅坂）のこと。

高橋 ただ、石原さんがいなくなっちゃうと……。

扇 石原さんは、関東軍参謀副長に追い出されてしまっんです。その時に、建川美次が行くでしょう。

石原莞爾が参謀本部一部長から関東軍参謀副長へ転出したのは、昭和十二年九月、その後十三年八月に帰国（前掲『日本陸海軍総合事典』一六頁）。

伊藤 それは、満洲事変の時です。

満洲事変（昭和六年九月十九日）当時、石原は関東軍参謀（昭和三年十月）七月八月）、建川は参謀本部一部長（昭和六年八月）七月二月）（前掲

『日本陸海軍総合事典』一六・九一頁）。

扇 行ったけど、その場合は会わさんようにさせてしまったという経緯があった。まあ、そんなノモンハン事件なんかとの関係だね。

ノモンハン事件（昭和十四年五月）との関係は、不明。なお、建川は、昭和十五年十月から十七年三月まで駐ソ大使を務める。昭和十六年四月に日ソ中立条約が締結され、十七年五月にはノモンハン地方の国境線が最終的に画定される（前掲『新版 日本外交史辞典』八二〇—八二二頁）。

扇（暢威）質問は、「海軍は、支那事変をどう解決しようとしたか」という話ですが……。

扇 『大東亜新秩序の建設』という標語を、京都学派の田辺元先生に哲学的に意義付けていたかどうかというお願いに行ったのも、我々の「悩み」の一端を示すものでした。

この部分は扇氏の要望により付け加えられたものであるが、挿入箇所の指定が不明瞭だったために、ここに挿入した。

田辺元、昭和二年以降、京都帝大教授（前掲『日本近現代人名辞典』六四

八頁）。

須賀武官との関係

伊藤 須賀彦次郎という方は、どういう方ですか。

扇 私は、尊敬している。大好きでしたよ。彼は、個人的営利を一切考えないんです。一口に言えば、自分の俸給は全部吐き出すんです。彼の人物の赤裸々なところは、どこへ行っても小便をするんですよ（笑）。陳公博との三十六時間の会議の話が出て来ますけど、そこでも、いつでも小便をする。だから、（会議が行われたのは）上海一の大きな料理屋ですが、始終、掛け軸や床（床の間）の大洗濯をしてね。小便を引つ掛けとるんだから……。床の掛け軸に小便を引つ掛けるんだから、どうもならんですよ（笑）。そういう男でありながら、日本側に立って命を落とした何人かの人たちの子供には、自分の月給を投げ出して、全教育費を負担していた。そういう人なんですよ。

須賀については、第二回（五三頁）の註を参照。

伊藤 その人は、上海武官なんですか。

扇 いや、いろいろ駐在地がある。

須賀は一貫して中国における情報機関に籍を置いており、その詳細は以下の通り。昭和五年一月十五日）七年四月二十三日漢口駐在、七年四月二十三日）八年十一月一日南京駐在、九年十一月十日）十一年十二月一日福州駐在、十二年十月三十一日）十二年十二月八日天津駐在、十二年十二月八日）十四年三月十五日北京在勤武官、十三年二月三日）十四年三月十五日

北支海軍特務部長代理、十四年三月中国駐在、十五年四月南京駐在、十六年一月八日〜二月五日中国国民政府軍事顧問（同日、事故死）（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇二、四三七〜四四〇頁）。なお、北支海軍特務部は北京に設置されており、部長は支那方面艦隊司令部付として北京、天津、青島に勤武官を指揮する関係から兼務となっている。

伊藤 今のお話の頃は、上海武官府というのがあったんですか。
扇 上海武官府というのもあります。武官府付になっているんですよ。

「奉職履歴」によれば扇氏は、昭和十四年七月十五日「軍令部出仕兼支那方面艦隊司令部付第三艦隊司令部付上海在勤海軍武官府」に補せられている。海軍の情報機関の一種である地方在勤武官制は昭和十三年四月軍令第五号により施行され、その後、各地に在勤武官府（室）が設置された。上海在勤武官は昭和十四年三月十五日から任命されており、この時、上海在勤武官府が設置されたと推測される。扇氏が上海在勤海軍武官府を免ぜられる昭和十五年四月までの上海在勤武官は、野村直邦（海兵三五期、中将、昭和十四年三月十五日〜十四年十月二十六日、中国大使館付武官の兼務）、岩村清一（海兵三七期、少将、昭和十四年十月二十六日〜十五年十月十五日）であった（前掲『日本陸海軍総合事典』四三二、四三七〜四三八頁）。

伊藤 扇先生は、上海武官府付になっておられるでしょう。その長が須賀さんなんですか。

扇 そうそう。これは人事局から聞いたんですが、須賀さんというのは無茶苦茶な人だけれども、支那人に対しては絶大な信用がある。汪兆銘からの招待で行っても、酒を飲んだら、直ぐその床に行つて小便を引つ掛けるんです。もう、持て余されている。「ああ、あれは始終のことだ」と言つて、みんな知っているんです。汪兆銘政府の要人でも、みんな知っている。蒋介石自身も須賀さんという人物を、よく知

っている。支那人に、とてつもなく人気があるんです、そういう無茶苦茶なことをしながらも……。そういう人なんです。

扇氏の直属の上司に当たる上海在勤武官は、須賀ではない（直前、およびその前の註を参照）。中国駐在、南京駐在という立場の須賀との関係は、官制上は不明。なお、扇氏に対して昭和十四年七月二十九日付で「中支在勤海軍武官長の命を承け服務すべし」との辞令があるが、中支在勤海軍武官長というのは、上海在勤海軍武官長のことが。

伊藤 扇先生は、その部下になるわけですか。

扇 部下になる。私が行く前でも、須賀さんという人物は、中央でもみんな知っているんですよ。ああいう男なんです。ところが、支那人には絶大な人気がある。だけど、組織的な活動は出来ないんだ。支那語だつて、ろくには出来ないんですからね。やつとこさ、まあまあの格好で、普通の付き合いは何とかやつておる。私は、ずっと付いていたんです。

それで、人事局が私に、「あれは、ああいう人なんだ。しかし支那人には、蒋介石にすらも、人情的には人気があるんだ。だから、お前が行つて、須賀さんに知恵を注ぎ込んで、有利に行動してもらうように、組織的には君がやれ。須賀さんは担いでおればいい」と。人事局の課長が、私にそう言ったんです。そういう人なんです、存在が……。北とか南の、地方の軍閥に絶大な人気があるんですよ。日本のために命を捨てた人の孤児に、勉強から何から一切の金を渡す。あるいは、孤児に限らず、例えば梁鴻志であるとか、王克敏であるとか、そういうところに、ポケット・マネーなんか始終やつて、連絡を取っているんですよ。

昭和十四年七月頃の人事局第二課長は、大西新蔵（海兵四二期、大佐、昭

和十二年十二月一日〜十四年十一月十五日)、島本久五郎(海兵四四期、大佐、昭和十四年十一月十五日〜十六年十月十五日)(前掲『日本陸海軍総合事典』四二二頁)。なお、第二課長は三戸寿(海兵四二期、大佐、十三年十一月十五日〜十五年十月十五日)。

梁鴻志(一八八二〜一九四六年)、福建省出身、日本の支持を受けていた北洋軍閥安徽派で段祺瑞に従う有力者であり、一九二〇年直隸派との内戦(安直戦争)で敗れた際には日本公使館に亡命した。一九二四年段が臨時執政に返り咲くと執政府秘書長、一九二六年の段失脚後は一時引退、一九三八年に傀儡政権たる中華民国維新政府が出来ると行政院長に迎えられ、一九四〇年維新政府が解消し汪兆銘の国民政府が出来ると監察院長・立法院長となった。戦後、漢奸として銃殺される(前掲『新版 日本外交史辞典』一〇五四頁)。

王克敏(一八七三〜一九四五年)、浙江省出身、一九〇〇年渡日して清国留学生監督を務め、一九〇七年帰国後は外交事務を担当した。中華民国成立後は金融財政関係の職を歴任するが、一九二七年北洋軍閥奉天派に投じ、東北政務委員、冀察政務委員等を歴任して対日交渉に当たり妥協的政策を取り続けた。一九三七年十二月、日本の傀儡政権たる中華民国臨時政府の行政委員長に就任する。同政府は汪兆銘の国民政府成立後は華北政務委員会と改称され、王は一九四三年その委員長となった。戦後、漢奸として逮捕され獄死(前掲『新版 日本外交史辞典』九七頁)。

伊藤 それは、給料だけではなくて、機密費もあるでしょう(笑)。

扇 機密費もあるでしょうね。そこらのところは知りませんが、機密費だってあるでしょう。

伊藤 武官府だから、あるはずですよ。相当お金を使えたんじゃないですか。

扇 ええ。自分も料理屋通いは好きなんです(笑)。行つとるですよ。伊藤 扇先生も、料理屋通いは好きですか。

扇 いやあ、行つとるですよ(笑)。それはね、支那人とか、洋人とか、あるいは陸軍と話をする時には、そこしかないですよ。私の支那艦隊司令長官だった人も、三回くらい、私一人をこの料亭に呼んでくれて要談を致しました。津田静枝さんという人がいたでしょう。あの人がまた器用な人で、あの人も支那人に人気がある。

扇氏が支那方面艦隊司令部付を命じられた昭和十四年から十六年にかけての同艦隊司令長官は、及川古志郎(海兵三二期、昭和十三年四月二十五日〜十五年五月一日)及び嶋田繁太郎(海兵三二期、昭和十五年五月一日〜十六年九月一日)。また、第三艦隊司令長官は及川古志郎(兼任、昭和十三年四月二十五日〜十四年十一月十五日)、高橋伊望(昭和十六年四月十日〜十七年三月十日)(前掲『日本陸海軍総合辞典』四四四頁)。

津田静枝は海兵三二期、当該期には興亜院華中連絡部長官(昭和十四年三月十日〜十六年五月七日)(前掲『日本陸海軍総合事典』四六一頁)。

伊藤 武官府は、どこにあつたんですか。

扇 武官府は、「須賀公館」という大きな家を借りて……。

伊藤 「須賀公館」というのは、それなんですか。

扇 ええ。ディグスエロ(威海衛路)と言うんですよ。新公園の直ぐ近く、私は毎朝ラジオ体操をやり新公園に行つとつたんだけど、直ぐ近く……。

伊藤 この武官府付は本務ではないはずですが、ほとんどその仕事をやっておられたわけですか。

扇 そうですよ。

伊藤 第三艦隊の参謀か何かでしょうか？

扇 それはね、もう『八雲』の一年前から行っているんですから、私は……。

高橋 第五艦隊ですね。

扇 『八雲』は、来年、高松宮様を乗せて遠洋航海に行かれるというので、『八雲』の乗員にはピカ一ばかりが行っている。高松宮様と一緒に候補生の指導官に行くんですから。私は、その一年前から、自分で言うのもあれだけど、ちゃんと選ばれて、次の年のために『八雲』に乗せられて行っただけです。私の航海士だって、クラス首席ですよ。この前、話をした小田切という男……。

話題になっている『八雲』への乗船は、昭和二年のこと。上海が旧知の場所という意味で話に出したのかも知れないが、一挙に話が十年以上遡ったことになる。この時のことに関しては、第一回の聞き取り参照（二五頁）。小田切に関しては、扇氏の錯誤と思われる。第二回の聞き取り（三三頁）に、高松宮が『磐手』に乗り組んで遠洋航海に行くので、その準備として選ばれて、前年から『磐手』に航海長として乗り組んだ話が出て来る。その際、扇氏を補佐する優秀な航海士として名前が挙げられたのが、小山田正一なので、その間違いか。

高橋 先生は、昭和十四年七月に上海に行きますね。当時の武官は、野村直邦さんだったですか。

扇 そうだったかも知れませんが。

高橋 その後は、岩村清一さんになっています。

伊藤 じゃあ、須賀さんは？

高橋 武官付だったと思います。彼は情報収集を一手に引き受けて、ずっと長いこと、華北に滞在していたという方ですね。

野村、岩村、須賀の当該期の役職に関しては、六二―六三頁の註を参照。

扇 私は『八雲』に乗せられた時から、その旨を聞かされているんですよ。人事局の課長が、私の昵懇の人だった。彼が、「お前は、来年のために行くんだから」と言われた。私の部下も、クラス一番の奴が来たんですが、この前、話をしたから……。

扇氏が『八雲』に乗り組んだ昭和二年当時の人事局第一課長は、出光万兵衛（海兵三三期、大正十四年十二月一日～昭和二年十二月一日）、第二課長は羽仁六郎（海兵三三期、大正十五年十二月一日～昭和三年十二月十日）（前掲『日本陸海軍総合事典』四二二頁）。しかし、当時の須賀は艦隊勤務中であり、中国での情報収集活動に乗り出したのは昭和五年に漢口武官になつて以後のことと考えられるので、昭和二年当時に、そのような話を聞いたというのは、扇氏の勘違いか。

高橋 先生が上海に行く前に、汪兆銘が日本に来ますね。その時、お会いになりましたか。

汪兆銘が昭和十四年五月に来日し、政権樹立工作を進めた際のこと。

扇 会った、会った。いや、二回目に来た時に……。二回目に来た時には、（その前に）汪兆銘とは上海で知り合っていた。毎日毎日、汪兆銘と交渉しとつたんだ。

汪兆銘は、明治三十七年に留学生として初来日、その後、政権樹立工作のために昭和十四年五月に再来日、そして病氣治療のため昭和十九年に三度来日し、同年十一月入院先の名古屋大学付属病院で亡くなっている（前掲『新版 日本外交史辞典』一〇二―一〇三頁、NICHIGAI WEB Service）。また、扇氏が上海で交渉したというのは、阿部全権大使随員として条約交渉を行った昭和十五年四月から十一月のこと。両者が、いつ日本で面会したかは不明。「奉職履歴」によると、扇氏は昭和十八年十二月十六日に伊号第二九潜水艦で渡独している。なお、汪兆銘が重慶を脱出し、ハノイに向か

つた昭和十三年十二月に、扇氏は南支沿岸封鎖交通線破壊及び軍事施設の攻撃に従事している(第二回聞き取り五二頁の註を参照)。

伊藤 武官府付で知り合いになったんじゃない。じゃあ、工作そのものには関わっていないんだ。

扇 その当時の大臣は、誰だったかな。

高橋 平沼騏一郎首相ですか。

扇 私は、平沼さんは知らんです。

高橋 阿部(信行)さんですか。

扇 もう嶋田(繁太郎)さんじゃなかったかな。

東條内閣における嶋田繁太郎海軍大臣の任期は、昭和十六年十月十八日から十九年七月十七日(前掲『日本官僚制総合事典 一八六八―二〇〇〇』二〇頁)。「その当時」とは、汪兆銘の来日時期のことか。

扇(暢威) 汪兆銘を引き出した動機は何かというのは、答えになっていきますか。

伊藤 いえ、引き出しのほうには、たぶん関わっておられないと思います。だから、汪兆銘と日本との条約交渉に当たられたんだと思います。

高橋 (日本において、汪と日本側の梅機関との間で進めた政権樹立工作は)条約交渉の前の、昭和十四年の暮れまでなかった。

伊藤 その時(昭和十五年四月以降の上海での条約交渉時)に、海南島をどうするかという問題で、大いに議論したということですね。

扇(暢威) そういうことになりますね。

高橋 ただ、海軍としては海南島を取って、支那事変をどういうふう

に解決するのかというあたりの筋が、ちよつと……。

扇(暢威) その筋がないのか、やったけど、駄目だったのかは、ちよ

つと分からないですね。

伊藤 汪兆銘政権は、一種の支那事変の解決に役立つと思われましたか。

扇 うん。これは、私もそんなに事情を知っているわけではないですが、影佐を中心にしてやるということが日本の閣議で決定しているんですよ。だから、私は汪兆銘工作に精力を注ぎ込みました。梅華堂というビルで――それが汪兆銘工作の中心になりますが――梅華堂は新公園に近い、日本租界の中心ぐらいいにあった二階建か三階建の小さな支那のビルです。そこへ籠って、主として陸軍、海軍、外務、大蔵……それと、関東軍関係の人もおりました。そういう人たちが数人、毎日一度は、そこで昼飯を食ったりして……。

しかし、陸軍と海軍は、こう(対立)ですからね。影佐も私に向かつて、どうこうというようなことは、あんまり言いません。私も、喧嘩したことはないけれども、何となしに隔靴搔痒の感があって、打ち解けてどうこうということはなかったです。ただ、谷萩那華雄という男で、それが影佐の懐刀。

影佐は、昭和十四年三月参謀本部付として汪工作に従事するようになっており(前掲『日本陸海軍総合事典』四二頁)、閣議決定は、この時か。

谷萩那華雄、陸士二九期、昭和十三年五月北支那方面軍特務部付、十三年十二月第一軍司令部付(太原特務機関長)、十四年三月支那派遣軍参謀、十四年九月支那派遣軍司令部付(軍事顧問部)、十七年三月兵器行政本部付(大本営陸軍部報道部長)(前掲『日本陸海軍総合事典』一四七頁)。

高橋 茨城県の出身ですね。

扇 うん、渋い茨城語でね。彼は、人間はいいんですよ。まあ、そういう付かず離れずという格好で、私は梅華堂に毎日のごとくに……。

高橋 影佐さんというのは、海軍としてはかなり信頼していた方なんですか。

扇 別に、信頼していない（笑）。いないけど、閣議で「支持する」と決定していますからね。

高橋 汪兆銘と日本側との交渉で、幾つか対立点がありますが……。扇 閣議で……。それを、中央で一人でやったのが影佐です。支那課長ですから。参謀本部が二つに割れたということも、この前お話ししましたが、その二つのうちの一つが影佐ですから。

高橋 汪兆銘が最もこだわった問題の一つに、国旗の問題がありますね。いわゆる「孫文の衣鉢を継ぐ純正国民党である」と言うんですけど、日本側は汪兆銘が言っているような国旗じゃ駄目だ、と。上に「和平反共救国」という印の三角巾を付けなきゃ駄目だということ、ものすごく揉めました。海軍は、そういう問題は全く話し合わなかったんですか。国旗の問題などは関係ない、と？

扇 あまり記憶にないですな。

伊藤 じゃ、やっぱり海南島の問題なわけだ。

高橋 海南島の問題に終始したんですね。

扇 下構想としては、南洋興発を活用する飛行場予備地造りなどを、ずっとやりました。

高橋 揚子江流域の権限の問題は、汪兆銘側にとっては大きな問題じゃなかったんですか。

扇 陸軍は、海軍が政治性を發揮して、海南島を北支・蒙疆と同じ地位にしようとしているというふうな受け取っておったと思います。だから、何となしに、最後まで合わんですよ。

伊藤 海南島の開発計画みたいなことも、おやりになったわけですか。

扇 やった。これは、私の部長が第五艦隊司令長官になって、私は五艦隊参謀で、支那事変解決のための、「蒋介石屈伏」のための、封鎖作戦をやったわけです。私は少佐で行って、封鎖作戦の担当だったわけですよ。「蒋介石屈伏」ということが、中心ですからね、汪兆銘政権を立てるんだということが、当時の閣議決定になっているわけです。扇氏は昭和十三年十二月十五日から第五艦隊参謀（昭和十四年七月十五日に「軍令部出仕兼支那方面艦隊司令部付第三艦隊司令部付上海在勤海軍武官付」となるまで）。当時の第五艦隊長官は近藤信竹（海兵三五期、昭和十三年十二月十五日〜十四年九月二十九日）。なお、それ以前の、近藤氏が昭和八年十一月海大教頭、昭和十年三月連合艦隊参謀長、十年十二月軍令部一部長等を務めた際には、それぞれ扇氏の海大在学、連合艦隊参謀、軍令部出仕第一部長時代が重なっていた。

だから、この前、お話ししたと思いますが、私は「相手とせず、絶対反対」ということで、会議に出られる前の軍令部総長に、鉛筆書きで書いたものを、海軍省の玄関で渡したんですよ。——それは、明日（大本営と政府の）連絡会議がある、と。陸軍は、もうそれに乗るつもりでいますから、これはどうしても反対しなきゃいかんと思って、前の晩からじっくり考えていた。それで、軍令部総長が、その連絡会議に出て主張される原稿を、鉛筆書きで一枚に書いて、（一月十五日の）朝、私の上司の横井（忠雄）大佐へ……。もう会議に出られる時刻で、九時でした。「直ぐ、これを持って行って、総長の宮殿下に渡してくれ」と。さあ、真つ先に走って行つたですよ。行って、玄関で、もう車に乗っておられた殿下に、「これをお願いします」と言つて頼んだ。殿下は、それをずっと主張されました。

話題となっているのは、昭和十三年一月十六日に出された第一次近衛声明。

当時、扇氏は大本営海軍参謀兼海軍報道部部員、参謀本部第一部兼報道部第一課勤務（「奉職履歴」）。軍令部総長は伏見宮博恭王、横井は軍令部一部員（前掲『日本陸海軍総合事典』四一四・二四四頁）。

その連絡会議が十一時間にも及んで、途中で、とうとう枢密院顧問官の頭——誰だったかしら、彼が「一息いれましょう」と言って、昼休みに、みんなそれぞれ帰って行った。また、改めて午後、集まってもらって、夜までかかりました。海軍は、とうとう反対し続けて、そのままになってしまった。そのあと、日本政府は、「蔣（国民政府）を対手とせず」という声明を出してしまいました。近衛さんですから、六月頃だったでしょう。

「六月頃」は、扇氏の錯誤。第一次近衛声明は、前記の通り一月十六日。

高橋 あの頃は、外務省もずいぶん強かったんじゃないですか。一月十八日に、補足説明というのをやっているんですね。

補足説明……補足的説明。「対手トセス」とは、「否認」とともに「抹殺」

をも意味するものと述べ、日中間の外交関係は事実上断絶した（前

掲『新版 日本外交史辞典』三二二頁）

扇 外務省は、大使館の内田信也さんが参事官でした。最後は、東京で閣議決定をしました。海南島工作というのは、私が初めて突っ込んで……。

「閣議決定」の内容については、不明。

中国の大使館参事官等に、内田信也は確認できない。

高橋 海南島に鉄道を敷いたのは海軍でしたが、あれも扇先生の計画でしたか。

扇 それは、私は自分の一生のうちでも自慢話にしたいぐらい、海南島にこだわったんですよ。最後の形は外務省をして、遂に交換公文に

私の考え抜いた名文句……迷文句かも知れませんが、「これを、とにかく通せ」と。日支関係調整条約（正式名称は「日本国中華民国間基本関係に関する条約」）の交換公文に入れさせた言葉は、簡単なのです。「軍事上の要求を充足するものとす」という一文句です。これについては、藤井茂さんと柴勝男と私が海軍省と軍令部の、国策・戦争指導を決定する三羽ガラス——決定の主務者ですよ。それで、今の文句を、外務省を口説いて、とうとう交換公文に入れさせた。これが生きているんですよ。こんな強い言葉はない。「全て南京政府は軍事上の要求を充足するものとす」という交換公文になっておる。

「日本国中華民国間基本関係に関する条約」は、日本と汪兆銘の南京「国民政府」との間で、昭和十五年十一月三十日に締結された（前掲『新版 日本外交史辞典』七四六頁）。

国民政府軍事委員会顧問として

高橋 思い切って聞きますが、汪兆銘政府は傀儡と置いていらつしやいますか。

扇 全くの傀儡です（笑）。しかし、それまでに私は、何遍も汪兆銘と直接会っていた。自分一人で行くんです。一人で行ってね……。

高橋 向こうは、傀儡とされることに對して、ものすごい抵抗をしたはずですけど……。

扇 向こうは、汪兆銘に付いている通訳がいるんです。周隆庠という、彼は私なんかよりも、よっぽど日本語がうまいですよ。それほどの通

訳で、汪さんも日本語はある程度分かるけど、いつも必ずその通訳が傍に付いている。私は、これを頼りにして、何遍も汪さんの自宅へ一人で行って、同じことを繰り返して、汪さんを口説くんですよ。

それで、最後の時になって汪さんが、「よし、私は分かった。私は分かったけど、どんなに内輪の閣議をやっても、陳公博がどうしてもウンと言わない」と。「うん」と言わないのは、当然のことですよ。海南島を失ったら、汪兆銘の面目がありません。「うん」と言うはずがない。それを、私は汪兆銘の所に毎日のごとく行って、同じことを繰り返した。もう言うことはないですな。

ただ、汪陣営は雑多な集団ですが、私も彼らの熱意に打たれたことはあるのです。それは、彼らを上海に送り込んだ直後、彼らから我がほうの艦隊司令部に、「軍医を派遣して、全員の血液型を調べて欲しい」との申し込みがあり、司令部は私に、それを実施させたのです。私は軍医を伴って、検査に行きました。汪側は全閣僚の外に大人、子供など数十人で、血液を採って検査し、それを紙に書き込み、胸に縫い込み、いざという時に即刻輸血が出来るよう備えたのです。その真摯な態度に、私は強く打たれた事実を忘れられません。

「ただ、汪陣営」以下の段落は、扇氏の要望により付け加えられたものであるが、挿入箇所の指定が不明瞭だったために、ここに挿入した。

高橋 もう一つ、お聞きしてよろしいですか。海軍あるいは扇先生から見て、汪兆銘は後ろで蒋介石と繋がっていると思っていましたか。

扇 いや、これは私の説明は、「蒋介石を亡き者にして、あなたたちの政府を南京に立てる。これが、日本の決定した国策なんだ。そうすれば、海南島は日本の海軍にとって非常に重要な地位になる。だから、蒋介石を攻めるための沿岸封鎖作戦を、どうしてもやらざるを得ない

んだ」と。私は、参謀として主任でしたから、沿岸封鎖作戦をどうしてもやるんだということです。それは汪さん自身にとつては、蒋介石から離れて、蒋介石の代わりの政府を立てるという意味から言っても、ある程度マイナスになるかも知らん。国連に対して、海南島は重要で、第三国に決して譲らないという条約を結んでいるんですからね。英仏なんか、と。あれは、非常に重要なところがあるんですよ。

それを、私は逆をやらせようとした。海軍が乗っ取ることには、「イエス」と言わせるんですから、これは容易なことじゃないですよ。毎日、私が行って、「海軍の立場は、蒋介石を攻めるための沿岸封鎖だから、沿岸封鎖をやってもらわなきゃ困る」と。そういう立場に、汪兆銘を追い詰めて行つたわけなんですよ。

高橋 なるほど……。

扇 一部長が、私を参謀として連れて行つたんですから。一部長も、そこまで考えていたかどうか。私は封鎖作戦の主任参謀だったんです。だから、涉外関係のあらゆる国際会議にも出ているんです。

「一部長」とは、近藤信竹第五艦隊司令長官、前職が軍令部一部長であった（六七頁の註を参照）。

高橋 汪兆銘の家を訪ねた時に、奥さんの陳璧君さんが出て来ましたか。

扇 何遍も出て来ました。

高橋 一緒に交渉をやるんですか。

扇 ええ、陳さんも、結構飲みますから……。

高橋 あの人は、日本人が嫌いなんじゃないですか。

扇 嫌いですよ。嫌いなところを説き伏せるんですからね。分かっていながら、説き伏せるんだから、こつちも悪いですよ（笑）。

しかし、蒋介石ですら、須賀さんという存在はちゃんと知っているんですから。当時、重慶に逃げていた閣僚連中も、みんな須賀さんのことを知っているんです。須賀さんは、もう別格なんですよ。支那人には、特殊な存在なんだな。その代わり、俸給は、みな命を捨てた人の孤児に、学校から何から、ずっと面倒を見てやっているんですから、偉いものですよ。

伊藤 先生は、梅機関のメンバーでもあるんですか。

扇 メンバーです。海軍代表ですよ。

伊藤 そうすると、梅機関というのは、陸軍の機関じゃないんですね。扇 まあ、陸軍の機関みたいなものです。参謀本部が二つに割れている、そこから来ているんですからね。その二つに割れている大陸派が、影佐なんですから……。

伊藤 須賀さんは、海軍から派遣されているわけですね。

高橋 メンバーで一緒に……。外務省からも梅機関に行っていますよね。

扇 外務、大蔵、関東軍関係、それから満洲国関係の者もありました。高橋 扇先生は、梅機関員の岡田芳政さんとは親しかったですか。

岡田芳政、陸士三六期、昭和九年十二月参謀本部付（中国研究員、北京・南京）、十一年六月中国駐在（広東）、十二年四月〜十月東大経済学部聴講、十二年十一月企画院調査官、十三年十二月興亜院調査官、十四年三月参謀本部員（八課運輸）、十四年九月支那派遣軍参謀、十七年八月兼上海陸軍部員（前掲『日本陸海軍総合事典』三七頁）。

扇 どこから来ている？

高橋 支那課のメンバーで、上海に行つて謀略をやっていた方です。あるいは、岡田西次経理将校……。

岡田西次、陸軍経理学校三〇期、昭和十一年三月参謀本部付（上海武官室）、十二年八月上海派遣軍経理部員、十三年十二月興亜院調査官、十四年九月支那派遣軍司令部付（梅機関）、十六年九月第五三師団経理部長。著書に『日中戦争裏方記』（東洋経済新報社、昭和四十九年）がある（前掲『日本陸海軍総合事典』三七頁）。また、阿部特命全権大使の随員に、興亜院調査官として加わっている（昭和十五年四月七日付『東京朝日新聞』「扇一登氏関係文書」三一四）。

扇 本を書いている、ああ、よく知っています。

高橋 あの方も、梅機関員ですよ。

扇 そうです。しょっちゅう会っていました。

高橋 それから、昭和十五年四月六日に、特命全権大使の随員として南京にいらつしやいますね。特命全権大使は阿部（信行）大将ですね。これは、政府が出来て、それに対するお祝いで行くわけですね。

扇 そうそう。

高橋 その時に、何か覚えていらつしやるような出来事がありますか。汪兆銘は、政府が出来たことを喜ぶというより、悲しみの気持ちで一杯だったと思うんですけど……。

扇 とにかく、海南島に地位を与える、と。陸軍は、「これは第二の満洲国にするんだ」と悪口を言っていたし、そう思っていたんです。陸軍に便乗して、中支、海南島、取り分け海南島を海軍のものにするという考え方には、真反対で対抗してきているんですよ。影佐なんか、そうなんです。

しかし、そこに参謀本部が二つに割れているということの、はつきりした姿が出るわけで、これはまた、たくさん話したいことがあります。陸軍は大陸政策の要として、初めから駐兵権の確立を強烈に主張

してきており、最初の「日支新関係調整要綱」の決定の時から、最大の牙城として無期限に要求しており、傀儡政権の最も痛い所を押さえ込んで、絶対に譲らないのです。解除の期限なき絶対的要求で、大反対の海軍も匙を投げた問題です。撤退期限「二カ年」とあっても、その解釈は無期限になるよう仕組んであるのです。

本文中「日支新関係調整要綱」は、昭和十三年十一月末の御前会議で決定された「日支新関係調整方針」のこと（前掲『新版 日本外交史辞典』七八九頁）。

梅華堂に関連して、もう一つ、私が感動を受けた話を付け加えます。犬養健さんが、お父さんの犬養毅さんに伴われて、南京の蒋介石を訪問した時の話を、（健さんが私に）博多のホテルで一緒に寝ながら話してくれました。それは、実に支那本然の姿のいい所でもあるし、孫逸仙（孫文）以来の支那の本然（姿）というか、私は本当に感動しましたよ。——お父さんの犬養毅さんが南京に行つて、蒋介石を引見したんです。引見ですよ。こちらに犬養毅さんがいると、蒋介石は次の間でこうやって（深くお辞儀をして）中に入らんですよ。それぐらい礼儀正しい、「いわゆる支那流の、最高の受け入れだ」と。親父に付いて行つた健さんは、それを見ていて深く感動した、と。私も、その話を聞いて、本当に感動しました。それが、本来の支那なんです。蒋介石の閣僚連中も、須賀さんのことは、みな知っていますよ。小便を引く掛ける所から何から、みんなの前でやるんだから……。

犬養毅は、一八九九年日本亡命中の孫文を援助して以来、関係深く、一九二九年六月に南京で行われた孫文の慰霊式には、頭山満らと共に国賓として参列した（前掲『新版 日本外交史辞典』四八頁）。なお、博多のホテルで同室とは、特命全権大使随員の折か。政友会代議士の犬養健も、民間人

として特命全権大使随員の一人に任命されていた（昭和十五年四月六日付『東京朝日新聞』「扇一登氏関係文書」三―四）。

高橋 それから、履歴によりますと、昭和十五年の四月六日に阿部大使の随員を仰せ付けられています。その一日前には、「支那方面艦隊参謀長ノ命ヲ受ケ服務スベシ」という命令書があるんですが、支那方面艦隊参謀長というのは、海南島を巡る問題で条約交渉をする上で、こういう命令を貰ったんですか。

扇 いや、そればかりじゃないです。そればかりじゃなくて、それを貰わんと、上海での活動が不自由で出来ないんです。

高橋 そういう意味ですか、分かりました。

扇 だから、上海在勤海軍武官の承命服務になるわけで、全て上海で活動が出来るように……。汪兆銘が方面艦隊司令長官に面会する時期がありました、その時に必ず私は汪兆銘に付いて行っています。

高橋 先生は、阿部大使の随員として南京に行くと、それからずっと南京に滞在なさるんですか。

扇 南京に、ずっと滞在です。南京に滞在して、汪兆銘政府の会場場所——委員会とか会議とかをやる大きなビルがあるんですよ。直ぐ近い所でしたが、そこへ行つて……。

影山 先生は、海軍中佐になられて、国民政府軍事委員会顧問に就任しておられますが、これはどういうことをされたんですか。

扇 顧問にされたんです。それで、汪兆銘は軍閥や財閥などを（汪兆銘の）新南京政府の旗下に入れるための国内旅行をずっとしましたが、私はそれにみんな付いて行きました。北支で霧の中を、汪兆銘に付いて行つて、命からがらでね。

青島でしたが、霧の中に着陸しなければならない状況になった。霧

で分からないから、飛行機は推測で風を加減しながら、飛行場に入って行っただけです。行ったら、あわや真正面に山が現われたのです。もう、直ぐぶつかるころだった。慌てて機体をグーツと真横にして、引き返し、ちゃんと霧が晴れてから着陸したので、助かった。私は、あの時に死んでいるんですよ、山へぶつかって……。汪兆銘も須賀さんも、みな……。そういうことがありました。

ついでですが、須賀さんは昭和十六年の初め頃（二月五日）に、飛行機事故で亡くなりました。これは、本国から来た全海軍大臣を海南島視察に案内するために、広東飛行場を出発した直後に、南方の山に霧中突き当たって、全員亡くなるという大悲劇で、汪兆銘が「須賀公館」を叩き、大声で泣きじゃくったことも、私は覚えております。

「本国から来た全海軍大臣」というのは、汪兆銘政権の海軍大臣のことか。なお、在支那海軍武官補佐官の角田隆雄（海兵五〇期）が殉職したのは、この事故と思われる。

影山 この軍事委員会の顧問には、陸軍は他にいましたか。

高橋 最高顧問が影佐さんですね。

扇 ……いたと思う。一々確認はしていないけれども、軍事委員会顧問にいないければ、陸軍は発言が出来ないものね。

高橋 最高顧問が影佐さんですから、たくさんいましたね。

扇 それは、いるでしょう。

高橋 南京に滞在なさったのは、昭和十五年四月から十六年一月までですね。

扇 その間に、何遍も上海や東京との間を往復しましたが、問題はいつでも霧ですよ。水面すれすれに飛んだら、前にドカッと、福岡の沖の島が現われて、ぶつかりそうになって……。それを、またグーツと

引き返して、霧の晴れ間を待つて、また飛行場へ入り直したり……。

高橋 南京に滞在していた時には、どんなお仕事をしていたんですか。汪兆銘が地方に行くのにも付いていらつしやった、と。おそらく、それは軍事顧問の一員としていらつしやったのかなと思いますけれども、南京では、どこに住んでいたんですか。

扇 揚子江の沿岸ですよ。直ぐ近い所です。

高橋 お一人で？

扇 いや、須賀さんと私と、もう一人は主計課の随員たる桑大尉で、三人が一緒に……。それから、向かいの家は、海軍省首席副官から来た中村勝平大佐と、軍務局から来た藤井茂中佐と、軍令部や海軍省から来た書記、タイプストなど四、五人が同居する大所帯でした。合わせて「須賀公館」と称して、テニスコートも付いた大きな構えでした。

桑大尉については不明。

中村勝平、海兵四五期、『沖島』艦長から、昭和十五年三月海軍省出仕として阿部大使の随員に任命され、昭和十五年十一月五日海軍省（先任）副官となる（前掲『日本陸海軍総合事典』二一七・四〇七頁）。「海軍省首席副官から来た」というのは、扇氏の錯誤ではないか。

高橋 先生の任務は、汪兆銘側との連絡ですか。

扇 それが多いです。しかし、阿部特命全権大使随員としての須賀グループの中では古参ですから、必要なことは何でもやりました。汪兆銘と一緒に出て……。

高橋 海軍はその後、南京政府をどういう方針で育てていこうとしたんですか。

扇 閣議決定した線に沿って、とにかく南京政府側に立って、必要なことを発言するし……。

高橋 南京政府は、強力な政府になると思いましたか。先ほどは、傀儡だと、おっしゃいましたけれども……。

扇 傀儡と言えば、傀儡です。ですけど、初めから汪陣営の重要存在だった前・蔣政府の亜州局長（司長）で、名前は……。

高橋 高宗武。

扇 高宗武が途中から逃げて、重慶へ帰った。

高橋 陶希聖と一緒に裏切っちゃうんですね。

扇 彼らが、上海でやっていることを、みんな重慶（国民政府）にぶちまけてしまったんです。そういう関係もありましてね。

高橋 それから、汪兆銘政権が出来る前後に、「桐工作」というのがありますね。「宋子良工作」、それはご存知でしたか。

「宗子良工作」は、昭和十四年末から十五年九月にかけて、参謀本部と支那派遣軍総司令部が対重慶直接和平交渉の一つとして宋子良（宋子文の弟）と自称する男との間で推進した和平工作。香港、澳門で会談するも不調で中止、のち昭和二十年に宋は替え玉で、中国側特務機関の有力幹部であったことが判明した（前掲『新版 日本外交史辞典』四六七頁）。

扇 「桐工作」はね……。

高橋 重慶による揺さぶりです……。

扇 誰が始めたのですかね。

高橋 今井武夫。

今井武夫、陸士三〇期、昭和十四年三月参謀本部支那課長、十四年九月支那派遣軍参謀（二課長）、十六年八月歩兵一四一連隊長（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇頁）。

扇 あつ、香港で、あれが騙されたでしょう。あんなのは、総軍司令部の謀略参謀という奴が、いろいろなことを焦つてやるんですね。八

方手を回して、これが出来そうだというような秘密交渉を、蒋介石側とやろうとするんです。その一つが、「桐工作」です。

高橋 他にもいろいろありますけれども、海軍はそれには全然タッチしなかったんですか。

扇 ええ、それは独特ですよ。

高橋 もう勝手にやらしておけ、と？

扇 ええ。秘密でやるから、知らんのが多いですよ。ところが、途中で向こう側に騙されとったということで、謀略が謀略へと渡り歩いているような格好に見えたんですね。

高木惣吉の下で——調査課課員

高橋 それから、先生は昭和十六年一月十日に、出張をしていたのを「中華民國出張ヲ免ス」ということで、日本に戻っていらつしゃつて、海軍省調査課課員兼軍務局局員という仕事を与えられ、やがて「第二課勤務ヲ命ス」という仕事に移られますが、具体的に調査課では高木惣吉さんの下に付いたわけですか。

扇 調査課の課長が高木惣吉さんですからね。これは私が軍務局にいた時から、国策・戦争指導の主務者に入つたわけです。それで、調査課の課長が高木さんで、高木さんが人事局に働きかけて、私を採つたと思つています。

私の前任者は大井篤という、私のクラスメートで、頭のいい奴だったんです。ところが、彼は高木さんとソリが合わんのですよ。大井篤

は三カ月ほど調査課にいましたが、当時、近衛総理がつくった大政翼賛会——徳川頼政さんを総務局長にした大政翼賛会のことをやれと、高木さんが大井篤に命じたんですよ。そしたら、彼はそっぽを向いて、本気でやらないのです。「私は、嫌いだ」と言って（笑）。それで、高木さんに睨まれて、「それじゃ、お前は人事局へ行け」ということになったんですよ。

大井篤、海兵五一期、昭和十四年十一月第二遣支艦隊参謀、十五年十一月海軍省調査課員、十六年十一月人事局一課局員（前掲『日本陸海軍総合事典』一七五頁）。

本文中「徳川頼政さんを総務局長にした」は、「有馬頼寧を事務総長にした」の誤り。大政翼賛会は昭和十五年十月の結成。

高橋 そうすると、高木さんの下で大政翼賛会の仕事をおやりになったんですか。

扇 そうそう。高木さんが大井を突っぱねて人事局に帰して、私を引っ張り込んだんですな。その前から、高木さんは海軍省で、今なら新聞に喧しい機密費を使つての工作をやっていたのです。連合艦隊司令長官だった山本五十六さんが次官の時に、高木さんに機密費を出した。それはね、その当時としては大した額じゃないんですよ。何でも毎月七千円ぐらいだったと思う。でも、今なら何百万円かに相当する、あるいはそれ以上のものかも知れません。それで、高木さんはブレーンを、だんだんつくっていったわけです。

高橋 ただ、高木さんとしては、先生に（調査課で）大政翼賛会の仕事をやらせると言つても、先生のご専門は、それまでの汪兆銘政権との関わりとか、中国との関わりを考えると、むしろこれを利用しようとしたのではないんですか。先生のご専門は、内政よりは、むしろ外

政のほうが……。

扇 それは、私が軍令部の戦争指導（班）にいる間、藤井茂と柴勝男と私が海軍省・軍令部を通じての「三羽ガラス」だった。そういうあれで、新しい部門を開いていく上での国策、戦争指導、条約、渉外交渉、国際条約、そういう一切の海軍としての政策の大元締めで、「三羽ガラス」と言われていた。これが三人集まって、いつでも重要問題の答申をやっていたわけです。国会対策から、全て国策の重要部門は三人でやっていたんです。自分で言うのもおかしいけれども、そうされてしまったんですな。それで、海南島の基礎付け（位置付け）ということで、私に野心を持たせたわけですがね。

戦争指導というのは、元々は海軍省軍務局長の仕事なんです。それを藤井と言ひ、柴と言ひ、みな私と非常に昵懇な……。

高橋 ただ、十六年一月となると、もうアメリカを目標にした戦争指導というものを、具体的に考える。つまり、高木課長の下で、対米戦争指導というものを考えていたわけですか。先生の調査課に入ってからのお仕事の内容を、お聞きしたいのです。

扇 調査課というのは、まず国会対策ですからね。軍務局長が（予算委員会に）行つて、海軍の予算を取る。予算委員会で、何遍でも説明するんですよ。陸軍と背中合わせになりながら、陸軍とは反対なんですから。その対抗を意識しながら、こちらがどんどん予算を……。その時、「八・八艦隊」（の計画）はもう出来ているんですから、これを完成する上で、幾らでも予算が要るんです。

高橋 予算作りのための資料を作ったり、関係各課との調整ですか。

扇 そういったことを全部、三人でやりました。みんな親しいんです。高橋 調査課というのは、小さな世帯だったんですか。

扇 いや、小さいとも言えるけど、大きいんですよ。

高橋 全体で何人ぐらい？

扇 根が深い。私が、その乙部員で行くまでは、一人でやっていた。やることは幾らでもあるんだけど、やれないんですね。

高橋 それから、十六年十一月に「対南洋方策研究委員会委員」と。

扇 これは、前からあったんです。南洋工作を中心にした、あれでね。

高橋 十二月には「南方政務部部員」となっていますけれども、南洋方策研究委員会と南方政務部とは、どんな関係があるんでしょうか。

扇 これはね、占領地の行政を考えなきゃならんと言うので、南方政務部というのが設置されたんです。大臣命令ですね。その前に、私が軍令部にいる時から、対南洋方策研究委員会というのはありましたから、辞令上、それに参加しただけのことです。

高橋 そうすると、調査課の仕事が一番のメインだったということですか。

扇 ええ。まず調査課固有の、毎回やっていることは国会対策ですからね。大臣の国会における全ての行動なり、弁明なり、説明なり、一切のことを、調査課が担当したわけです。高木さんは、特殊な存在なものだから……。

高橋 高木さんという人は、先生のような調査課の課員に対して、何でも相談するような方だったんですか。それとも、仕事の一切に垣根を作って？

扇 言わないことはないです、必要限、重要秘報は漏らしてくれました。あの人は、大臣や次官の知恵袋のような立場を自認していたと思います。宮中なんかのことは、西園寺の秘書長の原田から聞き出して来たと思います。高木さんも原田も、二人とも茅ヶ崎に住んでいたの

で、早くから茅ヶ崎からの汽車の二等車の中で知り合って、車中ずつと情報交換をやっていた。西園寺周辺の政治情勢や宮中の情勢などを、みんな彼から聞いているんですね。

高橋 アメリカと開戦をするという情報は、調査課ではかなり早い時期から分かっていたんですか。例えば、十二月八日に開戦をするとか？

扇 いや、戦争をするというよりも、「（戦争に）なる」ということを、早くから恐れているわけです。だから、それから逃げようと思つて、一所懸命努力するわけです。努力するけど、すればするほど、それが向かって来たわけです。

高橋 日米交渉で、ワシントンで野村吉三郎大使が一所懸命、國務長官のハルなどと交渉している内容は、調査課では把握していましたか。扇 外務省に入った最高秘密の電報は、みんな回って来るんです。私なんかも、それをみな読んでいますから、情勢は「三羽ガラス」がみな知っているんです。知つていながら、それに引つ張り込まれてしまうというのが、実情でした。

「三羽ガラス」の仲間、藤井茂（昭和十五年十一月軍務局二課局員、十六年二月四月欧州出張、十二月連合艦隊参謀、柴勝男（昭和十五年十一月軍務局二課局員、十九年二月『大井』艦長）とは、相変わらず軍務局第二課での同僚（前掲『近代日本陸海軍総合事典』一九九・二二八頁）。

高橋 日米交渉というのは、日本側から見れば交渉ですけれども、アメリカ側から見れば予備交渉という、一ランク下のものと見ていたようなんですが……。

扇 私の感じでは、アメリカは満洲事変以来、とつとくに、「日本は叩くよりほか仕様がな」と。これは、アメリカの立場として、機会均

等ということをもとに掲げて、どうしても日本陸軍は潰すよりほか仕様がな、と。アメリカは、我々が陸軍に対して抱いている観念と同じなんです。満洲事変の時に、もうアメリカはそれを決めているんです。熱河作戦の爆撃の時に、スティムソンの三原則か四原則を出すでしょう。これは、もう最後のところの腹を示しているわけです。

アメリカ國務長官スティムソンが、日中両国に対し、一九二八年の不戦条約の約束と義務に違反した一切の事態、条約、協定を承認しないという通牒、いわゆる「スティムソン・ドクトリン」を発表したのは、昭和七年一月七日。スティムソンの対日態度が硬化した契機は、昭和六年十月八日の日本軍による錦州爆撃と、その後の錦州占領であり、昭和八年二月下旬に起きた熱河作戦ではない（前掲『新版 日本外交史辞典』四四六・八一四頁）。

高橋 そうすると、最初からアメリカは、単に時間稼ぎをしているだけだと見ていたわけですか。

扇 そうそう。それで、自分のほうを、どんどん増やしていった。飛行機を造り、生産力を上げ、国防支援、生産力、国内対策、全てのことを、ずっと攻めて来て、あのヴィンソン案の第二、第三、第四次まで来て……。それに、みんな載っているんですよ、向こうとしては。その時に我々は、それが容易ならぬものだと思っ取って、「戦争をしてはならん」という、あれになっているわけです。なつとるんだけれども、だんだん、そうなってしまう。だから私は、あの時、いろいろな国策等の関係を「反省録」に書いているんですが、「日本が行ってはならんところに、自分が行っているんだ」と。私は、反省しています。「絶対行ってはならん」と思っているが、知らず知らずの間に引き摺り込まれて行った。それは、陸軍の勢力が政治を握ってしまう

から。だから、畑俊六陸相の時の陰謀ですよ。そういうところを、みんな読んでいますよ。

ヴィンソン案については、第二回聞き取り（四六頁）の註を参照。ヴィンソン海軍拡張法は三次にわたる海軍建艦法で、第四次は誤り。

だから、米内内閣をぶっ倒すでしょう。謀略、あれをつくづく感じているんですよ。そこへ、私なんか、そんなに度々会っているわけではないけど、石原莞爾さんと会っていますからね。私は部員を兼務しているんだから、挨拶や何やらで会っている。あのひと、率直に話をしている。

米内内閣は、昭和十五年一月十六日成立、日独伊三国同盟に難色を示す内閣に陸軍が不満を持ち、機密漏洩の嫌疑で有田八郎外相を取り調べ、畑俊六陸相が単独で辞表を提出したことで、七月二十二日総辞職（日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』山川出版社、一九九七年、二一九七頁）。本文中「部員を兼務」というのは、聞き取り後段の展開によれば、石原莞爾が参謀本部一部長（心得含む）であった昭和十二年一月七日〜九月二十七日の間（その後、関東軍参謀副長）で、扇氏が軍令部第一部員に参謀本部部員も兼ねた昭和十二年四月十五日以降のことという（前掲『日本陸海軍総合事典』一六頁）。少し前の話であるらしい。

高橋 石原さんが予備役になつてからも、お会いになつたんですか。

石原莞爾は、昭和十六年三月予備役編入（前掲『日本陸海軍総合事典』一六頁）。

扇 いや、予備役になつてからは、会ってないです。

高橋 あるいは、石原さんが京都に第一六師団長で行きますね。あの時は？

石原が第一六師団長を務めたのは、昭和十四年八月三十日〜十六年三月一

日（前掲『日本陸海軍総合事典』三四七頁）。

扇 知らん。

高橋 じゃあ、石原さんが作戦部長の時に？

扇 部長の時だけ。特に、私の話し相手というか、秩父宮様が来られたもので、あれで……。

高橋 先生が、いま覚えていらつしやることで、調査課で一番記憶に残った仕事は国会対策とおつしやいましたけれども……。

扇 それは、調査課に制度上課せられている仕事です。

高橋 先生は、その他に何かやっていたわけですか。

扇 あとは、ブレーンの操縦ですよ。高木さんが偉い人を集めたんですから。しかし、これに与って力があつたのは天川勇です。これは、慶応で哲学をやった男です。この男は、私が連合艦隊参謀をしている間に、私を訪ねて来ました。というのは、天川勇は慶応ボーイで、哲学をやって、海軍が好きで、一番尊敬しているのが末次信正中将ですから。私が二艦隊参謀時代に、末次さんの所に直接会いに来るんです。それで、私は会った時から、「これは、変わった男だな」と思っていました。彼は、何遍も末次さんの家に遊びに行ったりして、末次さんの純粋な崇拜者ですよ。私も、末次さんというのは、統帥の最高峰だと思っているから……。素敵だったですからな。

天川勇、慶応在学中から軍事戦略に関心を持ち、国防研究会に所属。卒業後、海軍省に入省、戦時中は海軍大学校教授を務めた（NICHIGAI/WEB Service）。

高橋 海軍のブレーンと見なしていた人たちの中に、天川さんの他に、どんな方がいらつしやったんですか。

扇 天川さんは、そのブレーンを揃えるために知恵を貸したんです。

学者として、慶応にいる時からの……。

高橋 扇先生は、彼らをどのようにコントロールしたのですか。

扇 このブレーンは、高木さんが直接握っているんですからね。あの人がつくつたんだから。天川の知恵を借りて、天川が嘘と真と半分半分で、「これがいい、これがいい」と。およそ、一技術、一政治力、一影響力というか、みんな選りすぐって、天川が推奨した人を引っ張って来た。五十数人おられます。みんな記録に残っています。全部、一流ですよ。

その中で一番重要なのが総合研究会で、これは私が行って、後からつくつたんです。（その中に）外交懇談会、政治懇談会、情報懇談会、太平洋研究会……と、五、六個の名前を付けて、懇談会というのをつくって、それに一流の学者をみな入れて、そのグループごとに幹事を置いて、幹事に機密費を差し上げて……。その機密費の支出を認めたのは、連合艦隊の長官であつた山本五十六さんが、海軍次官の時、自分の懐から機密費を出して……。

山本五十六の海軍次官在任は、昭和十一年十二月一日〜十四年八月三十日（前掲『日本陸海軍総合事典』四〇六頁）。

高橋 そうした各種の懇談会というのは、月に一遍とかやるわけですか。

扇 月に一回じゃないですよ、週に一回ぐらい。グループによつて違います。その中には、思想的に右の人、中央の人、左翼の人、みんな入っています。しかし、大事な政治懇談会とか思想懇談会は、一流の哲学者です。例えば、哲学で言いますと、和辻哲郎さんで、これは中性的な知識人。それから、安部能成は、その当時の一高の校長ですよ。これまた愛嬌のある、特徴のある、しかし政治的な影響力を持ってい

た人です。私は、非常に親しかったです。

高橋 そうすると、研究会のテーマは調査課が決めるんですか。

扇 (テーマは) 調査課が出して、それを議論するんです。最後は掴み合いですよ。齋藤忠なんて、最右翼がいるんですから。それから、最左翼もいるんです。この間から名前が出ないんですが、環境科学(?) というものを創り出した人……。あは、独特のものです。私は素人だから……。マカッサルの環境科学課(部) というのを、私がつくったりしました。

齋藤忠は戦前、国際文化振興会英文百科辞彙読編纂所長、読売新聞論説委員、大日本言論報告会専務理事・事務総局長、国士舘大学、埼玉大学各講師などを務める(NICHIGAI/WEB Service)。

環境科学の創始者というのは、畑井新喜司(パラオ熱帯生物研究所長、のちマニラ陸軍司政長官)のことか。

マカッサルは、インドネシアのスラウエシ(セレベス)島南端にある都市。一九四三年に、海軍はここに総合研究所をつくり、その環境科学部にパラオ熱帯生物研究所を編入する(http://www.ansl.or.jp/b1_10_1.htm)。

高橋 そうした研究をさせて、報告書を作らせますね。それを調査課はまとめて?

扇 調査課がまとめて、これを実行するのは軍政ですからね。それに軍令部が加わったのが、互渉規程によって出来た私の配置です。私と、さっき言った海軍省の二人、これは昔からの極めて親しい……。

高橋 地域の専門家は入っていたんですか。例えば東南アジアや南洋の専門家は?

扇 それはね、例えば商科大学の教授で板垣某というのがいます。

板垣与一か。板垣は、昭和十五年東京商科大学助教授、二十四年一橋大学

教授、東南アジアのナショナリズム論を中心に、経済、資源問題を研究した(NICHIGAI/WEB Service)。

伊藤 今、おっしゃった思想懇談会の幹事は、誰ですか。

扇 幹事は、私ですよ。

伊藤 いえいえ、機密費を渡す人です。

扇 機密費は、私が高木さんから貰って……。

伊藤 それを、個々に渡すわけですか。

扇 ええ。毎晩のように、どれか(懇談会)を開いていますから、その茶屋代。増田という女傑がいるんです。これを中心にして……。話せば切りがないけど、女傑ですよ。偉い奴でね、憲兵が付いていて、憲兵は『増田家』に出入りする者を、みんな知っているんです。私なんか、後を付けられている(笑)。

伊藤 その女将は、美人ですか。

扇 まあ、普通ですな(笑)。小柄な人で、普通ですよ。偉いですよ、肝つ玉が……。清水次郎長を、そのまま女にしたような人で、憲兵なんか屁とも思わない。偉いもんだな。

伊藤 政治懇談会は、矢部(貞治)さんが幹事みたいな役割ですか。

矢部貞治(政治学者)、昭和十四年八月東京帝国大学法学部教授、十五年六月兼海軍省嘱託、十七年十月兼外務省嘱託、十八年六月〜二十年八月海軍大学校教授嘱託、十九年十月〜二十年八月兼大東亜省嘱託、十九年十二月〜二十年六月総合計画局参与、二十年七月内閣嘱託、戦後は東京帝大教授を依頼免官、早大講師、拓殖大学総長等を務める(前掲『日本近現代人物履歴事典』五三八頁)。

扇 政治懇談会の幹事は、矢部さん。

伊藤 思想懇談会は?

扇 谷川徹三さんが幹事。それから、総合雑誌の懇談会は武村忠雄さんで、私と同じ浜田山に住んでいる。それから、太平洋研究会……。

谷川徹三（哲学者）、昭和三年四月法政大学文学部教授、戦後は中央公論社理事、国立博物館次長、法政大学文学部長、同大学総長等を務める（前掲『日本近現代人物履歴事典』三二五頁）。

武村忠雄、昭和三年慶応義塾大学経済学部卒。欧州留学後の昭和十年四月慶大経済学部助教授、十二年四月教授。この間、昭和四年二月～十一月近衛歩兵三連隊に入営、六年三月予備陸軍主計少尉。十五年二月各国経済戦力の調査機関（秋丸機関）に協力、十六年七月召集され、九月陸軍省経理局主計課付、十八年九月主計中尉、二十年九月復員・主計大尉、戦後は日本経済復興協会専務理事・理事長、東京計器取締役、東京薬品取締役、慶大講師等を歴任（前掲『日本近現代人物履歴事典』三二三頁）。

伊藤 武村さんは、経済のほうですか。

扇 経済だけど、慶応出身の武村さんは、自分の根城だった『増田家』を紹介してくれて、我々の根城にしてくれた。また、私たちの知恵袋にもなってくれましたからね。

伊藤 矢部さんは、どんな感じでしたか。

扇 矢部さんは、調査課最高のブレンだったですよ、何でもかんでも……。私、矢部さんについては、山ほど思い出がありますよ。戦後、海軍がなくなつたので、私は会社をつくって商売を始めて、全国の国有林を中心にして、大きな仕事をしたんですよ。

伊藤 それは、いづれ伺いましょう。

扇 海軍時代より、よっぽど努力しました（笑）。これはね、例えばブルドーザーで有名な河合良成さんなんかも、一肌も二肌も脱いでいる。それから、日産自動車の清水良平さん。彼も、実業界を握ってい

る一人です。もう藤原銀次郎さんなんか、毎日のように会っていましたからね。海軍省次官室の延長の所に顧問室というのがあって、そこに先生たちが随時、来るんです。それで、山本五十六次官とか、必要な人と話して帰る。

だから、私も度々、その部屋を覗いて話を交していたから、実業界の大物とは、みんな心安くなったのです。松下幸之助、井植歳男さんなんかは、私に多くの知恵を貸してくれたんですよ。だから、財界の大きなところと、かなり懇意になり、みんな私を引っ張り上げてくれました。

河合良成は昭和十四年満洲国顧問、十七年東京市助役、十八年に木造船建造本部長、運輸通信省海運総局船舶局長（昭和十九年二月二十六日～七月二十八日）を務める。「ブルドーザー」云々の話は、昭和二十二年に小松製作所の争議解決に尽力、翌年社長となりブルドーザー生産を中心に同社の業績発展に寄与したことを指す（臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年、三〇六頁。前掲『日本官僚制総合事典 一八六八～二〇〇〇』三一頁）。

清水良平は浅原源七の間違い。浅原は大正四年東京帝大化学科卒業後、理研研究員を務めた後、昭和三年北辰電機副社長、八年日産自動車取締役、十四年専務、十七年社長。十九年退任後、石炭総合研究所理事長。戦後は、昭和二十六年に再び日産自動車社長となり、会長、相談役を務めた。自動車工業会会長も務めた（NICHIGAI/WEB Service）。

なお、清水莊平という実業家が第四回（一〇三頁）に出て来る。

藤原銀次郎は、大正九年六月王子製紙会社社長、昭和十三年十二月同社会長。また、米内内閣商工大臣（昭和十五年一月～同七月）、東條内閣國務大臣（昭和十八年十一月～十九年七月）、小磯内閣軍需大臣（昭和十九年七月

（同十二月）を務めた。なお、十七年二月～十八年三月海軍省顧問、十八年三月～同十一月内閣顧問、二十年二月～同八月内閣顧問（前掲『日本近代人物履歴事典』四四九頁）。

井植歳男は、妹婿の松下幸之助の松下電器製作所に入り、昭和十年専務、昭和二十二年に三洋電機製作所を創設し、二十五年社長（NICHIGAI WEB Service）。

松前重義の役割

高橋 そうした研究会でまとめたものは、印刷したわけですね。

扇 印刷して、こういうことは、南方政務部で直ぐ実行した。その南方政務部の本当の中心は、軍務局長なんです。その軍務局長に私は承命服務になって、「海軍省と一体になってやれ」と。互渉規程が出来ていた。だから、藤井と柴勝男と、みんな五艦隊に行っただけですよ。だから、五艦隊は強いですよ。私は、その大きな所（艦隊）の沿岸封鎖の主務だったんですから……。

高橋 そうした研究の課題の中で、一番大きな問題というのは、何だったんですか。いわゆる占領地行政ですね。

扇 私に言わせれば、海南島を物にするということ。海南島を押さえたいことを、とうとうやり通した。

伊藤 ちよつと、話の時期が違ってきました。

高橋 アメリカとの戦争の直前ですね。

扇（暢威）いろいろ政策の研究会をつくったでしょう。その資料は、

どうしたか……。

扇 資料は軍務局に渡して、軍務局と一緒にやる。

高橋 海軍は、アメリカと戦うということを前提に研究しているわけですからね。あるいは、アメリカとの戦いが始まってからも、研究会は続いたはずだと思うんですけど……。

伊藤 続いていますよ。

扇 どうしたら、陸軍に対抗し得るか。どうしたら無条約状態で、海軍が嫌な（戦争を避けられるか）……。どうしても、戦争に突っ込むことを避けたいんです。ずっと、それなんですよ。

伊藤 でも、この懇談会では、アメリカと戦争になった場合に、どうするか。それから、アメリカとの戦争が始まったら、どうやって勝っていくか、ということが議論になっていきますよ。

扇（戦争を）しちゃならんということですよ。

伊藤 でも、もうなっちゃうんです。

扇 それは、海軍の政治勢力の後れですよ。長年、「海軍は政治に関与せず」ということで来て、互渉規程によって関与することになったんです。その当事者が、私なんです。藤井茂と柴勝男と私の「三羽ガラス」が、海軍兵学校時代からの親しいあれなんです。それで、軍務局長が井上成美さんと、藤井も柴も成美さんの所へ、自分の立案した政策を持って行くでしょう。国防、国策、戦争指導、渉外関係、全部ですよ。

持って行くと、井上局長に「もう一遍、やり直せ」と、コテンコテンにやられるんです。そうすると、「こう言われた」と言って、私の所に来るんです。私とは昔からの親しい関係があつて、「お前、ちよつと案を書け」と言つて、海軍省の命令の案を私に書かせるんです。

何遍も書いたですよ。それを藤井さんから言われて、寝ても覚めても考えて……。考え抜いた案を、私が持つて行くんです。そうすると、起案者はそれぞれ問題によつて、支那関係は藤井で、涉外関係、国策、条約は柴勝男の起案で回るわけです。誰も文句を言わない。そこに、必ず私の判が入っている。

伊藤 話を戻しますが、『増田家』というのは、どこにあつたんですか。

扇 本願寺の横を、川のほうへ……。

伊藤 駅は、どこになりますか。

扇 本願寺の正面に向かつて、左の狭い道をずっと行くと、川にぶつかつたと思うんですが、川にぶつかる前に……。

伊藤 小さな料理屋ですか。

扇 お茶屋ですよ、小さい。

伊藤 全部の懇談会を、そこでやっていたんですか。

扇 そこでやっていた。

伊藤 じゃあ、毎日ですね。

扇 それを、憲兵が前の部屋を借りて、眺めている（笑）。

伊藤 懇談会の記録を見ていると、扇さんの字で、ずっと筆記しているじゃないですか。

扇 筆記はしないですよ。

伊藤 していますよ。だって、あれは扇さんの字ですよ。

扇 それは、書いたかも知れませんが。高木さんに報告するために……。伊藤 いっぱい残っているじゃないですか。思想懇談会も、政治懇談会も、みんな（記録が）出ているでしょう。

扇 みんな出ている。高木さんは茅ヶ崎なもんだから、何だかんだと

支障が出て、あの人は（身体が）弱いし、出ない場合が多いんですよ。私一人で出た。

伊藤 『増田家』で懇談をやつて、懇談の後ろのほうは飲むでしょう？

扇 飲む、飲む。飲みました。家に帰るのは十二時過ぎです。

伊藤 矢部さんなんか、飲むのが好きでしょう。

扇 うん。私は、あんまり飲まん。まあ、矢部さんとなら飲むけれども……。他の人は飲まんですよ。谷川さんなんて、飲まないですよ。それから、和辻先生も……。飲むのは、安部能成さんだけです。安部さんは癖があつて、男同士でキスするのです（爆笑）。あれには弱つ

たもんだ。飲んだらキスする。私だけじゃないですよ、誰にでも……。

伊藤 気持ち悪い（笑）。

扇 それほど親しいんです。何でも話した。だけど、偉い者を、よく集めたもんだ。それを、天川が拾つて来るんだからね。しかし、天川自身も、嘘が多いのです（笑）。だから、私は高木さんに、「彼は、あれほど有能な男だけれども、嘘が半分ぐらいだと見なさいよ」と。私に対して嘘を言っていることが、後で、はつきりバレるのです。

伊藤 天川という人は、後で海軍から追い出されますね。

扇 あんまり嘘が多いから……。

伊藤 何か事件を起こしたんじゃないですか。

扇 事件も起こしたのです。「清水次郎長」の子分が二人か三人いるでしょう。その女将の所に、女中が三人いるんです。みんな頭がいいんだ。それが第一、第二、第三とある。

伊藤 「大政」「小政」だ。

扇 「中政」もいる（笑）。「大政」「中政」「小政」と。その中でも、

一番頭がいいのは「小政」なんだけど、「小政」と天川が恋愛をしてしまった（笑）。

伊藤 恋愛は御法度ですか。

扇 私は天川が死んだ時に、たった一人、個人として葬式に行ったら、海軍からは誰も来ていなかった。葬儀委員長は中曽根康弘さん。行ったら、「小政」がいるんですよ。それが、恋愛して結婚したんです。伊藤 結婚したんじゃ、問題ないじゃないですか。

扇 今は、どうなっているか知らんけど。まだ「中政」はいますよ。「大政」も、この間まで生きていたね。余分なことだけ……。

高橋 もう二時間半近く経ちましたので、今回は懇談会の話から入って、それからドイツですか。

扇 余計な話だけど、松前重義は「大政」と最後まで……。『大政』は総理官邸の、直ぐ横の所に某という大きな料理屋があつて、その女中頭で行つておつた。それで、松前の所で座談会とか研究会とかを度々、霞ヶ関ビルで行いましたが、必ず「大政」を呼んでおつた。「大政」が、「中政」と「小政」を従えて来とつた（笑）。

伊藤 松前さんとは、どこで、どういうご関係ですか。

扇 これが、また深いんですよ（笑）。松前は、大政翼賛会の総務部長をやっていた。あの時に、陸軍から決別したんです。彼は、自分の燃えるようなあれを持っているんです。彼は、いわゆるガバメント・オフィサーじゃなくて、文官で……。各省の専門の鉄、石炭、亜鉛、アルミニウム、それぞれあるでしょう。それから、タングステン、モリブデンというようなレア・メタル、それらの総元締めで、本当に握っているのは文官なんです。陸軍士官じゃないんですよ。ガバメント・オフィサー——いわゆる官吏じゃなくて技師、技手です。そうい

う人が、実数を握っている。その頭は、企画院の陸軍のオフィサーが握っている。陸軍のオフィサーは、それらの情報を、みんな自分に有利な数字に直すんですよ。それが、陛下の所に行っている。

陛下は、「内閣を信任する」と言う。痛い目に遭つておられるから……。田中義一を潰したでしょう。あれを、西園寺公望さんに怒られたんです。「それじゃ専制君主になる。やつちやいけません」と、怒られたとのことです。以後、それを陛下はちゃんと、ずっと守られて、東條英機の言つて来る数字——陸軍が言つて来る数字を信ずるようにされた。それは、何倍か水増しされているんですよ。それを松前は、生で、みんな知っているんですよ。松前は技師・技手の総帥で、またコレ（金）も握っているんだから……。本当のところを、全部知っている。

昭和四年七月一日、張作霖爆死事件の責任者処分に關して、田中首相は天皇に叱責される。翌二日、内閣総辭職。

伊藤 その頃から、お知り合いですか。

扇 ああ。それで松前が、「我々は陸軍が大嫌い。こんな奴は国を誤る」と言つて、海軍に來た。私の所に來たんです。私の所に來て、私と話をした。一回、二回じゃないですよ。ずいぶん話をした。私も、丸ビルの四階かにあつた彼の事務所へ度々行つて、話をしました。これは、お互いに国力の真底を知っているんですよ。それで話をして、それからずっと、私の所に來るようになった。そうして、戦時生産研究会というのをつくつたんですな。『増田家』の我々の懇談会では、議論が白熱すると、掴み合いの喧嘩になることもあつた。

伊藤 その『増田家』の懇談会の仲間に、松前さんもいるわけですか。扇 来る、来る。全部、来るわけじゃないけれど……。松前との懇談というのは、私の大事な問題なんです。戦時生産研究会というのは……

…。

伊藤 だけど、松前さんは当時は睨まれて、陸軍に徴兵されるでしょう。

扇 召集される。海軍は終始、総力を挙げて、これを食べ止めようとした。ところが、どうしても歯が立たん。立たんというのは、東條から募集担当の係長に直命で、「誰にも、一切言うなよ。松前を三等兵で召集しろ。それで、激戦地マニラへやれ」と。直接の密命ですよ。それは、後に残った「参本」の人がおるんですよ。私は、その人から戦後、松前さんと一緒に、直接、詳細を聞きました。それは陸軍武官をやった小野寺信さんで、彼はストックホルムへ行って五年になっても、東京へ帰させないんです。一遍帰ったけど、直ぐまたやられる。その小野寺さんの妻の百合子さんが、極秘録『バルト海のほとりにて』で詳しく書いています。それ以前に、私の所に小野寺百合子さんから手紙が来ているんです。偉い人ですよ、あれは。私は百合子さんの手紙を、あなた方に見せようと思って探すんだけど、まだ見付からない(笑)。「こちゃこちゃ」になっているから……。そのうちに見付けます。

小野寺信、陸士二期、昭和十五年十一月九日からスウェーデン公使館付

武官(着任は翌十六年一月)(前掲『日本陸海軍総合事典』三六九頁)。詳

しくは、一二七頁の註を参照。

小野寺百合子著『バルト海のほとりにて―武官の妻の大東亜戦争―』(共同通信社、一九八五年)。

伊藤 松前さんは結局、召集解除になって戻りますね。それには多少、海軍が力を出したわけですか。

扇 戻ったのは、(日本が)敗戦を認めたから……。

伊藤 いえいえ、もつと前ですよ。

松前重義については、六〇頁の註を参照。昭和十九年七月二等兵として召集・熊本師団入隊、同十月南方軍總司令部付、同十二月陸軍兵器学校、二十年一月帰国、同五月通信院技師・工務局、同五月召集解除・上等兵。

扇 海軍は知らん。私は、その時はもう国外だったんです。

高橋 二時間半たつぷり聞かせていただきましたので、ちょうど切りのいいところで終わりにしましょう。時間をオーバーして申し訳ございません。次回は、懇談会から後の話を……。

扇 何ぼでも話があります。

伊藤 今度は、ベルリンですね。

扇 また、質問に応じて……。ダブルかも知れないけど……。

高橋 有難うございました。

(以上)

扇 一 登

オーラルヒストリー

第 4 回

[2001 年 3 月 1 日 14:00~16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

扇 和子(長男夫人)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

「総合研究会」の顔ぶれ

高橋 前回のお話では、「総合研究会」という名前で、五つも六つも懇談会があった、と。政治懇談会、外交懇談会、思想懇談会、情報懇談会、あるいは太平洋研究会という名前も挙げてありますが、それらを総合して「総合研究会」と言っていたわけですか。

扇 はい。

高橋 一つ一つ思い出のある懇談会だと思いますが、『増田(家)』でおやりになった、と。一週間に三日ぐらい、いろいろな懇談会が同時並行的にあったと理解してよろしいですか。先生が幹事役ですよ。例えば、外交懇談会には、どんな人がいらつしやったとか、一つ一つお話をいただけたら……。

扇 雑談になるかも知れませんが、この前の速記録を見ますと、『増田』のところだけがはつきりしていないので、ちよつと付け加えておきました。『増田』は、元々慶応大学の武村忠雄教授の根城で、慶応大学の研究会とか懇談会とか、多くのことをあそこで……。『増田』を切り拓いたのは、慶応の武村さんなんですよ。武村さんが高木(惣吉)さんと私を、そこへ紹介してくれて、武村さんの努力によって、官房調査課を中心にした海軍——後に軍令部の私も入ったわけですが——の根城になったわけです。

高橋 そもそも、海軍がブレーンを集めて、こうした懇談会とか研究会を開いて話を聞いてみようというのは、高木惣吉さん本人の方針だ

ったんですか。

扇 それは、私が行く以前から、高木さんが基礎的と言いますか、そういう考えを持っておられたんです。それに賛成して機密費を出してくれたのが、山本五十六次官です。それ以来、あそこが根城になりました。

高橋 時には、山本次官も来られたんですか。

扇 次官は、来られたことはありません。私の記憶では、ないですな。高橋 高木惣吉課長も、毎回、来ていたわけではないという話でしたか……。

扇 そうです。あの人は体が弱いし、いろいろ他の関係もあつたりしてね。だって、それはとても多いんですよ。結局、それを活用していくについては、私が高木さんに報告し、同時に必要な(懇談会の)趣旨やアドバイスを高木さんから貰うんです。それから、私の麾下にいたブレーンと言いますか、「二年現役」の人がいるんです。例えば、澄田智——後に日銀総裁になったでしょう。

「二年現役」は、主計科二年現役士官のこと。大正十四年に、まず軍医科、薬剤科が始まり、支那事変の拡大を受け、昭和十三年主計科にも適用された。「大学令」による大学の法、経、商学部等を卒業した学士、または高等試験に合格した者から採用した者を海軍主計中尉に、専門学校卒業者を主計少尉に初任し、海軍経理学校で補修学生として約半年教育した後、実務に就けた(前掲『日本陸海軍総合事典』七二五頁)。

澄田智は昭和十五年三月東京帝国大学法学部政治学科卒、四月大蔵省入省、五月辞職して海軍主計中尉・海軍経理学校補修学生(短現四期)。「愛宕」乗組等を経て、十七年八月横須賀鎮守府付・海軍省調査課派遣勤務、十八年十二月南西方面海軍民政府局員、二十一年六月復員(前掲『日本近現代

人物履歴事典』二八七頁。

伊藤 前川（春雄）さんも？

扇 そうです。それから、同じく後に宇都宮大学の総長をやった世良晃志郎さんなんかも、みんな直属のアシスタントだったんです。高木さんが舞鶴に行かれた後は、軍務二課長の矢牧大佐が調査課長を兼務されたので、私も机を軍務二課に移し、隣席に澄田智さんの机を置いて、補佐してもらいました。軍務局にいる間は、私の麾下におりましたよ。

前川春雄、昭和十年東京帝国大学法学部政治学科卒、日本銀行入行。昭和十四年五月神戸支店、十六年三月外国為替局ローマ駐在（七月米国経由で着任）、十八年十月同ベルリン駐在（十二月着任）、二十年七月シベリア經由帰国、国庫局業務課長。日銀総裁就任は昭和五十四年（前掲『日本近現代人物履歴事典』四六五頁）。「短現」については確認できない。また、扇氏のドイツ、ハイデルベルク到着後、岩倉教授邸で「此所には前川日銀派遣員も居て夜は四方山の話がはずみ」（昭和十九年四月三十日頃）とあるので、前川氏との出会いを、その時と勘違いしている可能性もある（日記No.3）。「扇」登氏関係文書「三二二五」。

世良晃志郎は、昭和十五年東京帝国大学法学部法律学科卒、同大助手となり、戦後二十三年に助教授。東北大学法学部部長等を経て、昭和五十四年宇都宮大学学長（NICHIGAI/WEB Service）。「短現」については確認できない。矢牧章、海兵四六期、軍務局第二課長および調査課長の在任期間は、昭和十七年六月一日～二十年二月八日（前掲『日本陸海軍総合事典』四〇七頁）。

伊藤 天川（勇）さんは、どういう場所にいたんですか。

扇 天川勇氏は、普通は林、世良など四、五人の優秀グループと一緒にの部屋を足溜りにしておりました。調査課から、廊下をちよつと回っ

た所の小さな部屋です。連中は、みんな優れた人たちですよ。林なんていう人は、東大卒前に「高文」を一番で通った男ですし、世良先生なんかも、宇都宮大学の学長に……。世良さんは、その前に仙台の法学部長だったでしょう。その他の人たちも、偉い連中ばかりですよ。だから、海軍省としては、調査課に主なブレーンを集めたんです。「二年現役」の方の中でも、みんな特に優れた者ばかりですよ。

「林」については、特定できない。以下のいずれか？

林実香、昭和十一年東京帝大法学部卒、日銀入行。昭和十年十月文官高等試験合格（前掲『日本官僚制総合事典一八六八―二〇〇〇』三一七頁）。

林浩一、昭和十五年東京帝大法学部卒、内務省入省。昭和十四年十月文官

高等試験合格（澄田智と同期、前掲『日本官僚制総合事典一八六八―二〇〇〇』三三四頁）。

林陽一、昭和十七年東京帝大法学部卒、通信省入省。昭和十七年七月文官

高等試験合格（前掲『日本官僚制総合事典一八六八―二〇〇〇』三四四頁）。

伊藤 調査課の本来の課員としては、先生の他に誰いました？

扇 いま、大体、名前を挙げましたね。日々、それぞれ受け持ちのことを調査、勉強して、資料を私の所へ集めて貰いました。私は、それをまとめて整理したり、作文したりして、海軍大臣の国会活動や軍務局長の予算取りの活動などの準備や、国会現場でのお手伝いに万全を尽しました。

調査課は、私一人ですから。本来、調査課は、高木さんと私だけなんです。で、みんな私の所へ……。高木さんは高級活動に忙しいから、調査課独自の課としての区々たる業務などは、多く私に任せていただいたような格好でした。私も、必要なことは高木さんに報告して指示を仰ぐんですが、高木さんはここ（直ぐ脇）におられるんです

から、ある程度は以心伝心でやれるのです。また、調査課に所属した庶務室というのがありまして、一つの部屋に十人ぐらいいるんですよ。

伊藤 そんなに、いるんですか。

扇 それは、現役士官じゃなくて文官や雇員で、それに旧海軍特務大尉の年長者が主任に座っていて、信頼に値する構成になっておりました。女の子もいます。数十人の調査課ブレーンに対する人事や給与に関する事務も、みな庶務で扱います。それから、ご進講であるとか、軍務局長の国会における説明とかに対応するために、図表作成など、みんなやってくれる部屋が地下に別にあるんですよ。だから、調査課は、それらの上に乗っているんです。

で、隣が軍務局長室です。高木さんは、軍務局長室と一つ衝立があるだけです。衝立と言いますか、仕切りですね。

伊藤 一応、仕切りがね。

扇 あるだけで、行ったり来たり出来るわけです。

伊藤 扇先生の前任者は、誰ですか。

扇 大井篤です。

伊藤 後任者は誰ですか。

扇 私の後任者は、中山定義ですよ。ですが、彼が南米から帰国し、着任するまでの短期間、私のクラス（海兵五一期）の鵜沢聡衛がいましました。

中山定義、海兵五四期、昭和十五年十二月アメリカ駐在（プリンスストン大）、十六年八月ブラジル大使館付武官補佐官、十七年五月チリ公使館付武官、十八年一月抑留、同十月『帝垂丸』で帰国、同十一月軍令部出仕、同十二月海軍省調査課員兼軍務局二課局員。自伝に『一海軍士官の回想』（毎日新聞社、昭和五十六年）がある（前掲『日本陸海軍総合事典』二一八頁）。

鵜沢聡衛、海兵五一期、昭和十五年十二月第二遣支艦隊参謀、十七年四月兵備局員兼軍務局員、十八年四月第二三特別根拠地隊参謀兼副長、十九年十一月対潜校研究部員（上法快男監修、外山操編『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』一九八一年、芙蓉書房出版）。

伊藤 たぶん、そうだろうと思った。

扇 中山がアメリカから帰って来まして、私の後継ぎになったんです。鵜沢というのは、ちよつと足掛け（腰掛け）に来たばかりでした。

高橋 そうすると、いろいろな研究会とか懇談会とかは、先生が計画を立てるわけですか。研究会は、どのように運営していったのでしょうか。それから、同じ人が幾つかの研究会に顔を出すこともあったのでしょうか。

扇 研究命題というのは、その時々に応じて必要な、切実な問題をぶつけるんです。この一つの特徴は、高木さんは偉い先生を『増田』に集めるでしょう。そのメンバーに限りませんから、一晩に、そうたくさんじゃないです。そういうメンバーが調査課に集まって来たんですが、調査課というものをヴァリアブルなものにしたのは高木さんで、必要あらば、高木さんは軍事機密に関することまでも（彼らに）話すんですよ。他の人には絶対に秘密になっていることすらも、全部じゃないけども、要所要所、その人たちの認識を高める上に必要なことは何でもぶつけるんです。

高橋 具体的に、どんな機密ですか。

扇 主として、戦場のことです。戦が、どうなっているかというようなことをぶつける。それから、海軍省の方針で、「こういうことが伺いたい」というようなことを、その時に応じてぶつけるんですよ。秘密に、あまりこだわらないんです。そこで、そこへ集まるのは、みな

偉い人ですから、信用が出るんですな。海軍は、ここまで打ち明けてくれている、我々を頼りにしてくれているということの、これは一つの証左になるわけだね。

高橋 中には、アメリカをよく知っている人もいたのですか。アメリカの専門家と言われるような人は？

扇 いますよ、いますとも……。例えば、東大教授の高木八尺先生はアメリカ憲法のオーソリティーですからね。また、アメリカから交換船で帰ったばかりの都留重人さん。この人は帰国直後、「特高」が拘留する予定だったのですが、高木さんが「特高」に予め交渉し、「米国家事情を調べたいから、身分を海軍に任せて欲しい。私が責任を持つから」と、強談して引き取り、ずっと彼から最新情報を入手した。また、同じく交換船で帰国し、大倉ホテルの新社長になった野田岩次郎さんも、最新のアメリカ内情の有力な提供者として重視した。中山定義とは、在米時代から昵懇であつた。そんな状況で、調査課と研究会とはピッタリでした。

しかし、太平洋研究会では、齋藤忠氏のような極右の論客もいるし、環境科学(?)を創り出した東大の平野義太郎教授のような自由主義の人也有着、議論は白熱することもあつて、時には奮然と席を蹴って退場するような場面も、現出したことがありました。

高木八尺、大正四年東京帝国大学法科大学政治学科卒、大蔵省入省。大正七年東京帝大に米国講座が開設されるとともに講師として戻り、翌八年二月米国憲法歴史及外交研究視察のため米国へ出張、同五月東京帝大法学部助教授、十年二月ハーバード大学よりMA取得、十三年十月東京帝大法学部教授(米国憲法歴史及外交講座担当)、その後、昭和八年七月〜九年二月米国・カナダ出張、十三年十二月〜十四年三月米国出張。戦後は貴族院

議員や学習院大学教授を務める。四十二年十一月文化功勞者(前掲『日本近現代人物履歷事典』二九八頁)。

都留重人、昭和六年八高除籍後渡米。昭和十五年ハーバード大学で博士号を取得し同大学経済学部講師となるが、十七年六月辞職、同八月交換船で帰国、十八年一月外務省嘱託・政務局六課(前掲『日本近現代人物履歷事典』三三九頁)。

野田岩次郎、大正七年東京高商を卒業し三井物産入社。同年シアトル出張勤務となつて以来、昭和十八年十一月に第二次交換船で帰国するまでアメリカ駐在が続く。この間、アリス・K・コーストンと結婚、日綿への転職、戦争勃発による抑留を経験する。帰国後は海軍嘱託(調査二課)となる。大成観光(ホテルオークラ)社長就任は、戦後、昭和三十四年のこと(前掲『日本近現代人物履歷事典』三九五頁)。

齋藤忠は、第三回の聞き取り(七八頁)の註を参照。

平野義太郎、大正十年東京帝国大学法学部卒業後、助手。同十二年助教授となり、昭和二年ドイツのフランクフルト大学社会科学研究所に留学、五年帰国するも、同年治安維持法違反で東大罷免。昭和七年岩波『日本資本主義発達史講座』の編集に参画、十一年コムIIアカデミー事件で高輪警察署に八カ月留置、十四年四月太平洋協会企画部長、十五年には中国華北農村慣行調査および東アジア研究に従事。戦後は二十一年一月〜四十一年十二月中国研究所長、三十一年六月〜五十一年日本平和委員会会長(前掲『日本近現代人名辞典』八八二頁、『日本近現代人物履歷事典』四三二頁)。「環境科学を創り出した」については、確認できない。第三回の註(七八頁)を参照。

伊藤 メンバーの中で、陸軍のブレインになっている人もいるんじゃないですか。

扇 陸軍のブレーンで、両方兼ねている人……。まあ、強いて言えば武村忠雄さんです（笑）。

伊藤 そうでしょう。

扇 彼は、陸軍から来ているんだ。陸軍中尉ですよ。参謀本部でも陸軍省でも自由に出入りしているんですが、しかしこれは「海軍党」ですよ（笑）。

武村忠雄については、第三回聞き取り（七九頁）の註を参照。

伊藤 大丈夫なんですか。

扇 ええ（笑）。浜田山（東京・杉並区）の、直ぐそこに住んでいて、（戦後も）私と家族ぐるみで付き合って、極めて昵懇でした。

高橋 そういった研究会で一番力を入れたことは、アメリカと中国の問題ですか。しかも、先生が調査課にいらつしやるのは十六年の一月ですよ。日米交渉がまだ始まる前ですけども、本当にアメリカとの関係を何とかしなきゃいけないし、支那事変の問題もあるし、ドイツとの関係もあります。こういう構想で研究会を運営していったんですか。アメリカとの衝突は、もう避けられないということをやっていたんでしょうか。それとも……。そのあたりの国際政治との絡みと、それに対して国内をどうこうするという問題も関係してくると思うのですが……。

扇 その当時の主テーマというか、海軍は「アメリカと戦争してはならん」という立場ですからね。この部分は、動かすべからざるものです。これ（アメリカとの戦争）は避けなきゃいかん、という立場です。根本的にはね。あとは、政府を動かして、海軍的な方向に持って行かなきゃならん、と。というのも、「八・八艦隊」の計画は、もう出来ているし、『大和』『武蔵』も出来つつあるんですから、非常な予算が

要る。それで、政府の予算を如何にして取るかということ、そこが主題目ですよ。

それから、陸軍に対抗して、どうしたら陸軍が抑えられるかということ。これが、一番頭に残っている印象ですよ。しかし、それは所詮は駄目だった。海軍はね、もう海軍の創設の時代から、「軍は政治に関わっちゃならん」というのが信条ですよ。これの大本は、英国から来た教官が教え込んだのかどうかは知りませんが、『軍人勅諭』での強調もあり、我々は頭に染み込んでいた。海軍の全員が、そうですよ。政治に関わっちゃいかん、と。まあ、関わりにくい海上勤務ですからね。世の中とは離れているんですから。だから、海軍本来の姿というのは、国を守ることで、と。初めから世界的な視野に立っているんです。これは、士官学校教育とは全く違うんですよ。「オフィサーになる前に、紳士になれ」という、強い伝統ですよ。

高橋 陸軍の中心的な人々は、「対ソ問題と、アメリカとの対決」という覚悟を持って進んでいますから、「陸軍を抑える」ということはアメリカとの対決を避けるということですね。ということは、陸軍のやり方を抑えるために強力な理論というか、カウンター・パンチというか、海軍はそうしたものを考えていたと思うんです。こうしたブレーンの人たちは、どんな意見を持っていたのでしょうか。

扇 ……………。

伊藤 先生が調査課にいらつしやった頃は、「アメリカと戦争をするのは、しょうがないじゃないか」という雰囲気ではなかったですか。

扇 私が、そうだったですよ（笑）。これは、もうしょうがない、と。（前回の）速記録にも付け加えておきましたが、高木さんも、「陸軍には、もう手が付けられん。少々の努力で、こいつを引っ繰り返すこ

とは出来ない」と。それは、前から、もうそういうあれがあるんですよ。ドイツへ行つて、「八月会」と言いましたか、名前を思い出せないんですが、陸軍の数人が一派をつくつたでしょう。皇道派とか統制派とか、そういうものとも、また離れて、「我々、中堅陸軍士官は固まつて国家革新、陸軍革新をやらなきゃならん」というような趣旨のものをつくつたですよ。それが、初めは数人だったのが、だんだん大きくなって、陸軍を引っ張り回すようなことになるんですがね。

扇氏の話にある、「ドイツへ行つて」云々というのは、大正十年十月、陸士一六期生の小畑敏四郎、永田鉄山らがドイツのバーデンバーデンで会合し、陸軍改革を申し合わせたことに起源を持つ「二葉会」のことに思われるが、この後、同グループとは立場を異にする橋本欣五郎の名前も出て来るなど、扇氏の勘違いもあるように思われる（前掲『日本陸海軍総合事典』六六五頁）。

高橋 「二葉会」とか？

伊藤 いや、そうじゃないでしょう。中心になったのは、誰ですか。

扇 橋本欣五郎も、その一派にいたと思う。記録を見れば分かります。あれが、永田鉄山を殺したでしょうが……。

伊藤 相沢三郎。

扇 あれが、その派だったかどうかは知りませんがね。

伊藤 あれは、違いましたけど……。

扇 いわゆる陸軍革新派といったようなものが生まれているんです。だんだん勢力争いの中でやって、皇道派とか統制派とか、我々もよくは分らんような派閥があつて、最後は二・二六事件をやるんですが、これは革新青年士官ですからね。いつも我々の政治懇談会で、その話が出るんです。政治懇談会で、そういう事情を一番よく知っていたの

は、朝日新聞の秘書室にいた……後に副秘書長になったかな、佐々弘雄さん。彼は、詳しいんですよ。陸軍の中を分析していて、詳しい。あの人自身も、近衛（文麿）さんのブレーンになったでしょう。

佐々弘雄、大正九年七月東京帝大法学部卒。助手、外務省嘱託、欧米留学を経て大正十三年十二月九州帝大教授となるが、昭和三年四月依願免本官。九年三月東京朝日新聞入社後、論説委員、副主任、主任論説委員、論説室主幹、参与等を歴任。昭和十一〜十五年昭和研究会メンバー（前掲『日本近現代人物履歴事典』二四六頁、NICHIGAI/WEB Service）。「秘書室」云々は、扇氏の記憶違いと思われる。

伊藤 あの人、また陸軍の皇道派とも親しいんですよね。

扇 そうそう。むしろ、自分自身が皇道派みたいなものですよ（笑）。

避けられない対米戦争

高橋 話を元に戻して申し訳ございませんが、「アメリカとは、もう戦争をやるしかないんだ」と、先生自身は思っていたらつした、と。高木さんも、そうですね。こういう研究会に参加した人は、「そうだ、そうだ、その通りだ」というような雰囲気だったんですか。

扇 それは、先生方の意見によつて、それぞれ幾らかは違うんですけども、今の問題については、「そうじゃない」と言う人はいないですね。これはね、私自身が海軍大学にいる時から、「アメリカという国は、原則で動く。開国以来、原則を決めたら、その通りに動いて行くんだ」ということを、講義なんかで聞かされているし、自分たちも

そう思っていた。それは、既に満洲事変の熱河作戦の時に、はつきり出て来ているんですからね。いわゆる機会均等主義、民族自立と言いますか、不干涉……。

高橋 内政不干涉ですね。

扇 不干涉主義とか、四つぐらい原則があるんですよ。それを痛切に感じたのは、熱河作戦の時……。熱河を爆撃したでしょう。爆撃したこと、その四原則か何かを、バツとぶっつけているんですよ。アメリカ力は、もうその当時から、「日本という奴は、実力でぶっ倒すより他、やりようがないんだ」と。日本というよりも、日本陸軍ですよ。陸軍を潰さなければ、アメリカの原則的な要求は通らんだということですよ。これが、アメリカの本音。それは、その時、「ステイムソン声明」で出ているんです。それを、私どもは感じているんですよ。だから、避けられない、と。

向こうは、大陸政策、極東政策の根源として、あの原則——「機会均等」で押して来るんだということが、そこではつきり読めているんですから……。私どもも、そう感じているんです。それで、未だ米国民の輿論は不介入論でも、政府の肚は別で、大原則を持って、ぐんぐん押して来るということです。ヴィンソン法が第一次、第二次、第三次、第四次まで行っている。だから、具体的には太平洋艦隊を増強して行く、そして日本はまた日本で、華府（ワシントン）条約撤廃に出るでしょう。蹴つてしまおうでしょう。

「ステイムソン声明」については、第三回聞き取り（七六頁）の註を参照。

そこでも指摘したが、「ステイムソン声明」の直接のきっかけは、昭和六年十月の錦州爆撃であり、熱河作戦ではない。ヴィンソン法については、第二回聞き取り（四六頁）の註を参照。

高橋 そうすると、アメリカとの戦いは、もう必然的である、と。そうなると、こういう研究会では、「じゃあ、アメリカと有利な戦い方をするためには、日本はどうしたらいいのか」ということも、十分話し合われたわけですね。

扇 その話は出ますけれども、そういうことを言っているよりも、向こうが押して来るのが、もっと切迫していますからね。だから、「アメリカの参戦防止だ、何だ」と言ったつてね。まだ、その時は、アメリカはヨーロッパの戦争に入っていないんです。入っていないんだけれども、入るには違うなと思っておりましたよね。

高橋 当然ね。

扇 それに対抗するために、海軍は海軍としての軍費の要求を強くやりました。その押して行く構えは、調査課がやったんですよ。資料なんか全部揃えて……。

高橋 そうすると、四月に日米交渉の前座みたいなものがワシントンで始まりますが、それについては調査課は常に情報を得て、例えば「今、どのように進展している。だから、日本に有利な戦いをするためには、日米交渉をどう持つて行ったらいいか」と。日米交渉を本気でやらずに、時間稼ぎのようなイメージで捉えていたんでしょうか。扇 ええ。私は、こう思ったんです。嫌だけれども、陸軍の行き方を以てすれば、今の歩みを続けて行く限りは、日本は戦争になると思っていた。それは、少々のことでは防げない。根本的にやらなければ……。それで海軍としては、「八・八艦隊」が完成すると、アメリカはたじろぐというほどではないけれども、華府条約を撤廃し、こちらは強い態度で行っておりますからね。アメリカは、もうその当時から、ステイムソンは「叩くよりほかない」と決めていたと思うんです。

我々は、そう読んでいます。だから、それを如何に避けようと言ったって、避けよう、避けようとしながらも、自分で入って行っているんです。

その時に、じゃあ、大義名分的にはどういふふうになるかということ、高木さんも考えるわけです。私なんかもある。その当時、近衛が出した「大東亜共栄圏構想」といった思想は、元々は京都学派が言い出したことだったと思いますが、これをさらに哲学的に理論付けて貰う意味で、これは高木さんが言ったか、私が言ったか、私も京都に二、三遍行っておりますから……。西田（幾太郎）先生の学派の田辺（元）先生に、哲学的な意味付けをお願いしに行った。「これを、どういふふうに運営したらいいか、本当のところを、ひとつ教えてください」と。世界史的に見た、哲学的な解釈をお願いしたんですよ。

田辺先生は、わざわざ京都から来られて、『増田』だったか、あるいは『増田』と関係の深い料理屋だったか……。もう一つ、数寄屋橋の地下に料理屋がありました。そこだったかも知らん。……どこでやったのか、はつきりしない。田辺先生が、それをずっと哲学的に解明されました。それで、「なるほどな、さすがの哲学だ」と思ってた感心しました。感心はしましたけれども、こっちは哲学なんか分かんないから……。これは後に、高木先生の一周忌か何かの法事で——東慶寺に墓があった。話しましてね。「実は、私にも分かんないんだけど……。哲学は兵隊には分かんないが、しかしそれで一つの、まあまあ掘り所が掘めた」と。その時は、そう思いました。

第六回聞き取り（一八一頁）によると、法事の時の話し相手は大井篤。

我々には、その理論を喋ることは出来ないけれども、しかしそう思ったことは事実なので、私はドイツに行く以前に、岡敬純軍務局長に

意見書を書きました。これは、今でもはっきり覚えております。たった二つ書いた。一つは、「この戦が終わるまでに——もうその時には、一部はやつておつたんですけれども——いまヨーロッパの植民地になっている各民族に、『民族の独立』という旗を、一遍揚げさせておけ」と。一遍、民族に独立の旗を揚げさせたら、その民族の一つの宿命的な自覚として必ず残る。仮に後で潰されても、必ず精神は残るから、これは必ず後に影響を大きく及ぼす。極東の情勢を全般的に引つ繰り返して行くことになるんだから、「民族の旗を揚げさせろ」ということが、一つです。もう一つは、「早く戦を、やめなきゃいかん」ということです。その二つを書いたんですよ。

岡敬純、海兵三九期、軍務局長の在任期間は昭和十五年十月十五日～十九年八月一日（前掲『日本陸海軍総合事典』四一〇頁）。

二つを同じ重さで書いた。その場で書いて、その場で出したんじゃない、書いて握っておりました。私は、ドイツに行く八カ月ぐらい前に、内命を受けていたんですよ。その時は、フランスに行くということだったんですが、その間が長く、調査課員のままでいたんですよ。その間、温めていたんですよ。それでも憲兵に付けられていたから、もし行く前に私の意見が漏れると、暗々裏に、陸軍にどういふ目に遭わされるか分かんないという事で、温めておつたんですよ。行く前に、そういうことを言い出す弾みと言いますか、元気が私には出なかった。憲兵に漏れたら、陸軍に何をされるか分かんないですから……。

高橋 もう一点、お聞きしたいんですよ。「アメリカとの戦いは仕方がない。必ず戦うようになる」と、調査課で思っていたらついたらということなんです、その場合、調査課あるいは研究会では、ドイツの役割はどういふふうに考えていたんでしょうか。

扇 名前は忘れましたが、途中で陸軍の一武官がドイツから帰って来ました。そして、英米を敵とする日独軍事協定の案を持って来たんです。英米を敵にするということ……。

高橋 坂西一良さんですか。

坂西一良（ばんざい・いちろう）、陸士二三期、昭和十五年十一月十三日～十八年一月十八日ドイツ大使館付武官、参謀本部付を経て、十八年二月第三五師団長（前掲『日本陸海軍総合事典』一一九―一二〇・三七〇頁）。

もつとも、話題となっているのは昭和十五年九月二十七日締結の日独伊三国同盟の交渉経過に関わることと思われるので、坂西の着任前となる。定期的に符合するのは、坂西の前任者、岡本清福（陸士二七期、任期は昭和十四年十二月一日～十五年十一月十三日）と思われる（前掲『日本陸海軍総合事典』三七〇頁）。

扇 私は知らない武官ですけど、帰って来て、そういう話を海軍省でしましたよ。どうしても、日独防共協定と言いますか……。

高橋 三国軍事同盟ですか。

扇 独ソの戦になる、と。その時期に、ロシアと対決するというあれで、英米派とは逆に、日独の同盟を主張するために来ましたよ。彼は、海軍省でも話をしました。そういうこともあって、まだまだ我々でも憲兵が付いて来た。憲兵は、やっぱり怖いですからな。有無を言わせず押さえるんですから。怖いから、漏らしちゃいかんし、それは軍務局長に対しての最後の意見ですから、温めておりました。

扇（暢威）調査課は、ドイツの役割をどう思っていたか、というご質問なんです。

高橋 日本がアメリカと戦った場合、海軍はドイツをどのように使おうとしたか。

扇 ……………。

伊藤 ドイツを、どんなふうに考えていましたか？

扇 ドイツの初めの勢いに対しては、みんなヒットラーの『マイン・カンフ』を読んでいたから、「大したことをやるもんだな」とは思っていました。思ったけれども、これが最後まで続くかどうかということについては、決して樂觀してはおらんです。むしろ、逆だと思いました。

高橋 独ソ戦が始まって、そうでしたか。最初は、すごい勢いでドイツが入って行きますよね。年内に、ドイツはソ連をやつつけるんじゃないか、というような観測もされていたようですけれども……。

扇 その当時、ドイツの軍隊が寒さに対する備えを何もしていないというようなことは、私どもはつきりは分かったのですからね。だから、一応は「大したものだ」と思わんことはなかったです。なかったけれども、これまで手を抜けて行って、果たしてやれるものかということとは分かん。それから、ストックホルムで小野寺（信）さんが全く逆の判断をして、最後まで反対していたということは分かっているんです、その当時としては……。ただ、「こうまで手を抜けて、やるのかな」という危惧はしていました。戦況は分かっていたからね。だんだん、スターリンがね。包囲が解ける……。ソ連も、やっただすからな。

伊藤 日本がドイツと結ぶことで、海軍にとって何がメリットになりますか。

扇 メリットなんかよりも、デメリットのほうが大きいですよ（笑）。

伊藤 海軍としては？

扇 メリットはない、デメリットが大きいから。海軍は、いま米国が

ら輸入・備蓄中の原油が生命線と思っているんで、実に際どい感じを持つているのです。頭から離れません。どうしても黙り気味になるんです。私の本当の感じですよ。

伊藤 でも、海軍の中でも、ドイツ最良の人はたくさんいたでしょう。おりますよ。第一、私の軍令部時代の上司だった横井（忠雄）さんなんかドイツ最良的で、ひそひそやっているんです。あからさまには言わんけれども、話で分かるんですよ。

横井忠雄、第二回聞き取り（三五頁）の註を参照。

高橋 例えば、潜水艦とか、レーダーとか、その他、航空機の技術とか、日本の海軍がドイツから貰おうと期待していた所はないんですか。扇 非常にあるんですよ。

高橋 そしたら、それがメリットになるのではありませんか。

扇 ロンドン爆撃をやったでしょう。あれなんかで、大きく期待していたんですね。

伊藤 V2ロケット？

扇 ロケット。これで英国は参るかも知らん、と。参る寸前まで行っているというぐらい、痛切に感じましたよ。だから、ドイツの技術は技術として、大いに学ばなきゃならないことで、我々も技術を貰いに行つたんですからね。行つたんですが、当時の本音は、そういうことですな。

高橋 ドイツ側は自分たちの軍事技術を、日本の海軍が期待していたように、日本側に十分与えましたでしょうか。

扇 これはまあ、出し惜しみ、出し惜しみ、出し惜しみです（笑）。全面的に出したわけじゃないですよ。

それでね、私も軍務局の人と議論したことがあるんです。戦艦『大

和』『武蔵』は、世界一の戦艦ですからね。向こうは、そのデザインなり、威力なり、「生のもの（資料）をくれ」と言うんですよ。それが、こっちは出し惜しみなんです（笑）。なかなかやらんのです。なかなかやらないんですが、とうとう最後にやつたんです。

「やつた」というのも、こっちから向こうに請求して取りたいものがあるんだけど、ドイツはそれをなかなか出さんのですよ。一例を言いますと、高速艇のエンジンは非常なものなんです。それを、なかなか出さんのです。どうして高速艇のエンジンが欲しかったかと言うと、海軍はいよいよ悩んだ挙げ句に、最後は、いわゆる決死隊だ、と。自分を殺して敵の船を沈めるといって、いわゆる特攻兵器のアイデアが、もうあつたんです。それに対する暗々裏の研究もしていたわけです。それには、エンジンが欲しい。そのエンジンを、向こうはなかなか出さんのです。で、とうとう一番欲しがっている三菱のエンジン技師、相原と言つたかな、その技師を潜水艦に乗せて送つたんですからね。その潜水艦は、到着前に沈められましたけど……。

ヒットラーは、最後に戦艦『武蔵』『大和』の全図面を欲しかったんです。それを、こっちは最後まで出さなかった。そういう悩みを話し合つたのは、柴勝男と藤井茂と私……。『まだまだ、まだまだ』というあれですね（笑）。

高橋 ドイツは、潜水艦——Uボートの実物を日本にくれたんじゃないですか。

扇 くれました。

高橋 それを、日本の海軍は活用したんですか。

扇 活用というより、本当に完全な形で来たのは一隻ぐらいしかないんですからね。

高橋 それは、アメリカとの戦争が始まる前？

扇 前だったでしょう。

高橋 ある人の話によると、「日本の海軍の技術力では、Uボートのような潜水艦は造れない」と。そう言っている人がいるんですけど、これはどうなんですか。つまり、日本はドイツからUボートを貰っても、それに見合うだけの、いい潜水艦を造れなかったというのは、本当ですか。

扇 いや、一概に、そうとは思いません。日本は大型の潜水艦を造り、あと謀略の関係——私が「謀略綱要」を作ったんですが——で、飛行機を積める大型潜水艦とか駆逐艦とか、非常に先見的な計画をどんどん進めて行ったんです。それが、後來、みな効果を上げています。大戦中、実際に働いているんですよ、これは謀略として、私の「謀略綱要」の中に、みんなアイデアが書いてあります。日本の海軍は、そのアイデアの通りに多大な予算を注ぎ込んで、大型の駆逐艦や大型の潜水艦、途方もない高速力の出る潜水艦なんか、もうその時からどんどん造って行ったんですから、これは大変な努力ですよ。そして、その効果も上げているんです。

戦後、私は帰って来まして、やったことの経緯を調べてみました。それを確認してくれたのは、松前重義さんですよ。これは余談ですが、松前重義さんは、自分がいつも泊まっていたロサンゼルス、かなり大きなホテルの主人と昵懇になつていたんです。彼は、いつでも、そこを根城にして、アメリカのことを勉強したりした。戦後、直ぐそのホテルの社長を訪ねて行ったら、いないのですよ。ホテルは、あるんです。あるんだけど、社長はいない。苦心して探し回ったら、ずつと奥地に逃げていたんです。それを探し当てて、西海岸における、

その当時の状況を詳しく聞いて来て、私に話してくれたんです。

それによりますと、「もう、これは堪らん。いつ日本にやられるか分からん」と。ホテルを、そのまま放置したのか、売ったのか、とにかく全財産を捨てて、自分は身一つで奥地に逃げ込んでしまった。何故かと聞いたら、「冗談じゃないよ。パナマから北のほう、あるいはロサンゼルスからカナダに至るまで、沿岸は恐怖心に巻き込まれていた。どこで、何をされるか分からんからと言うので、逃げて行った」と。

扇（暢威）その話は、前回も聞きました。

伊藤 いやいよアメリカとの戦争——昭和十六年十二月八日の開戦ですが、いつからご存知でしたか。

扇 あれは、本当に決まったのは十一月ですからね。何日だったかは忘れませんでしたけども……。

伊藤 大体、その頃に？

扇 閣議決定か何かやったですよ。

高橋 調査課は、もっと早く開戦の日を知っていたんじゃないですか。

扇 知っておった。

高橋 いつ頃ですか。

扇 うーん……。あの閣議決定——連絡会議の決定ですよ。

伊藤 最高戦争指導会議かな。

扇 十一月頃だったです。

伊藤 連絡会議の決定、それは直ぐ分かるわけですね。

扇 分かる。

「蟻作戦」の遂行

伊藤 いよいよ戦争開始で、最初はハワイの真珠湾攻撃ですね。この時は、どんな感じでしたか。「やったーッ」という感じでしたか。

扇 (真珠湾奇襲を企画したのは、山本) 五十六さんですからね。だから、あの辺は微妙な所ですよ(笑)。とにかく、野村(吉三郎)大使とステイムソンとの会議の様子は、外務省の極秘電報で、みんな回って来るんですから……。

高橋 野村大使とハル國務長官ですね。

扇 刻々に、直ぐ分かるんです。何日だったかということは覚えていませんが、みんな分かるんです。

高橋 開戦の通告が遅れたことは、直ぐ知りましたか。つまり、アメリカ側からすれば、日本は裏切りのな行爲をした、と。ちゃんと通告をせずに、真珠湾を攻撃しちゃった、と。

扇 開戦の通告……。ああ、こっちの通告ですね。

高橋 そうそう、騙し討ちです。

扇 それは、後からですよ。大臣秘書官の私の後任……。私は、大臣秘書官の辞令が一旦出たんです。それを、軍務局長が蹴ったんですよ。「軍務局調査課としては、今、扇を出すわけにいかん」と言つて……。高橋 アメリカによつて、逆に、「騙し討ちをした」と宣伝されてしまったわけですけども、それについて海軍は通告が遅れたことの責

任を含めて、外務省に「本当は、どうだったのか」を調べさせるようなことはしたんですか。

扇 そこまでは知らんです。後から分かったんですが、その在米当事者が私のクラスの実松譲だった。私の代わりに、大臣秘書官になった人です。

実松譲、海兵五一期、話題になっている大臣秘書官着任は、昭和十二年十一月海軍省副官兼海相秘書官。その後、十四年十二月アメリカ駐在(プリンス頓大学院)、十五年九月アメリカ大使館付武官補佐官、十七年八月帰国・軍令部出仕、十七年九月軍令部員・三部五課(前掲『日本陸海軍総合事典』一九六―一九七頁)。

高橋 それから先生は、十七年六月十九日に「香港、海南島、マレー半島、東インド及びフィリピン方面へ出張ヲ命ズ」という命令を受けていますが、これは調査課の課員として、現地の状態を調査に行つたんでしょうか。どのぐらいの期間、そちらにいらつしやつていたんですか。

扇 十七年……。

伊藤 ちよつと、これを見てください。

高橋 「奉職履歴」には出ていないんです。

伊藤 秘密だったんだ(笑)。何か記憶がありますか？

扇 ん？(笑) 十七年と言つたら……。

伊藤 戦争が始まった次の年です。

扇 これはね、的確な記憶はないんですけれども、何もここに用事があつたわけじゃない。(私を)ドイツへ遣るということが内定していて――これは早くから決まっておつたので、その頃から、もう分かっていたんです。しかし、乗って行く大型潜水艦の手当がありました、

それを待つてなきゃならない。シンガポールで乗るということになっていたわけですから、それを待つのに、「こういうところを通って、シンガポールに行つとれ」ということでしょうか。

高橋 でも実際は、その時は行かなかったわけですね。

扇 行つたんですよ。

伊藤 でも、行つたのは、その次の年です。

扇 ああ、行きやしないんだ。行きやしないんだが、潜水艦『伊号第二九潜』を、呉で準備しておつたんです。それが、シンガポールで私を乗せて行くわけなんです。私ばかりじゃない、横井（忠雄）少将が駐独武官で行くので、それと一緒にですよ。ここへ寄りながら、どこで乗せるかということだけになるんです。

横井の駐独武官発令は昭和十五年九月二日（前掲『日本陸海軍総合事典』四三四頁）。この頃に、扇氏の渡独命令が出たということなのか。それで、横井氏の実際の渡独が遅れたのか。もともと、後段を読むと、扇氏の勘違いのようでもある。

高橋 そうすると、命令が最初に出ちゃって、実際には……。

扇 これが通つて行くところなんですな。

伊藤 でも、フィリピンのマニラとかの記憶はありますか。

扇 それは、帰りに……。

伊藤 いや、行きに……。

扇 行きは、フィリピンには……。

扇（暢威）寄らないでしょう。

扇 通らんですよ。

伊藤 だから、これはちよつと違うんじゃないですか。

扇 しかし、潜水艦が私を拾って行くんですから。

伊藤 でも、実際に（ドイツに）行かれるのは、一年後の十八年でしょう。これは、その前の年ですから……。

扇（暢威）私の記憶ですと、香港や海南島はどうか知りませんが、マレー半島や東インドという、今のマレーシアに……。

伊藤 いやいや、インドネシア。

扇（暢威）今のインドネシアと、それからフィリピンですか。ちょうど、この年に「南方視察」と称して、一カ月から二カ月行っていましたよ。その記憶があります。

伊藤 南方視察ということですね。

扇（暢威）それと、場所がちよつと違うけど、バリ島に行つたとかね。伊藤 バリ島はいいんです、東インドだから……。

扇（暢威）「バリ島とか、スマトラとかに行つた」と言っていましたから、それじゃないかと思うんですね。夏でしたから、暑い盛り……。

扇 うん、そう言えば思い出した……。

扇（暢威）溜島（たまるしま）さんとか……。

扇 それだ、それだ（笑）。溜島、それから海軍省顧問になって、後にマカッサルに司政長官で行つた岡田……。

高橋 岡田西次さんは海軍と関係ないでしょう、陸軍ですから。

問題の岡田は、内務官僚の岡田文秀のこと。昭和十七年三月海軍省顧問、十七年五月～十九年六月海軍司政長官、十七年五月～十九年一月南西方面艦隊民政府総監（在マカッサル）（前掲『日本近現代人物履歴事典』一二〇頁）。

なお、岡田西次（陸軍経理学校三〇期）は、前出のように昭和十四年九月支那派遣軍司令部付（梅機関）、十六年九月第五三師団経理部長、十七年十月支那派遣軍総司令部付（汪政権顧問）（前掲『日本陸海軍総合事典』三七

頁)。第三回聞き取り(七〇頁)において、同じ梅機関員として、「しゅっちゅう会っていた」と発言している。

溜島武雄は、NICHIGAI/WEB Serviceによると、「協定会、大日本産業報国会」とある。

扇 十七年と言ったら、開戦の翌年だな。これは海軍省顧問を連れて、もうそれまでに南方政務部として基礎的なことは、全部私がやったんですから、その出来上がりを観察に行っただけです。

伊藤 それは、よく分かります。

扇 特別機を乗りつ切りにして、ずっと行っただけです。約二カ月ぐらい掛けて……。そうだ、そうだ。それで、シンガポールやマカッサルあたりは、まだまだ品物があるんですよ。純綿とか、純毛とか、純絹とか……。コーヒー・砂糖はもちろんのこと、何ぼでも買えたんです。だから、私はコーヒー百キロ、砂糖百キロというのを、幾組か買いました。海軍省顧問の藤山愛一郎さん、同じく竹内可吉さんと一緒に行っただけです。

藤山愛一郎、大日本製糖社長等を経て昭和十七年二月海軍省顧問、当時、東京商工会議所会頭(昭和十六年三月～二十一年二月)、日本商工会議所会頭(昭和十六年四月～二十一年二月)(前掲『日本近現代人物履歴事典』四四八頁)。

竹内可吉、大正四年東京帝大卒。農商務省嘱託を経て、大正五年文官高等試験合格。特許局長官、商工次官等を経て昭和十五年一月企画院総裁。昭和十七年当時は貴族院議員(前掲『日本近現代人物履歴事典』三〇九頁)。

伊藤 あつ、そうですか。

扇 買って、東京に送ってくれ、と。東大の総長宛にコーヒー豆百キロ、砂糖百キロを送った。軍務局長の所にも、送った。そういう要所

要所の、私が世話になってる人に送りました。旅行直後、東大懷徳館で、乞われて視察結果を全教授に講話し、さらに南方対策を話し合いました。

昭和十七年当時の東京帝大総長は平賀譲(昭和十三年十二月二十日～十八年二月十七日)(前掲『日本官僚制総合事典一八六八～二〇〇〇』一二二頁)。平賀は明治三十四年東京帝大工科大学卒業後、横須賀造船廠に入ったのを振り出しに、造船中将まで昇り、昭和六年予備役編入となり、東大に移った後も海軍省、艦政本部嘱託を務めた(前掲『日本陸海軍総合事典』二二六頁)。

昭和十七年当時の海軍軍務局長は、岡敬純(海兵三九期、昭和十五年十月十五日～十九年七月十八日、(抜)として同日～八月一日)(前掲『日本陸海軍総合事典』四一〇頁)。

高橋 その時に、もうミッドウェー海戦は終わっていますね。日本海軍は大負けしますが、視察をしていた時に、その影響は何か感じられましたか。海軍の防御と、アメリカ軍の反撃ですね。反撃が、直ぐ始まるわけですから。

影山 そうそう、この後、ガダルカナルですね。

高橋 ガダルカナルに揚がって来るわけですから。

伊藤 ミッドウェーについては、海軍の人はあんまり言いたくないでしょう(笑)。

扇 ミッドウェーの戦に負けたことを知ったのは、だいぶ後ですからな。高木(惣吉)さんも、知らんですよ。高木さんが軍令部に行っただけ——彼は始終行っておったんですが、「どうもおかしい。何とも信用できない」と。作戦部の(連中が)ね。

高木惣吉は、昭和十五年十一月以来の調査課長職を十七年六月一日付で終

え、舞鶴鎮守府参謀長となっており、同年六月五日〜七日のミッドウェー海戦およびその後、軍令部に頻繁に出入り出来る状態ではなかったのではないか（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇六・四〇七頁）。

高橋 瀬島龍三さんは、直ぐ知ったと言っていますけどね。

瀬島龍三、陸士四四期、当時は参謀本部員（作戦課、昭和十四年十一月〜二〇年七月に関東軍参謀）（前掲『日本陸海軍総合事典』八一頁）。

扇 勘で、「何かおかしい」と思ったけれども、高木さん自身が、ミッドウェーで大負けしたことを知ったのは、少し後ですよ。我々は、何も知らないです。だから、私は後に軍事普及部の部員を兼ねさせられました。兼ねたのは、普及部にいい加減な発表をされては困るというわけで、「行って、派手な発表を抑えるようにせよ」と言われたわけです。行っただけで、何も深入りはしませんで、辞令だけですがね。あの当時、持て囃された軍事普及部の発表ぶりは、歯切れが良くて、有名だった。

「奉職履歴」によると、扇氏が海軍軍事普及部委員を拝命したのは昭和十三年一月八日で、ミッドウェー海戦の遙か前である。

伊藤 平出さんですか。

平出英夫、海兵四五期、昭和十一年六月イタリア大使館付武官、昭和十五年七月軍事普及部二課長・大本営報道部第三課長、十五年十一月軍務局四課長、十六年九月兼大本営報道部一課長、十八年七月軍令部三部八課長（前掲『日本陸海軍総合事典』二二六・四二二頁）。

扇 「勝った、勝った」を発表した人で、名前は忘れましたが……。

高橋 平出英夫さん。そうすると、ミッドウェーのことを知ったのは、ずっと後になってからだと言っただけですけど……。

伊藤 ずっとでもないでしょう。

扇 ずっと、後ですよ。

影山 いつ頃ですか。

高橋 昭和十八年、ドイツに行く前ですか。

伊藤 ドイツに行く前には、とっくに知っていたでしょう。

扇 それは知っていました。

高橋 日本の海軍が大負けした、と。アメリカ軍の反撃を、最初是一年後とか一年半後だと予測していたわけですけども、思ったより早い時期に、アメリカ軍の反攻作戦が始まったということで、海軍調査課では、こういう雰囲気だったんでしようか。例えば、十七年の暮れに、香港とか、そちらのほうを見て帰って来た。九月には、もうお帰りになっていると思うんですけども……。

扇 海軍の作戦が、右往左往しているんです。右往左往というよりも、むしろ馬鹿の一つ覚え……。「向こうは大艦隊を組んで、グーッと押して来る」と。たった一つですよ。それを途中で、次第にやつつけて、日本の近海に来た時には、もう向こうは細っている、と。士気も落ちている、と。そういうふうに行って行くような作戦を「漸減作戦」と称して、この一つ覚えですよ。だから、私が二艦隊参謀時代に、末次さんが言っておられました。——馬鹿の一つ覚えで、大学校では漸減作戦、それ一本である、と。もちろん、そのやり方はいろいろある。

あるけれども、向こうは大艦隊の大グループを持って来て、決戦に臨むというアイデアは、もう植え付けられておったんですな。それ以外の作戦は考えていなかった。ところが、そうではなくて、アメリカは航空兵力を中心にして、一つずつ島を潰して来る。そこへ、直ぐ前進基地を造って、どんどん風潰しに攻めて来るんだというような構想は、練られておらんです。

高橋 でも、この間の話では、海南島にサトウキビを植えておいて、後で簡単に航空基地にする、と。そうすると、南洋の島々でも航空基地を造って防備をするということは、考えていらつしやったわけですよ。

扇 それは、考えておりました。考えておりましたが——速記録に書き込んでおいたんですが——南洋の諸島は、南方委任統治領と言うんですよね。これを、ドイツから譲り受ける時の国際条約には、「南方委任統治領には、防衛軍事施設を造つてはならぬ」という条文が入っているんですよ。国際条約に署名しているんですよ。だから、表向きは何にも出来ないんです。

だから、裏をかく意味で、必要な島には、後で飛行場に出来るように、大きなサトウキビ畑を南洋興発に作らせる。それ以上のことは出来ないんです。地均しとか、山の高木を取っておくとかということは、サトウキビを作るということで、誤魔化してやって来たわけですね。そういう事情がありまして、この「漸減作戦」は、向こうが一塊になつて、大艦隊でグッと押して来るという想定が中心になつている。末次さんが、「それ一本じゃいかんのだ」と言っていた。

伊藤 日本の船がどんどん沈められて、南方との行き来がだんだん出来なくなつて来るでしょう。その問題について、先生が木造船のことを考えておられたのは、いつ頃ですか。

扇 これは、いつ頃と言われると……。このアイデアは、長崎造船所の川南豊作社長が持つて来たんですよ。この調子で行つたら、大型輸送船で油をいっぱい積んで来ても、途中で、みんなこつそりやられてしまう。それでは駄目だから、蟻が物を運ぶのと同じように、小型の船を使った「蟻作戦」でやろう、と。ドラム缶へ油を詰めて、何百隻

もの船で支那の沿岸伝いに運ぶより他ない、と。そういうアイデアを、川南豊作さんが私の所に持つて来たんですよ。

川南豊作、造船業者。東洋製缶株式会社勤務を経て、昭和十一年九月川南工業株式会社社長、十七年七月（川南工業）香焼島造船所が海軍管理工場指定を受け、十九年四月海軍省囑託参与（前掲『日本近現代人物履歴事典』一七三頁）。香焼島は長崎県にあり、戦後の川南工業倒産後、三菱重工長崎造船所の一部となる。扇氏の発言は、そのことを指すと推測される。

全く、そうなんですよ。やろうということになつて、それを始めたんです。これを「乙造船計画」と称した。もう一つ、「甲造船計画」も、同時に進めました。これも前線―内地間の、補給輸送の危険分散のために、鉄船の多数急造を策したもので、両計画を一括して、私が東條（英機）総理大臣の所に持つて行つて、「こうやらなきやいかん。これは、海軍挙げての政策として進めてくれ」と言つて、その説明書を渡して、東條を口説いたんですよ。東條さんも、それをやろうということになつて、閣議を通した。それを造る時に、本当に力になつてくれたのは松下幸之助さんです。松下幸之助さんと井植歳男さんが、大いに知恵を貸してくれました。

それで、藤原銀次郎さんとも相談して、国有林をどんどん伐り出して、木造船を一日に三隻造るという計画を立てた。私が渡欧するまでに、一日に一隻完成のところまで行きました。造船所は秋田と、青森にもあったかな。それから、日本海の鳥取県の湖の近く……。

昭和十七年五月十二日、重要物資輸送の便を図るため、鋼船および木造船について戦時標準船型を定め、その大量建造を図るべく、「計画造船確保に関する件」が閣議決定され、さらに「乙造船計画」に関しては、翌十八年四月一日、乙造船計画船舶製造特別価格報奨制度が実施され、基準生産期

間を短縮して製造したものに對して、報奨金を出すこととした。また、これに關し寺島健通信大臣が、同年四月十四日、地方長官會議で協力を要請し、計画は本格化した（橋本徳寿『日本木造船史話』長谷川書房、一九五二年、三〇二—三〇六、三二二—三二三頁）。

造船所の位置として、かつて扇氏は、「九州の若松、四国の今治、山口県の下関、それから木材資源の多い秋田県の能代などに国營の造船所が作られ」と書いている（『海軍省調査課のころ』「扇一登氏関係文書」一〇—九二、欄外に「松前文庫登載」と朱書きあり）。

松下幸之助は、当時、松下電器製作所社長。

井植歳男については、第三回聞き取り（八〇頁）の註を参照。

藤原銀次郎については、第三回聞き取り（七九—八〇頁）の註を参照。

なお、造船計画などの「物動」に關することについては、松前重義氏がまとめる実働グループが大いに貢献したという。グループは大きく二段階に分かれており、まずOBクラスは「藤原銀次郎さんを顧問として、藤山愛一郎、竹内可吉（前商工次官、勅撰貴族院議員）、山崎巖（内務次官）らが中心で、他に、小松製作所の河合良成、日産自動車の浅原さん、北辰電機の清水莊平さんらがいました。また当時は貴族院議員もしていた一匹狼の鮎川義介さんも別途に含まれていました。次に実働クラスですが、この一つが実施部隊として、軍司令官として、サンヨー電氣の井植歳男社長や、ナショナルの松下幸之助社長、小松製作所の河合良成さんがおられました。彼らの指揮のもとに、たとえば鋼鉄船とか木造船作りの実際の作業がなされる訳です。実働クラスの第二が、佐々木卓夫さん、東条元さん、大田慶蔵さん、柴田栄さん、野村進行さんらの技術者グループでありました。このグループが、実際の製作を作るんです。勿論、中心は松前さんですが、グループに引っぱってくる段階では、それぞれの上司には、内容を説明し

ませんでした」とある（前掲「海軍省調査課のころ」）。

影山 松江ですか。

扇（暢威）米子？

扇 それから、北九州市の八幡で、その四つぐらい造船所を造りまして、どんどこそこへ山の木を伐り出して、供給する。山の伐り出しは主として藤原銀次郎さんがやって下さった。他方、内燃機などは松下幸之助、井植歳男、清水莊平、浅原源七、河合良成ほか、有力社長さんの指導力によつて、私の渡欧時には一日に一隻完成するまでに進みました。しかし、アメリカの攻撃も激しくなつて、「蟻作戦」は実効が上がらずに終わりました。他方、鉄船の「甲造船計画」も同様で、皆さんの、そういう支援により急ピッチで進み、二千数トンくらいの鉄船として、戦後、近海輸送に不可欠の実効を上げました。

清水莊平、北辰電機製作所の創立者。同社は、精密温度計の国産化を目指して、一九一二年に創設された、我が国最初の工業計測器製造会社。船用ジャイロコンパスなどの航海機器、航空機用精密機器などの生産にも着手し、第二次世界大戦中には関連会社を含めて、従業員二万余の大会社に発展した。戦後も、多くの国産計測制御技術の工業化に成功し、一九八三年には横河電機製作所と合併して、現在は北辰工業株式会社となっている（莊平の息子・清水正博氏（北辰工業株式会社会長）に対する早稲田大学名誉博士号贈呈（一九九八年四月）の際の顕彰状の内容より抜粋——<http://www.waseda.ac.jp/kyomubu/gaku98/meiyo/hakushi.html>）。

浅原源七については、第三回聞き取り（七九頁）の註を参照。

河合良成については、第三回聞き取り（七九頁）の註を参照。昭和十八年木造船建造本部長。

伊藤 南方政務部と言っても、南方で海軍が管轄できる地域というの

は限られていますよね。

扇 そうですよ。

伊藤 南方政策全体ではないわけですね。海軍の占領地は、どこでしたか。セレベス島とか？

高橋 限られていますよね。

扇 待つてください。……マカッサルに民政部を置きますね。

伊藤 そうですね。主な所は大体、陸軍が取ったでしょう。

扇 そうですよ、主なところは陸軍で……。海軍は、マカッサルだけです。

海軍主担任地域の民政部としては、昭和十七年初頭に、セレベス（在マカッサル）、ボルネオ（在バリクパパン）、セラム（在アンボン）、ニューブリテン（在ラバウル）、グアムが、のちアンダマンが置かれ、同年四月にボルネオ、セレベス、セラム各民政部を統括する南西方面艦隊海軍民政府がマカッサルに設置された。また、ニューギニアについては、やはり同年四月に西部のマノクワリを中心に軍政を開始し、同年十月ニューギニア民政府を置いた。このほか海南島も、昭和十六年四月に海南警備府の設置とともに、軍政を担当する海南島海軍特務部が海口に置かれた（前掲『日本官僚制総合事典 一八六八—二〇〇〇』一四三—一四四頁）。

高橋 それからもう一つ、日本の輸送船——兵員を輸送する船が次々と沈められますね。沈められた時に、調査課で「暗号が解読されているんではなからうか」という疑問は起こりませんでしたか。何故、こんなに簡単に次々に沈められちゃうんだらう、と。

扇 暗号の解読は、いわゆる思想戦という項目で、懇談会の議題にすることはあるんですよ。話が出ることはあるんですが、現実には擱まれているということは分からなかったですね。それを本当に知ったのは、

山本五十六さんが墜された頃じゃないでしょうか。本当に暗号が擱まれているということを知ったのは……。

山本五十六がソロモン方面で前線視察中、アメリカ軍機に邀撃されたのは、昭和十八年四月十八日（前掲『日本近現代人名辞典』一一—一三頁）。

高橋 そうすると、山本五十六元帥が墜された時には、直ぐ、「あつ、これはアメリカ側が暗号を読んでいるんじゃないか」という疑問が起こったんですか。

扇 それは、起こりましたね。出会い頭に、バツとやられたんですから。

高橋 それに対して、海軍側としては何かやっただんですか。

扇 もちろん、やっただでしょうが、私は関知しておりません。その問題については……。

高橋 それは、調査課の仕事ではないと思うんですけれども……。

扇 というのは、暗号については海軍は大丈夫だということを、平生から聞かされているんです。それは、暗号機械を説明した通信課の課長から、「この暗号機は絶対だ。解読されることはない」という強い説明を受けていましたから。私のクラスメートに、暗号の専門屋がいたんです。

高橋 どなたですか。

扇 北海道の……。

扇（暢威）同期の人ですか。

扇 同期の今泉肇——彼は暗号の専門家なんだ。彼から、よく聞いておったんです。その暗号機を造り出した男ですよ。私の前にドイツに、「お前、この暗号機を造ったから、ご褒美にヨーロッパを一回りして来い」と言われた男なんですよ。とうとう行かなかったけど……

(笑)。親友です。家族も、みんな昵懇です。アメリカは我が海軍の沈没潜水艦から暗号機を引き揚げたということを、戦後聞いたように思います。

今泉肇、戦後、昭和三十年から四期、北海道留辺蘂町議を務め、四十四年から二年間議長を務めた人物、元海軍大佐のことか (NICHIGAI/WEB Service)。

高橋 それからもう一点、陸軍の「絶対国防圏」構想というのは、どう判断していたんでしょうか。

扇 分からんです、あれは。どう考えたって……。

高橋 そんなことは、あり得ない？

扇 しかし、陸軍でもやる人はやっただんですよ。というのも、(前回の速記録に) 書き込んでおきましたが、風船を飛ばして、アメリカのどこへでも、所構わず落とすというアイデアは、陸軍が考えた謀略の一つです。

それでね、私も「謀略綱要」を書く時に、これを海軍でもやると言っ、実験したんですよ。陸軍も、実験をした。陸軍は、青島から風船を上げるんです。そうすると、それが西風に押されて、日本の上空を通り、ずつと飛んで行って、アメリカのどこへ落ちるか分からん。そういう爆弾を落とすんです。それを陸軍が着想して、実験したんです。それを私も、海軍もやろうと言っ、「謀略綱要」の中に書き込んだんです。それで、海軍でも実験しました。

伊藤 どこから飛ばしたんですか。

扇 海軍は、たぶん青島だったと思います。

伊藤 やっぱ青島ですか。

扇 青島で上げて、日本の上空を通るのを、ずつと追跡するんです。

北海道の東沖を経て、ハワイの北を通り、アメリカ西岸へ……。あと、爆弾をどこへ落とすかは風まかせです。開戦後、内陸で大山火事を起こしたこともありました。

高橋 話を変えてよろしいですか。十七年(「奉職履歴」では十八年)二月に「工務局ノ事務ヲ嘱託ス」というお仕事なんですけれども、これはどういう仕事ですか？

扇 これはね、何でもないんですよ。松前さんが逓信省の工務局長だったんです。それで、私の家に電話を付けて上げますよ、と。それには工務局長の嘱託になって、「事務ヲ嘱託ス」との辞令が必要だ(笑)。局長ですから、翌日直ぐ付いた。それが、これ(今の電話)ですよ(笑)。

伊藤 ハッハッハ、ああ驚いた。

ドイツ駐在

高橋 次は、十八年十月のドイツ駐在ですね。「ドイツニ駐在ヲ命ズ」というのは、武官補佐官という身分ですね。

扇 いや、まだ補佐官にはなっていないです。溪口(たにぐち)という前任者は、クラスメートですよ。彼が行っているんですが、ドイツに行ってから、もう五年以上になる。代わらなきやいさんのだけど、代わる方法がないんです。交通がない。それで、まず「ドイツ駐在ヲ命ズ」というような辞令が出るわけだけど、「何をやれ」という命課はないんです。それで、行つて一年ぐらひは、ドイツ語の勉強をするん

ですよ。

溪口泰磨、海兵五一期、昭十五年五月一日終戦・駐独武官補佐官。因みに、扇氏は昭和十九年七月二十一日～二十年四月一日、同職（前掲『日本陸海軍総合事典』四三七頁）。

高橋 でも、この時期に、ずいぶんのんびりとした話ですね。平和時でしたら、そういうやり方をするんですが、この時期に一年間ドイツ語を勉強して、と。ドイツが本当に大変な時に……。

扇 まあ、それが仕来りですよ。行く時には、命課はないんです。「ドイツへ行け」という命令だけです。その前から「フランスへ行かせる」という計画があつて、私が南京にいる時に承つたことがあるんです。前の年ですな。

高橋 この命令を貰つた時、どういう印象でしたか。ドイツに行くことになって、びっくりしましたか。しかも、こんな時期に……。

扇 その頃には、もう交代しなきゃいかん、と。

高橋 でも、ドイツは負けるかも知れない。

扇 ドイツとは大きな関係があるので、「フランスでなく、ドイツに（行くことになる）から」ということでしたよ。

高橋 でも、先生はドイツ語はやっていらつしやらなかったわけでしょう。

扇 ドイツ語は、私はやっていません。だから、半年の間に、ドイツ語を独学で……。〈ドイツ語の〉解説や講義録みたいなもので、初步を電車の中で勉強していました。

伊藤 家庭教師も付けないで？

扇 その当時は、付かない。ただ、読むだけ。だから、物にはならんですよ。行つてから、一所懸命やりました。ハイデルベルクの大学に

四カ月行つて、各国から来ている他の外人と一緒に……。大学にも行くし、家庭教師にも付くし、私の家に来て教えてくれる人もいる。もう一人（教えてくれた人）は、ドイツの陸軍士官ですが、〈ドイツの〉「大本営」発表とか新聞の記事とかを読む力を付けてくれた。それぞれ専門的に、夜・昼、ずいぶん勉強しましたよ。

これら一切のことを世話し、指導し、教示してくださったのは、ハイデルベルク大学の岩倉具實教授の御一家で、戦後、帰国した後も交流は続き、一生忘れられぬ関係となりました。たつた四カ月で、ベルリンに帰つても、「大本営」に何とか一人でも行けるようになりました。それ（語学力）は、とてもとても不十分ですよ。不十分ですけども、まあまあというところです。それは、一所懸命やりましたね。

ハイデルベルクに半年ぐらいいるつもりで行つたんですが、ドイツは、どんどん戦をしているんです。それで、ハイデルベルクの近くのマンハイムに、毎晩のごとく空襲が来るんです。だから、真剣ですよ。一所懸命やりましたよ。まあまあ、何とか最小限度、一人で情報を取りに行けるようになったんですが、その時にヒトラーがあのこの部屋で爆弾でやられたんですよ。生き残つたんですが、それをハイデルベルクで聞いたんです。そうしたら、直ぐベルリンから横井武官が……。いや、その前に帰つたんですね。あと、武官が一時いなかったですね。私のクラスメートの溪口が武官代理でやっていました。「直ぐにベルリンに帰れ」と、阿部（勝雄）中將からの指示でした。阿部中將は三國軍事委員会の委員長です。それで大急ぎで帰つて、阿部中將の補佐官になりました。

岩倉具實教授は、岩倉具視の孫で、戦後は同志社大学で教鞭を取った。

ここで言うヒトラー暗殺計画は、一九四四年七月二十日、ドイツ陸軍がラ

シュテンブルクの「大本営」において、その爆弾による暗殺を企てたもの。

その頃の在ドイツ海軍武官としては、横井忠雄（海兵四三期、昭和十五年九月二日～十八年十二月二十八日）、小島秀雄（海兵四四期、昭和十八年九月一日～終戦）がいるが、横井は十八年九月に帰朝命令を受け、十二月に帰朝出仕、小島は同年十二月に出発するも、十九年六月に兼フランス大使館付武官となっている。また、海軍武官補佐官はドイツに溪口泰鷹がいたが、フランスにはいなかったもので、当時、小島はフランスにいたというところか（前掲『日本陸海軍総合事典』一八九、二四四、四三四～四三七頁）。

阿部勝雄中将は海兵四〇期、昭和十五年十一月から三国同盟軍事専門委員としてドイツ駐在、十九年九月兼イタリア大使館付武官、二十年五月スウェーデン移駐（前掲『日本陸海軍総合事典』一六一頁）。

伊藤 大使館の武官補佐官ではなくて？

扇 両方兼ねて……。主としては、阿部中将の補佐官です。溪口は、主として大使館付武官の補佐官、私は阿部中将の補佐官。しかし、両方兼ねるのです。

伊藤 潜水艦でドイツまで行かれる時の話は、以前お聞きしましたから、これは飛ばして、先のほうに行きましょう。

高橋 ドイツにお着きになるのは、十九年の何月でしたか？

扇 三カ月かかったんですから、二月二十七日かな。

影山 三月十一日に、フランスのロリアン港に着いておられますね。

伊藤 そこから、どうやってベルリンまで行かれたわけですか。

扇 ロリアンに三日ぐらいいました。そこはドイツの占領地で、フランスの海岸です。そこらのドイツ軍防衛戦線を視察しまして、夜汽車でパリまで出ました。それから、ベルリンに行きました。

当時の日記「日記 No.2」（「扇一登氏関係文書」三二二四）によれば、三

月十一日ロリアン着で、翌日には出発している。

伊藤 パリは、寄っただけですか。

扇 うん、パリは三日か四日ですよ。三日ぐらいじゃないかと思えます。私は、ヨーロッパに行くのは初めてですから、詳しく日記を書いてたんですよ。それを見れば、細かいことが分かります。

前掲「日記 No.2」によれば、三月十三日パリ着で、十五日発。

伊藤 日記は、その時だけ付けたんですか。

扇 いや、日記はずっと書いています。

伊藤 若い時から？

扇 子どもの時から書いています。

伊藤 残っていますか。

扇 持っていたが、駄目なんだ。私の留守宅が、原爆の時にやられて……。

伊藤 確か、この時の日記は残っているんじゃないですか。

扇 原爆の後、私の甥で、本家の後継ぎが「アメリカ軍が入って来る」と言つて、私の物を全部焼いたのです。惜しいことをしましたよ。こんなにあるんですよ。もう小学生の時から、日記を書いているんですから（笑）。

ドイツへの出発からデンマーク時代（昭和十八年十一月十八日～昭和二十一年一月十九日）の「日記」は、No.1からNo.7まで全七冊が現存（「扇一登氏関係文書」三一～二四、二八および三〇）。デンマーク出国の際、現地の人に預け、戦後返却してもらったもの。

伊藤 惜しいねえ。

扇 全部焼いた。それから、私は絵が好きでね。祖父さんの絵とか、親父の絵とかを描いているんですよ。それから、私の小学校の校長先

生のお嬢さんに頼まれて、描いて、ほんと自分でもびつくりするほどよく似た、いい絵なんです。全部、焼いてしまった。

第一回聞き取り（二三頁）では、小学校の校長先生夫妻から、夭折した娘さんの絵を描いてくれるよう頼まれたとある。

扇（和子） 日記は、割に最近まで付けていましたね。十年ぐらい前まで……。

扇（暢威） 一年ぐらい前までだろう？

扇 海軍兵学校時代の日記から教科書類まで、全部焼いたんだ。

現在のところ、海軍兵学校卒業直後の遠洋航海中に記した「遠航記事」

（「扇一登氏関係文書」三―三三）と、断片的ではあるが一九二七年から一

九三五年までを記した「原稿ノート 1927.4.10 Shanghai」（同三―一）

の存在を確認している。

伊藤 じゃあ、戦後の日記は残っているわけですね。

扇 戦後の日記は残っています。ドイツに行つてからの日記も残っています。あなた、ご覧に入れたんじゃないですか？

伊藤 いやいや……。

扇 いつでもお見せしますよ。一部、潜水艦の航路が分かるように、毎日書いてあるんです。それを戦後、墨で消したんです。アメリカ軍に取られたらいけないから（笑）。あの行動は秘密だと思つて、消したんだけど、よく見れば前の墨が、きれいに分かるんです（笑）。それを地図にしたのが残っているし、いろいろな出版物や書籍に出ている地図も、大本は私の日記です。あれ、間違いはないんです。いつでもご覧にいられます。

「扇一登氏関係文書」三―一―三〇が該当。

高橋 ベルリンに着いて、大使館に行つたと思いますが、その頃の日

本の大使館、あるいは武官府というのが、別にあつたんですね。

扇 別の建物でした。

高橋 近い所にあつたんですね。

扇 近い所にあつた。

高橋 その当時の武官の、戦争についての見通しとか雰囲気は、どんなものでしたか。

扇 これはね、ドイツの「大本営」とか海軍省と言っても、我々に接する人は決まっているんです。フォン・クロージックという人がおつて、それは正規の士官ですよ。フォンと言うんだから、昔の貴族ですよ。それが一人。それは、表向きだけです。それから、もう一人は日本語の上手な、海軍の特務士官みたいな人です。彼とは毎日のごく会っていました。

それで、私は行つて間もなく大島（浩）大使に……。大使以下、内田という、後のベルリンの大使になる人とか、後に文部大臣をやった樋口という三等書記官がおりました。

高橋 内田藤雄さんは、いましたね。

扇 内田？ いました。後に大使になった。

高橋 大使になっています。

内田藤雄、昭和五年九月外交官試験合格、同年十月行政科試験合格、六年三月東京帝大法学部卒。十三年七月大使館三等書記官兼領事・中華民國・南京、十五年二月東亜局一課、十五年十二月大使館三等書記官・独国、十七年六月二等書記官、十九年七月一等書記官、二十一年四月依願免本官。なお、戦後は法務事務官・入国管理局長、外務省・移住局長、官房長、特命全権大使・オーストリア等を務めた後、昭和四十年四月―四十五年一月ドイツ大使を務める。四十五年四月退官（前掲『日本近現代人物履歴事

典』八四頁)。

「後に文部大臣をやった樋口」については確認できない。扇氏の錯誤か。

扇 行つて、私は陸軍の横暴なやり方をぶちまけました。全部言つた。その代わり、行く前までに、私は「物動」(物資動員)計画の数字を、鉄、アルミ、石炭、石油、レア・メタル、タンクステン、モリブデンというような、なくちゃならんものの数字を、全部暗記した。少なくとも三十種類ぐらいの数字を、全部覚えて行きました。これを、途中で忘れちゃならんと思って……(笑)。書いてあると、潜水艦が沈んだ時に敵側に取られるから。だから、こいつは書くわけにいかん。書いてないから、覚えなきゃならん。それを、みんな暗記したんです。行く前から暗記して、ずっと毎日思い出しながら行つて、それをみんなぶつめたですよ。「陸軍の横暴で、こんな馬鹿戦争をやっているんだ」ということを、みんなぶつめた。陸軍武官も聞いているんですよ。それは、東京の最新知識ですからね。私は、担当者だったんだから。だから、覚えて行つて、陸軍武官室に行つても、みんな言いました。

高橋 陸軍武官は、小松光彦ですね。

扇 陸軍武官は、小松少将だったでしょう。よく陸軍武官の所に行つて……。旧知の甲谷(悦雄)さんもおりました。全員に、みんなぶつめた。こうなんだ。もう負けるんだ。だから、その手を考えなきゃいかん」と。沼田というフランスの大使館付武官もおりましたが、彼なんかに、みんな言つたんです。だから、そういう連中も、みんな非常に深刻に考えるようになったと思います。しかし、そういう連中は、みんな東京から退けられて、追い出されている連中ですから。沼田さんなんかも、そう。それから、トルコにおつた陸軍武官——彼は一部和平工作をやろうとしましたよ。そういう連中は、みんな日本

の中央から追い出されて、一遍帰つたつて、直ぐまた出される。それが、陸軍の内情です。参謀本部は影佐(禎昭)が……。

小松光彦、陸士二九期、昭和十五年十一月兵器本廠付(日独伊三国混合委員会専門委員随員)、昭和十六年一月東京発、十六年二月ドイツ大使館付武官補佐官、十八年一月ドイツ大使館付武官(前掲『日本陸海軍総合事典』五九頁)。

甲谷悦雄、陸士三六期、昭和十八年三月ドイツ派遣、十九年十一月ドイツ大使館付武官補佐官(前掲『日本陸海軍総合事典』六一頁)。扇氏との接点は、どこか? 遡つて昭和十二年三月ロシア駐在のまま参謀本部員となり、十二年六月帰朝、十五年八月関東軍参謀。あるいは昭和十七年一月大本营一部十五課長(十八年三月)の折か。

沼田英治(前出)、陸士二九期、昭和十四年七月一日から終戦までフランス大使館付武官(前掲『日本陸海軍総合事典』三七〇頁)。

在トルコの陸軍武官は、昭和十三年二月十日から終戦まで立石方亮、陸士三一期(前掲『日本陸海軍総合事典』三七〇頁)。

高橋 そうしたことをぶちまけたら、大島大使は何か言いましたか。

扇 大島さんは、黙っている。黙っているが、他の参事官とか書記官たちが質問するですよ。質問するけれども、構うことはないんだ。日本は、戦争を続ける力はないんだ、と。

伊藤 もう憲兵はいませんか(笑)。

扇 その国力の生の知識があるのは、松前さんですからね。松前さんは、自分が文官的な技術者で、各省にいる技師・技手を全部、大元締めとしてギュツと握っている。そういう連中が松前さんを頼りにして、全部、本当のことを言うわけです。その企画院の頭は、陸軍士官ですから……。

伊藤 鈴木貞一じゃないですか。

鈴木貞一、陸士二二期、昭和十六年四月～十八年十月 国務省・企画院総裁

（前掲『日本陸海軍総合事典』八〇頁）。

扇 その陸軍少将に、技師・技手が幾ら真実を言うたって、総理の所には持つて行かないんです。陸軍式に、これを何倍かに水増しして持つて行く。その水増しした数字を、東條が陛下に言上する。陛下は、これを嘘だと思いいになったかならんか、分かりません。分からないけれども、一遍「それは嘘じゃないか」と反問されたことがあるとの話を聞いたこともありました。高松宮様は、「生」（の情報）を、みんな知っておられるんです。高松宮様と秩父宮様とは一緒じゃなくて、別々に（陛下と）会食をされることが、月に一回か二回あるんです。高松宮様は陛下に、みな「生」（の情報）を申し上げていますが、それを、「お前、これは違わないか」ということは、陛下は一切お言いにならないかった。西園寺さんの苦言の経緯もあつたと思っていました。

企画院総裁時代の鈴木貞一は、予備役編入の中将であり、扇氏の「陸軍少将」は勘違い（前掲『日本陸海軍総合事典』八〇頁）。

伊藤 次回は、和平という問題から始めましょう。

扇（暢威） 研究懇談会の役割が、いま少しピリツとしませんが、よろしいんでしょうか。

伊藤 大体分かりますから、大丈夫です。

影山 研究会の文官の皆さんが、いつまで機能したのか。戦争中も、そういった会が続けられたのかどうか……。

伊藤 いやいや、それは、この次にしましょう。

高橋 どうも有難うございました。

（以上）

扇 一 登

オーラルヒストリー

第5回

[2001 年 4 月 12 日 14:00～16:30]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

矢部貞治宛の書翰

伊藤 珍しいものを、ご覧に入れます。

扇 ああ……。

伊藤 これは、矢部貞治さんに宛てた扇さんの手紙です。今、ご覧になつてゐる長い手紙（史料一）は、たぶん昭和十六、七年のもので、ね。その他に葉書が三通ありまして、終わりから二番目は「ただいま帰朝いたしました」と（史料三）。これは、昭和二十一年四月です。それから、この前も、ちよつとお話しになつたかと思いますが、材木の仕事で、田沢湖だったかの旅館から矢部さんに宛てて手紙を書いてゐます。これは、講演に来て貰いたいという依頼状（史料四）です。

矢部貞治については、第三回聞き取り（七八頁）の註を参照。

史料一 （年欠）三月十七日付 矢部貞治宛の扇中佐書簡（封筒に「海軍省調査課」の印あり）（「矢部貞治関係文書」一三―二四）

拝啓

御速達有難く拝誦仕り候。

御多忙の御様子拝察申上候。

先日其の旨御聞き申候もそれ程とは存ぜざりし為失礼致し候。

用事と申すも大したることに無之、綜合研究会の例の東亜新秩序論が相当難産を極め居るに付、先日のお会合に於て三枝先生に重ねて御依頼申上候も、あれはあれとして真に内容ある東亜新秩序の理念確立を必要と認めらるゝに付、矢部先生に於かれて別に代案を御考へ置き候

願はれまじくやを御相談申上度考へたる次第に御座候。世界新秩序との関係もあり、矢部先生の同じ頭で組立てゝ戴くに非れば、結局所期の構想述作が出来ざるやに考ふる次第に御座候。高木課長よりの示唆もあり、右の点に付御考へ置き下され度、入学試験終了後、御出を願へれば結構に御座候。御多忙中いろいろ御邪魔致し相済ま不申候へども、御許し下され度候。先は右御返事まで、如斯に御座候。

三月十七日

扇中佐

敬具

矢部教授殿

史料二 昭和十七年八月二十四日付消印 矢部貞治宛（台北草山大屯ホテル）扇一登葉書（「矢部貞治関係文書」五七―二二九）

拝啓

南方旅行の準備待機、乃至は中継基地として台北、就中草山の持つ味は、一応綜合研究会の議題となり得るかと思存します。

福岡で一泊、台北で三泊などゝいふ経過は現実の事態に即せざること遠しとして御叱りを受けること必然でありまして、極くつましやかにやつて居りましたが、それにしても解放された身軽さと新鮮なものとの配列配合は一応肯定して戴き度いといふ様な気が致します。向暑の折柄、切に御自愛を祈ります。

史料三 （昭和二十一年）四月二日付消印 矢部貞治宛て扇一登葉書（「矢部貞治関係文書」五四―五五）

此の度帰朝仕り候。洵に感慨無量に御座候。其の後は引続き御壮健にて重大変局に御尽粹の御模様、異郷にありて遙に御想像申上げ居りたる次第にて、直ぐにも御拝眉の上御話承り度存じ候も、唯取敢へず御通知申上度次第に御座候。表記の所に居住致し候故、若し先生が従前

の所に御住ひならば―戦災の御模様は如何に候や、切に其の最小なりしことを祈り居り候―最近の機会に御会ひ致し度存念罷在候。何でも連絡方法等御示し下され度懇願申上候。小生留守宅罹災せしも家族異状無之、是非一度拙宅に御出を願ひ致し度、樂に致し居り候。先は取急ぎ右御挨拶申上度、如斯に御座候。

敬具

史料四 昭和二十七年二月二十四日付 矢部貞治宛て扇一登葉書（「矢部貞治関係文書」五七―二二八）

拝啓

久しく御無沙汰申上げて居りますが御変り御座いませんか。長い御旅行にて御疲れのことゝ拝察申上げます。私は正月以来三度目の秋田旅行中であります。昨日柴田、野村、水野の諸氏と営林局で会同致しました。その際、営林局側よりの御願ひとして三月十一日管下署長会議の節、前回の様に御講演を御願ひ致し度、絶つての懇願であります。その連絡、御願ひを私に依頼されましたので御多忙中甚だ恐縮でございますが、どうぞ予めレザープ下さいますよう懇願申上げます。日程は三月九日夜上野発、十日早朝上ノ山着（水野氏出迎へ）、十一日秋田行（講演御願ひ）といふ風に御願ひ申上げます。私も御伴をさせていただきます。何れ帰京後参上申上げますが、とり急ぎ右御願ひ申上げます。

高橋 矢部さんとは、昭和十五年以前からお知り合いだったんですか。
伊藤 そのようですね。それ（史料一）は懇談会の話みたいですよ。

昭和十七年ぐらいですね。東亜新秩序の問題で、作文の話です。ちょうど、私の大学で「矢部文書」を全部いただきましたので、この間、整理を終わって「書翰の部」だけの目録を作りました。見ていたら、ふっと扇さんの名前があったので、コピーをして持って来たんです。

扇 台北草山大屯ホテル……。草山は始終行っていました。藤山愛一郎さんの別荘ですよ。

伊藤 それです、それです。何と言うホテルですか。

扇 「大屯ホテル」と書いてある。

伊藤 これ（史料二）が十七年、この前（聞き取り第四回、九八―九九頁参照）、「記憶がない」とおっしゃっていた南方視察に行く途中なんです。

扇 「……乃至は中継基地としても……草山の……」。

伊藤 「就中草山の持つ味は、一応総合研究会の議題となり得る……」と。何かと言うと、「綜合会」が多いんですよ。

扇 「……福岡で一泊、台北で三泊などという経過は現実の事態に」合わせ……。

伊藤 これも面白いですけど、この手紙（史料三）ですね。

扇 「此の度、帰朝仕り候、洵に感慨無量に御座候。其の後は引続き御壮健にて……異郷にありて遙に御想像申上げて居りたる次第にて、直ぐにでも御拝眉の上御話承り度存じ候も、唯取敢えず御通知申上度次第に御座候」。

伊藤 これは、ヨーロッパから帰って来られた時ですか。

扇 そうですね。帰りにあそこに寄っていますから。あそこで日本の船に乗り換えるんです。

高橋 台北ですか。

伊藤 いや、あの時は、どこで乗り換えましたか？

扇 あそこへ、日本から迎えが来ていたんです。それに乗り換えた。
高橋 アフリカのほうですか。

伊藤 いや、どこまで来たんですか。

扇（暢威）この葉書は、「（杉並区）下高井戸四一九九六」から出していますね。帰ったのが、（昭和二十一年）三月でしょう。これは、四月ですからね。

扇 ああ、家に帰ってから書いたんだ。

扇（暢威）帰ったのは、三月ですよ。それは四月の手紙ですから、（杉並区）浜田山から出しているんですよ。

下高井戸四一九九六は、町名変更により浜田山四丁目となる。

伊藤 ここですね（笑）。

扇 これ（台北・大屯ホテル）は、いつも愛一郎さんと一緒に行っていた。それと、台北大学の哲学の後藤先生が、私の中学校の受け持ちの恩師なんです。その人と、そこで会うことが多かったし、私の中学校の学友が台北の総督府に二人いたんです。非常に親しい奴がね。だから、ここでみんなと会っていたんです。

後藤俊瑞（明治二十六年三月兵庫生まれ、大正十二年東京帝大文学部支那哲学科卒業後、台北帝大教授）のことか。

伊藤 ホテルの名前は、「大屯」と言っんですか。

扇 そうでしょうね。とにかく愛一郎さんが、あそこに別荘を持っているんです。ホテルも持っているし、愛一郎さんは大きな台湾製糖会社の社長ですから……。

藤山愛一郎は昭和九年から二十年まで（また戦後も）大日本製糖社長。当時、同社は、明治製糖、台湾製糖とともに寡占体制を築いており、藤山は台湾製糖の社長を務めたことはない。

なお、昭和十六年六月、大日本製糖は、本社を台北市に移転している（『索引 政治経済大年表 上巻 年表編』東洋経済新報社、昭和四十六年六月、一二五〇頁）。藤山は、昭和十一年から二十一年日本糖業連合会会長、昭和

十五年日本砂糖統制株式会社社長（前掲『日本近現代人物履歴事典』四四八頁）。

伊藤 だから、台湾なんですね。

扇 あそこが本拠ですよ。だから、何度も行っているしね。

伊藤 それが昭和十七年ですから、この前お話しの方南視察の途中でですね。

扇 だから、こんがらがってきます（笑）。日本から迎えに来た船の中で、初めて日本製の味噌汁を飲んだ感慨が残っています。

伊藤 それは、日本から迎えに来た船に乗って、初めてですか。

扇 あそこまでは、『ブルスウルトラ』と言うアメリカが徴用した船で、イタリアのナポリからずっと……。途中で寄りながら帰って来たんですからね。

伊藤 アメリカ経由ではなくて、ですか。どこを通過して帰って来たんですか。

扇 ナポリを出て、それからまず寄ったのはハイファ（現イスラエル）とか言う地中海沿岸の港に寄って、そこで補給してね。それから途中、またアデンに寄って、インドへ寄って、シンガポール……と、ずっと帰って来たんですな。

伊藤 じゃあ、シンガポールで日本の船に乗ったんですか。

扇 マニラ。だけど、途中で寄った所は、どこでも上陸なんかしないですよ。

伊藤 半分、囚人みたいなものだから……。

ベルリンに赴任する

高橋 では、始めさせていただきます。ドイツへの赴任について幾つか質問がありましたので、お手紙に書いたんです。

まず、シンガポールに「伊八」（伊八号）の潜水艦が到着して、そこで扇先生は、ドイツから戻って来る横井忠雄さんにお会いした、と。あと、伏下中佐と再会されましたが、そこで特に伏下さんといろ議論をした、と。伏下さんはドイツの情勢、扇先生は日本の情勢を話し、情報交換したわけですね。忌憚のない意見交換が行われたと言うんですけれども、そのあたりのお話をお聞きしたいんです。

伏下哲夫、海軍経理学校卒（二期）、呉工廠会計部員等を務めた後、昭和十三年一月軍令部出仕兼支那方面艦隊司令付（上海出張）・臨時特務部員、十四年三月興亜院調査官・華中連絡部、十四年十一月支那方面艦隊司令付・上海出張、十五年六月～十八年十二月ドイツ駐在、十八年十二月出仕（軍務局四課）、十九年十一月兼綜合計画局参事官（前掲『日本陸海軍総合事典』二二七頁）。

扇 頭には浮かんで来ないですが、伏下は「我党の士」なんですよ。

高橋 同期ですか。

扇 彼は主計科で、経理学校を一番で卒業しました。彼は政治性があるって、私と話がよく合うんです。

高橋 その時の、具体的な話の内容についてはどうですか。あるいは、かつて横井さんと一緒に働いていたことがあるわけですから、横井さ

んからドイツの情勢について聞いたと思うんですが、何か覚えていらっしゃるのでしょうか？

扇 うーん……。それは、「陸軍をやっつけてやった」ということだろうと思うんですよ（笑）。

伊藤 伏下さんは、ドイツの見通しについて、どんな話をされていましたか。樂觀的な感想でしたか。それとも、「もうドイツは駄目だ」という感想でしたか。

扇 伏下は、物を買に行つとつたんですからね。金塊を持って行つた男ですから……。二トンの金塊を積んで行つた。あれは、みんな伏下が買うために持つて行つて行っているんですよ。

高橋 何を買に行つたんですか。

扇 時によつて違うんですけれども、とにかくドイツの物で……。例えば、海中における潜水艦の方向探知機なんか、英国がちよつといいのを造ると、直ぐドイツがそれに応じた、その上を行くやつを造つたんです。そういう技術の競争の実態を、彼がみんな見ているんですよ。もちろん、彼は経理局にいましたが、日本にいる時から私とはしょっちゅう話をしていたから、気持ちには相通じているんです。

高橋 大島（浩）大使の話は出なかったですか。

大島浩（前出）、陸士一八期、昭和十三年十月～十四年二月ドイツ大使、昭和十五年十二月ドイツ大使再任（着任は十六年二月）、二十年五月米軍に拘留され、同七月ドイツを出発し、十二月帰国、巢鴨入所（前掲『日本陸海軍総合事典』三三三頁）。

扇 大島と話をする時には、伏下はいたか、いないか。

伊藤 いないですよ。

扇 いなかった。

高橋 それから、先生はドイツに行つてから、よく陸軍武官室に行つて、「日本の敗戦は必然的である。必ず日本は負けるだろう」ということを、ぶちまけられた、と。

扇氏は昭和十九年三月十六日にベルリン到着。語学研修のため四月三十日にはハイデルベルクに向け出発したが、この間、当時の「日記」から関連する記事を摘記すると、以下の通り。

三月二十一日（火）

（ヘルツフェルデの阿部公館における武官会議がありⅡ註）○九三〇より私が日本国内事情を説明した。二時間話し続け、後、無着中佐が戦況及米国事情を話して午前を終り午後議題に入る。（後略）

三月二十二日（水）

（前略）夜は打寛いだ。夕食後、懇談した。甲谷大佐に国内事情を話した。（後略）

三月三十一日（金）曇時々晴

（前略）午後三時から大使館に行つて大島大使、河原参事官、内田一等書記官、陸軍小松少将、甲谷大佐、西中佐の六人に対し国内事情一般、特に生産状況を中心に約二時間話をした。（後略）

四月一日（土）曇朝雪

（前略）陸軍西中佐の案内で同中佐の私宅に招待される。来れるもの清水大佐（大学のコレスボン）、甲谷大佐、西中佐、扇中佐、藤村中佐、後に溪口中佐。（中略）沢山食べコミヤックも相当飲んだ。戦局問題を中心にして歓談し打解けて愉快だった。（後略）

四月二日（日）晴

（前略）日高大使が部屋に話しに来てくれと昨日伝言があつたので行つて見たが不在だった。（後略）

四月三日（月）

（前略）今日は小野田大佐がヘルツフェルデより伯林に出て来てもう明日は出発して内地に帰るのだ。手紙も書き度いし落ち着かぬこと甚だしい。夕方旅館に帰り食堂で小野田大佐、中山中佐と一緒に葡萄葡萄酒を三人で二本飲んで酔が廻る。

食後小野田大佐の部屋に行き国内状況の枢機に亘る所を一時間ばかり話した。同大佐とは非常に話の間が合ふし私の意見も彼には其の真意が通ずるので此の人と話すと熱がこもつて来る。いろいろな人も紹介して貰つたし、ノートや化粧水等をも貰ひ受けた。（後略）

四月四日（火）

（前略）大学が済んでから大使館に日高大使を訪れる。話が聞き度いから来て呉れとの希望があつた。二人きりで一時間半に亘つていろいろ話した。昔の關係からなつかしくもあり、心置きなく意見を述べた。大東亜共栄圏に対する最後の我々の考へ方に於て、彼と完全に意見一致し兩人共非常に愉快だった。是非伊太利に来いといふ。（後略）

四月十一日（火）晴

（前略）それから夜六時から新聞社代表が数人集つて私の話を聞き度いとしてアドロンに席を作つた。小島少将も加はられて、食後、大毎加藤君の部屋で懇談した。私から三十分ばかり大要内地事情を話し、あと意見交換等になる。警戒警報があつたので十時過引揚げ十二時半頃まで寝ないで待機したが何事もなかった。

（以上、「日記Ⅱ」「扇一登氏関係文書」三一―二四）

四月十九日（水）晴

午後三時より船本、伊木中佐の斡旋で商工省技師太田氏及日鉄技師島村氏等に対し内地の生産に関し話をしてやることになってノーレンドルフ

附近の伊太利料理で六時迄話した。太田技師（商工省）が東京出発の際に紹介状を書いて呉れたのだ。

七時頃ホテルに帰り今夜は大使館の内田書記官とも懇談することになって居たので待つて居ると十時前頃部屋に來た。それからコニヤックを飲みながら遂に一時半まで外交政略を中心にして話し込み議論を交し久し振りに意見を吐露することを得て愉快だった。（後略）

四月二十四日（月）晴時々曇

（前略）午後四時よりラーツケラーで陸軍との技術官の懇親会を行ふ。陸軍の大谷少将、伊茂大佐、落合大佐等と知合になる。（後略）

四月二十六日（水）晴

（前略）午後二時半より二時間余に亘り陸軍武官室に到り懇請に依り国内事情、特に生産状況を講話する。監督官のみで大谷少将以下十四、五名だ。（後略）

四月二十七日（木）

（前略）夜ホテルの部屋で勉強していると阿部中将と小島武官とが、新聞記者と懇談して居るので国内問題等の関係から呼出しがかかる。三〇一号室に到り之に参加、コニヤックを飲みながら対蘇問題、世界戦将来等に関し雄弁を振って意見を吐露し愉快だった（後略）。

（以上、「日記 Ⅲ」「扇一登氏関係文書」三一―二五）

扇 そうそう、そうなんですよ。

高橋 そうすると、時には大島大使も聞いていたんですか。

扇 （私の話は）大使館でやったんです。それを、大島は無視して……。その前に、ちよつと、これは余談になるかも知れませんが、ベルリンと東京の関係を……。ベルリンにはベルリンの色があつて、これは「大島一色」なんです。ヒットラーを中心にした、大島中心のベ

ルリンの……。それで、例えば海軍武官の横井さんなら横井さんが、海軍の見識というものを、ぶつこともあつたんです。（横井さんが）見識、情勢の見方をぶつと、その見解を、我々がまた東京で話すんです。

例えば、（我々が）宇垣（一成）さんの陣営——堀場（一雄）なんかと、「海軍は、こう考えているぞ。こう言つて来とるぞ」と話をするんです。そうすると、堀場が直ぐ、それをベルリンに知らせるんですよ。「ベルリンの海軍武官は、こう見ているぞ」ということを知らせる。そうすると、そこで悶着が起るんです。海軍が独自の展開をやつたら、大島大使の面目がなくなるからね。それが、一回や二回じゃないんです。（何回も）あるんですよ。それを、みんな私の所に言うて来るから、分かるんです。みんな分かるものだから……。それで、ドイツ関係の情報というのは、大島の「一手販売」なんです。

宇垣一成、陸士一期、陸軍大将、昭和十二年十月内閣参議、十三年五月、同九月外相、同六月、同九月兼拓相、戦後は参議院議員を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』二二頁）。

堀場一雄については、第二回聞き取り（四三頁）の註を参照。

大島さんの幕僚はどうするかと言うと、ドイツの「大本营」あるいは海軍省に行つて、その担当の人と会つて来るんです。それだけが情報源になるんですよ、彼ら独特の……。陸軍は、裏のほうから情報源を引っ張り出すということはやらないんです。しかし、海軍には、それをやる上手な者がいるんです。酒井直衛——彼は、ドイツの実業家と密接な関係を持つておつた。商売で、物を買に行こうと思つて、密接な関係を持つているから……。ドイツ側のそういう連中は、ドイツの内部であらゆる情報を取っているから、情報が広いんですよ。そ

れは、ナチスに反対の者がたくさんいるんですから……。

酒井直衛、明治三十三年生、十六歳で海外雄飛を志し出国、在ロンドン日本大使館嘱託を経て、大正十年駐独日本大使館海軍武官室嘱託となる。戦後、昭和二十三年ウエスターン・トレーディング社長（NICHIGAI/WEB Service）。

そういう状況で、情報は普通には「大島情報」ということで、アマルガメートされて一色になっているんですね。

高橋 そうすると、大島さんは表面的な情報しかドイツから取ろうとしなかった？

扇 取らない。大島さんは、ヒットラーの「直報」みたいなものですよね。もちろん、ヒットラーとも会っているんですが……。会うけれども、ヒットラーの言うことと同じような考え方で、まあ情勢判断としての妙味は、もうないんですよ。一色になっている。そいつを私は構わず行つて、「自分は担当者だったんだ。日本の国情は、こうなんだ」ということをぶつけたんです。私は、大島さんがどうだろうが、こうだろうが、そんなことはどうでもいいんですよ。

高橋 大島さんは、そこで黙っていたんですか。

扇 私は、大胆にぶつけて、陸軍の大悪口を言つたんです。陸軍武官室に行つても、そうです。そういう考え方というのは、ベルリンでも心ある人はみんな持っているんですよ。持っているけれど、ベルリンでは、そうは働けないんです。彼らは、「大島一色」で動くよりほかないんですよ。

高橋 在ベルリン陸軍武官室の情報は、大島さんと大差ない情報だったんですか。

大島大使時代の駐独大使館付陸軍武官は、河辺虎四郎（陸士二四期、昭和

十三年十月八日～十四年十二月一日）、岡本清福（陸士二七期、昭和十四年十二月一日～十五年十一月十三日）、坂西一良（陸士二三期、昭和十五年十一月十三日～十八年一月十八日）、小松光彦（昭和十八年一月十八日～終戦）の四人であつた（前掲『日本陸海軍総合事典』三七〇頁）。

扇 それはもう、大島さんに口を合わせた情報ですよ。一色ですよ。東京も、そうなっているんだ。外務省と……。

高橋 海軍では、先ほどの酒井さんと、あと、どなたを情報源としていましたか？

扇 これがまた厄介なんです。酒井という男は、元々海軍のロンドンの武官室の嘱託だったんです。その時に、イギリス人の奥さんと結婚しているんですよ。私が行つた頃は、その奥さんをスイスに逃がしているんです。それで、始終、スイスに行っていました。（日本から）持つて行つた、金の使い古しですからね。金の商売に係りして、物を買つて仕事を一人でやっていたんです。だから、裏の裏の情報を知っているんです。しかし、その以前に、行く所があるんですよ。……名前が出て来ない。

高橋 和久田さんですか。

和久田については、一三三―一三四頁及び一四一頁以下に採録されている「日記」を参照。駐独大使館の嘱託（二四八頁）。

扇 じゃない、英国人ですよ。日本に捕虜に来て、松山に長くいた男です。青島で捕虜になつて。フックじゃない……。

伊藤 ハックじゃないですか。

ハック・フリードリヒ、ドイツ人。大正元年に大連の満鉄顧問事務所に赴任、のち後藤新平の私設顧問となる。第一次大戦で義勇軍に志願、青島陥落で日本軍の捕虜となり博多の捕虜収容所に入る。戦後、ドイツに帰国し

商社を設立、日本海軍との間で大型機械の日本への輸出や技術提携を行う。ドイツの諜報員として活動するが、のち反ナチスに傾き、一九三七年ゲシユタポに逮捕される。しかし、日本海軍の助力で釈放され、スイスに亡命、第二次大戦後半にはアメリカの諜報機関「ダレス機関」とも接触、日本海軍がスイスで進めていた笠信太郎などの、日本の終戦工作グループと度々会合し、日本のために奔走した (NICHIGAI WEB Service)。

扇 それだ……。私は中学時代に、彼と話をしているんですよ。私は、中学時代に英会話に興味があつて、中学校でありながら、「英語ばかりしか使っちゃならん」と言うアメリカ人の宣教師が、広島女学院（から教えに来ていた）。今でも、有名な大きな大学ですよ。これは、全くのアメリカの資本で出来ているし、アメリカ流の教育だけやる。全部、クリスチャンです。うちの婆さん（妻・幸子）は、その出身ですよ。

その男は、捕虜として松山に在る間に日本を研究して、日本のことは詳しいんですよ。そのドイツ人の捕虜たちが、今の平和公園の「原爆ドーム」（当時、広島県物産陳列館）に来て——中に兵隊なんか、みんなおつて——ドイツの製品とか、料理とか、何でもドイツの物をあそこで売っているんですよ。それを、私は毎日行つて、その男と話をしていたんですよ。だから、よく知っている。そういう関係で、実に、それは微妙なあれでね。まあ、そういうことで、一朝一夕に出来た関係じゃないんですね。

高橋 そのドイツ人のハックさんと酒井さんが、また知り合いなんですか。

扇 それは、非常に親しい。

高橋 だから、酒井さんは（彼を通じて）イギリス側の情報も取つて

いたということですか。

扇 そうです。

高橋 なるほど、分かりました。

扇 だから、海軍武官室は情報源が広いんですよ。

高橋 酒井さんの他に、海軍武官室がベルリンで使っていた情報関係者は、どなたがいらいっしやいますか。

伊藤 酒井さんだけですか？

扇 いや、それはね……。名前が出て来んのが非常に困るんだが、たくさんあるんですよ。酒井は、金二トンを使つての物の買い入れを、一人でやつていたんだから……。

伊藤 金二トンというのは、伏下さんたちが持つて行つたやつですか。扇 そうそう。私の潜水艦にも、二トン積んでいた。それは、みんな酒井に手渡し、酒井はスイスでもやれば、ドイツでもやる。ドイツの、その業界の下の方と、ずっとやるんです。で、そこで物を買うんですよ。それを、後には潜水艦で（日本に）運んで来るというようなことなんです……。涎の出るようなものが、ドイツにたくさんあるんです。それは、私も連合艦隊参謀をしている時から、第二艦隊の末次さんの参謀をしている時から興味を持っていますから……。

その男と、「原爆ドーム」の中で話をした。たぶん十日か二十日くらいやったと思う。ドイツ料理を作つて、食べさせるんです。私は中学生だから、それに興味があつて、毎日学校からの帰りに——私の通り道になつていんですよ——寄つて、今でもはつきり覚えていますが、その男と途中で会つて、階段で話をしたりしてね。私は、ただの中学生ですから、彼は何も興味が無いでしょう。ないけれども、私は興味があつたから、よく話をしました。それが、イタリアの独立をやつた

男ですから……。イタリアのダレス工作……。

高橋 アレン・ダレス。

扇 ダレスという奴がおったでしょう。

高橋 アメリカ人ですね。

扇 弟のほう……。あれが、イタリアに行つとつたわけだ。アレン・ダレスと言ったかな。

それ（ハック）が青島で捕虜になつて、日本に来て、松山におつて、松山で日本のことを勉強したんでしょね、日本通ですよ。私は、ただの中学生で行つて、ただ英語を話すものだから、向こうも英語を話す。私は、英語を話すのに興味を持つて、毎日行つとつた。

アレン・ウェルシュ・ダレス、アメリカ人。アイゼンハワー政権で国防長官（任期一九五三年一月～一九五九年四月）を務めたジョン・フォスター・ダレスの弟。第二次大戦中、スイスにあつたアメリカ戦略活動機関の責任者として活動。話題となつてゐるイタリアにおける「ダレス工作」とは、在イタリア独軍の単独降伏工作のこと（NICHIGAI WEB Service）。「松山で捕虜」云々の話は、ダレスとの交渉に当たつたハックのことと思われる。

伊藤 その人と、ベルリンで会うんですか。

扇 ベルリンで……。私は直接会わんけど、酒井が会うんです。酒井とは、ぴつたりですよ。だから、話は酒井を通じて来る。

もう一人、私の「ダレス工作」をやらせた男が、藤村義朗。これがまた変つた男で、大阪人で堺の出身。その男は悪い癖があつて、大阪商人の一番悪い所を、全部持っているんです。自分本位なもんだから、クラスから嫌われて、「藤村の除名論」というのがクラスで満ちていたんです（笑）。除名寸前まで行つとるんですよ。それぐらい嫌われ

てゐる男だつた。

それを、私が調査課にいた時——八カ月も前に、フランスに行くという内命を帯びていたんですが、それがドイツに変わつてから八カ月、調査課のままでいたんです。その間に、藤村の同じクラスで……。藤村は一番ですからね。

伊藤 一番なんですか。

扇 ああ、クラス・ヘッドだ（笑）。その（藤村と同じクラスの）男は、志村という男で、大阪に住んでいた。大阪の道頓堀に「水交会」というのをつくつて、大阪の海軍を、ずっと守り立ててきた男なんです。それが、『富田屋』という有名な料亭の女将と非常に親しいんですよ。その『富田屋』の女将が、私のクラスメートで、豊田大将の娘さんと結婚した美丈夫の山本祐二——私の最後まで最高の親しい友人だつたんですが——に惚れたんですな（笑）。それで、艦隊が入つたら、必ずその女将が来るんですが、山本の所に行かずに、私の家に来る。それで、「山本を引つ張り出してくれ」と（笑）。その女将は、私の家に何度も来たんだ。山本の所に行かんのですよ。まあ、変な格好になつたんだな（笑）。それが内幕で、みんな一緒になつてゐる。

藤村義朗（本名は義一、のち改名）、海兵五五期、昭和十五年五月ドイツ駐在、十五年十一月ドイツ大使館付武官補佐官、十九年六月フランス大使館付武官補佐官、十九年十月兼ドイツ大使館付武官補佐官（前掲『日本陸海軍総合事典』二二九頁）。

志村正、海兵五五期、海大甲種第三七期を藤村と同期で修了後、総力戦研究所の第一期研究生（昭和十六年四月～十七年三月）、十七年三月軍務局員兼調査課員、二十年一月支那方面艦隊参謀（前掲『日本陸海軍総合事典』六二九・六六二頁、前掲『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』二四八頁）。「大

阪に住んでいた」と言うのは、戦後のことか。

伊藤 藤村さんは？

扇 藤村は、彼のクラス一番だけど、二番か三番の奴（志村）が軍務局で私の直ぐ傍にいます。それが、藤村のことを、一切私に話してくれた。「あいつは、こういう奴だ」と。クラスから除け者にされて、相手にされていない。だから、内閣が政治的な人材を養うために総力戦研究所という学校をつくったですね。藤村も志村も、みなその学校の優秀な卒業生ですよ。それ（志村）が軍務局で、私の向かいの机にいるんだ。毎日の如くドイツから来る情報を、来る度に志村とみんな内部の事情をさらけ出して、常日頃話し込んでいたのです。だから、私はベルリンのことは、よく知っているんですよ。

藤村義一は総力戦研究所に研究生として配属されたことはない（前掲『日本陸海軍総合事典』二二九頁）。

でも、それを聞いておつて、藤村という男は実行力がある。他人の手柄を、みんな自分のものにする男だから（笑）。そういう性格をしている。ただし、非常な実行力を持って、頭は切れる。切れるが、悪いほうに切れる（笑）。

私は見ていて、「さてベルリンに行つて、どの男をどう使うか」ということを、じつと、いつも志村と話をしながら考えていたんです。「いざという時には、こいつを使うんだな」と、もうその時から思っていた。それで、向こうから横井さんが帰つて来ても、誰が帰つて来ても、伏下が帰つて来ても、私は藤村のことばかり聞いていた。「あいつが、いまベルリンで、どういう仕事をして、どういう立場にいるか」と。そしたら、私のクラスメートがベルリンには四人いるんですが、その四人の誰もが藤村を相手にしないんですよ（笑）。無視

しとる。無視しとるということは、藤村が勝手に動いているということ。勝手に動いているから、そういう（酒井や他の）男からの情報をみんな一人で（押さえている）。

また、そういうことはやるんですよ。そして、みんな自分の功績にする（笑）。それで、他人から全く無視されて、溪口なんか全然藤村を相手にしない。小島がいるし、溪口がいるし、豊田隈雄がいる。豊田は、海軍大学の恩賜長剣の拝受者ですからね。

溪口泰磨（海兵五一期、昭和十五年五月一日終戦）、豊田隈雄（海兵五一期、昭和十五年十一月十五日終戦）は、共に駐独海軍武官補佐官（前掲『日本陸海軍総合事典』四三七頁）。「クラスメート」というのは、海兵五一期の両名。海大甲種三二期で同期の柴勝男と山本祐二も武官補佐官としてドイツに駐在したが、藤村の渡独より前である。当時、ベルリンにいた関係者については、第四回聞き取り（二〇八—二〇九頁）を参照。

なお、小島とあるが、昭和十一年二月十三日十二月、および昭和十八年九月終戦まで駐独大使館付武官を務めた小島秀雄は海兵四四期で、かなり先輩である（前掲『日本陸海軍総合事典』四三四頁）。

「日記 Ⅱ」（「扇一登氏関係文書」三一—二四）昭和十九年三月二十七日の項に、「（前掲）夜引続いて豊田の下宿にて、またクラス六人集まって飲みつゝ飲談した（扇、溪口、豊田、小島、西原、木梨（後略）」とある。

高橋 それから、フランスに行つていた沼田さんもいたでしょう。

沼田英治は、前出のように昭和十四年七月一日終戦までフランス大使館付武官（前掲『日本陸海軍総合事典』三七〇頁）。

扇 ええ。そんな人を、みな前にして……。それぞれ場所は違う。向こうは、内地の状況を聞くために、みんな呼んでくれるんです。それで、最初に内田さんの所に行ったんですね。

高橋 内田藤雄ですか。

扇 内田藤雄。それから、大島大使。大島大使が前にいる。で、大島大使に説明する意味で、私は全部、その時に陸軍の大悪口を、あらゆることを全部言いました。

内田藤雄については、第四回聞き取り（二〇八—二〇九頁）の註を参照。

高橋 それから、外務省の牛場信彦さんがいませんでしたか。

扇 牛場もいた。牛場は三等書記官でした。しかし、牛場は質問なんかしないですよ。質問するのは参事官とか、内田藤雄と言ったかな、後に大使になる人ですよ。ああいう連中が、私に質問するんです。東京の状況を質問するんだけど、前に大島さんがいるから、大島さんの意図に反するようなことは、そう直接には聞かないですよ。聞かないけれども、聞く・聞かんに拘わらず、ぶちまけました（笑）。口一杯の陸軍の悪口を言っただけです。だから、耳が痛かったと思うんですよ。牛場信彦、昭和七年東京帝大法学部卒、高等試験外交科・行政科試験合格、昭和十五年ドイツ駐在（この間、三等および二等書記官）、昭和十九年一月東京帰着（前掲『日本近現代人物履歴事典』八三頁）。扇氏が昭和十九年三月にベルリンに到着した際、牛場はすでに東京帰着済み、よって「牛場がいた」というのは、扇氏の錯誤と思われる。

高橋 陸軍の武官府の人たちも、そこにいたんですか。

扇 武官の所にも行つて……。その時に、沼田さんは来とったですね。それで、甲谷悦雄がおった。甲谷は「我党の士」ですから、甲谷も耳が痛かったと思うんですよ。構うことはないんだ。私は、最後ですからね。ベルリンで何をするかということを考えて行っただけですから、ぶちまけて……。

甲谷悦雄については、第四回聞き取り（二〇九頁）の註を参照。

高橋 先生がぶちまけた中の一つは、「早く和平を……」ということですか。

扇 そうそう、「戦をやめろ」ということです。大西洋憲章が出る、ちよつと前ですから……。

大西洋憲章は、一九四一（昭和十六）年八月十四日に大西洋会談を終えたローズヴェルト米大統領とチャーチル英首相が共同で発表した八項目の戦後世界構想。アメリカ参戦後の一九四二年一月一日に連合国宣言に取り入れられた（前掲『日本外交史辞典』五〇一頁）。扇氏のベルリン到着は昭和十九年三月のことであり、そのいづれよりも後の到着である。

高橋 具体的に、どうしたら戦争をやめられるかということも、お話しになりましたか。

扇 それは、負けるんですよ。もう降伏するんですよ。

高橋 ソ連の出兵は、お話しになったんですか。甲谷さんはソ連の専門家ですから、スターリンがどうするか、と。

扇 ソ連は、事情があるんですよ。「ソ連を仲介とする」ということを、日本政府が決めたでしょう。あの事情を、私はよく聞いているんですよ。何とか言っただけ……。

高橋 有末精三ですか、情報部長の……。

扇 有末が、「ソ連を仲介とする」という案を持って行っただけですから。企画院でしたかな。単独で行つて……。参謀次長を連れて行っただけかな。それで、「ソ連を仲介とする」という案を、とうとう吞ませただけですよ。外務省に行つて、吞ませた。

有末精三、陸士二九期、昭和十一年八月イタリア大使館付武官、十四年三月軍務課長、十四年六月イタリアより帰朝、十四年十二月北支那方面軍参謀、十六年三月北支那方面軍参謀副長、十七年七月参謀本部付、十七年八

月参謀本部二部長（前掲『日本陸海軍総合事典』一〇頁）。

その頃には、海軍の暗号を解く研究があるんですよ。海軍の暗号をみんな読まれとった。外務省の暗号も、みんな読まれとった。それで、「ソ連を仲介とする」なんていうのは、私はその当時、「何と言う馬鹿なことをやるもんだろう」と思ったんですよ。ただ、彼らとしては、ソ連とアメリカという二つの仮想敵国を持っているわけですからね。「アメリカとも戦争をする」と言うんだから……。それで、「ソ連を仲介とする」という案を持ち込んで、それで政府を動かして……。あれが、箱根であつたりしとるでしょう。

高橋 広田弘毅元首相が、マリク大使に対して……。

扇 あれに行くことになつとったんですよ。そんな経緯は、私は外務電で、みんな分かるんですよ。外務省は、電報をみんな読まれとるんだけど、「外務省はこうやつとる、こうやつとる」ということで、みんな報告が来ますからね。外務電も、全部（ベルリンに）来るんですよ。

マリクはソ連の駐日大使。広田・マリク会談は、東郷茂徳外相の要請で昭和二十年六月に行ったものだが、成功しなかった（前掲『新版 日本外交史辞典』九五七頁）。

高橋 そうした対ソ和平工作などに対して、武官室とか大使館で、先生が、「反対だ！」とおっしゃいますね。それに対して、他の人は、どんな反応を示しましたか。

扇 これ、ちよつと微妙ですがね。トルーマンが大西洋憲章を決めて、……決まったんですが、トルーマンがアメリカの何とかと言う高速巡洋艦に乗って、ベルリンに行くんですよ。

大西洋憲章については、前頁の註を参照。トルーマンは無関係であり、扇

氏の錯誤。後述のように、ポツダム会談の際の話である。

伊藤 ベルリンじゃなくて……。

扇 ベルリンの郊外にあるでしょう、有名な……。

高橋 ポツダムですか。

扇 ポツダム。

伊藤 それは、もう、だいぶ後の……。

ポツダム会談は、一九四五年七月十七日から八月一日に開催。すでにドイツは降伏し、扇氏等はデンマークに脱出済み。

扇 ポツダム会議に行く途中に、私の名前が出て来るんですよ。アメリカに、日本の海軍の暗号を解読されているんだもの……。外務省のも、みんな解読されている。それで、スウェーデンの「バカ公使」が私のことを電報で東京に注進する内容も、みんな分かっているんです。高橋 岡本季正公使ですね。

岡本季正、昭和十七年十一月十九日、在スウェーデン特命全権公使、昭和二十一年一月二十日引揚（前掲『日本官僚制総合事典 一八六八—二〇〇〇』四五頁）。

扇 トルーマンは、電報（解読したもの）で知っているんです。ただ、その時には、「おうぎ」でなくて「おうや」となっている。それが、仮名で書いてあるんです。それで、私がスウェーデンの公使館付武官になる予定であることを、（その電報を）トルーマンは巡洋艦に乗って行く船の中で見とるんですよ。それで、あそこへ来たのはチャーチル、ロシア（ソ連）のスターリン、蒋介石もいたと思う。そこで、私の名前を出すんですよ。「この人は、終戦派だ」と。つまり、トルーマンは、「おうや」が終戦降伏派だということを、巡洋艦の中で、電報で見えているんですよ。それで、その先（ポツダム）に行つて言うん

ですが、仮名で「おうや」となっている。

その「おうや」となっている電報については、小野寺（信）さんの奥さんの百合子さんが『バルト海のほとりにて』に書いているんですよ。（トルーマンは）それを見て、そこで出している。「だから、日本は降伏する可能性が強い」と。で、大西洋憲章を、バツと出すわけです。小野寺さんは帰って来て……。ずっと、それを自分が暗号で打ったりしているんだから、みんな知っているんです。『バルト海のほとりにて』にも書いてあります。

「大西洋憲章」は、一九四五年七月二十六日に発表されたポツダム宣言の誤り。

高橋 分かりました。

扇 今のは、余談だから……。

伊藤 非常に面白いお話でした。

小野寺武官との出会い

高橋 それでは、和平工作について、お聞きしたいと思います。昭和十九年九月下旬、扇先生はスウェーデンに行くんですね。目的は「小野寺武官を訪ねることだ」と言うんですけれども、スウェーデンに行くことになった背景は、どんなことだったのでしょうか。

当時の「日記」によれば、扇氏のスウェーデン訪問は、九月二十二日から二十七日の六日間（扇一登氏関係文書「三一―二七」）。

扇 スウェーデンに行ったこと自体？

伊藤 何の目的で？

扇 ……………。

伊藤 まだ、ドイツが負けていない時ですよ。どういう手段で行ったんですか。

扇 ドイツの飛行機に乗って行きました。

伊藤 民間の飛行機ですか。それとも、軍の飛行機？

扇 民間の飛行機でしょう。

伊藤 まだ危なくはなかったんですか。

扇 危なくはないんですよ。その前に、武官がスウェーデンに行かれました。

伊藤 ドイツの？

扇 小島武官がスウェーデンに行つて、（その時は）まだ私が武官になるとかという話は全然ないんです。「一遍、スウェーデンを見て来い」と言われてね。武官が先に行つて、あの人は始終歩いていきますからね。別に、目的があつて行つたと言うほどでもないんですが、スウェーデンの公使館関係——海軍の武官がいますからね。三品伊織中佐です。あれは、武官ということで行つたんじゃないんですよ。つまり、スウェーデン公使館付武官という名前はないんです。

高橋 確かに、そういう名前はなかったです。

扇（小島武官は）方々訪問していますが、普通の旅行で行つたんですよ。帰って来て、「君も一遍、スウェーデンを見て来い」と言われたんです。それで、航空券を買って行つたんですよ。普通の旅客機が、まだ通っていましたから……。

実際、扇氏のこの度のスウェーデン訪問は、小野寺少将他の関係者と話もしているが、基本的には、まだ物資の豊富なスウェーデンでの買物や観光

が目的の通常の旅行であつたようだ。当時の「日記」を摘記する。

九月二十二日（金）晴

懸案の瑞典行が実現して、私の外に舟木書記及三上囑託（三井物産）が同行して私の世話をしてくれることになった。（中略）五時四十五分一同送られて自動車でテンペルホーフ飛行場に向ふ。荷物でござたしたが、ともかく三人七時半機上の人となり造作もなく秋空に舞ひ上った。（後略）

九月二十三日（土）晴

（前略）午前十時、海軍武官府の山仲君が迎へに来て呉れて愈々買物の蒐集にかゝる。莫大な買物で一苦勞だ。（中略）午後四時三品中佐の紹介で陸軍武官小野寺少将を訪問し、約一時間余一般情勢に付意見交換を行ふ。家族も居られて久し振りに日本人家庭の空氣に接した。（後略）

九月二十五日（月）雨

（前略）午前中「エンコ」で今日も山仲君の案内で私の伯林新居に対する道具類、ウエッシエ等沢山買ふ。地下室の台所道具等をも可成り買はねばならなかった。午後一時、今日は新聞記者が招いて呉れた。同盟の斎藤君、毎日の向後君だ。約三時間語りつゝ瑞典料理を満腹する。独蘇問題等特に興味深く、充分に私の意見を聞かせて置いた。

武官府に帰り夕方、三品中佐の案内で岡本公使を訪問する。（後略）

九月二十六日（火）曇

午前十時から瀬崎君の案内で買物を続ける。仲々はかどらぬ。連日の買物は頼まれものを併せて二千円位になる。舟木君は更に大量だ。（中略）今夜は小野寺少将に招待されて御家族と一緒に食事する。食後再び欧州戦局に付語って十一時過帰る。

ストックホルムの五日間は斯くして終った。平和の美しい都に来て映画

にオペラに感激を重ねてテニスまでやり、連日美食して英氣は養った。之で大に又伯林で働こう。

（日記 No.5）「扇一登氏関係文書」三一二七

三品伊織、海兵五三期、（兼）在ドイツ海軍武官補佐官Ⅱ昭和十六年九月十五日〜十七年二月十四日、在スウェーデン海軍武官Ⅱ昭和十七年二月十四日〜二十年四月一日、（兼）在フィンランド海軍武官Ⅱ昭和十九年六月五日〜二十年四月一日（前掲『日本陸海軍総合事典』四三三・四三四・四三七頁）。

山仲伝吾、海兵五四期、在イタリア海軍武官Ⅱ昭和十九年六月五日〜九月二十日（前掲『日本陸海軍総合事典』四三三頁）。

高橋 それまでに、小野寺信さんとは面識があつたんですか。

扇 ないです。

高橋 ベルリンにいらした時に、小野寺さんについて何か聞いておりましたか。

扇 うーん、あんまり聞かんですな。

高橋 軍令部にいらつしやつた時も、聞いたことはないんですか。

扇 それは、小野寺さんからの暗号電報はみんな回つて来ますから、ある程度は知っていましたが、しかしあの人が日米開戦に反対であるとか、それに努力していたということは知らんですよ。

高橋 小野寺さんは、汪兆銘工作に反対でしたよね。それはご存知でしたか。

扇 それは、知つとる。

高橋 当時、知っていたんですか。

扇 ええ。知っていたが……。

高橋 結局、反対していたので、小野寺さんは飛ばされちゃいますね。

彼は上海に出て行って、「小野寺機関」というのをつくって、汪兆銘ではなくて、蒋介石と直接交渉するような工作をやっているんですね。結局、汪兆銘工作と完全に対立するわけですから、陸軍から弾き飛ばされたんですね。

扇 そうそう、あの時は、私とは反対の側にいたんですね。

高橋 で、ラトビアのほうにやられちゃいますね。

小野寺信、陸士三二期、昭和七年四月陸大教官、八年七月参謀本部付仰付（北満駐在）、九年五月参本部員、十年十二月ラトビア公使館付武官、十二年四月兼エストニア・リトワニア公使館付武官、十三年六月参本部員、十三年十月中支那派遣軍司令部付（上海・小野寺機関長）、十四年六月陸大教官、十五年十一月スウェーデン公使館付武官、十六年一月着任、昭和十八年八月少将、昭和二十一年三月復員（前掲『日本陸海軍総合事典』二八頁）。この履歴から見ると、小野寺機関での活動より前に、「ラトビアのほうに」出ている。

扇 「私は、ああいうことはやらん」ということでしたからね。蒋介石と、いつでも交渉できる立場をとっていたものですから。

まあ、そんな徹底した、いろいろな知識があつて行つたわけじゃなくて行つたんです。しかし、（スウェーデンに）行く時の構えはね、誰彼の区別なく本当の所を言つて、「もう戦は出来ないんだ。力はないんだ」ということを言おうと思つていたんです。

伊藤 小野寺さんに、ですね。

扇 そうです。だから、小野寺さんといろいろ議論する前に、新聞記者の有名な者を集めて……。まあ、集まつて来たですよ。そんなのを集めて、「ソ連を仲介としてやるなんて、とんでもないことだ」というようなことから、嬉野であるとか、井上であるとか、大きな新聞の

記者を五、六人集めたんです。集めたというよりは、私が行くと、集まつて来るんですよ。そういう人と飯を食いながら、東京の話を一切ぶちまけて……。

高橋 新聞記者は、他に、どなたか覚えていらつしやいますか。

扇 嬉野、井上……。井上というのは、三井船舶だったかな。

嬉野満洲雄、昭和八年読売新聞社入社、海外特派員を務める、二十六年論説委員、三十七年より欧州総局長として活躍（NICHIGAI/WEB Service）のことか。

井上陽一、三菱商事。昭和十七年十月、ストックホルム陸軍武官室には、井上氏のほか、三井船舶の本間次郎氏、三井物産の佐藤吉之助氏、合わせて三名が、中立国における新聞・雑誌等からの情報収集のために、少佐相当の嘱託として配属された（小野寺百合子「ステッラ・ポラーリス作戦と日本」『軍事史学』一〇八号、一九九二年四月、七四頁）。

高橋 あと、共同通信のベルリン支局長はどうですか。

伊藤 いま、ストックホルムの話をしているんじゃないの？ 今の話はストックホルムのことですか、ベルリンのことですか。

扇 それは、ストックホルムにいる新聞記者。新聞記者は、別に私に付いて行つたわけじゃない。嬉野とか、あそこにいる著名な人ですよ。それから後、ずつとお付き合ひをしています。五、六人集まりました。ストックホルム訪問の際に、「日記」に名前が出ているのは、「同盟の斎藤

君、毎日の向後君」（二六頁の「日記」参照）。

高橋 スウェーデンにいらつしやつた時に、和久田さんも一緒に行つたんですか。

扇 和久田は、いないでしょう。

高橋 お一人でいらつしやつたんですか。

扇 私一人で行ったんです。小野寺さんのことについても、あの人の立場とか、主張とか、何も詳しく知っているわけじゃない。ただ、私はぶつけるつもりで行ったわけです。それで、その新聞記者と会った後、公使館にも行きますよ。公使館に行ったら、普通の挨拶で、その時に接したのは、英語の達者な……。

前掲「日記」によれば、「舟本書記及三上囑託（三井物産）」が同行。

高橋 スウェーデン公使館で、岡本公使の下にいた人でしょう？

扇 公使館員がいたでしょう、書記官が……。

高橋 調べてみます。

扇 非常に英語が達者で、その人と会ったりして……。だから、おそらく公使にも、「日本の国力は、もう駄目だ」ということは言ったと思いますよ。とことん、ぶつけるんだから……。

高橋 そしたら、何か反応がありましたか。

扇 反応なんかないですよ、あの人は……。

高橋 小野寺さんは、ありましたか。

扇 小野寺さんから反応が出て来たんです。そして、その翌日でしょう、小野寺さんに「今から訪問する」と言って、行った。小野寺さんは、東京の事情を聞くのには格好な機会ですから、歓迎してくださって、奥さんが焼きを作ってくれて、御馳走になりつつ、飲みつつ話したんです。私は、陸軍をボロクソに言って、そのままぶつけた。その代わり、日本の国力というものを、生の数字を暗記して行ったやつを、そのままぶつけた。どこでも、みんなそうです。大使館でも、陸軍武官室でも、そのままぶつけた。ぶつけたら、小野寺さんが何を考えているかというのを、今度は向こうから話し始めた。

それで、小野寺さんがストックホルムに来て、ドイツの開戦後、

（日本が）英国艦隊二隻を……。

高橋 『レパルス』と……。

伊藤 『プリンス・オブ・ウェールズ』。

扇 沈めたでしょう。ああいう話から入って行って、「戦は、やめなきゃいかん」ということを、陸軍（小野寺さん）を前にして、私は陸軍の大悪口を言った。ありったけの悪口を言った。そうしたら、反応があるんですよ。実は、華々しい戦果をインドシナで挙げた時に——向こうの戦艦を二隻沈めた時に、もうその前から（小野寺さんは）グスタフ五世とは、会っているんですが、あの時にグスタフさんが、「日本は、いま二隻を沈めて、『勝った、勝った』と言って、有頂天になっている。しかし、戦というものは勝つことばかりじゃないんだ」と。あの王様は、日本の国力というのを知っているからね。日本には非常に好意を持っているらしいんで、知っているから、「早く戦をやめなきゃいかん」と。やめる時には、自分は英国のヴィクトリア女王と近親だから、お役に立てるかも知れない。また、自分は実弟の息子を非常に可愛がっているんで、連絡はその子を通ずれば良い、と。その息子は、あまり柄のいい人ではなくて、闇貿易をやったりして、一般からも睨まれている人だった。にも拘わらず、グスタフ王は、その息子を非常に可愛がって、いつでも面会していた。その息子が王様との面会の状況なんかを、小野寺さんの所に行って話をしているんです。だから、小野寺さん自身も王様に会って、さっき言ったように、「戦というのは、勝つばかりじゃないんだ。負けることも考えておかなきゃいかん。戦を早く止めること、これが日本にとっては肝心なんだ」と言われていた。それから、「日本の天皇や皇室とも仲がいいので、好意的に考えているから、お役に立つことがあったら、いつでも

力になるから」ということを、小野寺さん自身が聞いておられた。

だから、行って、料理を御馳走になりながら、今度は小野寺さんたち陸軍の悪口を一切言うたんです。「こうなっているんだ。石原莞爾さんの他はボロクソだ」ということを、みな言うたんですよ。そして、（小野寺さんは）感動しましてね。その感動したことは、『バルト海のほとりにて』に書いてあります。その他に、小野寺さんの奥さんが、私には何通も手紙を寄越しているし、関係書類をくれています。

アメリカの外務省から解禁・発表になっっている、暗号解読された秘密記録の生のやつを、NHK取材班を通じて、みんな持つて来ておられる。そういう状況で、私も、「終戦については、いつでもお役に立つ、仲介に立つ」というグスタフ国王の意向を、小野寺さんの口から直接聞いたのです。だから、話が合ったんですよ。抱き合ったですよ。「やろう！ この道で行こう」ということで、抱き合った。

「NHK」云々は、昭和六十二年十二月八日放映のドキュメンタリー特集番組『日米開戦不可ナリ』制作の過程で資料収集したことを指す。この番組は、小野寺百合子著『バルト海のほとりにて』の前のタイプ印刷による私家版（タイトル不詳）に基づき制作された（「扇一登氏関係文書」六―二一、二頁）。

その間に、いろいろありましたけど、小野寺さんの奥さんが私にくれた手紙が沢山あるんです。その中で、小野寺夫人曰く、「主人は諜報の神様と言われていた」と。そういう小野寺さんが私に、「自分が世界中で、今まで一番信頼した人が四人いる」と。その四人のうちの一人は、小野寺さんの二つ上のクラスの土居明夫中佐――後の中将です。もう一人は、ポーランド陸軍の情報部長で、少将か何かだった。これは、ドイツと英国の偵察をやって、現地を駆けずり回ったりして

いる。もちろん、名前を変えて、「イワノフ」とかいう名前で、諜報関係が詳しいんですよ。これは、二重諜者だと言われてね。

土居明夫、陸士二九期、大正六年陸士卒、ポーランド・ソ連駐在等を経て、昭和十三年一月ソ連大使館付武官、十五年三月参本ロシア課長、十五年五月帰国。その後、十五年九月参本作戦課長、十六年七月第三軍参謀副長、十七年七月第三軍参謀長、十八年三月関東軍情報部長、二十年三月第一三軍参謀長等を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』九八頁）。

小野寺氏の協力者として、特に重要な役割を果たした外国人は、当時ワルシャワに存在したポーランド軍地下組織の一員で、ドイツ担当の長であったミハール・リビコフスキー少佐（満洲生れの白系ロシア人「ペーター・イワノフ」と名乗る）、そしてエストニア参謀本部第二部長リカルト・マージング少将（小野寺百合子「小野寺武官の戦い―北欧の地の情報戦とリビコフスキーのこと」『正論』二四九号、一九九三年五月、一九二―一九五頁）。共に亡命者としてストックホルムに滞在中であり、特にイワノフはかつてリガ滞在中に取得した満洲国のパスポート、のちには「岩延平太」名の日本のパスポートを持ち、「通訳官」という立場で武官室に入入りしていた（同前、一九八頁）。

高橋 そうですね、ダブル・スパイ。

扇 もう一人は、「ユーニア」と言ったかな、バルト三国に一人ずつおるんですよ。

高橋 ラトビアでしたか。

扇 陸軍の情報部長が……。それが、みんな散らばって、ヨーロッパの、ドイツが主です。ドイツの国力を、発展している国力を、諜報で握っている。それから、もう一人は、英国の国力を、そういうふうに見ている。それらが、全部同じ諜報の、ディレクターとして小野寺さ

んを尊敬している。そういうことを、全部話してくれましたよ。

高橋 初めてお会いして、よくそこまで話しましたね。

扇 それで、抱き合ったんだ。「これは、やろう。やらなきゃいかん」ということで、抱き合った。

高橋 その時に、扇先生も「スウェーデンまで来なきゃ駄目だ」と思っただんですか。つまり、ベルリンにいちや駄目だ、と。

扇 その時に、小野寺さんが私に、「それじゃ、あなたにスウェーデンの公使館付武官として正式に来て貰えるように……」。

高橋 工作しよう、と？

扇 自分も工作する、と。陸軍省参謀本部の次長宛に、直ぐ電報を入れるから、そのつもりでおつてくれ、と。陸軍省参謀本部として、海軍省を動かして、私をスウェーデンの公使館付武官にするようにやつてくれると言って……。それで、内命的なものは、私が阿部中将とか横井武官に……。

高橋 小島秀雄武官ですか。

扇 全部、帰って来て、直ぐ話をしました。小野寺さんが、こういう電報を入れるそうだと。

高橋 小島さんでしょうか？

扇 それと同時に、横井武官、阿部中将は、私をスウェーデンにやれということ、大臣宛に（電報で）打っているんですよ。打った後、「そうするつもりだ」という電報は、阿部さんの所に返電が来ました。そういう状況だった。だから、公式にスウェーデンに赴任する手続きをしたわけですよ、スウェーデン政府に……。

当時の在ドイツ海軍武官は小島秀雄。横井忠雄武官は、すでに帰国済み。

高橋 最初にスウェーデンに行って小野寺さんとお会した時は、ど

のぐらい滞在したんですか。

扇 一週間ぐらいです。

高橋 小野寺さんは、扇先生をいろいろどこかに連れて行ったりしたんですか。

扇 連れては行かん。

高橋 スウェーデンに行かれた時の記録とか日記はあるんですか。

扇 記録は、日記ですな。

伊藤 その日記は、まだあるんでしょう。

扇 あります。

伊藤 それは、燃やしてないわけですね。

扇 それは燃やしてない。ヨーロッパに行つてからの日記は、燃やしてない。ただ、私は日記を書く上において、これが敵側に取られて困ること、いわゆる政治情勢的なことは一切書いてないんだ。初めから書かんように……。ただ、私は初めてヨーロッパに行くんだから、何ぼでも珍しいことはある。だから、見て回る。あるいは、自分の生活の周囲のことは、幾らでも、ずつと綿密に書いている。書いているが、これは田舎者がヨーロッパに行つた時と同じなんです（笑）。重要な政治的な話は、一切書いてないんです。誰に取られても、大丈夫なようにしてある。

スウェーデン公使館の内情

高橋 スウェーデン公使館付武官としてビザを申請しても、なかなか

ビザが下りないですね。それは、どうしても思いますか。
扇 そのビザを待ちあぐねて、とうとうそれで終るんです。

高橋 ビザが下りないので、自分で行っちゃったわけですね。先行しちゃった。

扇 下りないのは、公使が邪魔をしている。公使は、重光（葵）の次
に大臣になった、あの人。重光の次に……。

高橋 東郷茂徳ですか？

扇 東郷、東郷。あれ宛に、「扇を入れちゃいかん」と言うて……。

高橋 岡本さんがですか？

扇 ああ、岡本が……。

高橋 東郷さんに？

扇 外務大臣宛に電報を打っている。「扇を入れちゃいかん。引つ掻き回すから」と。

高橋 でも、ビザを出すのはスウェーデンですから。

扇 岡本が言うには、「自分の所の海軍武官として入れるには、まず公使に通知して、承認を受ける」と。それが必要なのに、やっていないです。

高橋 そういう電報を打っていたというのは、後で知るわけですか。

扇 外務電の暗号電報は、もうすっかり読まれている。

伊藤 やっぱり後で分かったんですね。

高橋 戦後ですね。

扇 それで、小野寺さんは、「外務電は読まれているよ」ということを（岡本公使に）言っているんですよ。言ってるんだけど、「絶対、そういうことはない」と頑張つて、私のそういうあれを、みな東郷外務大臣宛に打っているんですよ。「これを入れちゃならん」と。

高橋 岡本さんが邪魔をしたということですね。私、小野寺さんには生前、何遍もお会いしましたけど、奥さんが代わりに話してくれたんです。——岡本公使と小野寺さんとの関係が、非常に拙かった、と。

扇 悪いの、あれは……。

高橋 そこが陰に陽に、扇先生の立場を非常に拙いものにしたということですか。

扇 そうそう、非常に仲が悪い。小野寺さんは、「あいつは、政治のことは分からん。あれは事務公使だ。事務だけで、あれは馬鹿だ」と言っていた（笑）。表向きは、一応（小野寺さんも）普通にやっているんですよ。会合なんかでは、ちゃんとやっている。奥さんでも、そう。やっているけれども、内心は「こんな馬鹿が……」ということで、相手にしていない。物を相談に行ったりはしないんだ。ただ、小野寺さんは、「扇のビザを出せ」と振じ込んでいる。振じ込んでいるが、やればやるほど、それが激しくなつて、仲が非常におかしくなつた。それが分かったんです。最初に会った新聞記者五、六人が、私に話している。全部、岡本公使の悪口ばかりですよ。

あそこに、パリから行った日本人の画家夫婦がいるんです。今でも住んでいるんじゃないかな。……ああ、帰って来たか。その奥さんというの、おかしな顔をした人なんだけど、三品君と公使とが、それを巡って何やらおかしくなつとるんですよ。おかしくじゃない、一緒になつていっているんだけどね。

高橋 三角関係ですか。

扇 三品は、その絵描きの奥さんを、自分の事務室の秘書に入れとるんですよ。私は行って、会っているけれども、どうなつとるか分からんのですよ。和久田君が、それを調べたの……。おかしい奴らだ、と。

それを巡つてですよ。和久田君は、それを全部調べている。

あと、ストックホルム会というのを、東京へ帰ってから、ちよいちよいやつて、私が逃げて行つた所の連中も一緒にストックホルム会へ呼んでくれとつたんです。呼ぶのに、和久田が女関係を調べたんです。私は、「まさか」と言つたんだけど、和久田は調べて、確信を持つているんだ。新聞記者は、みんな和久田の所に来るんだから……。

高橋 岡本公使は、奥さんを連れて行つたんじゃないんですか。

扇 いないのよ。

高橋 それで、これを巡つて……。分かりました。

扇 だからね、ストックホルムの天地というのは、とつてもおかしいものなんですよ（笑）。

高橋 何をやっていいのか……（笑）。

扇 醜悪らしい。

伊藤 二十年四月に任命されますね。だけど、四月というと、ドイツ国内に、もう敵が入つて来ているわけですね。

発令前後に関しては、前掲「日記」に、次の記事がある。

「日記」に、スウェーデン行きの話が出て来るのは、次の箇所。

（昭和二十年）三月一日（木）曇雨模様

（前略）午後二時終つて役所に出る。

出て見ると午前の会報で私の瑞典行が決せられて居た。居ない間に小島武官の英断で、阿部中将も予てから心には描いて居られたらしいが（上司に洩らされたこともあるらしい）、一挙に定まったものだ。昨日小島大佐、藤村中佐とも話す時、兩人とも力説して居た。溪口大佐への手前など甚だ気掛りな所はあるが諸状況から已むを得ない。

今日は引越しやら転任（未だそうではないが）やらで一挙に何も彼も変

つてしまった。急テムポの変転だ。（後略）

三月二日（金）曇

辻副書記が昨日ケーニヒシュタインから帰つて来た。今日の会議で光延家族と辻とを瑞典に派遣することに決す。（後略）

三月三日（土）曇

（前略）私はともかくも瑞典に行く積りでもう今日はビザの請求をも出した。（後略）

三月五日（月）晴

瑞典へ行くことになつてからの感じは、日々の圧しつけられた様な伯林生活が何とはなしに別な明るさを以て迎へられることだ。尤もプライガー氏邸に引越して来たことは一層実質上にも私の生活は極めて豊かなものになつて来た。（中略）然しそれにも拘らず戦局の急激なる悪化は、一面に於て瑞典行さへも果してどうなるかといふ不安を呼び起さぬでもない。今日旅行査証の請求を出したが、東部戦局の今の沈黙が何時迄続くかに付て大きな不安が残されて居る。（後略）

三月六日（火）晴

OKM班も最近の機会に出発すること、藤村はビザが来たので速に出発すること、皆川と神谷囑託をコンスタンツに派すこと、私は当初より武官として着任する如く東京に打電のこと（瑞典は今日附で一般旅行者入国禁止の情報あり）等々、午前の会報でテキパキ決定して、実行に移す運びとなる。（後略）

三月二十七日（火）晴

私の瑞典武官任命がもう三週間以上となるのに東京の返事が来ないので重ねて催促電を出す。（後略）

四月二日（月）曇

私の瑞典武官任命に関し三月七日東京に發電もして至急發令方上申中であったが、仲々返事が来ず、一方査証も下りず憂慮して居たが、本日 of 電報に依り四月一日附にて瑞典国公使館附武官の發令が来た。之で一応明くなったが査証は未だ来ない。今日ストックホルムに電話して通知すると共に、査証督促の要求をもして置いた。(中略) 午後は休業だが何彼と落着かぬ。和久田君と共に私の自動車の瑞典送付やらベンチンの買付やらでこたごたする。(後略)

四月四日(水) 曇後雨 稍寒し

午前私の自動車チトロエンをハインケルの人に頼んで瑞典に送る為にワルネミュンドに自力輸送せしむ。(後略)

四月五日(木) 晴

(前略) 私の査証も来ない。いつまで延びることやら判らぬ。和久田君がピシピシ荷物や自動車の輸送を決めてかゝるので査証以外のことはほとんどんぢって居る。(後略)

四月六日(金) 晴

いつまで経っても査証は来ない。戦況は日に々々悪くなって、此の分では果して行けるものかどうか多大の疑問となつて来た。(後略)

四月七日(土) 晴れ

(前略) 瑞典からは和久田君排撃の電報が来るし不愉快の極みだ。

四月九日(月)

友岡教授、小野書記官以下大使館の大部分(残十四人)は、本日バードガスタインに向け出發した。戦況急激に進み、愈大使館も疎散避退を發動したのだ。私の瑞典入国ビザは一向ラチがあかぬ。ストックホルムへ電話をかけても武官は回避して電話にもつかぬ始末だ。

今日、大使館に公使館への連絡を頼みに行く。(後略)

四月十一日(水)

情勢逼迫の場合、瑞典への査証を待つて航空便で行くといふ旅行計画は危いので、次善の手段としてコペンハーゲン經由で陸路旅行の計画を立てる。和久田君が万端の準備を進めて呉れて、もう何時でも出發可能との報告を受け、明日の戦況等を見た上で決定のこととする。

そんなこともあり今日午後的小島武官のカラーレン行に同行してお別れをして置くことにした。午後三時半發、溪口大佐と共に武官に随行し、ワグナー少將の戦況説明後、ダビットソン大佐の家で茶の会を開催、予て武官とも話してあつた筋で、阿部中将以下の応急行動に就ても当方の氣持を話し、大島大使、デーニツ長官、何れに就くべきかに関し、迷ひある事情を明にし、海軍に就くことの必要を説明して置く。(後略)

四月十二日(木) 晴

午前にきつぱり決定して和久田君の計画に乗り、明日午後二時自動車で出發、ワルネミュンドを経て一先づコペンハーゲンに出て待機することに一決した。決めてしまへばさつぱりとして万般の準備もほとんどん拍子で進む。昨日来、和久田君から戦況に鑑みもう決心の時機たることを強く希望して来る。私もそれに依存はない。其の点丈けから考へればもう二三日前にでも出發して居なくてはならない所であらう。唯全般の機の熟するのをジーツとこらへて眺めて居たのが私の心境であつた。今朝の戦況としても進む行脚の続行に過ぎないが、マグデブルグに入りステンドールに來たといふ速度では、もう正しく発動の時機であらねばならぬ。それに独逸陸軍アタッシェアプタイリングも今夜出る。空軍も同様に今夜即時待機に入つた。茲に至れば私の行動も愈々最後の瞬間まで持応へたことになり、何等独側に対しても日本側内部に対しても臆する所はない。独逸の出国ビザ、丁抹の入国ビザ等何れも昨日以来の和久田、プリ

ンス等の熱心さで完備された。

「明日午後二時出発」を決定して、阿部中将の許を受け、ルイゼとメツケに電話通告、役所方面にも通知してしまへば、あとは光風清円の心境だが、唯此の戦況では、明日さへもが既に不安になって来る。正午に予定されて居た空軍省の地下製油施設のフォアトラグにも私はもう欠席して準備を進める。事務所は部官以下で右に参加して誰も居らず、午後の三時間を唯一人で淋しんだ。一方、瑞典の海軍武官にもリユーベック宛電報して査証取得の援助を依頼す。四時武官々邸に行き、ケッスラー大将の参謀長格たるMEIN少将招待会の流れに短時間入って居合せた甲谷大佐や海軍の技術官連中にお別れをする。

甲谷より小野寺少将との協力に付て誠意を披瀝した懇談があり。心持よく五時過ぎ辞去して池田君の所へ帰宅す。今夜は家の子郎党丈けで送別の会食を池田の所でやることになって居た。此の機に際し、私の住居が何等こうした会合に使ひ得ないことを深く憾に思ふが、さるにても池田君、ルイゼ等の心からの家庭的感情が私の住居の真近に得られたことは伯林生活の最後をうるほすうれしい感激であらねばならぬ。夕方の短い時間を大急ぎで荷物を纏め上げ、不用の雑品や半壊のトランク等自動車に積んで最後の伯林市内ドライブの気持で、又、伯林生活の出発点をなすアドロンホテル附近の見納めにもとフリードリッヒシュトラッセ方面迄飛ばし、雑品はフロイラインヘレネに与へてお別れをする。アドロン奉公三十七年、世界各界の名士に一緒にサービスして来た此の老女中が前後三ヶ月半の私への奉仕―それも唯簡単な片附けに過ぎないが―に於て国や人種を超越した人情の投合から涙をばらばら落して訣別の言葉を述べる風情は、戦利あらずして彼女までも遂に南方チューリンゲンの森に逃げなくてはならぬ悲境と併せて私の胸にもこみ上げる堪へ難きもの

を感じずには居られなかった。(中略)七時池田の所に帰る。ベルリン最後の晩餐はルイゼとバプケの心尽しに依り、私の外に池田、鮫島共に卓を囲み、新しいマルケンの来ない悲しさに、私の家で食べられぬ淋しい昨今をこうした潤沢な御馳走にありつく有難さに、つくづく感謝しつつ楽しく食べた。アラームの来ない中に、而も幸に電灯の下で和やかに団欒し得たことは、最後の思出として飽く迄も感謝に堪へぬものであった。荷物は全部作り上げたので今夜は池田君の所に宿泊することにする。(アラームの際のみ帰った)然し滞独一年有余、凡百の悲喜感慨を含めた一連の生活が今夜限りで終ることの反省は一種の興奮をすら喚び起して想念湧くが如く連り容易に眠りにつけず、結局午前五時雀の鳴声をちらちら耳にしつゝ漸く眠りに入つたのであった。

(日記 No.5)「扇一登氏関係文書」三一二七

扇 もう逃げることを考えなきゃならない(笑)。

伊藤 その時は、ベルリンにおられたわけですか。

扇 うん。

伊藤 でも、空襲が……。

扇 空襲が每晚来るんですよ。私は、二千坪ぐらいの大きな家に住んでいたんです。プールもテニスコートも、あるんですよ。それはね、クンツというユダヤ人の有名な世界的な鉄鋼王の家で、それを借りて住んどつたんです。

伊藤 そこは、爆撃されましたか。

扇 近い所に爆撃されたんだけど、命中はしなかった。その中に、屋敷を守る、あるいはサービスをする使用人の家族が二家族か三家族ぐらいいるんですよ、各家を持って……。それほど大きな金持ちの邸宅を借りて住んでいた。

伊藤 スウェーデンに赴任すると同時に、そこから逃げなきゃならないということもあるでしょう。ドイツが負ける……。

扇 だから、その家へ私が泊まっているんですが、一人じゃないんですよ。鯨島という海軍兵学校の教官をしていた人で、彼が阿部中将の通訳として行っているんです。私が阿部中将の補佐官になる以前から、その人と一緒に住んでいました。彼は二階で、大きな部屋が幾つもあるんですから。中には、ドイツ人に貸している人も二、三家族いたこともありますが、それはもう了解の上で、私はその家を借りているんです。

阿部中将の補佐官となることは、扇氏がハイデルベルクからベルリンに戻った当日、昭和十九年七月三十日には決っていた。同日の「日記」に、次のようにある。

七月三十日（日）

二ヶ月振りで伯林に帰る。（中略）私は阿部中将補佐官にせられることになった。当分家が見つかるまではアドロンホテルに居て、大いに勉強することにしよう。

また家に関しては、前掲「日記」に次のような記述がある。前述のスウェーデン旅行は、この新居の生活に必要な品々の買い出しという色彩が強かったようである。

（昭和十九年）九月十一日～九月二十一日（木）

（前略）私の住居の方は、グルネワルトに極めて広い庭を持ったビルを発見し、とんとん拍子で固まって来た。家は古いが堂々たる邸宅で、特にその庭園は何物にも換へ難い。鯨島教授、舟木書記、辻筆生等、共同住居として抱え込むことにした。（後略）

（「日記 No.5」「扇―登氏関係文書」三一―二七）

伊藤 食事は、どうしたんですか。

扇 食事は、何年か前に陸軍少将のハウスキーパーをしていて、五十歳になる人を雇って貰って……。 （彼女は）日本人のことはよく知っているの、食事を作って貰った。で、私と鯨島が、その食事を食べるわけです。朝晩ずつと……。

それから、そこで新聞記者を呼んだり、いろいろな名士を呼んで、私も御馳走したりしてね。何しろコーヒーと砂糖を、ふんだんに持っていますから……。ベルリンでは、こんな強いものはないんですよ（笑）。ドイツ人というのは、コーヒーと言ったら、目が吊り上がるほどなんです。「エアザッツ」まがいの、草のコーヒーを飲んでいるんですからね。それで、砂糖なんか、とてもないんだから。パンも、一日一切れですよ。二食持つのに、不自由をしている。

エアザッツⅡエアザッツ・カフェ…大豆を炒った代用コーヒー。

伊藤 先生自身も、不自由していたんですか。

扇 いや、私は外交官の特権で、食料券もふんだんに持っている。だから、それをチョッチョツと施すんですよ（笑）。やると、空襲の中でも飛んで来ますよ。それほど、ドイツ人はコーヒーのマニアです。それで、我々はガソリンが買えないでしょう。それが、「コーヒーをこれだけやる」と言うと、ガソリンが手に入る（笑）。コーヒーと砂糖を、こんなに持つとるんだから、強いもんですよ。

伊藤 金を持っているようなもんですね（笑）。

扇 まあ、そういう状況だった。

ベルリン脱出

伊藤 とにかく、先生だけでなく、他の人たちだってベルリンを逃げ出さなきゃならない状況になって来るわけでしょう。どういう協議をしたんですか。

扇 阿部中将は阿部中将で、身分が高いだけに、如何にしてドイツを逃げ出すかというのを自分で考えて、いろいろなことをやっとなんですよ。それで、とうとう無理矢理に、私の筋に乗せたんですが、先生（阿部中将）はドイツの一番大きな飛行機会社の技師たちと交流がありましたからね。そこから飛行機を出させて、自分はその飛行機に乗って、ドイツを離れてスウェーデンに行くという計画を、独自に阿部さんが立てたんです。それが分かった。分かって、私はまたそれに一苦労するんですがね。

私は、ドイツ海軍の防備隊のコペンハーゲンの司令と、仲良しになった。異常の努力をして、そうしたんですよ（笑）。するのには、骨が折れたですよ。骨が折れたというのは、まずそこを訪問して、いろいろ話をしました。下手なドイツ語で話をする。そうすると、向こうも私のコーヒーにつられて、打ち解けてくる（笑）。そして、そのクンツェという中佐参謀だったんですが、……（彼を）手に入れたですよ。ホテルに呼んだり、御馳走したり、コーヒー豆をやったりしてね（笑）。そこへ、毎日の如く行きました。行って、とにかく顔馴染になると、日本海軍の士官が、最後にどうするか、こうするかというこ

とについて、親しみを持ってくれる。女の子も四、五人いるんですが、そういう連中にもコーヒーを飲ますんですよ（笑）。そうして、クンツェと一緒に、その女の子も、私の泊まっているコペンハーゲンのグランドホテルという一番大きなホテルに呼んで、コーヒーを飲ませたりして接待した。連中と一緒に、ドライブしたりね。毎日、私は用事はないんですから……。

それで、必要な時には、和久田が自由なパスポートを持っているから、いつでも彼がストックホルムに行くんです。行って、ストックホルムの情報を、私の所へ持って来る。そういう関係で、ずっと続けておったわけです。最後には、阿部中将は飛行機会社の技師と仲良くなつて、その飛行機を出して、その奴もスウェーデンに逃れる、女の子たちも乗せて行く、というような独自の入国計画を立てた。

いよいよ最後……。私はコペンハーゲンにいても、ドイツ側から情報が入って来るんですよ。ドイツの海軍の中でも、裏の裏をやっている奴もいるんですから、そういう情報がみんな入って来る。毎日行って、連中を郊外あたりにドライブに連れ出して、私が御馳走してやるというようなことで、すっかり仲良くなっていたから。それで、「いよいよ明後日ぐらいに、ドイツが降伏する」という情報が入って来ました。そういう情報は、コペンハーゲンの一般市民の中にも流れて、市民は有頂天になっている。ドイツを恨みとしているんだから、ドイツが負けて、連合軍が勝つという情報が流れている。市民・群集がホテルの前の大広場にワーツと集まって、大騒ぎですよ。歌を歌うわ、辻芸人が来て何かやっているわ、電車の上まで市民が乗って、喜んでるんですよ。そういう状況だった。

扇（暢威）コペンハーゲンの話だね。

伊藤 今の話は、ちょっと混乱していますね。

扇 そこに、最後に私が行った時には命からがらで、鯨島と二人で「あれは、ドイツ組だ」と言われて……。いつやられるか分からんのですよ。「ヤパーシカ」とかなんとか言うて、みんな睨むんですよ。手を出すか、出さんかというところまで……。その危険を冒して行つて、司令官に会った。

私は司令官に、最後の時に、「ドイツの軍艦で、スウェーデンに逃がしてくれ」と言つたんです。ドイツの軍艦が、もしスウェーデン中立国の領域に入ると、スウェーデン当局は、それを押さえて返さんのですよ。

高橋 拿捕しますから。

扇 国際法で、そういう権利がある。「だから、絶対、中に入っちゃいかんのけど、日本海軍の、あんたが行くなら、中へ入つて送つて上げる」と。マルモ（マルメ）という港ですよ。ちよつきり七マイルしかないんです。しかし、途中に、公海が四マイルぐらいあるんですよ。その間、ドイツ海軍は敵の爆撃を受けるんです。それを、「敢えてドイツ海軍で、あんたを棧橋まで送つてやる」と言つた。そのことは、ドイツ海軍のスカゲラック長官の稟議を得ている、と。それで、スカゲラック長官が、「これを扇に持たせてやれ」と言つて書いてくれた手紙まである。ちゃんと、タイプライターで打つてある。それを見ますと、「ドイツ海軍が、日本の外交官の扇中佐を貴国に送る。棧橋まで送るから、それはハーケンクロイツの軍艦旗を立てているけれども、抑留しないで、その軍艦を返してくれ」と。そういう依頼状が、スウェーデンの沿岸守備隊の指揮官宛に書いてある。それを、私に渡したですよ。開封してあるから、直ぐ読んだです。

私は、嬉しくて涙が出た。もう、これで絶対ですよ。それで、その通りに、夜明けの午前二時にクンツェという参謀から、「ドイツは降伏するに決めたから、あなたをドイツ海軍の、ハーケンクロイツを掲げた軍艦で棧橋まで送るから、これ（手紙）を持って行け」と。あの時は、ありがたかったですね。本当にありがたかった。

伊藤 どこの港から乗つたんですか。

扇 コペンハーゲンの港ですよ。

伊藤 だつて、ドイツから行くわけでしょう。

扇 コペンハーゲンは、ドイツ軍が占領しているんだから。

伊藤 やつぱりそうだ、デンマークでしょう？ コペンハーゲンから出たわけですね。

扇 そうそう。

伊藤 それで、ストックホルムに行く、と？

扇 スтокホルムじゃない、マルモという港があるんですよ、直ぐ向かいに……。

扇（暢威）（地図を見ながら）マルモは、ここですよ。スウェーデンは、こつちで、ドイツはここです。で、これがデンマークですね。コペンハーゲンはここですから、ここからマルモまでが七マイルですね。扇 この公海の間、敵が爆撃して来る。敵の飛行機が、ウロウロしているんだから。それで、ドイツの海軍は、ここにおるんだ。

扇（暢威）デンマークはドイツが占領しているから、ドイツ軍はここにいるわけですよ。負け男ですね。この青いのが国境でしょう。マルモは、ここだから……。

伊藤 そうか、すぐ近いんだな。

扇 危ない橋を渡つたものですよ。

伊藤 爆撃は、受けなかったんですか。

扇 受けない。

伊藤 夜ですか、昼ですか。

扇 朝五時……。夜中の二時に、クンツェという参謀が私に電話をかけてきて、「今から直ぐホテルに、お前を迎えに行く。軍港まで運ぶから、直ぐ全員を起こして」と。軍港まで三十分ぐらいかな。私は、十九人を抱えとるんだから……。

伊藤 阿部さんもいるんですか。

扇 阿部さんもいます。私は三、四日前に阿部さんに、「ドイツ海軍で送って貰うから、私の所に来なさい」と呼んだのです。阿部さんは、直ぐ飛んで来た。で、無事に入って来た。際どいですよ。

伊藤 危ないですねえ。

扇 全く敵地にあるのと同じなんだから、命懸けですよ。

伊藤 今日、スウェーデンに着いたところで、終りにしておこう。

扇 しかしね、私は、これほど感動したことはない。「ドイツ海軍のハーケンクロイツで、棧橋まで着ける」と言うんだから、これほど感動したことはない。私はその間、三週間か、ストックホルムにいて、一切の努力をそれに集中しておったんだから。私は海軍生活で、これほどの努力を一心に打ち込んで、これほどの大きな成功を収めたことはないですよ。何とも忘れることが出来ない。

扇 (暢威) スtockホルムじゃなくて、コペンハーゲンね。

扇 大体、分かりましたか？

伊藤 分かりました。

扇 (彼は) ドイツのカイゼルから呼ばれて……。カイゼルと向き合って、御馳走になったんです。それで、ドイツの最高勲章を貰って

るという、そういう偉い人なんです。

伊藤 それは、さっきおっしゃったクンツェという人とは違うんですか。

扇 クンツェとは違う。その司令官です。

伊藤 その上ですか。

扇 親玉。これが偉い人なんだ。第一次大戦の時に、自分は仮装巡洋艦の艦長だったんです。ドイツ海軍の人で、召集されて艦長になった。艦長をしている間に、英国あるいは連合国の商船百五十六隻を沈めています。これにカイゼルが感嘆しまして、呼んで、ドイツの最高勲章を与えて、食事を一緒にした、そういう偉い人なんです。それが、私のコーヒーで…… (笑)。私との間は、そういう繋がりがあった。

伊藤 じゃあ、扇さんより、かなり年上の方ですね。

扇 年齢はどう違ったか……。上ですよ、年寄りですよ。

伊藤 扇先生から「年寄りだ」なんて言われると…… (笑)。

高橋 一つお聞きしたいんですが、ドイツにいらっしゃった時に、俸給は円で貰っていたんですか。

伊藤 円で貰うわけではないだろう。

高橋 ところが、それをドイツのマルクに換える場合、外交官特権で、ものすごくいいレートで取り換えてくれるんです。

扇 給料は、武官から貰ったか、大使館から貰ったか、はつきり分かんが、マルクじゃないでしょうか。

高橋 じゃあ、武官府のほうで換えていたんですか。

扇 もう金は余って余って、しょうがない (笑)。しかし、ドイツ人に対して、金は効かんですから。それよりも、バターやコーヒー (豆) 一握りのほうが、よっぽど効くんだから。コーヒー (豆) 一握

りというのは、大変な効力があるんです（笑）。時代が違うんですよ。

伊藤 そのコーヒー（豆）は、潜水艦で持って行ったものですか。

扇 潜水艦で持って行ったんです。

高橋 ドイツには、みんなコーヒー（豆）と砂糖を持って行ったんです。

扇 自分用に百キロと、別に百キロ持って行っている（笑）。それは、艦長が私のクラスメートだから、「これ、頼むぞ」と。面白い生活をして来た（笑）。

伊藤 ドイツからスウェーデンに行く時は、そのコーヒー（豆）はどうしましたか。

扇 持って行きましたよ（笑）。持って行ったから、強いんですよ。もう百キロはなかったでしょうね。

伊藤 だいぶ減っていたんだ。

扇 私の、その大屋敷の防空壕は、直接そこに弾が落ちて、大丈夫なんだ。一メートルの厚さのコンクリート……。

高橋 よくコンクリートがありましたね。

扇 それで、文士の林芙美子さんが、ベルリンにいたんですよ。で、いつも一緒に、そこに逃げて来る。でも、別に芙美子さんと、そう話をしたことはないです。ウイスキーを飲ませたりしたことはありませんけどね。

伊藤 怪しい関係ではない、と（笑）。

扇 もう少し話をしてあげれば良かったな、と思って……（笑）。

伊藤 矢部先生は、若い時にドイツに留学しているんですよ。その時の日記に、「ドイツ人の女性は綺麗だ、綺麗だ」と書いてあるんですよ。扇 それも、話がある。私の（屋敷の）防空壕へ、他の人も来るんで

す。広島出身の有名な絵描きがいるんですよ。そのお嬢さんは東京に来ると、いつもテレビに出たりする有名な人ですよ。その人が、いつでも私の（屋敷の）防空壕へ入って来るんです。近くに住んでおったらしい。

伊藤 戦争末期のベルリンは、爆撃であちこちやられて、大変だったでしょう。

扇 ガラガラですよ。まともに建つとるビルは少ない。直撃を受けない限り、ビルは残っていますからね。私の日本人の同僚は、女の子に至るまで、そういう所を借りて住んでいた。それで、通って来るんです。電車も動いているし、バスも動いている。

伊藤 スウェーデンに逃げた十九人は、全部日本人ですか。

扇 外交官が一人います、書記生が……。あとは、海軍武官事務室の雇員です。東京から行った人、あるいはドイツ人の女の子で、それらをみんな乗せて……。

伊藤 武官府が雇っていたドイツ人ですね。

扇 うん、みな乗せて行ったんですよ。それで、朝飯は、その船の部屋で、ちゃんとしたドイツの朝飯を御馳走になった。

伊藤 港からマルモまで、船でどのぐらい時間がかかるんですか。

扇 乗船して三十分……。夜中の二時ですが、それまでに（港に行くまでに）デンマークの銀座通りを通るんですが、そこにドイツの商社が出とるんですよ。大きく商売をやっていた。市民がその商社へ侵入して、商品をみんな道路にぶち撒けて、火を付けていた。道路はポヤポヤ燃えて……。夜になつてから、私たちの車はその上を走るんですが、ブスブス燃えている上を走って……。市内も郊外も、バリバリと機銃を撃ち合っている。デンマークの軍隊とドイツの軍隊とが撃ち合

っている。遠くでバリバリ、音がしている。近くではなかったです。それで、ブスブス燃えている商品の上を、車が走って行った。

伊藤 危ないな。

扇 それで、午前五時でしょう。港へ着いて、その防備隊司令の部屋に行つて、私が「お願いします」と言つた。その前に、もうそのの棧橋に、長さ百メートルの水雷艇がハーケンクロイツの軍艦旗を掲げて、着いている。それで、ドイツの小さい駆逐艦とかが、港の入口付近をグルグル哨戒しているんですよ。平生と同じように……。

それで、艇内食事を御馳走になつて、あとは公海へ出る頃に、暗号関係の機械とか拳銃とか、武器とかを、みな海の中に沈めるんです。暗号機械を叩き壊して、沈める。そういう準備をして、いよいよ船に乗る。船に乗るのも、ちゃんと「捧げつつ！」をされながら乗つて……。だから、その老司令官の誠意がありがたくてね。ここ（ポケット）へ手紙を入れるんですから……。それで、途中で暗号機械なんかを海の中に捨てて、拳銃もみんな捨てて、無防備になつて中（スウェーデンの領海）に入つて行った。

そうすると、沿岸防備隊の小さなボートが「停戦！」と言つて、来るんです。司令官が乗っている。止まる。上がつて来る。それに手紙を渡す。そうすると「イエス」で、ずーっと、入つて行ったわけですよ。入つて行ったら、横付けする。和久田君は、直ぐ飛び下りる。もう、その顔見知りですよ。だから、こっちは気楽です。和久田に任せて……。そうしたら、荷物は手続きだけで、ちよつと蓋を開けて見るだけで、中を出してみても、どうこうというものは一切やらない。そのままで。そして、あとは向こうのスウェーデン政府の役人が、大きなホテルへ、我々をみんな連れて行つたんです。

その前のことですが、阿部さんは航空会社の飛行機と高速艇を用意していた。その高速艇に乗つて行こうと思つて、そっちのほうへ行つとつたんですね。近いんです。それを私が、「ドイツ海軍で送つて貰うんだから、そんな危ないことをせずに、ここへ来なさい」と呼んだんですよ。「勝手に呼ぶな」と。「どうしても来なさい。あなたともあるう人が、そんなにいい加減な逃げ方はしないで！」と、怒つたんだ（笑）。「私を信用しないのか」と。そうなると、もう上も下もないですからね。直ぐ自動車に乗つて来ました。それで、私のホテルと一緒に泊つたんだ。四日間か五日間ぐらいだったかな。一緒にオペラを見に行つたりした。あれは、オペラが好きなんですよ。

伊藤 その頃、オペラをやっているんですか。

扇 あるんだ。コペンハーゲンで、オペラをやっているんですよ。

伊藤 コペンハーゲン？

高橋 いや、ストックホルムに行つてから……。

扇 それから、コペンハーゲンでは美味しい魚料理をやっているの、評判の魚料理店にも案内した。そこへも一緒に連れて行つた。阿部さんは、その何日間は非常に楽しく、私に任せつきり……。だから、ドイツ海軍のありがたさというのが、私は身に染み付いています。

影山 マルモ港には、何時に着かれましたか。

扇 近いですよ。

影山 一時間ぐらいですか。

扇 海峡の距離は、七マイルです。だから、途中で公海を四マイル走るんです。三十分か四十分ぐらい。その間、上ばかり見ておつた。敵の飛行機が、グルグル回っているのが見えるんですからね。

伊藤 非常に臨場感あふれるお話でした。

全員 有難うございました。

*参考として、ベルリン脱出当時の「日記」を以下に採録する。

四月十三日（金）快晴

愈々出発の日が来た。あはたらしい一日が始まる。午前八時起床、眠ったのか眠らないのか判らぬ。一晩中まんぢりともしなかつた様な氣もする。慥にそうであつたに違ひない。

先づ起きてハレンゼー迄ブローチンとブッターを買ひに出る。買はねば朝食がないからだ。ブッター三軒は普通のドイツ人から見れば驚くべき量であらう。自分で買って見て始めて其の恩恵が判る。自動車でパン買ひに行くのもで終りだと思ひつゝ飛ばして帰り九時半朝食。此の時も鮫島、池田、一緒に認める。食後直にツェーレンドルフウエストに和久田君を迎へに行き荷物等積込んで更に附近の川北少佐宅に行つて同乗させ急ぎグルネワルトの自宅に帰り此所で出発の一切の荷物をビュイック大型の自動車に積込む。和久田君が廿日鼠の如く敏捷に一切を立廻る。目覚ましい働きだ。（中略）

十一時ルイゼをゲロルドに送りその足で大使にお別れの挨拶に行き、陸軍武官室にも挨拶する。続いてOKMにスーシオン大佐、クロジック少佐を訪れ訣別すると共に、折りよく来合せた瑞典海軍武官リンド フォン ハーゲビー大佐に事情を話して査証の促進方を依頼する。之は非常に好都合であつた。

十二時半事務所に帰り残れる準備万端を整ふると共に、ルイゼの買つて来たコーヒ―、バター、米等を受取り、ルイゼに対し百マークとハンカチ等与へ、其の好意を感謝しつゝお訣れをする。池田君が所用ありて家に帰るので、彼とは特別な間柄であり名残尽きず道路に見送り、ルイゼ

と共に自動車で出発する迄見送つた。目まぐるしき変転で一切の之等のお訣れは極めて事務的に進んだけれども、流石に一年苦楽を共にした伯林生活であつて見れば握手の度毎に深い感慨の波は止め度もなく押寄せて来る。シュミット、プリンス、メッサーシュミット、ギロウ、フランツ、石渡、フラウホッペ、エリカ、キューネマン、クン、ベツカー、ハウスマイスター等々の名前も遠からず忘れるであらうが、その顔や人となりは永く心に残るであらう。

昼食後OKM班は急にあはたしく行動準備の打合等やり出した。之の班は今日迄無計画に流して来た嫌いがあり、最も問題にされて居たのが遂に居たゝまらず泥縄的感じを以て急ぎ準備にかかつたものゝ如くである。豊田大佐、川北少佐、奥津理事官の組はもう今日午後五時行動を起して南独ザルツブルグ北東方、Maller See の北岸に向ふといふ。之も容易ならぬ旅行だ。昨日来、陸軍の西中佐班が動き始めたのを手始めとして各部急遽行動を開始した。小島、伊木、永森、田丸の班はじつくりとした前からの腹案で之は成案を持つて居る。

何よりもうれしきは阿部中将が大島大使（早急行動を起すが如し）と別れて、溪口、鮫島、舟木を伴ひ、デーニツ長官との接触を主眼として行動され、大使には武官、中山、熊切が同行といふ風に行動が明確に定められたことであつて、之も今日午前になつて始めて確定したものである。之等行動の基本方針は私がずっと前から進言した所のものと符合して居り特に阿部中将の行動は永く私の思索黙考の対象であつたものである。此所迄定まれば何等思ひ遺す所もなくても私も出発出来る。

従てOKM班としては、阿、溪、今里、小林、萩尾、村上、舟木、吉野、酒井コック、小松、栗山、大木、大海、鮫島、（黒田）の十五人となり、池田、酒井、山本がその別班となる。

今朝酒井君がワルネミュンデより帰り、一切の打合を終つて来た。茲に先見的計画の実効を論者と雖も感ぜずに居られまい。

扨て午後二時出発の時刻とはなつた。小島武官、阿部中将、小島大佐、池田中佐等とお別れは特に感慨が深い。私が出たらあとはどうなるかと口癖の様に心配して居つた鮫島君との訣別は兄弟の如き感情を以て涙さへも催ほすのであつた。

午後二時四十五分、阿部中将も懇に外に送つて戴き一同の見送りを受け豪華なビュイックに永森技中佐、樽谷技大尉、外にハインケルの Schiefer=decker 氏及今一人の人を乗せ、荷物を満載しながらも、知らぬ顔で音もなく迂り出す種の余裕と豊さとを以て、何気なくなつかしきビュローを後にした。

大切なお訣れの感慨は既に往時に片附けられたといふ平静な落着を以て思ふは唯今日四時間の行手丈であつた。

途中ハレンゼーの手前で空襲警報あり、一先づグルネワルトの私の家のブンカーに入らんかとて前に車を止めて見る。ルイゼが来てもう敵機は西に去つたと告げる。意気軒昂、車を返して樽谷の宅に立寄り荷物を積み、再びオリムピック運動場に引返し、此所からナウエン行の本道に乗つて、三時半、愈々エンジンに物を云はせて西へ西へと伯林を後にした。一行六人語りつゝ、和久田君のさへた運転で坦々たる路面を我がビュイック音もなく百キロの高速で滑る。春風暖く耳をかすめれば、沿道の楊柳黄緑色の糸をなびかせて、春は正に酣と見られ、心も浮々として来る。唯思ふは残る独逸人——去るに所もなき人々の明日に迫る運命であり、其の心情に対する万斟の同情であつた。

「漸く伯林を離れた」押しつけられたベルリンのいらだつ空気を離れれば、田舎は戦をそしらぬが見ゆるのどかな風景だ。

ナウエン方面では道路上行き交ふもの悉く兵隊であり軍需品である。避難の群さへ時々見かける。流石に戦線が近いとの情景だ。ワルネミュンデ迄行程二四六軒、Nauen から Friesack Walkwitz Kyritz に出で、此所で漢堡行道路と分れて専らロストック向の一〇三番の道路に乗る。此の辺では時々西向の軍需品トラックを追越すのに苦勞するの外別に「戦線背後」の感じは何等受けなかつたが、ワルネミュンデ到着後、聞く所に依れば Kyritz から Pritzward の間は米軍戦車部隊先頭が着いたといふ Perleberg から僅か二十五軒位しか離れて居なかつたことに驚いたのであつた。フォレレの魚を産するといふ Plau を過ぎ、Krakow 湖を右に望んで北独の農村の行けども行けども茫漠たる瘦地と森林の波状に連る様を眺め、その恵まれざる風土に人文豊に生きて行く独逸氏族の姿を不可解とも見つゝ走りに走つた。七時四十五分頃ロストックに差掛つた際、コントローレンの為停止したまゝエンジンの電流停止で一寸面喰つた。然し和久田君の機械技師としての直感が全幅ものを云ひ、電路のゆるみを直に発見、凱歌を發して夕刻八時十五分頃、海岸のワルネミュンデに着き、砂浜を前にしたハインケルの宿舎に入る。ハインケルから Dr.Launberg 氏が来て、戦況の差し迫つて居ること、今夜は徹夜で工場の前処理を行ふこと等を語り、今後の万般に關し打合を了し夕食を共にして、夜のアラームもそしらぬ顔に十二時就寝した。

戦況を聞けばもう明日にでも米軍は此所に来るかも知れぬ氣配で、ハンブルグは市街戦、パーレスブルグには戦車の先頭が来た。ポツダムにも戦車が一部来た等々あはたゞしい限りだ。全部その通りとも思はれぬが、兎も角も私達の出發がぎりぎり結着の最後のものではあつたこと丈は間違がない。危い綱渡りを果たしたことに對し一日顔を見合はせる程であつた。明朝のケルツ行の渡航も八〇%は出るが状況に依れば出ないかも知

れぬ。その際は直航の手段に出るの外はないとも語り、此所までは来たものゝ未だ先のことは一抹の不安を残して居た。然し此の緊迫を伯林で聞いたとしたらどんなものであつたらうか。今日決行して此所迄来たことのうれしさを再び感ぜざるを得なかつた。

昨夜は二三時間しか眠られず、今日はあはたぶしい此の旅行を張り詰めた緊張の下に成し遂げた。空襲警報も解けない中にベッドに入り、走馬灯の如くめまぐるしく過ぎ去つた一日を考へると、戦争の悲壮なる反面と人生とのつながりが今更の如く深刻に忍ばれて、同時に伯林生活を通じて見た独逸人のトロイな一面が今となって見れば深く親しきものにさへなつて感無量のものがあつた。

四月十四日（土）晴、稍寒し（独国を去り丁抹に入る）

午前五時起床、和久田君と共に身仕度をして出発準備万端を整へる。永森、樽谷両君とは遂にお別れの挨拶も出来なかつた。六時ハインケルのラムメルツ氏来り、共に自動車で stutz punkt Kommandant のポーンシュッツ少佐を訪問。六時といふにもう起きて我々を迎へ、私の自動車輸送や連絡船乗船に関する万端の手配をハキハキと片附けて呉れ、一切の手配は出来た。出るか出ないかを危ぶんで居た連絡船がいよいよ出ると判つた時のうれしさは又格別だ。彼にコーヒー一盃度（ラムメルツ氏にも）を贈り、七時辞去する。（敵が近づくといふに一向緊張といふ程のものを認めず、港内に横たはる多くの船舶船艇も石炭や油がなくて動けないといふ一種の諦め観をさへ、彼に於て看取した）。彼少佐に案内されて自動車諸共に乗船する（其のまゝ乗り込むのだ）。関門連絡船位の大きさで、食堂に案内され諸手續きは極簡単に終る。兵隊が相当沢山乗つて居た。八時過出帆。深い深い感慨を乗せて連絡船は独逸本国を離れた。静かなオストゼーだが、勿論敵の出現が絶無とはいへない。掃海艇が先

行して磁気機雷の掃海をなしつゝ先導する。

出港後、黒パン三片にチーズ、ベーコン、レーバーブルスト等をつけた贅沢な朝食を給される。空腹においしく食べた。食後甲板に出て去り行く独逸の海岸を見渡す。

たゞ訳もなくくだらかな平凡な海岸で、何等の妙味をも与へぬが、感激は私の胸で限りなく湧かせつゝ八節の船足で北へ北へと去つていく。遂に独逸を去つた！ 彼女の亡び行く運命を親しく中で見送つてやることなく、今はの際に退去して行くことの心苦しさは、そんな風に考へれば限りなく湧くのであるが、私の此の根を下した感情——独逸に対する深い愛着——は、仮令他の国に行かうとも、又一生を通じて決して消えるものではない。嘗て兵学校時代に英人教授に随分可愛がられて、爾後暫くの間英人に対し可成りの親しみを持った経験はあるが、独逸人の実直さから見る時は、親しみを受入るべき程度に多大の本質的差異があることを、今にして一層深く感ぜず居れない。何よりもおごる英人の気質に代へて、宿命を甘受して苦しみ抜いて行く独逸人の憐れさに先づ何よりも同情せずに居れないではないか。そして此の恵まれざる国土、寒々とした風土（埋蔵資源等は別として、此の空漠たる荒涼の波状地を見よ！）に之れ丈けの人工を加へ、文化を生んで行く創造の力は、彼等が頑固一徹の理屈っぽい性格と、一事一物を忽になし得ず、規矩準繩に叶はされば気のすまない性格とに依つて、嘗て我々の反感を日常の茶飯事に於ても感ぜしめる嫌な反面を有しつゝも、矢張り大いなる感歎の対象にならずには置かないのだ！！

静にふり返る過去の一年は、戦争の渦巻のなかにありつゝ、矢張り独逸的生活の真端を充分に体得することは出来た。何よりも日本人を他人と思はぬ彼等の態度に深い感謝を払はずには居れない。何所に行つたつて

何をしたって、嘗て一度も白眼視されたり他民族扱ひをされたことがない。洵に居心地のよい社会であつたことを深く思はずには居れない！それだけに深い名残が今ひしひしと湧いて来るのだ！

追懷を繰返しつゝ沖へ沖へと船は去つて行く。

寒いと疲労とで無心に食堂に戻つて来てソファの上で居眠りする。ボーイに起された時にはもう十二時で、船は Gedsar の棧橋に着く所であつた。

棧橋では直に独逸海軍の老大尉が迎へて呉れ、同時にハインケル社のカートハウスと称する社員が挨拶に来る。我々二人も我々の自動車も何等の停滞もなく直に上陸することが出来た。丁抹といふ国への第一歩だ。ケツアーの町は此の棧橋を一つ持つ丈の些細な寒村に過ぎないが、予て聞く兇匪の出没（何所と明確には耳を止めて居なかつたが）を思ひ出して、独逸国内と違つた多少の警戒気分を喚び起す。棧橋でSSの尉官一人がコペンハーゲンに同乗を頼んで来たので乗せてやる。三人で直に出発、坦々たる道路を和久田君の運転で北へ々と快速で走る。町を離れて田舎に入る。春先、和やかに平和な農村の連続だ。独逸と一見異なる所は、村の家々が独逸の様に一個所に集団して居なくて、広く散らばつて居り、独逸で見られぬ軒屋が至る所にあることだ。どの家も小さいながら赤い屋根と窓硝子、レースのカーテン、草花の庭といった纏まりを見せ、小奇麗な住宅といった感じだ。然し其処に見られる住民は独逸人から見れば何れも服装こそ殆ど変らないが、体格といひ顔つきといひ、何か生活の意気込とエネルギーとを欠いた福々しい風情だ。景色は森と荒野との連続した波状地だが、独逸の如く壮大な森林は勿論見られぬ。松も少い。あつても独逸の如く赤松の丁々たる屹立ではなくて、黒松か、所々に日本のその如く曲りくねつた枝ぶりで無秩序に残存する

程度だ。其の他は何といふ樹か、未だ冬状のまゝで一向若芽を吹く気配もない。

アスファルトの道路はなだらかな起伏を繰返しつゝ、一本道に北に延びる。巾は狭いがいゝ道路だ。ビュイックは時速百キロで快速調に走る。

「等々独逸を離れて外国に入った」といふ安心とも感慨ともつかぬ漠然たる感じが、時々頭をかすめる。別に兇匪が出さうな気配もない。一四六軒の道程は訳もなく行けそうだ。

中途一時間位来た所で、名も知らぬ町にかゝる。海峡を渡る世界に有名な大鉄橋がある。全長二千米にも及ばんか。鉄道を通じ、中央行程の所に跳ね上りの装置さへ備へて居る。壮大な大土木だ。独逸人の建設にかゝるといふ。素晴らしい長橋だ。此の辺のホテルかレストランかで昼食でも食べやうかとの話が出たが、結局行き着いてから落着いて食べた方がよからうとなつて、美しく飾られた食料品店の窓を珍らしくふり返りつゝ行き過ぎる。真白なパンが強く感覚を衝く。食欲からではなくて、物の豊かさを思はしめる所から。草花の豊さも顕著だ。このよい道を一度運転して見るも経験の為とあつて、和久田に代り十分間ばかり運転する。こんな高級車では返つて手応へがない。使ひなれたポロ車の方が手応があつて自分に其の所を与へて呉れる様だと語りつゝ、それでもいゝ気持で運転した。

午後二時コペンハーゲンに入る。自転車の多いこと、町の規模が小さくて人口百万は別としても小国の首府を象徴して余す所がない。市の中央、カートハウスの向ひで、高い銅屋根の尖塔を持った四五階建の煉瓦造り、之が私のホテルパレスだ。

荷物を卸し、三階の一等室に納まる。何よりも昼食とあつて、二人で食堂に行く。伯林から来れば何といふ素晴らしい食事だ。今後毎日之を食

べて、此の贅沢な食事に無感覚になることは、然し何だか惜しい様な嫌な感じさへないではない。何となれば、美食過食は私に取って決してよいことでもないし、伯林の粗末な、然し栄養は充分な食事に却って限りなき恩恵を感じつゝ一年を過して来た体験が余りに深く身に沁み込んで居るからだ。こんなに潤沢によいものが不断にあつて見れば、それより受ける恩恵に無感覚となる、そのことは何だか淋しいではないか！贅沢を避けて簡易生活で行かう！（此所にも戦争の目に見えぬ感化を感じるではないか）

食後ハインケル社の技術部長ヒンツペーター氏来る。

ストックとの連絡船や通路の状況を聞くと、今日直に和久田君を派遣した方がよさそう。急に思ひ立つて午後七時の汽車でヘルシングボルクを持って急派することに決定、停車場迄三人共に行く。出発を見送って独り宿に帰り、空襲警報のない天地たることを私に歎びつゝ早く寝む。

四月十五日（日）晴

（前略）今日は役所訪問も出来ぬので終日無為に宿に引籠り、唯然し心ゆくばかり感想を綴つて思出の資に残し、又伯林への手紙も書いた。（後略）

四月十六日（月）

午前九時過、先ず此所の海軍関係の官庁として軍需省管轄の *Rüstung abteilung* に *Forstmann* 大佐を訪問。副官の *Kuntze* 少佐に戦況も聞く。尋で瑞典総領事官と連絡する為に独逸公使館に参事官 *Bobrik* 氏訪問。電話で瑞典領事 *Molander* 氏に査証が来た場合の急速連絡方を依頼して貰ふ。（後略）

四月十七日（火）晴

（前略）午後一時フオールストマン大佐とクンツェ少佐をホテル食堂で

招待、大へんな御馳走で歓談した（一五〇クローネ）。そしてその足で彼の所に行き、丁抹の食料切符を貰ひ、又今夜は独逸軍隊慰問用の映画に案内され、クンツェ少佐に伴はれて行く。九時頃ホテルに共に帰り、コーヒー等飲んで語る。

四月十八日（水）晴

十一時頃（？）突如として和久田君が帰つて来る。明日帰る予定だった丈に驚いた。ビザは漸く四月十三日になって正式に瑞典外務省に請求した由にて、凡そ問題にはならぬ。中央の電報が来ないことを以て何か不純なものと考え今日迄放置したことは到底常軌の沙汰ではない。洵に慨かしい極みだ。

独逸でさへも決戦の要求の前には法規手続の運用に広い融通を見せて居る。稲葉大佐よりの手紙に依り初めて此所へ来て此の態たらくを見せられ唯痛憤あるのみだ。阿部中将の重ねての電報を無視せる所も恐るべき反常識だ。小野寺少将が居たゝまれず公使に切言されて中央へ至急電を以て私の辞令を確め、漸く昨日瑞典外務次官に面会申入れたのだといふ。其処まで確めて和久田君は急遽マルモ迄飛行機で帰つて来たのだ。（昨夜）先づ然し之で二三日の中には何とか通知があるだらうとのこと。（後略）

四月十九日（木）

正午頃独逸公使館 *Bobrik* 参事官より私のビザは許可せられざる旨ストックホルム外務省より当地総領事に電話ありたる趣を伝えて来た。最悪の場合としてあり得ることを最初から覚悟はして居たが、尽すべきを何等尽さざるのみか寧ろ対岸の火災視して最後のどたん場まで放置した現地機関責任者の責は洵に軽からずと考へる。和久田君が未だ絶望に非る旨を強調してはげまして呉れるけれども、事態茲に至つては容易の問題に

非ず。今後の行動処置が走馬灯の如く頭に往来するが兎も角も今暫く落着いて模様を見ることにする。未だ現地機関よりの通知が来た訳ではない。

午後〇時半、独逸公使館に Bobrik 参事官を訪れ一応の話を聞く。別に変わったことも判らない。(中略) 然しともかくもリユーベックに居る瑞典の海軍武官にも私電を打って援助を依頼し伯林への通話をも企図したが遂に通じなかった。

四月二十日(金) 晴時々曇

(前略) 伯林との電話は許されぬとホテルの交換手が伝へて来たので直に別の電話番号、即カイザーアレーの登録されて居る番号で十時頃申込んで置く。

そして明日はハインケルのクーリエがワルネミュンデに出るといふので、小島大佐に宛てゝ近状詳細を書き終った頃、午後一時、伯林に電話がつながった。恐るべき通信力だ。なつかしきカイザーアレー、電話に出たのは正しくエリカの声らしい。すぐに溪口を呼び約十分間も続いたらか。全部の要件を充分に話した。独逸語だ。こちらから云ったことは、昨日瑞典領事から査証不許可の通知ありしこと、未だストックから通知なきに付それを待つて居ること、国家の威信にも関するので軽々に行動出来ぬこと、ストックの状況では四月十四日になつて始めて申入れたこと等々。

先方から聞いたことは本日午後、阿、溪、鮫、吉、の一行愈行動を起しコラン一行と共にフレンスブルグに向ふこと、もう皆準備完成、結局は我々に将来合同するやも知れざること、今後の私のことは河原参事官によく話して置くこと等であつた。

あと鮫島君と短時間話す。感慨無量だ。「溪口から万事聞いた」「よかつ

たね」と繰返して、私が云へば「よかつた」と感深く答へる。そして今池田中佐の所に待つて居るから、よく話すると結び alles gute を繰返し、遠い伯林に話す方も、聞く方も感慨真に無量であつた。

然し此の電話に依つて永久に伯林との連絡はぶつとりと絶たれた。もう伯林に誰も居ないとなれば寂寥の極みだ。それにしても阿部中将が私の献策した通りに行動して下さることは何といふ満足であらう。私出発の日にそのことが決定されて、さてその結果がどうなるであらうかは、私の深く憂へて居た所であつたが、行動が茲に定まれば全く重荷を卸した感じで、何よりもうれしく思ふ。私の査証も昨日稲葉よりの電話では、五部々々とのことだし、阿部中将は三品武官を独逸に呼んでも私の査証取得に邁進すると云つて居られると聞いて、深く感動した。(後略)

四月二十一日(土) 晴時々小雨

(前略) 漸くテレフンケンを買ふことが出来て今日からはニュースが聞ける。(中略) 八時過歸つて二人で私の室で夕食をする。それが済んでからラチオニュースを聞き入ると、戦局の進展著しく唯感慨無量だ。

ハンブルグ、ブレーメンは砲撃中、ニュールンベルグは疾くに占領されて、更にレーゲンスブルグへ五〇キロに進んだ。

東部戦線伯林附近は遂に戦場と化し Bernau 東方 Pankow 東方等に迫り、市内に砲弾が飛ぶ様になった。(中略)

今日十一時頃ワルネミュンデより電話ありし由なるが不在なりし為、明朝当方より連絡のことゝする。

四月二十二日(日) 晴時々雨あり

朝食後ワルネミュンデとの電話連絡を図つたが、先方の電話が普通の番号なりし為、外国通話出来ず、結局小島大佐宛に、先方より今一度掛けて貰ふ様に頼んで電報を打つ。(中略) 十二時から昨日の約束に基き軍需

部に行きクンツェ副官と其の秘書たるフロイライン Noe を伴ひ、四人で我々の自動車を出して、よい天気の外郊にドライブする。(中略) 私の室で夕食をして、あとラヂオを探つて伯林放送を求めるが結局出ない。

どうも昨夜きりでもう放送も出来ないのではないだらうか。(中略)

自分の査証も一向らちがあかぬので、明日は和久田君にマルモ迄行つて貰つてストックとの電話連絡で様子を明にし度い。そして将来の行動に關しても準備するところなくてはならぬ。

四月二十三日(月) 晴

和久田君は朝早く起きて独逸公使館に行き、出国許可証を作つて貰ふ。

十時半に歸つて来て、すぐにマルモ向け出発すると云ふ。共にタクシーに乗つて港迄行き、「マルモ」より「ストック」に電話する内容等話して置く(査証の見込、引退る訳に行かぬから此の俟つ、東京又は阿部中将のよりの電報如何、万一の場合に対する行動に付、小野寺少将、稲葉主大佐等の意見の打診)。(中略)

約束に従ひハインケルのカートハウス君が来る。私の部屋で昼食をとりつゝ四方山の話をした。来週かその次の週あたりから当地も警戒を要すと語る。万一の場合に処すべき舟の準備に關し内々話して置く。(後略)

四月二十四日(火) 晴

朝、和久田君からの電報あり。曰く交渉は尚継続中、コペンハーゲンの瑞典総領事の通知は誤、三、四日中には決定の見込なりしと。和久田は兎も角水曜日帰還す、と。之で少し安心した。ほつとした気持だ。いきなり入国不許可との断定を受取つては落胆せざるを得なかった。その中に十一時頃ワルネミュンデより小島大佐の電話あり。頼み度いことがあるから一度ワルネミュンデ迄来て呉れといふ。和久田不在の故を以て、兎も角明日彼が歸つた上で相談することにして置く。阿部中将は矢張り

兵学校の練習船に居らるゝとか。電話が途中二回切れたが通話は明瞭で、お互いになつかしく感じた。(中略) 夕食をホテルで行ふ。夕方が長くて八時半は未だ明いので運動の為にまた少し外出しやうかと思つて居る時に、電話で和久田よりの電報を伝へて来る。

それに依れば交渉は進みつゝあり、唯一点丈が未だ残されて居る。それでもう一日滞在するといふのであつた。此の分ならば先づ八分通りは成功し得るかと思はれ一層明くなつた。兎も角も夕方の町を風に吹かれつゝ一時間ばかり散歩する。(後略)

四月二十五日(水) 曇

(前略) 十一時頃ワルネミュンデより電話連絡あり。状況を通知して明日の連絡船では行くことが出来ぬ旨を返事して置く。一時頃から出掛けて床屋に行き、二時過独逸陸海軍軍需部を訪問、フレンスブルグへの電話連絡を試みたが今日は通ぜぬといふ。(後略)

四月二十六日(木) 晴

午前中部屋に閉籠りラヂオを聴いたり独逸語を読んだりしてワルネミュンデの電話を待機したが来なかつた。午後三時頃、和久田君よりの電あり。土屋、稲葉両君ストックより夕方着くといふ。私の査証がさては暗礁に乗上げたかと直感した。(中略) 漢堡黒田総領事より阿部中将、鮫島教授、二十四日同地発コペンハーゲンに向ふ、査証取得善処方の電であつた。両方面よりの来会者を専ら待つたが、八時頃稲葉、土屋両氏のみ来着、夕食を共にしつゝ私の査証の経緯を詳しく聞く。両人の来訪は阿部中将の為であつた。私の方は何とか行きそうだ。三時半迄稲葉大佐と語る。

四月二十七日(金) 曇夕方驟雨

午前、四人揃つて私の部屋で種々懇談してゐる中にウェアマハトコンマン

ドア Kopfermann 氏より電話あり、重要電報あるに付、直に來訪を要望して來た。行つて見ると阿部中将よりの電（フレンスブルグより）なかりしに付、直に同所よりフレンスブルグに電話連絡、午後一時連絡成りて同中将よりの昨日の電報の意図も了解、此所迄の旅行に付各種詳細を当方より伝へ、大体明後早朝出發して來ることに略話合ふ。私の査証の件も同中将より三品武官を仮令丁抹に出しても扇を入国せしむべき意味の意見具申が中央に出してある由に付、目下公使より照会中の扇を入れて三品を出すか、三品を残して扇を元に帰すかの問題は、東京より遠からず返電あるものと考えられる。（中略）稲葉大佐持参の一般情報に依れば、三月十日の帝都大爆撃以後の無差別な敵機の爆撃に依り、被害区域、帝都では浅草本所深川、城東向島、各区大部分焼失、下谷本郷、日本橋神田、荒川各区亦被害大、四月以降は豊島、板橋、王子、四谷、大森、荏原、品川相当被害、中野、蒲田大部等甚大にて、焼失戸数東京五十一万、大阪十三万、名古屋約六万戸、神戸約七万戸、罹災者東京約二一〇万、大阪約五一万、名古屋約二七万、神戸約二六万なりといふ。洵に大なる被害である。

四月二十八日（土）曇

午前土屋書記官及和久田囑託は所用の為外出する。私と稲葉は残つて雑談に時を過し、特に私のストック着任後の仕事の方針等に関し懇談する。その中にワルネミュンデより電話あり、小島大佐に稲葉大佐來訪の経緯、及今後の対処方針、参考事項に関し話して置く。（中略）土屋書記官との各般の打合も終つたので、今夕一九〇〇彼一人は汽車でヘルシンキボルグを経ての帰路に就いた。（後略）

四月二十九日（日、天長節）曇

阿部中将一行、本日十一時当地着の電、突如今朝あり。十一時半頃到着。

一行、阿部中将、鮫島教授、舟木、村上理事官、コッホ中尉、ヤヒヨウ運転手丈だ。久し振りに一同と会し非常になつかしかった。話に依れば三十日伯林脱出の際には既に砲声聞え、途中溪口大佐は自動車を衝突させて溪口、吉野は夫々相当の痛手を被り一泊、漢堡に三泊してフレンスブルグに着き、彼所でも毎日警報ありといふ。皆相当疲れては居る。阿部中将の入国問題を繞り稲葉と三人で懇談し、尚阿部中将の残れる五日間に於けるリッペントロップ（二回）（第二回目にヒットラーの回答を聞く）、カイテル元帥、デーニツ元帥等と連日面会、我要求を強く申入れ最善を尽して來られたらしい、しかしヒ綏統の答は『戦況非なる場合に対する日本の好意感謝に耐へず、然し斯る場合のことは今考へ度なし、戦況良好なる場合は大に派遣すべし』といふに在りき。D長官は油がない、ウーエーン方面を奪回したら出来る、又多数建造するようになったら出来る等といふので一向話には乗つて來て居ない様だ。

午後ずつと稲葉と大義名分を立てることに就て深く懇談して、中将への進言内容をも打合す。今日迄の行動は私の計画通に行つたが、あとを謬らぬことが肝心だから思ふ通りを強く意見を開陳して置いた。午後五時より郊外の先日行つた海岸の森に行き、東方を向いて一同遙拝式を行ふ。歸つて私の部屋で七人集つて祝宴を開き愉快に食事す。食後再び稲葉と二人で中将と右問題で懇談。ワルネミュンデ小島よりも電話連絡あり、明晚出發直行すといふので一応此所へ來いと命ぜらる。

戦況非、伯林では昨日既にカイザーアレーに入り今日はホーヘンツォルレンダム、ハレンゼー駅占領されベルリナー通も占領されらしい。殆ど目ぼしい所は全部だ。チアガルテンで戦つて居る様だ。（後略）

四月三十日（月）曇

昨日の放送ではヒムラーが瑞典赤十字を通じて英米に和平を申入れたる

も、英米は蘇に対して何等同様の申入なきを理由として之を突かねたることを伝へて居る。今朝和久田君が町のガレーヂに行つた所、当地独逸軍が大型自動車の微発を始めたことを確めたこと、並に昨日丁抹の放送にて丁抹外相は独逸公使に対し帰国を勧告した件（真偽尚不明）等があり、北独の戦況切迫と共に当地にも愈火がついて来るかと憂慮せられ、今朝は早速自動車の微発防止をオーバーコマンドアに依頼に行つた。

然し微発は貨物自動車の一部のみであつた。午前十時半コッホ大尉、ヤヒョウはフレンスブルグに向けて帰る。和久田と稲葉大佐はストックヘ向け帰る。あとは四人が残されて淋しい。（中略）午後六時頃ワルネミュンデ小島大佐より電話あり、昨夜命令として先づ此所に来れ、直接瑞典に行くべからずとの旨を伝えられたが、爾後只今迄の真剣な研究に依れば、遂にその命令に従ふこと不可能にして、独逸人を共に連れて行くこと、今夜既に出発して直接瑞典に入国すること等の計画を伝へて来た。いろいろ議論を往復したが已むを得ざる時は自己の責任に於て善処せよと云ひ渡さる。依て夕食後鮫島君を伴ひクンツェ副官に頼みて先づ郵便局にてストックに電報を打ち、次でホテルより三品武官に電話にて多分今夜出発する旨を伝へ善処を要請す。^(Chino)三品君も直に公使と協議、最善を尽す旨を伝へて来る。ワルネミュンデは恐らく明日は敵地となるだらうといふ。小島の心情に深く同情する。

（日記 No.5「扇一登氏関係文書」三一―二七）

五月一日（火）朝小雪後雨、曇、晴

（前略）公園を散歩して五時半頃帰つて来るとストックホルムより至急電話を掛けられ度旨の電報が来て居る。

七時半頃通じて三品中佐と話した所に依れば、小島大佐一行は瑞典国に到着したとのこと、何れ南部海岸であらう。其の他詳しいことは判らな

い。三品武官の所に本日午後通知があつたといふ。尚、溪口大佐に到達すべき電あるに付フレンスブルグにて受領しあるや否やを確める為、夕食後直に鮫島を伴ひウエアマハトコマンドアに行き溪口大佐にも電話を頼む。通話等待つ間に午後十時半頃、突如大本営特別発表として「ヒットラー」総統伯林に於て戦死、後任はデーニツ元帥なりとの発表あり。予て斯くあるべしとも考へ、英雄の最後として此の死に方が最美事であらうと私は藤村中佐に話したこともある程ではあるが、今突如として此の報に接すると、悲壮此の上もなく並居る独逸の陸軍士官達も悲壮な面持でラヂオに聞入つて居る。（中略）瑞典ラヂオは既に小島大佐以下数名の日本海軍士官入国の旨を放送したる由。

深夜阿部中将に対しフレンスブルグに今一度帰られて艦船東亜派遣の重要任務に対し重ねて最後の努力を払はるゝの必要なる所以を進言する。

中將も諒せられ、黒田大佐一行に対し速に小型の乗用車を以て当地に向け出発すべきを明日伝へる様に話された。（中略）

ムツソリニは二十九日に伊太利解放軍の為に殺されて十七人の仲間と共にさらし首になつて居るといふ。両雄の末路悲惨なるもヒットラー總統の戦死は武人として其の所を得たものと思ふ。（後略）

五月二日（水）雨

正午頃ウエアマハトコマンドアに行きフレンスブルグの溪口大佐に電話をかけ、阿部中将はマイセル大將來らば（現在 plan らし）要すれば何時でも帰るから遠慮なく電話すること、黒田大佐一行は速に來ること、阿部中将の当地滞在のことは東京にも電報せざること、溪口大佐は阿部中将の名前にてどしどし要件を独海軍に申入るゝこと、等々の件を伝へ、尚私の意見としても、もう一度阿部中将がフレンスに帰らるゝことが軍事委員としての最後の使命達成上必要なる所以を話して置いた。溪口も

最初よりその意見なる旨を述べて居た。(中略)

ストックとの電話連絡で、昨日の小島大佐以下の行動が今日の新聞に出て、それが伯林外交団の瑞典逃避として、独逸人十九人(内婦人二名子供六人)を伴ひヨットと曳船の中間位の船で(日本丸)金、食料品、酒等を多量積込んで渡つて来たことを載せて居る。而もその指揮官は海軍武官コンマンドア小島大佐にて以下八名より成ると称して居る。甚だ面白くない。BBC放送に依れば本二日午後三時、伯林要塞司令官は蘇軍に対し降伏を申込み捕虜七万以上といふ。尚本日英軍は Lubeck 占領、蘇軍は Rostock 及 Warne=Munde 占領といふ。小島一行も最後の瞬間迄踏止まったことに間違はない。唯惜むらくは二段飛の考慮が足りなかったのと独逸側に因縁で引摺られて拙いことになってしまったのは重ね々々遺憾である。あれ程私からも電話ではつきり言つて遣つたし本人も充分心得て居りながら遂に引摺られたのだ。(中略)

五月三日(木)

(前略) 夕食は全部で阿部中将の所で認めた。其の間にストックより電話あり。私のビザはまた外務省(瑞典)の態度硬化で引懸つて来た。つまり三品を帰朝ビザ待合せで残すことを認めないのだ。どうしても出なければ折合はぬらしい。

五月四日(金) 晴

午前十時ウエアマハトコンマンドアに行つてフレンスブルグに念の為電話を試みる。今朝電話で尋ねた所では、昨夜のラヂオで云つた如くフレンスブルグも解放と見られ、もう電話連絡不能と云つて居たが、行つて試みて見ると存外通ずるではないか。そしてクロジツク少佐が電話につき、もう溪口大佐以下全部今朝早く出発、当地に向かったといふ。それ

で安心して、実は阿部中将の当地に於ける用事も終つたので明朝出発フレンスに帰られ度意向に付それを告げんとせしむものなる所以を繰返し説明し、最後に何時の日にか再会を待つ旨懇切に相互の挨拶を交換し、感慨深く通話を終つた。その足でクンツェ少佐を尋ね舟のことを依頼しホテルも頼んで昼食を二人でスカンディアに取り、三時再びリュストングスタツフに帰着。(中略) それからハーフェンコンマンドア Kapit.zs.Von Fischer を訪問せんとしてた所、丁度其処に来たので面会して船のことを依頼すると案外楽に引受けて呉れた。一安心してホテルに帰る。そして溪口一行を待受けて居る間に外の広場がざわついて来た。何か大きな声を上げて活気づいて来た。何だらうかと訝つて居る間にホテルのボーイが来て独逸軍の降伏だといふ。

さては予てこのことあるべく、而もあるならば今明日中ならんと考へて居た矢先、余り早いので驚いた。その中に外の群衆は段段と活気を増し、青年達は自動車といはず電車といはず屋根の上に乗つて万歳々々の大騒ぎだ。広場を埋めんばかりの群衆となった。それにしてももう八時になるのに一行がつかぬし、舟のことが心配なので、もう一度鯨島君と共にクンツェの所に行き、Kapit.Fischer に電話をかけて見た所、今日午後直にアドミラル スカゲラックに電話をかけて、もう舟艇一隻を用意して居る。何時出るかといふ。之で非常に歎び且安心した。然し一方、溪口一行は途中の Korsor 及 Nyborg に尋ねても一向要領を得ず未だ来ないといふ。心配しつゝ群衆を分け分け帰つて来ると、一行はもうホテルの前に着いて荷物を上げて居た。之亦大いなる安心だ。話に依れば、OKMの自動車は群衆に取囲まれて放棄の已むなきに至つたといふ。一同元氣だ。広場は五年以来のネオンサインが点ぜられ、その一つ々々がつく度に群衆は大歓呼だ。(中略)

十二時頃までも騒は続く。

一方我々の方は今夜徹夜でも既に出発して対岸に行かうかと云ったが、電話も通ぜず、ストックの査証交渉も判らず、結局そのまゝになり、明朝明るなるを待つて舟を見に行くことにする。然し昂憤して仲々眠れぬ。午前二時、外では機関銃の打ち合ふ音さへ近く聞えて何となく物騒な様だ。

五月五日(土) 曇

(前略) 昨夜十一時頃、今夜中に出発せんかと焦慮した甲斐もなくて万策尽き、明朝四時半頃和久田君と共に速に舟を調べに港湾指揮官の所に掛ける約束で、兎も角就寝したが、溪口との話も尽きず十二時を過ぎて漸く寢床に入る。然し今後のこと、応急行動のこと等々考へると却々眠れはしない。起床が早いからとて焦れば焦る程寝付られない。起きて冷水摩擦を行ひ、鉢巻をして書物など読みつゝ眠気の催ふすのを待つ間に、突如三時半電話あり。Major Kunize よりだ。今より一時間後に二台の自動車にて迎へに行く。貴官及爾余の Herrn 悉くそれ迄に出発準備をせられ度しといふにあつた。すわこそ来た!! 然しよくこそ此の援助に出でゝ呉れた有難い! とかをどりしつゝ、和久田、阿部中将等々の部屋を訪れて起して廻る。昨夕、武装解除は明朝八時を期して行ふとのラヂオ放送に依り、徹夜してでも出発せんと一度は試みた位の予感であつたのだ。一同大急ぎで荷物を纏め上げる。和久田君はターミナスホテルの丸尾君に電話連絡が出来ないので遂に出掛けて行く。「用心しろよ」と云ひつゝも単独で此の時刻に出掛けさせることの心配は深かつた。

然し兎も角も彼は行って来た。そして丸尾は四時半迄に此所に来ますと告げる。機敏な処置、其の実行力、さても頼もしい青年だと感動する。

四時半過、既にクンツェ少佐及グロース海軍佐官が、何れも平服で来て、

数人の兵員と共に荷物の積込を始める。玄関にてクンツェが私に小声で耳打ちして曰く、今夜英軍カストルップに空中着陸のことゝなれり、さればこそ貴官外一同を送り出すものなりと。

有難い! かくてこそ私がコペン滞在三週間、個人的に深く喰い込んだ甲斐もあつたのだ。恐らく之は Kapitän Forstmann 及 Kapitän Fischer の深い慮りと真からの同情、友情より出て居るものと思はれる。

此のことなくして、そのまま英軍の手中に入ったら、そも如何なる結果となつたらうか!

英軍進駐と聞いてどきつとした。素早く阿部中将及溪口大佐に耳打ちして全般の指揮に任ずる。第一便で私は先行する。正に五時十分頃。

既に夜は開けて外は明いが、冷雨静かに往還に注ぎ、ライトハウスブラツツ一体は、平静にして心配もなさそうだ。クンツェ少佐の熱い厚意に今更の如く深く感激し、彼との別れは真に感慨無量である。記念の腕時計を与へ、又テレフンケンのラヂオ機械を寄贈することを約して自動車に乗る。機関銃を構えた護身兵を乗せて自動車は銀座通りを港に走る。

道々に窓外を見れば、所々独逸人の商店は昨夜の群衆に悉く無惨に蹂躪されて、特に私が書物を漁つた独人書店は悉く焼払はれて黒焦げの書籍が路上に散乱し、商店内では数人の丁抹人が焼残りの書籍を灰の中に探して居るのをさへ認めた。そして独逸人の昨夜来の運命に対し深き同情を寄せ、逆に丁抹人の口非不謹慎な斯の種行動に対し強き憤怒を感じざるを得なかつた。車は走る。所々に人の群を見るが、之は早出の出勤者であり、又軒下の雨宿りに過ぎず、構えた機関銃に物を言はせる底の空気がない。港に十五分。入つて海軍の Flotilla chef に面接する。

Fischer 大佐の命令に依り、瑞典マルモに急航護送すといふ。而して今朝八時英軍 Kasstorp 飛行場に着陸の予定をも併せて承り、遅くも七時に

は出港せねばならぬと判つて多少気分も落ちてくる。暗号書を暖房用竈で焼却し、二回目三回目、遂に四回目が最後として着いた時は六時四十分、Kapt.Fischer 及、艦隊指令の少佐に夫々腕時計を贈呈して六時四五分、愈々三百噸、乗員二十三人の掃海艇（漁船）に乗艦し、数十個の荷物も悉く積込んだ。

Guter Reise! alles gut!! 独逸海軍の甚大なる厚意に依り、軍艦旗を高く掲げた正規の艦艇に依つて今瑞典国に護送されるのだ。之が夢でなくて何であらう！

港には巡洋艦ニールンベルグの外二三隻の駆逐艦及数十隻の小艦艇が横たはり、尚沖合には十隻に近い運送船や駆逐艦等が碇泊又は錨地變更の航行を行つて居る。正に堂々たる一大軍港のおもかげだ。

之が一時間の後には全部武装解除されて英軍の手に入るのかと思へば感慨無量だ。然るに不思議なことには士官以下兵員達は平然として何等平素と変りなく当直も営内挙措も何等の異変を認めない。艦隊司令の室に約半時間ばかり休んで居たが、同人は机上に飾つた夫人と子供の写真をいぢくりつゝ、私に何彼と話しかけ、仮初にも一時間後に敵軍が入つて来ることに關し多くの興奮を覚えて居るとは見られない。時々引出を捜して書類を数枚宛暖炉で焼く程度に過ぎない。兵員も平素の通り朝の日課を続けて居る様だった。之は到底日本人には諒解し得る所でない。我が乗艦第八〇一号は間もなく防波堤を出た。対空機銃三門を有し、掃海具を装備した堂々たる掃海艇で、艦長の少尉はたくましい特務士官と見られる。速力十節で走るから、マルモ迄二十哩は約二時間の行程だ。その中最初の七哩半が公海で、あとは瑞典領海内を岸に沿ふて南下するのだ。コペンハーゲン港外には数隻の小艦艇が高速で移動して居る。見渡すコペンの町々は滞在三週間の思出をも停めつゝ静に雨に煙つて居る。

和久田君をふり返つて、ドライブした海岸を指さしつゝ感慨を語るのも危機一髪を免れて心からの安堵を覚ゆればこそだ。七時半頃既に瑞典領海に入る。もう敵の攻撃を受ける心配はない。船室に入つて黒パンの朝食を摂る。流石に一昨夜来の睡眠不足も応へて疲労は激しい。八時半頃艇は停止する。瑞典の監視艇が横付して官憲が艇に移乗し兵器に封印し、次で再び行動を起して港内棧橋に入る。陸上官憲が来て親切に上陸に付打合を行ふ。兎も角も一同保税倉庫に一応入れられて、書付に身元等を書き込み、続いて形ばかりの税関通過を行ふ。自動車に積込んだ莫大な荷物に就ては、何等触れようもしない。唯纔に所持金の登録を行ふのみ。検査に就ても医者が来て一応咽喉をのぞき外套の襟を一寸めくつて見る、之はシラミを見たといふ手続たることだ。がだんだん判つて大笑ひだ。課税品、武器いづれも持たぬことにして、さつさと片附いて行つた。和久田君の氣転の利いた応酬振りが全幅ものを云ふ。此の間に和久田君は税関や警官と相談して、もうホテルクラマーに部屋の予約まで済ませて居る。一同徒歩で築港より程遠からぬ此のホテルに入り、普通の旅客と同様に落着いた。

之より先、我々が税関手続きを行つて居る間に、第八〇一号艇は我々の荷物全部を岸壁に上げた俣で待つて居た。我々が岸壁に来ると共に、ねんごろな挨拶を交換した上で直に出港する。我々の為に此の重大な使命を滞りなく達成し、独逸国の軍艦旗を最後に瑞典の朝風に翻かせて、そのありし日の栄光の名残を示し、岸壁に見守る大勢の市民や我々一行に送られて、感慨深く今出港して行く。送る我々も、送らるゝ乗員も、啻に飾目の一出港場面のみでなく、今急激に展開する栄枯盛衰の世界史の深刻な場面を強く背景に描きつゝ、此の小さな情景に無限の感慨を含めて居るのだ。『よくこそ此所まで送つて呉れました』ハーケンクロイツの

独逸軍艦旗に対し此の時程深い感謝を覚えたことはない。岸壁より打振る我々の帽子に答へて乗員の返す「ハイルヒットラー」の敬礼の規律もきびきびしく幾度も幾度も繰返しつゝ港口に向け前進原速をかけて出て行つた。茲に愈々独逸ときつぱり手が切れた。限りなき名残は相互に止めつゝ。

マルモの町は百三十年間戦争を知らぬといふ瑞典国の第二の都市、人口十七万といふ。飽迄も平和に充ちた美しい風景に包まれて居る。寛大に厚遇されたとはいへ、謂はゞ捕はれの身だ。昨日まで僅かなりとはいへ瑞典海軍武官として堂々入国の望を失はなかつた心境と比べれば、一段と深い暗影がさして、覆ひかゝる憂鬱を払拭することが出来ないではないか。「日蔭の存在」になつてしまつたのだ。故国との職務上の繋りがぶつとりと絶たれ、故国から一応度外に置かれなければならぬ環境に飛び込んでしまつたのだ。ホテルの食事が贅沢であつたり、居住や環境が昨日に變つて全くの平和界になつた等のことは、此の暗い憂鬱の蔭から見れば、何等の慰藉にはならない。当然、正規の入国の出来る身でありながら、区々たる愚かな仕打に禍せられて稲葉大佐や小野寺陸軍少将、さては土屋一等書記官等の甚大なる努力に拘らず、遂に此所に到つたことは諦め難き恨事であり、義憤でなければならぬ。伯林に於て昨年暮以来既に心用意する所あり、藤村君も常に遅れを取らざらんことを自分に忠言して呉れて居たのに、其の決行に當つて案の定事茲に至つたことを、藤村と津山が瑞西に於て幾度か述懐言及するだらうと考へれば、尚更義憤を禁ずることが出来ないではないか。

決然たる実行力と決断の貧困は、あらゆる場合に事成功を阻害し、屢々機を失して大いなる失敗を招くこととなる。自分の身上に関することとなるが故に遠慮した私の気持は、鈍い人の感覚に映らう筈もなかつた

のだ!! 然し今更愚痴を延べたつて帰らぬこと。大東亜戦争の終末段階にこそ大にお役に立ち度いと意気込んで居たのが、此度でぼつきりと折れてしまへば今後の一年か一年半の生活は空虚な抜け殻に過ぎないのだ。抜け殻生活には何の張もなく意気込も伴はぬ。『蔭で働く』ことの如何に困難なるかをよくよく身を以て体験した。之は統帥の中核的命題を供するものであることを今程痛感する時はない。(後略)

(日記 No.6)「扇一登氏関係文書」三二二八

(以上)

扇 一 登 オーラルヒストリー

第 6 回

[2001 年 5 月 15 日 14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 和子(長男夫人)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

スウェーデン幽閉

高橋 先日、御子息のお嫁さんのお父さんが亡くなられてね。

伊藤 関さんが亡くなられたんですか。

関之（せき・いたる、明治三十六年―平成十三年）、昭和七年東京帝大法医学科卒、九年検事任官、東京控訴院検事等を経て、二十七年公安調査庁総務部長、三十二年同庁次長、三十八年最高検検事、四十一年同総務部長を歴任。この間、法務府（現・法務省）の特別審査局次長として、昭和二十七年に施行された破防法の立案作業に携った。中央学院大学教授も務めた（NICHIGAI/WEB Service）。

扇（和子） 四月二十五日に……。

扇 一昨日、告別式をやったんです。

伊藤 お幾つでいらつしやいましたか？

扇（和子） 九十八でございました。（義父とは）二つ違いでして……。

扇 彼こそ、百歳まで生きる素質を持っていた人ですがね。

高橋 急にですか。

扇（和子） ちよつと、風邪をひいておりました。四年前にペース・メーカーを入れましたが、ペース・メーカーには細菌が付きやすく、この細菌にいろんな臓器をやられてしまいました。

扇 私より、ヒストリカルには、よほど大きな仕事をした人です。

伊藤 お話を伺っておきたかったですね。

扇 公安調査庁の次長で、破防法を一人で作った男です。オウム事件

の時には始終、テレビに引つ張り出されていました。

高橋 それでは始めます。今回は、無事コペンハーゲンを経てストックホルムに着いた話でした。阿部勝雄中将などをお連れしてスウェーデンに到着した日は、昭和二十年五月五日ですか。

後述のように、スウェーデンに入国はしたが、ストックホルムには結局、入ることは出来なかった。

扇 ドイツの敗戦の日です。

一般に「ドイツ敗戦の日」とは、ドイツ軍がランスおよびベルリンで連合国への無条件降伏文書に署名した五月七日、八日と考えられ、このうち八日が「ドイツ敗戦記念日」とされている。

前回、細かくお話ししましたが、前後ダブったりして分かりにくいので、粗筋が分かるようにと、一生涯の知恵を絞って（速記録に）手を加えました。

高橋 スウェーデンに着いてから、岡本（季正）公使に、阿部（勝雄）中将など、十九人一行を面会させたんですか。

扇 岡本公使とは、帰りに船の中で会いました。会った時に、岡本公使が、いきなり私に喧嘩を吹っ掛けてきて、「あなたは、私の言葉を聞き違えている」と言って……。

伊藤 それは、どういう意味ですか。

扇 彼は、私のことを「絶対（スウェーデン公使館付武官には）いかん！」と言って、東郷外務大臣に何通も電報を打っているんです。自分で書いて、自分で打っていることが分かっているんですよ。米国が外交秘密をオープンにしたでしょう。あの後、NHKが私と小野寺さんとを取材した後ですよ。

高橋 テレビ番組をやりましたね。

聞き取り第五回の註（二二九頁）にあるように、昭和六十二年十二月八日放映のドキュメンタリー特集番組『日米開戦不可ナリ』の制作に当たって、NHKに取材された。その間の経緯については、「小野寺百合子原稿」（タイトル不詳、「扇一登氏関係文書」六一二二）に詳しい。

なお、五月五日スウェーデン到着当時、査証問題に関して、幾ばくかの希望を持ち続けていた扇氏等であったが、早々に、見通しが暗いことを知るようになる。これに関して「日記」の記述は、以下の通り。

五月七日（月）快晴

（前略）三品君からはその他に、我々インターン組の今後の処理に関しては目下外務省と交渉中なること、此の一両日尚更に日本側に対する当国政府の監視取締が著しく嚴重を加へたこと、従つて我々の待遇等に関しても必ずしも所期の如く行かざる場合あるべきこと等を伝えて来た。もう私の入国査証の問題等は夙に消え去つてしまつた様だ。此の上は長期窪居の氣構を確立するの外はない。（後略）

五月八日（火）快晴

（前略）夜、稲葉大佐よりの電話に依れば、阿部中将及私の査証交渉は、岡本公使の外務省宛電に於ては、我々一行の当地到着の報告電中に於て「之を以て打切りと致度」旨の止めが刺されて居るといふ（土屋君の漏す所）

而して之を三品武官は知つて居ないと謂ふ。（知つて知らぬ振をするものかどうかは不明）若しそうであつた場合には公使が此の大切な事項を武官に相談なしに決定したこと、又武官が稲葉大佐よりそのことを聞いても一向公使に喰つて懸らうともしない、謂はゞ同穴のむじなにして荏苒遷延して遂に茲に至らしめたことが正に当初より期する所であつたと見るの外なく、洵に憤慨に堪へない所である。此の交渉を懸案のまゝの形

で残し度い我々及土屋氏の意見も全く水泡に帰してしまつたのではないか。

土屋氏及稲葉大佐の憤慨も当然であつて、小野寺少将から或は東京に發電されて居るかも知れぬ。兎まれ真黒な終止符は打たれてしまつた。（後略）

（「日記 No.6」「扇一登氏関係文書」三二二八）

扇 アメリカが外交秘密を解いた。日本で言えば、国会図書館の公開のようなもの……。

高橋 暗号電報の公開ですね。

扇 あそこへ行つて探して、みんな取つて来た。私の言葉を書いたものが、全部入っているんです。小野寺さんから私に送つてくれているのも、みんなあるんですよ。ですから、材料は何ぼでもあります。私は一生のうちで、これくらい真剣に努力したことはありません。

高橋 阿部中将を岡本公使に会わせようとはしなかつたんですか。

扇 いや、もうそんな段階ではないんです。こっちは不法入国ですからね。ただ、スウェーデンが非常に寛大で、一切のことは極力フリーにしてくれましたが、ただ、「どうしてもストックホルムへ入ることだけは、我慢してくれ」と。それから、私の行つていた人口八万人ぐらいのヨンチョピン（Jonköping）という町ですがね……。

この頃のことについて、「日記」には次の通り。

五月十四日（月）

午前六時起床。一同ヨンチョピンに移る日だ。不眠の不愉快さを乗せて七時汽車は出発する。配所に向ふ汽車の旅といった感じで一向面白くない。（中略）正午過、ヨンチョピンの町に着く。我々一行先行組は稲葉大佐が同行して呉れ、夕方に着く小島大佐以下イースタッド組八名は和

久田君が連行して呉れる。

町に着いて見ると人口四万に近いといふ丈けに一寸した観光地だ。美しい町だ。燐寸の工業地でもあるらしい。(中略) 配所としては先づ申分なき所であらう。此所之から何ヶ月か何年か住まはねばならぬと思ふと、つい気持ちも暗くなつて、美しい町だけれども見たくもない。黙りこんでしまふ。

(日記 No.6) 「扇一登氏関係文書」三二二八

伊藤 それは、ストックホルムに近いんですか。

扇 そこへ、みんな行つたんです。スウェーデン政府は、「スウェーデンの中で、どこでも、あなた方の住みたい所に住んでくれ。その代わり、(移動は) 一つの県ぐらい、あるいは都市の広さぐらいの範囲で、それ以外には、あまり出ないでくれ。出る時には、ちよつと警察に言つてから出てくれ」ということで……。しかし、私や阿部さんがストックホルムへ行くなんていうことは、認められないから、と。

高橋 じゃ、ストックホルムには行つていないんですね。

扇 「ストックホルムだけは、来ないでくれ。あとは自由にやつてもいい」と、非常に寛大でしたよ。ヨンチヨピンというのは、日本で言えば箱根というか……。あんな高い所じゃないんですが、湖畔の、実に風光のいい所なんです。ホテルも一軒、ちゃんとしたホテルがありまして、「そこへ、自由自在に住んでくれ。下宿するなり、どうやられてもいいから……」ということでした。

高橋 そうすると、扇先生はそこに、日本が終戦を迎える日までずっといたんですか。

扇 いたんです。

高橋 阿部さん一行と一緒に？

扇 ええ。阿部さんと一緒に……。生活自体としては、贅沢をしなから、ゴルフをやりながら、無聊に苦しむぐらい……。地元の人たちが非常に親切で、良くしてくれて、「日本人だ」と言つて、疎遠にするとかということは一切ない。みんな、とてもいい生活をしました。

高橋 ヨンチヨピンへは、小野寺武官はよく来たんですか。

扇 小野寺さんは、一遍も来ないです。

高橋 では、小野寺さんとは、常に電話か何かで連絡をして？

扇 ええ、電話連絡しますが、来ないですよ。

高橋 それで、和平工作を進めて行つたんですか。

扇 和平工作をするための、その行動は起こしたわけですからね。私がドイツに行く抱負も、そこにあつたんですから。この前、だいぶくどくどお話ししましたが、一筋で分かるように直したつもりです。

伊藤 それから後、具体的に小野寺さんと相談して何かしたんですか。

扇 いや、その前後に、小野寺さんに、「ビザを出すように公使に申し入れてくれ」とお願いしたんです。彼は、直ぐ岡本公使の所へ行つて交渉をしているんです。しているけれども、あの二人は表向きは普通にちゃんとやつていっているんだけど、全くお互いを敵視してるんだから。私はストックホルムに行つて、初めて小野寺さんと会つた時の状況を、ちゃんと心得ておりますから、仲を取り持つてどうこうというようなことは一切やらないし、その問題には触れませんでした。

高橋 ビザは、全然出なかつたわけですね。

扇 ビザは、全く出ない。岡本公使が、「ビザを出すな」という電報を外務大臣に何通も入れているんですから。「これ(扇) が来たら、引つ掻き回す」と。引つ掻き回すというより、「公使館を乗っ取るつもりだ」と書いているんですよ。

伊藤 で、実際に引つ掻き回せましたか。

扇 引つ掻き回しやしないですよ。何にも、しやしない。

伊藤 何にも出来ない？

扇 何にも出来ない。ただ、小野寺さんと「やろう」ということだけで、これは強烈なものでしたよ。

高橋 それは、スウェーデンの国王を通じた和平工作ですね。

扇 そうです。

高橋 そのあたりを、ちょっとお話ししていただけますか。

扇 スウェーデン国王は、熱心なんです。彼は日本の皇室に対して、皇室と王室ということで、お互いに親近感を感じると同時に、日本に対して好意を持っているんです。だから、戦争というものは、勝つばかりではないんだ、と。『レパルス』と『プリンス・オブ・ウェールズ』の二隻を沈めた時に、日本が沸き立っているのを見て、直ぐ小野寺さんに本当の心持ちを言ったわけですね。「自分は、英国のヴィクトリア王室と、非常に近い」と。グスタフ皇太子が、向こうの王族の娘さんと結婚しているんです。両家は、大体古くから行ったり来たりで、何でも直ぐ女王に、直接電話をかけられるような関係になっっているんですね。だから、「私は、いつでもエリザベス女王に電話で申し入れることが出来るから、いつでもお役に立つ」と。肉親同士が結婚しているという一番近い間柄ですから、遠慮がない。「遠慮なしに言ってくれ。いつでも仲介の労を取るから」と、王様自身が小野寺さんに言っているんですよ。

それから後も……。王様の弟さんに、ちょっといい加減な息子がいて、まだ二十歳過ぎぐらいなんですかね。年はよく知りませんが、王様は彼を目の中へ入れても痛くないぐらいに可愛がっているので、始

終、王様の所へ行つては、気儘を言っていた。しかし、スウェーデン人は、「あのプリンスは、いい加減な奴だ」と馬鹿にしている。また、裏貿易や闇取引をやったり、いい加減なことをやとる男だったようですが、王様は、ただ可愛い、可愛いで、いつでも王様の所へ呼ばれて行つては、内輪話を何でもしていました。

高橋 そのプリンスと小野寺さんは、親しかつたんですか。

扇 名前は忘れましたが、「プリンス」と言うんですよ。闇貿易のグループと親しいんですね。ですから、スウェーデン人自身が馬鹿にしているような、ええ加減な男らしいんですが、しかし、小野寺さんと王様の仲介者としては……。彼は王様に会つたら、直ぐ小野寺さんの所へ来ていました。そして、内輪話を全部打ち明けて、王様の意思をみな……。そういう仲でしたね。名前は忘れたですよ。

プリンス・カール・ベルナドット（前掲「小野寺百合子原稿」「扇一登氏関係文書」六一二、一〇頁）。

高橋 具体的には、どうやって和平工作をしようとしたんですか。

扇 私自身？

高橋 先生が小野寺武官と協力して……。

扇 私自身は、そんなことを考えて行つたわけではないんですが、「戦は、やめなさいかん」ということ、これは結論ですからね。王様も言っていました。が、「そうでないと、日本も直ぐドイツの戦後のような状況になるんだから、『勝った、勝った』で、有頂天になつたらいかんよ」と。小野寺さんに、直接言っているんです。私は、そんなことを聞くつもりで行つたわけではないんだけど、話している間に、それがみんな出て来たんですよ。小野寺さんは、全部話をしました。それは、後から証明がつくんです。あの人の言ったことは、奥さ

んが『バルト海のほとりにて』という本に書いていますから。

高橋 小野寺さんと扇先生と協力して、「なるべく早く、日本を終戦に導きたい」というようなことは、阿部さんにも話したんですか。

扇 阿部さんは帰って来て、小野寺さんと、こういう話をした、と。

というのは、小野寺さんから生の言葉を聞いた、と。小野寺さんは、「扇をスウェーデンの公使館付武官に正式に発令するように」という上申書が、阿部さんと小島武官から出て、「そのつもりでいる」という海軍大臣からの——軍務局長からかも知れませんが——電報も来ている、と。それは、私がベルリンへ帰ってから、直ぐ来たんです。というのは、三品という私より三期後輩がいるんですが、彼は武官じゃないんです。ストックホルムに駐在して、武官の代理でも何でもなく、資格がないんです。「駐在を命ず」というだけですが、そんな関係にあったもんだから……。

三品伊織は、昭和十七年二月十四日から昭和二十年四月一日まで、在スウェーデン公使館付海軍武官である。第五回聞き取り（二六頁）の註を参照。なお、昭和二十年四月一日から終戦までは、扇氏が同職にある（前掲『日本陸海軍総合事典』四三三頁）。

伊藤 扇先生がスウェーデンに行ったということは、日本の海軍省は分かっていたわけですか。

扇 行ったということは普通のことです、ただ、小島武官が、「君も一遍スウェーデンを見て来い」と。

伊藤 いや、そうじゃなくて、スウェーデンに入ったということは、日本の海軍省は分かっていたんですか。

扇 いや、分かってはおりんです、その時は。別に、言っちゃおりんですからね。

伊藤 小野寺さんを通じては、何も日本国内に連絡していなかったですか。

扇 いや、小野寺さんと会ったということは、私がベルリンへ帰って来て……。

伊藤 いやいや、そうじゃなくて、スウェーデンに行ってしまった後の話です。

扇 ドイツに送られて行ったという？

伊藤 いやいや、スウェーデンに行かれたでしょう。そのことは、日本では分かっていたんですか。

扇 その時は、分からんですよ。

高橋 知らせなかったんですか。

扇 第一、その前に、小島武官がストックホルムに行っているんですからね。あの人は、スウェーデンへ行ったり、イタリアに行ったり、あちこち始終歩いているんです。だから、私をどうこうという意思があつて、行ったわけじゃないんですよ。ただ、行ったんです。

伊藤 いや、そうじゃなくて……。

高橋 先生たちはスウェーデンに行ってから、本国の海軍省に対して「無事、スウェーデンに到着した。阿部さんも、スウェーデンに来ています」という連絡はしなかったんですか。

扇 そういう連絡よりも、「扇を、スウェーデン公使館付海軍武官に指名して欲しい」という電報のほうで、先に行っているんです。

伊藤 それは、分かります。

扇 それだけです。こつちの意思ではなくて、私が（スウェーデンから）帰って来て報告している間に……。小野寺さんは、自分で陸軍の参謀本部次長宛に、「扇をストックホルム駐在の正式武官にするよ

うに、海軍省に働き掛けてくれ」という電報を、直ぐ打ったんです。

伊藤 だけど、履歴書を見ると、四月一日付で、「補瑞典國在勤帝國公使館附武官」に任命されていることになっていますが……。

扇 ええ、これは出たんです。

伊藤 出たんですか。

扇 出たんですが、これが出る前に、直ぐ、「そのつもりでいる」という答えが来ているんです。だから、内命は、その前に来ているんです。

伊藤 本当の命令は、受けていないわけですか。

扇 本当の命令は出ているんですよ。

伊藤 出たのは分かりますが、それは分かっていたんですか？

扇 誰の所へ？

伊藤 扇先生は、それが正式に決まった、と？

扇 これは、僕宛に來ていますから。

伊藤 スウェーデン駐在の武官？

扇 ええ。

伊藤 スウェーデン駐在の海軍武官は、誰なんですか。

扇 いないですよ、今まで。

高橋 それまでは、いなかったんですね。先生が最初ですね。

扇 三品君はいるけれども、あれは、ただスウェーデンで在勤を命じられただけで、公使館付武官じゃないんですよ。

伊藤 武官になつても、不法入国だから、赴任できないわけですか。

扇 不法入国以前のことですよ。

伊藤 分かります。だけど、任命はされたけれども、実際には……。

扇 ビザが出ないんです。スウェーデン国の外務省からのビザが出な

い。ビザが出ないのは、岡本が抑えているから。

伊藤 ですから結局、この職務には付けなかったわけですね。

扇 付かない。

伊藤 出来ない？

扇 ええ、全然出来ない。出来ないで、終わっちゃった。

高橋 「首都のストックホルムに行っちゃいけない」と言うんですからね。

扇 全くカラで終わっている。ただ、裏のことはグスタフ五世を通じて、小野寺さんとの間は、ぎつしり固まっていた。「いつでも、やるから」ということで、小野寺さんは私に、「それには、お前がストックホルムの公式の武官になつて欲しい。海軍が一緒になったら、こんな強いものはないんだ」と。

伊藤 小野寺さんは、本国に電報を打つことが出来るわけですね。

扇 小野寺さんは打ちました。

伊藤 いやいや、先生が着いてからも……。

扇 ああ、それはやらない。着いてからは、私からは一言も中央には電報を打たない。

伊藤 小野寺さんを通じては、駄目なんですか。

扇 小野寺さんも、もうその時にはやれないですよ。私が除け者にされているんだから……。ビザが、ないんだから……。

伊藤 それは、そうでしょうけど、話は出来るわけでしょう。

扇 話は電話でします。あるいは、和久田を通じてやりました。和久田は、いつでも行ったり来たりしているから。

伊藤 ちよつと話が変わりますが、ベルリンにいた公使館の人たちは、スウェーデンに行った人と、スイスに行った人とがいるでしょう。先

生が、この前お話しになった藤村さんは、スイスに逃げたわけですね。
扇 あれは、私がやったのですよ。藤村との関係は、私が東京にいる時からじっくり考えていたので、いい加減なものじゃないんですよ。あいつの悪い点は、もう散々聞かされているんですね。クラスから除名される寸前まで行っているんですから。彼は生まれつきが、そういう男なんです。

伊藤 だから、両方に分かれたんですね。

扇 分かれた。分かれたというのは、私がそうしたんですよ。

伊藤 分かれたけれども、連絡は出来ないわけですね。

扇 ええ、後は連絡を取らない。(行つた時に)話しただけ。話すのに、私は東京にいる時からの宿題として、ジツと藤村を研究したんです。藤村はクラス・ヘッドで、海軍兵学校の一番ですから、秀才なんですよ。

敗戦の報を聞く

高橋 日本が降伏して、ポツダム宣言を受諾したというあたりの話に進みたいと思いますが、一件だけ……。扇先生は、ソ連が日本を攻めて来るという情報をキャッチしていましたか。

伊藤 ソ連の参戦を、予め感じていましたか。

扇 独ソ戦？

高橋 いえいえ、日本に対して……。ソ満国境を、ソ連の機甲集団がドーッと。

扇 それは知らんです。それは、小野寺さんがその情報を掴まえた。三国の情報部長の非常に強い連携、共同があつたんですよ。

高橋 ラトビア、エストニア、リトアニアのベネルックス三国ですか。扇 そうそう。小野寺さんは、その各陸軍の情報部長・少将ぐらいの連中から——奥さんの言葉によると、「情報の神様」だ、と。「スパイの神様」だと、その三国の情報部長から奉られていたんです。非常に尊敬を受けていた。

高橋 しかし、「近いうちに、ソ連が日本に参戦する」という情報を、小野寺さんは扇先生には伝えなかつたんですか。

扇 それは、小野寺さん自身からは……。有末が参謀次長と一緒に外務省へ乗り込んで、剣をガチャガチャやりながら、ソ連を仲介した和平工作という提案をしたでしょう。我々は、その状況を知っているんですよ。

ソ連の対日宣戦布告を知り、「日記」には次のように記された。

八月九日(木) 晴

昨八月八日は我々何も知らずに居る間に大事件が起つて居る。蘇聯参戦がそれだ。今朝七時半、ストックホルム和久田君が私の所に直接電話で「どうも大変なことになりますナア」といふ。何だと聞けば蘇聯が参戦したといふ。昨夜モスコフ時間八時にモロトフより佐藤大使に宣戦を通告したとのこと。

予てより此の事あるべきは想像し覚悟もして居たが、仮令あるにしても未だその時機が来て居るとは思はなかつた。

之を聞いて少なからざる衝撃を受けた。帝国政府もあらゆる努力を試みたものとは思ふが、蘇聯の国策遂行の為に理不尽に開戦して来たので如何とも出来なかつたものであらう。

思へば独逸降伏して以来正に三ヶ月だ。然し一切は予て計画的に行はれたもので、七月二十六日のポツダム宣言にも直に蘇聯は参加して居る。先般来、宗子文のモスコ行（既に再度滞蘇中）、最後通牒、（蘇聯との打合せなくして唯英米軍のみにて出来る性質の内容には非ず）原子爆弾の出現等、悉く有機的に構成せられた一連の計画に過ぎぬ。硫黄島や沖縄の占領すらあれ程の犠牲を厭はず強行したことは、今から考へれば原子爆弾の使用が大きく計算に入れてあつたこと勿論である。（中略）蘇聯宣戦後八時間の今日、原子爆弾の第二弾を長崎に投じたといふ。（後略）

〔日記 No.6〕「扇一登氏関係文書」三二二八

伊藤 何で知っているんだろうな。

高橋 分かりませんね。

扇 その当時、「そんな馬鹿なことを……」と。陸軍から言えば、第一の敵性国はソ連ですよ。第二がアメリカですよ。自分がアメリカと開戦しようとするわけですから、二つが敵性国として一番の焦点になっている。それに陸軍の若い士官が乗って、独善的な独り善がりの「八月会」とかいう会をつくって、ドイツのバーデンバーデンでやっただでしょう。

伊藤 ずっと、昔の話ですね（笑）。

扇 ああいう醜悪な陰謀や思想が陸軍にあったんですからね。だんだん、それが嵩じて五・一五事件になり、二・二六事件になる。

伊藤 日本がポツダム宣言を受諾したというのは、どこでお聞きになりましたか。スウェーデンの小さな町ですか。

扇 それはベルリンですよ。

伊藤 いや、そんなことはないですよ。

扇 ベルリンに帰ってから……。

伊藤 いや、ベルリンに帰らないですよ。

高橋 スウェーデンで終戦を迎えたはずですよ。

扇 ポツダム宣言受諾でしょう。

伊藤 スウェーデンで聞かれたはずですよ。だって、その時は、もうドイツは負けていますから。

高橋 ドイツに帰れないですね。

扇 スウェーデンと言ったら、ヨンチヨピンですよ。

伊藤 そうです。たぶん、そこでお聞きになったのだと思いますよ。

扇 そういうことは、和久田君が始終ストックホルムとヨンチヨピンとの間を往復していましたから……。

当日の「日記」は、以下の通り。

八月十五日（水）曇時々太陽現はる

正午のBBCニュースを聞く前に既に九時半ジエルン氏より日本の全面受諾のことを電話にて通知して来る。次で小島からも通知あり、更には正午前、鮫島教授からも東京よりの放送にて、御勅諭が発せられ且従来嘗てなきことながら、陛下御親しくラヂオ放送を遊ばされたること、此のラヂオ並に内閣告諭の内容を聴きて洵に崇厳そのものゝ感を禁ぜず、

日本が此の前代未聞の大事件に対し天皇御親政の下に秩序整然として機宜の処置を取りつゝある様が覗はれ、真に心強き感じを受けたること等の通知あり。遂に戦争が最後の幕を閉ぢ三十年の歴史に拭ふべからざる一大汚点を染めたる事がひとしく胸に迫る。

正午のBBC日本放送では、日本の回答に基く英首相の、今日零時発表の声明が読み上げられた。

それに依ると、帝国政府は回答として

一、日本政府のポツダム宣言受諾に当り詔書を発せらるべきこと

二、天皇はポツダム宣言条項実施に当り、大本營の執るべき必要なる処置に対し裁可せらるゝこと

三、陸海空の各軍に対し交戦停止並に武装放棄の勅命を発し各軍隊は聯合軍指揮官の命に従ふべきことを命令せらるべきこと
等を伝へて居る。

同時に鈴木内閣総辞職、阿南陸相の自殺が報ぜらる。有史以来の「降伏」が現実になってしまった！

そして正しく明治維新の昔に、或は更にそれ以上の日本に一躍縮小されてしまった。国民の感懷や如何に！ 況んや畏多きことながら上御一人の御懸念の如何ばかり御深刻に亘らせるゝことか。鈴木首相の苦衷や如何に。(後略)

(日記 No.6)「扇一登氏関係文書」三一―二八

伊藤 和久田さんは、自由に動けるわけですか。

扇 ええ、彼はフリーの民間のビザを持っているから。それから、公使館の英語の通訳も、よく遊びに来たですよ。だから、スウェーデンでは、私の下宿でもよく話をしていました。

伊藤 日本が戦争に負けて、スウェーデンの扇先生たちに対する扱いは変わりましたか。

扇 ちつとも変わらないですよ。

伊藤 これから先、どうなっていましたか？

扇 いや、これは、もう手も足も出ないんですからね。ただ現地では、警察署長が我々を監視するという立場を握っているんです。その警察署長と私は非常に仲良しで、とってもいい男なんです。だから、お互

いにいがみ合った取り締りなんか、一切ないんですよ。私は、同僚を連れて警察署長の家へ、何遍行ったか分からない。いつでも行ったり来たりして、私の下宿にも何回も招待しましたしね。

伊藤 まだ、その時はコーヒーも砂糖もありましたか。

扇 ありました、ありました(笑)。まだまだ、たくさんある。

伊藤 それは、スウェーデンでも役に立ちましたか。

扇 スウェーデンでも役に立ったんです。スウェーデン人も、コーヒーは好きなんですからね。その当時、一流ホテルの食堂に入れば、本当のコーヒーが飲めるけれども、何か条件が要るんですよ。だから、スウェーデン人にも、「ほんとのコーヒーなら、俺の家に」と言つて……。

伊藤 良かったですね(笑)。

扇 だから、レストランでは模擬コーヒーを飲まされました。

高橋 原爆が広島と長崎に投下されたという話を聞いた時に、どう思いましたか。

伊藤 それは、情報がないんじゃないの？

高橋 ヨンチヨピンで、原爆の話は聞きましたか？

扇 あれは、八月八日と九日ですね。

高橋 六日と九日です。

扇 直ぐ分かったでしょう。私は下宿の自分の部屋に、いつでも超短波(ラジオ)を置いて聴いておりましたからね。だから、連合国側の情報は、みな入るんですよ。

高橋 じゃあ、BBCも聴こえるわけですね。

扇 BBCでも何でも、みな入る。だから、それは直ぐ分かりました。伊藤 その時も、日記を書いていましたか？

扇 書いていますよ。

伊藤 それは、残っていますか。

扇 残っていますよ。

伊藤 じゃあ、それを見れば分かる（笑）。

高橋 一番手っ取り早いですね。

扇 おそらく書いているでしょう。

関連する「日記」の記事は、次の通り。

八月七日（火）晴

（前略）今日正午の放送で「原子爆弾」の発表あり。極めて大袈裟に取扱はれて居る。それに依れば八月五日広島市に対するB 29少数機の爆撃で初めて使用したるもの（一発のみ）として、対日戦を決定すべき恐るべき新武器となし米大統領トルーマン、英首相アトリー（チャーチル起草）両者に依つて発表されて居る。ウラニウムを使用する原子破壊に依るものにて十噸爆弾の二千倍の効力を有すといふ。広島市への損害は続いて発表せる所に依れば、市の六〇％は破壊せりといひ、東京放送では「相当の損害」との大本営発表である。

何れにしても従前の爆薬に比し驚くべき爆発力を有することは充分想像されるが、之を忽々今迄余り爆害を受けて居ない広島市に用ひたこと（軍事施設等よりも効果の目立つ所から？）僅か一発を使用したこと（製造の初期？）之を政略的に大々的宣伝を行ひつゝあること等から見ても、先般の最後通牒と関聯し日本の戦争継続意志の破壊に対し全力を集中しつゝある様が視はれる。（後略）

八月八日（水）晴時々曇

原子爆弾の効果に関しては未だ具体的に判らないが、敵側宣伝では広島市の六〇％破壊といひ、東京発表では「大半」といふ。千平方粁米との

情報もある。何れにしても広島を中心部が大部損害を受けたこと、又其の損害が凄惨にして市民が黒焦となり誰彼の差別さへつかぬともいふ程であること等は本当ではないかと思はれる。

広島市には古い知人も多く我が故郷である。況んや程遠からぬ所には私の老母も余生を送つて居られる。兎や角考へると夜も眠れぬ心配だ。各国語で放送する敵国のラヂオが口を極めて其の宣伝をやつて居るのにも気が痛む。（後略）

八月九日（木）晴

（前掲につき省略）

八月十日（金）晴

正午BBCの日本語放送は、強く原子爆弾の威力を報じ、広島爆弾長崎爆弾等を引用して、之が戦争への決定的効果を強調して居た。そしてポツダム最後通牒に対しての回答も未だ日本政府は明確なる決意を固め得ないで居るが、国土を原子爆弾に依り悉く荒廃に帰せしむるか、本宣言を受諾するかの岐路に立ちあり、ポツダム宣言は日本国家を滅亡せしめんとするものに非ず、宜しく速に本宣言を受諾すべきものなりとの意味のことを旺に放送して居た。

更に蘇満国境にては蘇軍濫りに進入して黒龍江を渡つて主要地数箇所を占領し、満洲里市にも入つたかの如き報道振りであつた。何所だかでは無抵抗裡に二十二軒進入したともいふ。

政略的宣伝は此所を先途とポツダムへの導入に関し最大の努力を続けあり。

ラヂオを聞いてホテルの当直に出掛け小島大佐と話して居る中に、午後一時の独逸語放送（BBC）を聴いた溪口大佐より突如電話あり。『唯今入りたる情報』として『日本政府はポツダム条件を受諾せり』と確言せ

りといふ。

容易に信ぜられないが、兎も角も確言したのには違ひないらしいので更に次の放送で之を確める為に漢口の宅に出掛ける。

二時の放送はよく纏めなかつたが、英語では『受諾するの用意あり』と聞えた。更に三時の放送を聞く。其れに依ると同盟放送に依り『我皇室の存続を条件として』居ること、又瑞西及瑞典両国政府を介して申入れたること等、何れも判明、先ず事実であらうと考へらるゝに至つた。

昨日のBBC放送に依れば七月初旬に陛下の親書を以て「スターリン」に対し和平仲介の申入があつた様であり、スターリンは之をポツダムに携行して示し、其の結果ポツダム宣言となつた。然るに仲介斡旋を執るべき当のスターリンが舊に此の親書を無視せるのみならず遂に宣戦してしまつたので愈々此の申入れとはなつたものゝ様だ。

日本政府の申入は大体次の様なものらしい（八月十日夕刻放送）

『本日、日本政府はスエス及瑞典両国政府に対し米英蘇華四国に対し次のことを移牒すべく要請せり。即、常に世界の平和を顧念し、速に戦争を終結して其の惨禍より救はんことを切望せらるゝ陛下の天命を拝受し、当地尚中立国たりし蘇聯に対し和平仲介を要請せり。不幸にして右は水泡に帰したるも、前代未聞の惨禍を防ぎ世界の平和に寄与せんが為、米英華後に蘇聯をも加へたる各首領に依り七月二十六日発表せられたる宣言の各条項は君主としての陛下の特権を阻害するが如き要求を含まざることの了解の下に受諾するの用意あり。此の了解を是認せられんことを希望し且速に之を明示されんことを希望す』。（後略）

（日記 No.6）「扇一登氏関係文書」三一―二八

復員

高橋 それから、日本への復員はどんな形でなされましたか？ スウエーデンは、扇先生たち一行に非常に協力的でしたよね。ビザは出してないけれども、非常によく面倒を見てくれたわけですね。日本が負けると、今度は扇先生たちを日本に帰さなきゃいけないということになりますよね。復員の問題は、スムーズに行きましたか。

扇 それは、アメリカがやっただんですから……。アメリカが、スペインの『プルスウルトラ』という三千トンぐらいの小さな船をチャーターしましてね。それをナポリに回航して、ナポリで我々欧州にいる外交官や日本の駐在員全員を乗せて、日本へ送り出すという計画はアメリカが立てたんです。それは一つには——これは想像に過ぎないんですが、我々もみな含めて、戦犯を裁判にかけるということもあるし、その当時のヨーロッパにおける諜報活動を研究することもあるし、何もかも含めてヨーロッパの者を、全部日本へ送り出す、と。新聞記者も何も、みな……。でも、特定の人がヨーロッパに残るということは、認めているんですよ。

伊藤 認めているんですか。

扇 ええ、認めている。だから、残った人もいるけれども、多くの人は、もう長いものだから、みな日本へ帰りたいがるのね。だから、みんな一緒に同じ船『プルスウルトラ』で、私と岡本公使なんかも一緒にすよ。

帰国に関して、屬氏が初めて情報を得たのは、昭和二十年十二月三十一日のこと。以下に掲げた「日記」の通り。一月になってから事態は急展開し、ヨンチョピンを去るところで「日記」も終わっている。

「昭和二十年」十二月三十一日（月）曇 零下六度

（前略）ストックからの電話に依れば、日本外務省よりマックアーサーに対し在外日本人招還（召還）に関し助力あり度き旨を要請せる所、自分では出来ざるも尽力すべしと答へし由にて、それかあらぬか当国外務省より公使に対し帰国希望者の員数を問合せ来れる事実あり。舟木君の話で何かしら明い様な空気もたゞよふ。と同時に帰国準備の妻子其の他への土産物などに付きとりとめもなきことを考へながら室から出る。（後略）

「昭和二十一年」一月十三日（日）

（前略）今一つ今日のラチオではスペイン政府はスペイン、ポルトガルの日本人を送還することゝなった。伊太利をも含む（瑞典は云はず）といふにあった。瑞典のみが最後となるのか。ストックでの観察では早くとも九月以前は望なきものゝ様である。（後略）

一月十六日（水）曇 気温零下三〜五度

（前略）ストックホルムの稲葉大佐より電話あり。帰朝の件はその際によく判らなかつたが夜九時頃阿部中将より、池田大佐急用にてスンドより来るに付三大佐集合との電話あり。十時池田君が来て、米国公使館より「無理にとは云はぬが、今、飛行機準備手配中に付、ナポリ本月二十八、九日発の西班牙船にて帰朝せぬか」との話が岡本公使宛にあり、公使は yes を答へたるに付、海軍は如何にするや今日中に返事をする様連絡があつた旨報告あり。早速応諾して準備の手配をする。十二時帰り荷物のことを考へる中逆上したので、雪道散歩に出て歩きつゝ前後処置を

考へる。然しなかなか未だ不明の点も多く策も立たなくて就床したがとうとう朝五時半迄眠れず閉口した。

一月十八日（金）曇 零下三度

今朝七時の汽車で愈ストックホルムに向ひ問題の核心を衝くことになった。（今日迄帰朝問題五里霧中にして向ふ所を知らず、但し稲葉の努力で目鼻はつきつゝあり）

午後二時電話連絡あり、未定のまゝ、但し概ね実現の方向にあるに付準備を進む。私は十時に起きてずっと荷物に掛つたが一向不明な為に荷造りには大いに苦勞をして而かも見当がつかぬ。三時にフルーアークスナ―を訪問、次第を告げると私を思ふ親心より遂に慟哭して私をかゝえる。私も渺からず感動して思はず涙をさそはれた。そして暫く話して辞去、町の買物に行く。

午後二時の電話連絡にはストックの錯雑した模様、手に取る如く、感銘深かつた。（中略）九時帰来、稲葉より先に電ありし由にてこちらから呼ぶ。今日の模様を聞く。未定。明朝七時、米公使館員来りて全員会合、それにて決定の由。

彼地当地共、明後二十日夕刻迄に準備して集合すべき要望あり。然し之も現計画が見透しを得たる場合との仮定に立つものにして、計画の骨子其のものが成否半々なるが如し。洵に混雑、其の様に達す。然し稲葉の働感激にたへず。九時帰宅後午前四時迄荷造を行ふ。未だ完成は勿論せず。

一月十九日（土）曇 零下二度

昨夜は夜通し荷造をして遂に午前五時に至る、それでも未完成。許容量五〇斤見当ではコクアー二個で精々となり非常に困難である。（中略）正午、稲葉より電話あり、決行のことに決定。酒井、山本共、向後君、瀬

崎夫妻、北山読売特派員外一名は遂に残ることとなる。

稲葉の問題は未だハカバカしからず。然し今日よき方に脈を得たるに付向ふ由、大丈夫解決と見らる。(中略)そして午後五時、阿部中将、溪口大佐と共に警察署長宅訪問。謝礼として千クローネ市に寄贈、コーヒーを御馳走になり記念品を貰って辞去。お別れの際、署長も自分も共に男泣きに泣いた。シェヒティンとの別れも悪かった。終始最大の好意を示して呉れた署長に対し、満腹の感謝を捧げる。

かくてヨンチヨピンの最後の日は愈明日となる。思出を秘めて一生に再び来らざる此の町に無限の愛着を残して思出に耽りつゝ夜通し再荷造を行ふ。

そして此の滞欧日記を忽卒の間に閉ぢる。ヨンチヨピンよさらば！

此の日記よさらば。何れの日にか再び汝と相見えん。必ず私の許に再び帰って来て呉れ、さらば!! 一月十九日夜十二時半

(「日記 No.7」「扇一登氏関係文書」三一三〇)

伊藤 ナポリまでは、どういふふうに行つたんですか。

扇 ナポリまでは、そういう船が公使館方面から来て、その元はアメリカの当局からでしょう。それで一月二十日頃でしたかな、「みんな同じ列車で、デンマークまで出る」と。

伊藤 船に乗らないといけないんじゃないんですか。

高橋 陸路は無理ですね。どこかで……。

扇 ストックホルム発のバス二台と……。

扇 (和子) ナポリまでは船に乗らなければ、陸だけでは行けないんじゃないですか。

扇 船に乗るんじゃないのよ。ストックホルムで仕立てたバス二台と、トラック四台。これは、食料品や何やら全部詰めてあるんだよね。ア

メリカが全部やった。男も、女も、新聞記者も、誰もみな同じトラック、バスに乗せて、ずっとナポリまで送る。

伊藤 そうしたら、またストックホルムとコペンハーゲンの問題が……。

高橋 そうすると、フィンランドを通って、ずっと陸路を行くんですか。

伊藤 いえいえ、そうじゃないでしょう。デンマークまでは、船に乗らなきゃ行けないでしょう。

扇 あその連絡船には、バスなんかも一緒に乗るんです。

伊藤 分かりました、分かりました(笑)。要するに、フェリーですね。

高橋 確かに、その通りですね(笑)。

伊藤 それは、アメリカの軍人がやつているわけですか。

扇 アメリカの、ストックホルムにいる当局がやるんですね。その下でキャラバンをつくって、そのまま夜も昼も走って……。

伊藤 ナポリまで？

扇 ナポリまで。夜も昼もです。

伊藤 じゃあ、夜はそのバスの中で寝るわけですか。

扇 夜は、バスの中で寝る。所々、林の中とか便所に停まって、ちゃんと用を足させるんです。それから、途中でホテルへ泊めてくれたところが二回ありますね。食事なんかはホテルで取って、入浴させたりね。アメリカ側の武官が乗りまして、ちゃんと、そういう一切のことをやりました。その日本側への連絡を、外務省の英語の達者な書記官が一人でやるんです。

高橋 バスに乗っている間、尋問はされなかったんですか。

扇 何にもしない。

伊藤 ナポリへ行ってもですか。

扇 アメリカの当局は、ほとんど個々のバスには来ないですよ。先頭バスか、どれかに乗っていたんでしょうね。

伊藤 でも、一応誰がいるという登録は、どこかであったわけでしょう。要するに、扇一登、某……というのを、全部リストアップしてあったでしょう。

扇 それは、それぞれの国の公使館とか大使館とか、ヨーロッパ全部ですから……。アメリカ側は、「ヨーロッパにいる日本人の主な者は誰々だ」という統一したものの（リスト）は、ちゃんと、もう出来てい

るんです。

伊藤 ナポリに集まってみたら、ヨーロッパ中から、みんな来ていたわけですか。

扇 そうなんです。

伊藤 さっきおっしゃった藤村さんもいたわけですか。

扇 ええ、藤村は来ていました。藤村には、「お前、スイスへ行つて、『アレン工作』をやれ！」と言って別れた。これは、長年の私の計画でした。

高橋 藤村さんと会った時に、藤村さんはその工作の話を扇先生にしたんですか。

扇 彼が、全部話しました。こうこう、こうやった、と。なかなか周到にやっていました。彼に付いていた知恵袋が、大阪商船の船舶部の主任で、ヨーロッパに長くおった男で……。何とかいう名前で、非常に親しくて、頭のいい偉い男なんです。

藤岡泰周「扇一登海軍大佐と和平工作」（雑誌『丸』別冊『戦争と人物』一三

人物・太平洋戦争』一九九五年二月、潮書房、一五六―一七一頁）によると、藤村義朗中佐のスイス行きに同行したのは、大阪商船出身の津山重美囑託（少佐待遇）であった。なお、この藤岡氏による扇氏の伝記執筆に当たっては、「（昭和）六三年四月二九日起 直語要旨」と書込みのある「扇一登大佐の回想録」など、種々の取材メモが作成されている。

高橋 しかし、その藤村さんの工作は失敗したんですよね。

扇 失敗ですが、あれは、とことんまで行きましたよ。ただ、向こうの予定があつて、その予定に間に合わなかったんですね。

高橋 それからもう一つは、藤村さんの地位が、あまりにも低過ぎる。当時、中佐ですよ。

扇 低過ぎる。

高橋 そういう低い地位の男が海軍省を代表して、和平工作などをやるはずがないと、アメリカは見ていた。

扇 そうなんです。送還船に乗って、藤村の報告を聞いて、初めて「よくやったな」と思いました。その時のアメリカ側の知恵袋がブルームという男でして、彼は宣教師の息子で、横浜で生まれた男ですから、日本に非常に詳しい。そういう詳しい男が、イタリアを引つ繰り返したアレン・ダレスの幕僚で行つとった。アレン・ダレスは、国務長官の弟ですよ。

高橋 ジョン・フォスター・ダレスの弟ですね。

扇 私は東京へ帰つて、彼に何遍も会っていますし、一緒に藤村の別荘で寝泊りしたりしてね。

高橋 ナポリから、スエズ運河を経て、インド洋……。日本に帰つて来るのは、こういうルートだったんですか。

扇 ナポリを出る時に、初めての所ですから、ベスピアス火山なんか

を眺めて……。今でも目に見えるようですがね。ずっと地中海の真ん中を通って、そうして最初に着いたのは中央アジアと言いますかな。

高橋 イスタンブールですか。

扇 イスタンブールには行かないです。あれは、ずっと北ですが、南の港へ寄って、船が石炭や水を積むのを、ただぼんやり見とるんですわ。一切、上陸しない。

高橋 その船には、大島浩大使も乗りましたでしょうか。

扇 乗っていました。

高橋 ただ、大島大使はアメリカに抑留されますよね。

扇 アメリカへ連れて行かれて、別の道に行っただんですよ。

高橋 どこから別れたんですか。

扇 分かんなんです。我々はナポリへ行っただんですから。その間に、とにかく……。それには誰が付いて行っただのか。私のクラスの豊田隈雄なんか、一緒にアメリカへ行っただね。

高橋 厳しい尋問をされていますね。

扇 厳しくて、ずいぶん人権に触れるような扱いも受けているらしいな。憤慨しておっただですよ。アメリカへ連れて行かれたのは……。ドイツ（大使館）の配置で、ドイツの「大本営」に付いていたのは、私とか阿部中将以下十九人ですよ。全部、海軍関係の人。たった一人、外務省の書記生がいましたが、これは留学していた男で、私が拾って行っただんですが、あとはアメリカへ連れて行かれて、アメリカで尋問を受けたり、いろいろ不当な扱いを受けたりして、豊田なんか憤慨しておっただ。

高橋 そうすると、先生は無事に、大した問題もなく航海をして、日本に？

扇 アテネに寄って、それからインド洋……。

高橋 シンガポールは寄りました？

扇 シンガポールに寄る前に、シシリー島に寄って……。

伊藤 シシリー島？ セイロンじゃないですか。

高橋 おそらく地中海で、シシリー島に寄っただんでしょう。

伊藤 だって、もうアテネまで来ちゃったじゃないですか（笑）。

扇 シシリー島へ寄っただんですよ。それから、シンガポールですよ。

高橋 香港は寄りましたか？

扇 香港は寄らない。

高橋 マニラ？

扇 マニラは行っただんです。いきなりマニラへ……。

高橋 台湾は寄りました？

扇 台湾は寄らない。

高橋 そうすると、マニラから東京ですね。横浜ですか、品川の棧橋ですか。

扇 品川じゃなくて、下田ですよ。

伊藤 下田！（笑）。

「奉職履歴」には、昭和二十一年三月二十九日、帰国（下田）と記されている。浦賀港と下田港を取り違えているのではないか。

扇 そこで、みんなが上陸させられて、アメリカの憲兵（MP）が来て、みんな鞆を開けられるわけですよ。私は金が残っていたから、デนมάρクを去る時に、あそこの「銀座」で、ドイツ人の店から銀の器を五、六個買ったんですよ。まあ、土産にしてやろうと思って……。そうしたら、その中の宝石入りの一番いい、細かい彫刻のある純銀の器を、アメリカの兵隊に取られました。

伊藤 全部、没収されたわけじゃないんですね。

扇 全部じゃない、それ一つだけ。一番いいやつだ。あとは、みなありますよ。

扇（和子）あとは、まだあります。コーヒーのお砂糖を入れたり、ミルクを入れたり……。

扇 こんな大きな銀のお盆とかありますよ、みんな……。

高橋 「日記」などは没収されなかったんですか。

扇 「日記」は、私が監禁されていたヨンチョピンの警察署長に頼んで、「これは私の大事な『日記』だから、保管しといてくれ。そして、あと平和になったら、東京のスウェーデン公使館に送り込んでくれ」と頼んでおいた。

高橋 でなきゃ、没収されちゃいますものね。

扇 で、その通りになった。なったんだけど、その時に、スウェーデンは自転車のいいのがあったですから。減速器付の、とにかく進歩したい自転車があった。その自転車を一台送ってくれたですよ（爆笑）。

扇（和子）それも、最近までありましたね。がっしりした昔のタイプ。

扇 あれは立派なもんですよ。

高橋 ハンドルは、真っ直ぐですか。

扇 ハンドル……。これはね、うちへ来とった植木屋が何かに上げたよ。

扇（和子）九十歳過ぎても、まだ自転車に乗って、「もう、おやめなさい」というのに、交通の激しい道を走るんですね。その時まで乗っておりまして。

扇 それを見に、日本の自転車屋がドカッと集まったんです。そして、

デザインを写し取ったりね。いや、スウェーデンの警察署長の一家とは、子どもや孫に至るまで、みんな仲良しでした。

伊藤 下田では、憲兵は、ある程度調べましたか？

扇 いや、何にも調べやしない。向こうが訊くとか、何にもやらない。

伊藤 一番いい銀の器を取っただけですか。

扇 それを取っただけ、私の知らぬ間に……（笑）。

「扇矢資材」の設立

高橋 それから先生は、直ちに浜田山に戻ったわけですか。

扇 はい。上陸して、それが済んだら、海軍省の車が迎えに来ました。それで、ここまで帰って来た。ここが残った。どうなってるか分からんですから、全く音信不通で……。

高橋 この辺は、全然焼けなかったんですか。

扇（和子）いや、そうでもなかったです。

扇 今の三井グラウンドの中に、防空砲台があったんですからね。それで、ボンボン、敵の空襲に対して大砲を撃ったんです。だから、爆弾なんかも落とされとるんだけど、家には落ちませんでした。

伊藤 海軍省は、その時は、もう復員省になっているんじゃない？

高橋 その頃は、まだ復員省になっていないでしょう。戻ったのは二十一年の何月頃ですか。確か復員省になったのは、二十一年の九月じゃないですか。

伊藤 いやいや、もうちょっと早いでしょう。だって、「奉職履歴」

によると扇氏は）二十一年の三月には、予備役から第二復員省の所属になっていきます。

昭和二十年十一月三十日、第二復員省の官制が制定され、同日、海軍省は廃止（前掲『日本陸海軍総合事典』四九二頁）。

高橋 そうですね。

扇 上陸した日に放免になったんですから。小野寺さんなんかは、直ぐそこで押さえられて、（アメリカの）憲兵に連れて行かれた。どこへ連れて行つたか、小野寺さんは「諜報の神様」で「大元締」だったから、いろいろ訊かれたんでしょう。

伊藤 小野寺さんだけじゃなくて、他にも、そういう人がいたわけですね。

扇 他に連れて行かれたのは、誰がおるか私は知らんですがね。私は、直ぐ放免になったんだから……。あと、誰が連れて行かれたか。あんまりいないんじゃないですか。

伊藤 下田に帰って来られたのは、三月ですか。

扇 二十一年三月。

伊藤 三月三十一日で、予備役になっていますよね。

扇 帰って来たら、直ぐね。

伊藤 その後、直ぐ、同じ日に第二復員省に入っていますね。

扇 我々は皆、一応、第二復員省に入れられた。これは、もう何にもないんですからね。食っていく道はないから、途方に暮れるところだったけど、海軍省は直ぐ残務整理で、直ぐ復員省に入れてくれて、総務部の部員になりました。

伊藤 何をしたんですか。

扇 それは、やっぱり残務整理で、復員局というよりも、全国に海軍

の財産がありますからね。昔の役所の後へ、みんな配員をして、後始末、残務処理をずっとやっただんです。それは、米内さんが海軍を葬るために、最後までやってくれましたから、あの人を中心にして残務処理をやりました。その間、私は、ずっと全国を見て回りましたよ。

伊藤 じゃあ、仕事としては、しばらくの間、元の海軍省で……。

扇 ちょうど、一年おりました。その間に考えて、私は自分の貿易会社をつくって、これで本式に自分独りで、全く自信はないんですが、全国の国有林、営林局、営林署を相手にして商売を始めたんです。まったくの素人で……。

伊藤 それは、何の商売ですか。

扇 これは、しかしその前に、私は戦争中に海軍の政策として、木造曳船とか、近海の連絡に使う、小さい鉄の船などの大造船計画を立てて、東條総理の所へ、私一人で行って計画を見せました。「これを海軍の政策としてやることに決めたから、内閣として、これを支持して閣議に掛けてやってくれ」と、ずっと説明したですよ。二日ぐらい行つたでしょうか。そしたら、東條総理も内輪で（検討を）やっただでしょうかね。「よし、やろう」ということでやっただんです。

その骨子は、幾ら南方を占領しても、ボルネオから石油を持つて来ることが出来ない。大きなタンカーに一杯積んで持つて来ようとすると、途中でアメリカの潜水艦や飛行機に狙われて、ごっそり、みなやられてしまう。何の意味にもならん。内地まで運び込めないんですよ。非常な苦手ですよ。石油、原油ということになると、海軍が唯一の資源として貯油場を徳山や徳山の他にも造って、タンクヘ一杯詰め込んだんです。詰め込んだのは、八百万トンか何かですが、限りがあるんです。それを戦争中に使って、だんだん戦力がなくなつて、心細く

なつたような状況……。

「それじゃ、駄目だから」と言つて、一つの打開策を申し込んで来たのが、長崎造船所の社長だった川南豊作という男なんです。これは頭のいい男で、私の所へ来ました。当時「蟻作戦」と言つただけで、「それなら、蟻が運ぶように二、三百トンの木造船のタンクへ重油を詰めて、百隻か二百隻か、支那の大陸に沿つて——領海の中を——北上する。蟻のように進んで、そのうちの半分でも日本へ着けばいい。そうじゃないと、大きな船だったら、一遍にやられてしまう」という見方を、私に持つて来たんです。二、三回来て、それを二人で調べたり、いろいろ議論したりして、「やろう」ということになった。

そういうことを決めるのは、私と、柴勝男というドイツから帰つたばかりのひと、藤井茂……。三人で相談して、「これをやろうじゃないか。これしかやりようがない」と、それをスタートにした。その計画を立てるに当たつて、一番知恵を貸してくれたのが、ナショナルの社長ですよ。

木造船増産計画に関しては、第四回聞き取り参照（二〇二—二〇三頁）。

高橋 松下幸之助。

扇 それと、（松下の）義理の弟の井植歳男です。井植さんが熱心で、二人で計画を立てる時、一切の知恵を私に貸してくれた。当時、ともかく（計画を）つくつて、その後やることになつて、山の材木の伐り出しは藤原銀次郎さんにお任せした。あれは、国有林の山を持つている。「山が坊主になつてもいいから、これをやろう」と。それから、もう一つは、総トン数二千トン内外の鉄の船で、種類は二、三種類あるんですよ。

伊藤 それは木造じゃなくて？

扇 鉄の船。やつぱり、それに原油を積み込んで、沿岸伝いに行くという、二つの計画を立てました。「甲造船」「乙造船」という大計画ですよ。海軍の政策として、それを内閣に突き付けた。

伊藤 それが、営林署との関係になるんですか。

扇（和子）お祖父ちやまが始めた「扇矢資材」と、今のお話とは関係があるんですか。

扇 そういうことをやったもんだから、私は全国のそういう大きな会社——清水荘平さんとか、日産の浅原源七さんとか、とにかく、その当時の大会社の社長さんから、あらゆる知識を借りました。そういう人たちが、みんな打ち込んで、最全力を尽くしたですな。だから私は、海軍を助けてくれた人たちの名前が消えないように、無理矢理に押し込んだんです。

東條総理を説き伏せて、閣議を通したとか（二〇二頁参照）。

そういうことをやった。木造船のほうは、非常な努力で藤原銀次郎さんがどんどんやつてくれて、私がドイツに行く前に、一日に一隻完成するところまで行きました。しかし、それから後は、アメリカに悟られて、沿岸でも飛行機でやられるんです。飛行機、潜水艦が待ち受けとつて、（攻撃を）やるんですな。だから、そのほうは、あまり効果が上がらないで終わりました。後から調べたら、何隻かは日本へ着いとるんですが……。ところが、「甲造船」の鉄の船は、南方から運ぶというところまでは至つていなかったけれど、戦後、引き続いて内地の沿岸航路および南方からの復員船に利用されました。戦後、私が帰つて来てからも、数年間は非常に役に立たんですね。実績を上げました。私は、帰つて来てから、船会社の常務になりました。その船を五、六隻利用しました。それに、自分も食わせて貰つたんです。

川南豊作が……。

伊藤 川南造船ですか。

扇 ええ。藤井茂も源田実も、そこへ入ったんです。海軍の猛者が川南豊作の所に、逆にお世話になって、それが何年か続いたんです。

源田実、海兵五二期、戦前は第一航艦参謀、軍令部一部一課部員、第三四三航空隊司令等を歴任。戦後は航空自衛隊に入り、航空幕僚長を経て、昭和三十七年七月～六十一年六月参議院議員（前掲『日本近現代人物履歴事典』一八九頁）。

伊藤 営林署との関係は、やっぱり、その時ですか。

扇 そうです。そういう造船計画という海軍の施策を、全力を挙げて助けてくれた大会社の社長連中が、素人の私がどうして食っていくか困っているところに来て、みんなで知恵を貸してくれた。それで、「扇矢資材」という会社をつくったわけです。

伊藤 オウギヤ？

扇（和子）「扇」と、弓矢の「矢」です。矢部さんという方と二人で始めたので、「扇」と、矢部さん「矢」を取りまして、「扇矢資材」という名前に……。

扇矢資材株式会社は「経歴書」（「扇一登氏関係文書」六―七一）によると、昭和二十七年六月十日、資本金百二十万円で東京都江東区深川平井町二丁目に創設された。会社沿革には、「会社創立数年前よりの関係に基き主として諸官庁への納品を取扱い、有力なるメーカーとの提携協力の下に、地道な運営を期して来ましたので、各方面の信用加はり、営業の地盤は確立して居ります」とある。木材、鋼材、機械器具（土建用機械、鋼具・工具、光学機械類）、橋梁工事・鉄骨・鉄筋コンクリート・建築工事請負業、シートや麻索類など繊維、事務用機械器具等を幅広く取扱い、林野庁ほか北海

道および東北・東日本の諸営林局や、清水建設、竹中工務店、神木製作所などを、主な納入先としていた。仕入先としては、岡谷鋼機、東京製鋼、東洋製鋼、ラサ工業、新和機械工業、日本工学工業、服部時計店、東京鉄骨橋梁などの諸株式会社が挙げられている。

なお、平成七年十一月十五日付の終業挨拶状（「扇一登氏関係文書」六―七九）には、「昭和二十五年以来、主として林野庁、営林局署の御指導のもとに、四十五年間に亘り、林野事業資材機器用品等の納入販売を致して参りました」とある。

この間、昭和三十七年六月二十七日に、杉並区下高井戸四丁目を本店所在地とする同名の法人設立申告書が作成されている（「扇一登氏関係文書」六一―一二）。

扇 「扇矢資材」の最初の仕事は、鉄材です。鋼材を、主に日鉄の社長なんかが私に卸してくれて、それを営林局へ納めるんです。それで夢みたいな話ですが、最初の成功は、秋田県二ツ井に今でも架かっている橋なんです。百六十メートルはある大きな橋ですよ。

伊藤 鉄橋ですか。

扇 鉄橋。その鋼材を全部、一手に納めたんです。それで、一遍に八十万円儲かったんですよ。

おそらくは、この仕事に対して贈られた、昭和二十八年四月二十九日付、秋田営林局長水野金一郎からの「感謝状」には、「この度長さ六十米の曲弦ワレントラス四連を連ねて米代川の清流に跨り剛壮な姿で銀杏橋が誕生しましたが、当時入手至難とされていた長大鋼材を要求する設計の俤に誠意をもって遅滞なく納入せられたあなたの協力に負う所大であります」とある（「扇一登氏関係文書」六―一一〇）。

高橋 すごくですね、しかし……。

扇 今でも橋は残っています。この時、岩に穴を開ける削岩機をスウェーデンの会社が造っていたんですが、私は、そこから輸入したんですよ。輸入するのに商工省の認可が要るんですが、その認可に保証金が百万円掛かる。その百万円を林野庁が、「おい、貸して上げる」とダーツと出してくれた。それで、橋を架けたわけです。

伊藤 だけど、それはまだ占領中のことですか。

扇 占領中ですよ。

伊藤 そしたら、GHQの許可が要るじゃないですか。

扇 それは、日本の政府内のことです。

伊藤 だって、貿易は……。

扇 GHQとの関係は、どうしたか知りません。しかし、それに構わずやったんです。その当時、占領軍の中に、オーストラリアの軍隊も入っていた。呉におったんです、この占領軍がね。……私は、米内さんが艦長の時、遠洋航海に行ったんです。

伊藤 ええ、前に伺いました。

扇 行つて、米内さんに、ずっと可愛がられて……。それで、ここ（呉）に来た司令官はその当時、陸軍の少佐だったでしょう。陸軍将校としては、たった一人、日本の外語大で日本語を勉強した男ですが、彼が司令官で呉へ来ていたんです。（遠洋航海の時に）私は米内さんから、「お前、行け。二、三人英語の好きな奴を連れて行け」と言われて、彼の家に三人か四人ぐらいで行ったんですよ。行ったら、奥さんも出て来た。自分の家族や近所の人、親類の人が十人ぐらい集まって、パーティをやった。奥さんは、ヴァイオリンの先生をしているんです。ヴァイオリンを弾いて、ダンス教育をやってくれて、我々が兵学校で覚えた一番簡単なダンス——ツー・ステップをやったりした。

そしたら、今でも残っているんですが、一人が日本から『越後獅子』の楽譜を持って行っていた。「これを、やらせてみようか」と言つて、見せたら、ターツと弾いてくれた。速い曲ですよ。それをやっている写真がありますよ。

うつつを抜かして踊っていて、さあ、時計を見たら、帰艦時刻を三十分も遅れているんですわ。いやあ、この時は、私は真つ青になった。あまり夢中になって、「これは悪いことしたなあ」と思つて、それから直ぐ船へ電話したんですよ。メルボルの郊外ですからね。電車でメルボルンまで来るのに、三十分は掛かる所だった。「どうしたって、これは帰るのに、夜中まで掛かるわい」と思つて、「しくじったなあ」というわけで、直ぐ電話を掛けた。そしたら、当直将校が米内さんに言ったんでしょう。米内さんが、「いいよ。遅れてもいいから、帰つて来い」と言われて、ホツとした。それで、駅まで送られて、こつちへ帰つて来た。それはそれで終わったけれども、その時の米内さんのことを書いた「世界で一番短い英語の演説」という私の文章は、米内さんのことを書いた本の、どれにも必ず載っているんですよ。今でも載っている。有名になつてしまった。

しかし、負け戦だったから、「呉に行きたいな。行きたいな」と思っていたんですが、とうとう行かなかつた。今では残念に思っていますがね。負けたんだからという、照れも大いにあるんです。遠洋航海後、奥さんと交わした手紙が、何通か手元にあります。

伊藤 今の呉の話は、どうなつたんですか。

扇 呉は行かずに、終わった。

伊藤 だけど、その人が呉に来たんですか。

扇 うん、呉の司令官になつて来た。

伊藤 会いに行かなかったんですか。

扇 会いに行かなかった。それは非常に残念に思います。

伊藤 さっきの「扇矢」の「矢」は、誰ですか。海軍の人ですか。

扇 「矢」は、私が専務取締役にした材木屋の矢部という親父です。

伊藤 これは、海軍と関係ないんですね。

扇 関係ない。矢部というのは深川の材木屋で、財産もあるし、食べ物の不自由な時に行くと、海老だとか何とか美味しいものを御上さんが作ってくれる。度々、矢部さんと一緒に行つて、御馳走になっていました。矢部さんとか、溪口とか、豊田とかと……。

昭和三十七年六月二十日付の「扇矢資材株式会社定款」によると、創業当時の会社所在地である江東区深川平井二丁目の矢部精一氏が、二百五十株を引き受けている（扇一登氏関係文書」六一一二）。

伊藤 それは、どの矢部さんですか。

高橋 矢部貞治さんですか。

扇 矢部教授です。

伊藤 矢部教授のことですか。行つた先の相手も、矢部さんなんですか。

高橋 材木屋の親父？

伊藤 材木屋の親父さんも、矢部さんなんですか。

扇 そうそう。

高橋 こんがらかっちゃつた（笑）。

扇 それで、学者の矢部さんから、奥さんと話をして、「十万円出しなさい」と。十万円を、この材木屋に委託するんですよ。そうすると、

「月一割配当を出す」と言うんです。

高橋 大変なことだ。

扇 これも救援作業ですよ。それを、溪口と豊田にやつたんです。

助かつたんですよ。それはねえ……。

高橋 溪口さんは、戦後何をやっていらしたんですか。

扇 あれは、能はないですから（笑）。技術屋ですから。海軍の委託学生として、東大を出たんですよ。経済をやったんですが、海軍としては何も、これという仕事はしておらんですよ。軍務局に入りましたが、「これは……」という彼の業績はありません。

伊藤 「扇矢資材」には、海軍の人は他には入らなかったんですか。

扇 私一人。私は帰つて来てから、食糧難で本当に食うや食わずというあの時代に、ここを坪四百五十円で買ったんですよ。

伊藤 だつて、元々あつたんでしょう？

扇 元々は、向こうの百坪。

伊藤 それに、ここを買い増したわけですか。

扇 ここから五十メートル先に、元の家がある。これは、戦後の名木を使った、浜田山でも有名な、唯一のいい家だったんですよ。

伊藤 材木屋だもの……（笑）。

扇 冠木門（かぶき門）があつて、大したもんだつた。

伊藤 「扇矢資材」の社長は、扇先生ですか。

扇 私一人、誰も人を使わない。うちの婆さん（妻・幸子）が留守番で、見習いが一人おつて、儲かり放題、儲かつたです。

伊藤 扱つた物は、鋼材の他には？

扇 輸入……。「ウインザーニュートン」という、（横山）大観が使つた有名な絵の具とか。長年、戦争で輸入が絶えて、そういう物がありませんよ。それから、削岩機をスウェーデンから輸入した。そういう独特のことをやつた。全国の営林署が、みな使ってますから。その当

時は、「国有林」(営林局)も財政が非常なプラスですから、何でも買うんですよ。だから、何でもやりました。内閣にも納めたし……。

伊藤 内閣に何を納めたんですか。

扇 内閣は文房具。現在の文祥堂は、私の仕入れ先だった(笑)。何でも出してくれるんですよ。

伊藤 それは、やっぱり人脈ですか。

扇 人脈(笑)。海軍省時代、あるいは軍令部時代に、私を一所懸命助けてくれた連中が、みな大会社の幹部になっているんですよ。偉いもんですよ、みんな……。

扇 (和子)やつて上げずにはられないという、人柄からも来るんじゃないですか。

扇 それがみな、「国有林」(営林局)がどんどん買ってくれるんだから、貯まる一方ですよ。何ぼ貯まったか、私は知らんですが、婆さんが……。あれは頭のいい婆さんだから、今、こんなになっている(笑)。私は、何にも分からない。帰って来てからも、そういう幸運に恵まれて、一切合財、幸運ですな。「必ず死ぬ」という目に三回遭って、それを生き通したんですからね。

海軍から海上自衛隊へ

伊藤 海軍を、もう一度再建しようということは、考えておられなかったですか。

扇 いや、それどころじゃないですよ。早く戦をやめなければ、グス

タフ……。

伊藤 それは、分かりますけど……。

扇 「ドイツの状況を見てみる」と。「どんなことになるか、分かるのだ。民族が減びるぞ」と。

伊藤 いや、負けてしまった後のことです。

扇 その時は、もう時代が変わって、海軍は全部なくなつとるんだから……。

伊藤 戦後、「もう一遍……」とは思いませんでしたか？

扇 いや……。ただ、海軍の伝統はロマンティックで、とても美しいものだから、これを自衛隊に受け継いでもらおうというのが、今まで続いている私の念願です。今、やっていることも、みなその「繋ぎ目」となることですよ。幸いにも、その方向へ向いて、自衛隊がみんな私に向いてくれているんです。

伊藤 だけど、海上自衛隊が出来るまでには、いろいろあったでしょう。警察予備隊が出来て、そのあと海上保安隊かな？

影山 海上警備隊です。

伊藤 海上警備隊とか、そういう時代は、何かご関係がありましたか？

扇 ありました。というのは、自衛隊からも希望があったし、我々の古手からもそういう意見が出て、「二つの繋ぎ合わせの会をつくらう」ということになったんです。じゃあ、誰がその幹事役・中心になるかということで、みんなの意見を聞いたんです。鎌倉に宮崎という男がおりまして、軍令部の作戦部員をやっていた男ですが、彼が私のクラスの人なのに意見を聞いたんです。私は(海兵の)五一期ですが、五一期の中で、誰がそういう役目に一番適当かということ、宮崎が

私のクラスの主な十六人に手紙で問い合わせたら、全員が私を推薦してくれたんですね。それで、私に頼んで来た。それで、海上自衛隊の課長以上の幹部十七、八人を集めて、高木（惣吉）さんを中心にして海軍との繋がりのお会をやろう、と。毎月一回ずつ、十九年間やりました。

高橋 それは、「海軍反省会」のことですか。

扇 「反省会」とは違う。

伊藤 それは、何という会ですか。

扇 後で名を付けろということで、霞が関の水交会でやっていたから、私が仮に「じゃあ、霞会にしよう」と言った。この間まで、水交会の会長をやった中村悌次という人が中心になっていた。その度に高木さんに茅ヶ崎から来て貰って、ずっとやったですよ。

また、この中での面白い話がいろいろあるんです。海軍のブレインを分析したりして、参考になることを、みんな話したんです。そんなことがあって、もうそれは中村悌次さんで終わりました。大体の目的を達した、と。

中村悌次、海兵六七期、戦後は海幕防衛部長や護衛船隊司令官等を務め、

昭和五十一年三月海上幕僚長、五十二年九月退官（NICHIGAI/WEB Service）

話題に出ているのは、宮崎勇、海兵五八期。昭和十五年海軍兵学校教官、十七年四月第三〇駆逐隊、『望月』駆逐艦長（ラバウルで着任）、翌十八年一月『太刀風』駆逐艦長、十八年七月海軍大学校甲種学生（第三九期）、十九年三月駆逐艦『清霜』艦装員長等、一貫して艦隊勤務であったが、十九年九月軍令部部員兼大本営参謀を命ぜられ第一部第一課勤務として終戦を迎えた（宮崎勇「心のあしあと」掲載紙不明、「扇一登氏関係文書」五一五

八）。高木惣吉氏を囲む会の発足経緯や内容については、宮崎夫人の三年忌に当たり、おそらくは平成二年頃、扇氏が書いた文章（後掲）に詳しい。会の名称は「霞会」ではなく、「虎の門会」。

（史料） 宮崎夫人の追悼号を読んで

元海軍大佐 扇一登

宮崎みどり夫人が急逝されて間もなく三年忌が来る。今追悼号を読み返して見ると。今更のように感懐に打たれるので、一端を以下少し書いてみたくなった。

私と宮崎さんとのつきあいは、戦後氏が終戦連絡中央事務局に入られた頃から始まる。当時私はよく外務省の旧知を訪ねて雑談を交していたが、そんな時必ずと云ってよい程宮崎さんの席に寄って時局談を聞かせてもらうのが一つの楽しみであった。

その後一層密接な関係になったのは、高木惣吉少将を中心とする「虎の門会」結成からである。その起りは昭和三十三年頃と思うが、庵原海幕長の時、同氏や中山定義氏の発意で、海幕幹部の高木少将を囲む懇談会を作り、同少将の高見を承わりながら、ときどきの情勢検討、意見交換を計るというのがその趣旨であったと思う。メンバーは海上幕僚長以下、幕僚副長、各部長、総務課長、調査課長等主要幹部、旧海軍からは高木（少将）、扇（大佐）、宮崎（中佐、外務事務官）、庵原貢、中山定義両氏は海上自衛隊の草分けから基礎固めに執掌し、謂はゞ海幕の後見役であったし、高木少将とも長く密着して来た人だから、退役後も重い存在のメンバーであった。

宮崎さんは会の創設から幹事役として企画、連絡を担当すると共に、会合毎に外務省から見た内外の情報、資料の提供、時局情勢の分析、研究等並々な努力を傾注され、高木さんの透徹した見解と併せて、こ

の会を極めて実のりあるものに盛り上げて居た。会合は支障なき限り月一回、場所は虎の門共済会館を常とした。

いつも打解けて頼もしい雰囲気であったから、以後歴代の海幕長（庵原、中山、杉江、西村、板谷、内田、石田、鮫島各海将）によって引継がれ、後に高木さんの上京出席が健康上稍々無理となった頃まで（中村梯次海幕長の時）実に十九年間に亘って続けられた。

高木少将が戦後期を通じて海上自衛隊の育成発展の為に異常の努力をされた実績は云うを俟たないが、虎の門会も亦その延長であったと思う。高木さんはその頃同時に外務省アメリカ局の嘱託として機務に参加して居られた関係上、宮崎さんは同局安全保障課防衛班長のポストに於て、この会構成の要となつて総合的機能を果して来られた。（後略）

（「扇一登氏関係文書」五七九）

なお、昭和五十四年十月十一日付「霞会・南政会名簿」（「扇一登氏関係文書」五一八）の、「所属」欄の記載によれば、「霞会」は調査課、「南政会」は南方政務部、それぞれの関係者による会だったと推測される。

伊藤 戦後、海軍については野村吉三郎さんがいろいろおやりになりましたね。野村さんと先生とは、関係がありますか。

扇 別に、野村さんとは直接話をしたことはないです。

高橋 グループが違ふんですね。

扇 終戦連絡局のアメリカ班長だった、宮崎勇という男がいるんですよ。禅を修行した有名な男ですが、彼が中心になって十九年間で終わりました。みんな、死んでしまったから……。

高橋 「霞会」（虎の門会）の記録などは、あるんですか。

扇 総監部にはあるでしょう。私自身は別に記録は取ってないですが、ちよつとした出来事については記憶が残っています。

伊藤 日記を書いているから、残るんでしょう。その頃の「日記」はあるでしょう。だって、最近まで書いておられたんじゃないですか。扇 日記はずつと書いているから、あるでしょう。

高橋 じゃ、その「霞会」（虎の門会）のことも書いていらつしやいますか。

扇 「霞会」（虎の門会）のことまでは広げてはおらんかも知れませんがね。

伊藤 いや、「今日、会があった」ということぐらいは書いているでしょう。

高橋 今日、誰と誰に会つて、と。

例えば昭和三十六年の「日記」から、関係があると思われる箇所を摘記すると、以下の通り（「扇一登氏関係文書」三三三）。

一月二十七日 金曜 晴、稍寒冷

（前略）正午、共済会館で幕僚長会食、十川総務部長の話でもち切り。

高木、宮崎と三人で三千円見舞す。あと少時中山君と話して三時文祥堂。

（後略）

二月二十五日 土曜 晴

正午、共済会館で幕僚長会食あり。庵原君が比島、沖縄に行つて来た報告。（後略）

三月二十九日 水曜 晴

（前略）正午、共済会館、高木会。山下新総務部長と初顔合せ。中山君に宮崎の手紙を渡す。宮崎の父と妹とが四月三日に来日する由。（後略）

八月四日 金曜 曇

（前略）庵原海上幕僚長が八月十五日で退官するので今日は最後の招待会だった。（高木、宮崎、山下、庵原）十一時から芳町のスコット、フラ

ンス料理。(後略)

九月二十五日 月曜 曇、蒸暑い

(前略) 正午、庵原、中山新旧海幕長を日活ホテルに招待(高木、扇、宮崎にて)。二時迄歓談した。(後略)

十一月二十日 月曜 曇

(前略) 正午、共済会館。中山海幕長、石黒防衛部長、山下総務部長、高木、扇、宮崎会食。(後略)

十二月十八日 月曜 快晴

(前略) 正午、共済会館で海幕長、防衛部長、山下総務部長と会食。高木、宮崎、扇。(後略)

扇 湯川さんと呼んだことはありませんがね。

伊藤 湯川盛夫さんでしょう。

扇 湯川盛夫。

湯川盛夫、外交官。昭和七年十月外交科・行政科試験合格、八年三月東京帝大法学部卒業後、外務省に入り、外務事務官、商工事務官、企画院書記官等を務めた後、十七年五月外務事務官兼海軍司政官・南西方面艦隊民政府企画課長、十七年十二月海軍司政官、十八年九月外務書記官・条約局二課長、二十年一月〜同九月兼条約局一課長(前掲『日本近現代人物履歴事典』五五六頁)。

伊藤 大井篤さんと先生とは、戦後、どういうご関係なんですか。

扇 私が海軍兵学校に入った時に、大井は私の隣の席にいたんです。彼は山形県の医者の子で、頭のいい秀才なんです。私は、中学生の頃から英語が好きだったから、英会話の勉強が好きだった。そんな関係で、外人の教授が——教室に入ってから一切英語でやるんですが、何かと言うと、直ぐ私を指名するんです。そうすると、「オウギ」と

「オオイ」で、外人にははっきり分からない(笑)。それで、大井を指名しても、彼は「貴様だ、貴様だ」と言っつて、立ち上がらんのですよ(笑)。で、高木さんの法事の時に、私はそういう話を持ち出した。「こいつは狡いんだ」と言うつとった。私は、とにかくパツと会話を続けられるが、彼は山形弁ですから、会話にはならんです(笑)。

伊藤 戦後も、ずっと付き合っておられる?

扇 それ以来、大井とはずっと、いろんな会合なり何なりで、いつでも一緒です。

伊藤 でも、大井さんはGHQのあれ(歴史課)をやられたでしょう。

大井篤、海兵五一期は昭和三年四月〜五年三月東京外語(英)派遣、五年三月軍令部出仕、五年七月〜七年五月アメリカ駐在(バージニア大・ノースウエスタン)と留学体験がある。その後、海軍省調査課員、人事局一課局員、軍令部一部員、海上護衛参謀兼連合艦隊参謀等を歴任。昭和二十二年〜二十六年GHQ歴史課勤務(前掲『日本陸海軍総合事典』一七五頁)。

高橋 あと、地方新聞の社説なども書いていらつしやいますね。

伊藤 戦後の、大井さんの『太平洋戦史』ですか。大井さんは、GHQとの関係が非常に深かったですね。それは、先生と全然関係ないんですか。

正しくは、大井篤・富永謙吾訳編『戦争指導篇/米国戦略爆撃調査団』(証言記録太平洋戦争史、米国戦略爆撃調査団、日本出版共同、一九五四年)。

扇 彼は、GHQから呼ばれたんですから。ハーバードに講義を受けに行ったりなんかして、アメリカ駐在を二年か三年やったので、アメリカ通ということになったりするからね。GHQにおける時に、「藤村工作」を再び調べようということになって、藤村を呼んで、ずっと聞いています。藤村は、何でも自分一人でやったようなことを言うてるん

だが、大井は、そこらを知つとりましますからね。私からも話したことがあるし、ドイツに行く前のことから全部知つとるから……。藤村を呼んで、その記録を作つて、これはアメリカに残っているんじゃないですか。しかし、それは藤村流に書いてあるんだろうと思う。それは、『文藝春秋』に出ました。

「ハーバード」とあるのは、バージニア大・ノースウエスタン大の誤り。

「藤村陳述記録」云々に関しては、「マッカーサー司令部歴史課勤務時代収集資料」のうち「藤村海軍中佐陳述（原本）（アレン・ダレスとの和平交渉）」と題した資料がある（「扇一登氏関係文書」四―三二）。表紙には、「扇用」（朱書き）、「昭和26年」―『文藝春秋』（一九五一年五月号）にはこの原文を多少手を入れて掲載」との書き込みがある。聞き取りは、GHQ歴史課囑託としての大井が、昭和二十五年十月二十四日及び二十六日に藤村事務所で行った。

伊藤 先生は、大井さんたちのGHQのグループとは直接には関係ないわけですか。

扇 私には、あれには一遍も行ったことはないです。しかし、大井とは話していますから。それで、アレン・ダレスとの話のことは、『文藝春秋』に出ていますから、大井の調べた記録としてアメリカにも残っております。私も『文藝春秋』で読みましたが、それは藤村が一人でやったようなことになつとりますが、まあ、それはそれでいい。

伊藤 さつきの「扇矢資材」は、いつ頃まで続いたんですか。

扇（和子） ずいぶん続きましたね。

扇 五、六年前まで……。私は、もう行かなくなりましたが、向こうから注文が来れば、最小限にやっていました。もちろん、それは私一人だから、黒字でも赤字でもないんですよ。

平成七年十一月十五日付の「終業挨拶状」がある（「扇一登氏関係文書」六一七九）。

伊藤 じゃあ、別に会社を大きくしたわけじゃないんですね。

扇 大きくも、小さくもしない（笑）。一人だから。それは儲かったばかり。それを貯めたのが、うちの婆さんです。

扇（和子） 息子である主人（暢威）は技術屋ですので、全く関係ございませんで、日産のほうへ……。会社自体は、もう年を取つたので、自然消滅ということ……。ただ、会社の名前だけは、かなり最近まで持つておりましたね。

扇 妙な繋がりになつて、これ（嫁・和子）のお父さん（関氏）も、亡くなられた瞬間に惚れ直しました。偉い人だったなあ……。というのは、哲学みたいなことになるけど、私が初めて、これ（嫁）の結婚する前に、親父さんと二人で話をしたことがあるんです。その時、親父さんがこんな石を持っているんです。「あなた、趣味は何ですか」と、私が親父さんに聞いたたら、「いやあ、恥ずかしいけど、この一つだ」と言うて……。河原の、こんな丸い石ですよ。「これが、私の田舎の……」と。

扇（和子） 信州の諏訪です。

扇 村長か何かの息子なんです。それで、子どもの時の庭の石を拾つて来て、「これが、私そのものなんだ」と。というのは、お父さんのお母さん（祖母）が非常に臨済宗か何か、宗教に熱心な人で、子どもの時から仏前に参らされて、お経を暗唱させられたんです。それは、私が田舎でやらされたのと同じことなんです。私の家は浄土真宗で、九条武子さんの広島別院に……。私の母親が九条武子さんを生き仏だとして、私も連れて行かれて、お説教を聞かされたこともある。そ

んな関係が、親父さん（関氏）と同じなんですよ。母親のこと……。それが、自分の長男が亡くなって、長男が残したのを見たら、バイブルがあつた。長男がバイブルに、いつも疑問のところに、意見をだいて書き込んでおる。それをじつと見ていたら、非常に可哀相になつて、一旦キリスト教に入るんです。田園調布の直ぐ近くに、クリスチャンの教会があるんですが、そこへ入つて、奥さん（嫁の母）も入つて、ずっと今まで法要とかなんかも、一切キリスト教でやつて来たところ、それにも拘わらず、この人（嫁）のお父さんは、「私には私の信教がある。どうしても、子どもの時の宗教から逃れられん。忘れられん」と。「自分は……」と、心で思うだけです。一切の式典は、教会でやっているんです。私も何遍も行つたんですよ。にも拘わらず、「自分は逃れられん」と。それが、死ぬまで続いている。この間、死んで、私はお別れに行つて、それを初めて聞いたんです。「自分は、どうしてもクリスチャンになれないんだ。……なっているのは、この石なんだ」と。自分の母親が暗唱させてくれたお経と、その宗教から、どうしても抜けられずに戻つたんです。戻つたことを、この間行つて、初めて知つたんです。それから、私は親父さんに惚れ直してお棺に入っている傍に座つて、「あんたは偉い」と言つた。偉いというよりも、私と同じだということで、惚れ直した。本葬は、そのままで、家族で内々で（葬式を）やつたんです。

この回の冒頭に、関之氏の死去、告別式の話がある。

「九条武子」云々は、彼女が真宗本願寺派門主の娘であることに関連しての話であらう（前掲『日本近現代人名辞典』三六九頁）。

伊藤 それは、キリスト教ですか。

扇（和子） いえ、それは真宗です。東本願寺の大谷派ですね。ちょう

ど親類に、その住職さんがいましたので……。本来は、曹洞宗なんですけれども……。

扇 書類（？）を見て、みんなが持つて行かれたそうだからね。彼がやつた生涯を考えてみて、私は感無量ですよ。それと、私が尊敬しているというか、本当に意見が同じなのは、陸軍で言えば石原莞爾さんと堀場一雄、甲谷（悦雄）、それから最後に東條総理の秘書官をやつた、大井と親しいハナ……。陸軍でも、なかなか優れた者がいるんですよ。

「ハナ」というのは、赤松貞雄のことではないか。

赤松貞雄、陸士三四期、大本営参謀、陸軍省副官兼陸相秘書官、フランス駐在、スイス駐在を経て、昭和十五年十一月陸相秘書官兼陸軍省副官、十六年十月首相秘書官、十九年七月軍務局軍務課長、二十年二月歩一五七連隊長。著書に『東條秘書官機密日誌』（文藝春秋、昭和六十年）がある（前掲『日本陸海軍総合事典』五頁）。

扇（和子）（父は）亡くなつてしまいましたが、晩年は中央学院大学の先生がいらして、「未来学とかいうのを教えよう」とか言つて……。影山 さっきの「霞会」（虎の門会）ですが、新しい海上自衛隊が始まるに当たつて、先生が特に希望されたこととか、主張されたのはどういうことだったでしょうか。

扇 特に希望したことは、その時々によつて、それぞれ意見は述べております。けれども、重点的には、海軍の、英国流に育てられた伝統を何とか続けたいということです。海軍の、その雰囲気ね。これは、必ずしも、いいからということじゃないですよ。「政治に関わらず」という、そのことですよ。海軍は、環境としては海上ですから、世間から離れているので、政治常識が身に付いているとは言えないんで

すよ。それを敢えて、政治に嘴を入れても分かんですよ。だけど、それを思えば思うほど、陸軍を引っ張って行かなきゃいかんということの責任ですね。これは、私は今でも同じだと思う。海上自衛隊と陸上自衛隊の、それぞれの思惑がね。やはり伝統があると思うから、それを強調したんです。

それは、我々が調査課で研究会をやっていると、いろんな場面に出て来るんですからね。出て来て、自由主義的な外交官と、凝り固まった右翼論客の齋藤忠とか、平井義太郎教授——これは別に右翼じゃないけど、新しい環境科学（？）なんていうのを創った人——とか、ああいう人と意見が合わんです。それで、トルコの大使をやって辞めた田村幸策さんが、齋藤忠と摺り合わんばかりになって、田村さんは憤慨し、席を立てて帰って行きましたよ。「こんな奴が日本人におけるのか！」と言つてね。そういう場面もあった。

齋藤忠については、第三回聞き取り（七八頁）の註を参照。

「環境科学」については、第三回聞き取り（七八頁）の註を参照。

田村幸策、外交官。前掲『日本近現代人物履歴事典』（三二九頁）によると、大正十年八月チエコスロヴァキア在勤（三等書記官）、十一年十二月二等書記官、十四年三月総領事・広東在勤（未赴任）、十四年三月依願免本官、十五年十月昭和七年十二月日本生命保険会社東京支店長、十九年五月二十三年三月外務省嘱託、その後中央大学教授、国士館大学教授を務めるが、「トルコ大使」にはなっていない。

高橋 二時間経ちました。お疲れだと思いますので、今日はこれで終わりにしましょう。どうも有難うございました。

〈以上〉

扇 一 登

オーラルヒストリー

第 7 回

[2001 年 6 月 21 日 14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

高橋久志(上智大学教授)

扇 暢威(長男)

扇 和子(長男夫人)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

◆海軍の戦略・作戦思想

影山 今日、私の質問状によりまして、先生にいろいろお話を伺いたいと思います。

「一 海軍の戦略・作戦思想について」

1 艦隊決戦主義思想が日露戦後から太平洋戦争全期に至るまで、一貫して保持されたと思いますが、その原因についてご教示ください。

2 第二段作戦にあたって、大本営は米軍の反攻を戦略構築の中心軸に置き、予想していたにも拘わらず、ギルバート諸島のマツキン、タラワのような米軍補給線（豪・米連絡線）と交叉する危機的な最前線の基地には、小規模兵力を配置したまま、無関心に近い状況であったのはなぜですか。

3 海軍の艦隊決戦思想は、空母、潜水艦、航空機の戦闘がどのように行われようとも、最終的な、取って置きの艦隊決戦があるはずで、それまで戦艦群は保存しておかなければならないと考えていた、あるいは空母戦闘で出番がなかったのではないですか。

扇 十分なお答えが出来ないかも知れませんが、私の頭に映ったところだけ申し上げますが、これは全く恥さらしを申し上げるほかないと思います。実際、本命の戦略思想というものが全く振れているわけですから。「艦隊決戦主義」で、この前申し上げました漸減作戦ということに（頭の中が）焦げ付いているんですよ。私自身が、そうだった

んですよ……。

一例を申し上げますと、私が海軍大学校を卒業する時に、昭和天皇が来られて、御前兵器演習というのをやりました。その時に私は、その当時は「赤軍」と言いましたが、日本の艦隊司令長官の役割を命ぜられたんです。戦術の教官は小沢（治三郎）さんですが、「艦隊司令長官をやれ」と言われたわけです。

それをやった時に、一つの（作戦の）特徴として煙幕というのをやったんです。これは、煙幕を張って、敵の視野から味方の部隊を隠すんですよ。日本の艦隊には石炭専用の艦と、石炭と重油の両方を焚いた「混焼」の艦がありますが、それに適した煙幕があつて、ダーツと、真つ黒な煙を出しますよ。真つ黒な煙を出しますから、何も見えなくなる。それを、私が御前兵器演習でやりました。その当時、煙幕というのが一つの流行になっておりまして、それで自分を隠すんだ、と。隠せば、それでいいと思う頭なんです。隠せばいいんだ、と。

小沢治三郎、海兵三七期、昭和六年十二月海大教官（戦術課長）、昭和九年『麻耶』艦長ほか（前掲『日本陸海軍総合事典』一七四頁）。

ところが、そうじゃないんだ。キスカ島の撤退作戦の時に、非常に濃霧だったんですね。私は「戦記」を読んではいませんが、雨も降るし、濃霧だったことには間違いありません。ところが、濃霧にも拘わらず、撤退作戦の艦艇は……。司令官は、木村さんだったか？

影山 木村（昌福）さんです。

木村昌福、海兵四一期、キスカ島撤退作戦時（昭和十八年七月）は、第一水雷戦隊司令官（前掲『日本陸海軍総合事典』一八五頁）。

扇 濃霧にも拘わらず、自分の艦に弾が当たるんですよ。敵は見えない

いのに、自分に弾が落ちるんです。あれは、驚いたんですね。それで、非常な痛手を被っているんですが、そういうことも後で分かったんですがね。それぐらい日本の戦略兵事思想というのは、後れている。全く桁が違うんです。向こうは電波でやっているから、見えようが見えまいが、弾が正確に当たるんですからね。そういうことを、私も帰って来たら聞きまして、如何に、その差があったかということをつくづく感じたわけです。

とにかく、その兵器演習の時に、私は煙幕をしきりに使ったんですよ。私自身が、「漸減作戦で、だんだんに敵を痛め付けて、主力対主力（の戦いに持ち込む）」と。これは、目で見ながらやる戦争なんです。アメリカのほうは、そうじゃないんです。非常に進歩した電波に頼る戦争で、格段の差があるんです。それを、私自身がやったんですから……。しかも、卒業式の時に、陛下の前で最後の演習をやるんですが、その前に予行演習をやっているんですよ。教官は小沢中佐だったんですが、彼は戦略・戦術の教官なんです。それで、御前演習をやる以前に、私は得意になって何回かやっているんです。私自身がそうなんです。それが、日本海軍の思想なんですから……。

小沢治三郎は、海大教官となる以前の昭和五年十二月に大佐となっている

（前掲『日本陸海軍総合事典』一七四頁）。

目に見える戦争——戦艦と戦艦との対決ということだけで考えれば、日本の『武蔵』『大和』『長門』『陸奥』というのは、砲力にかけては世界一ですからね。それを、外国も知っているんです。だけど、向こうは遙かに進んでいる。それなのに私自身がそれをやって、小沢教官自身が、それを異としない。それが、日本海軍の本当の姿ですよ。だから、兵器演習というのを何遍かやって、言葉は強過ぎるかも知れな

いが、その中の代表的なもの（演習）が陛下の前でやられるわけで、それまでに教官を始めとして練っているんですよ。これは、海軍の進化と言えは進化ですが、目で見える戦……。それが、東郷艦隊の（左舷）一六〇度回転（一八〇度の回頭）から来る、一つの……。

影山 戦法であり、戦略ですね。

扇 ええ、型になっている。それで、漸減作戦ということになって来ているわけですから、向こうから見ると、全く別天地ですよ。それを、そのまま私がやったんですから……。

影山 その頃、アメリカの電波とか高い技術とかを情報収集するチームは、軍令部の中にあつたんですか。

扇 アメリカには、みんな優秀な者が行っているんですから、それを探っているわけですよ。ところが、日本では、そこまで情報を取っていないんですよ。だから、私の身代わりに行ってくれた実松譲なんか、何遍かサンディエゴあたりの軍港をウロウロして怪しまれて、文句を食らったり、いろいろ虐待を受けたりしているんですよ。……しているんですがね。

彼の指導官になった人は、ハーバードでしたかな。高等学校の先生だったらいい人ですが、実松の下宿のおばさんが、「この人は、日本の海軍士官の指導官になって（日本人と）付き合っているから、この人に付いたらいいだろう」と言った。その人とずっと付き合って、その人の指導によって動いているわけです。高等学校の先生ですから、アメリカの本当の所を知っているかどうか分かりませんが、実松なんかもそういう状況です。同じハーバードに入学している友達と、気分良く二十人ぐらいのグループの付き合いをして、みな平生と同じように付き合っている。そういう状況なんですよ。

実松譲は第四回聞き取り（九八頁）の註にあるように、海軍省副官兼海相秘書官等を務めた後、昭和十四年十二月アメリカ（プリンストン大学院）に駐在している。ハーバードではない。その後、十五年九月アメリカ大使館付武官補佐官、十七年八月帰国。

影山 そうしますと、結局、日露戦争で勝った栄光がベースにあつて国防方針が定められて、邀撃漸減作戦を作つて、それが一応母体になつた。あと、その後のアメリカの技術の変化も、よく情報収集しないまま、ずっと続いていったということですか。

扇 そうなんです。その間に日本海軍は、どれだけアメリカの言っている「筋道」を嗅ぎ付けていたかというと、私は全然ないと見ますよ。分からなかった。蓋を開けたら、大変な開きになつていた。飽くまでも、東郷さんの「一六点回転（回頭）」で、「主力対主力」ということと言っているんですからね。だから、戦艦の砲力というものを、過大に評価しているわけです。十八インチでしたか、その当時としては世界一ですから、無理もないですよ、情報が何も入っていないのだから……。今から考えても、そう思います。

今、阿川（弘之）さんの書いた井上成美さんの伝記を読んでいます。が、まだ長官になる所までしか読んでいないので、行かれてオボウ（？）にしている間に、こういう見方をされたか、それが問題だと思つうので突き止めたんですけど、まだそこまで読んでいないんですよ。

阿川弘之著『井上成美』（新潮社、昭和六十一年）。

井上成美は、軍務局長、支那方面艦隊参謀長、航空本部長等を務めた後、十六年八月第四艦隊長官としてトラック島に赴任している。その後、十七年十月海兵校長、十九年八月海軍次官、二十年五月大将・軍事参議官（前掲『日本陸海軍総合事典』一六五頁、前掲『日本近現代人名辞典』一〇三

頁）。

影山 いま先生がおっしゃつた艦隊決戦主義という邀撃戦法の思想がある一方で、日本はハワイ攻撃の時から、空母で戦争をしましたね。それを二つ並べた時に、日本は、やっぱり艦隊決戦は最後にあると、いつも思い続けたのではないか。航空母艦を造つてハワイを攻撃したり、その後、ミッドウェー海戦をやつたりしますね。

扇 戦艦だけが目標ですよ。航空母艦をやつつけるということは、アメリカのほうで、きれいに身をかわされているんだから……。航空母艦を逃がしているわけですからね。アメリカは、もう戦艦は必要ないんですよ。戦艦対戦艦でやるなんていう思想は、もうないんですから。戦艦を捨てているんです。高速航空母艦が中心になつた機動部隊、これは自由自在で身軽な、航空基地を造るための支援部隊ですよ。これが、まず南洋の離島に行つていて日本の陸軍をぶつ潰して、そこへブルドーザーを入れて、直ぐ飛行場にするという。向こうの一番先端の、重視している兵力というのは、ブルドーザーです。

影山 アメリカの「戦艦は、もうやめた。機動部隊をやる」という発想は、日本の真珠湾攻撃によつて、その教訓を得たと思うんですが、先生はどのようにお考えですか。アメリカが、「もう、これから戦艦は必要ない」と考えたのは、日本のパール・ハーバー攻撃によつて学んだことでしょうか。それとも、アメリカは、前からそういう考えを持っていたんでしょうか。

扇 そこが、向こうでも問題になつて、日本が騙し討ちをやつたことを逆用しようとした。アメリカの国民は、「そういう海軍の考えは、第二次世界大戦に引つ張り込むものだ」という思想で、避けようとしていっているんですからね。まだ、第二次世界大戦に参加していないんです

から。だから、政府というか、アメリカ大統領が最高の戦略思想として考えていることと、実際にやられていることとは全く違ったんです。

それなら、我々がどういう教育を受けていたかと言うと、「アメリカという国は、飽くまで原則によつて動く。大統領の本当の胸の内によつて動く」と。大原則がリードするということです。例えば、トルーマンも、皆そうなんですが、「極東を支配するには、日本をぶつ潰すより他ない。日本の行き方は、支那を占領するという侵略だ。これでは、アメリカの本当の目的は達せられない」と。アメリカは、これを民主主義の基盤に置こうとした。つまり、日本を無視した、日本とは反対の方向で行こうとしているんですから。それを、我々は海軍大学で、「向こうは、そういう大原則に従つて進んで来るんだ。満洲事変を認めないということは、日本をぶつ潰すということであり、陸軍をぶつ潰すことである」と、戦史の講義で聴いているんですからね。「向こうは飽くまで、それで進んで来ている。表向きに何とかかんとか言つても、終極においては日本陸軍をぶつ潰すことだ」ということを、我々は講義の時に聴いているんですよ。

◆海軍調査課「研究会」

影山 では、次の質問に移ります。

「二 海軍調査課が主導した研究会は、太平洋戦争が始まってから、その活動目的や活動自体に変化がありましたか」

これは実際に、高木惣吉課長が始めたわけですね。太平洋戦争が始まった後、何か変化がありましたか。

扇 私の実感から言いますと、高木さんの思想というのは、初めから

一貫しているから、戦争が始まったからと言って、別に変化はないですよ。ね。「戦争をしなきゃならん」ということです。から、別に変化はない。高木さんは、山本五十六次官の機密費を貰つて、この研究会を始めたんです。から、その以前（開戦前）からやっているんですよ。だから、「海軍は、陸軍のおだてに乗つて行つちやいかん」ということで一貫しているんですよ。一貫しているんだが、力が足りない。のみならず、陸軍は「これは反対だ」と思う奴は、みんな外にやつて、中央に座らせないんですよ。陸軍は影佐（禎昭）が中心で、大陸派というのが参謀本部を支配していたわけです。

海軍はそうじゃなくて、陸軍のその考え方に乗つてはいけないということなんです。ね。乗つてはいけないけど、それなら徹底的にアメリカを研究して、「新しい行き方として、どういうふうにすればいいんだ」ということは何もありません。私は、私の前にいた戦争指導（班）の担当の人を知っていますが、ただ陸軍が弄んでいるだけの生産力（の実態）であるとか、海軍としての真価を自覚している者などいません。そういう人は、軍令部へ行つちやおらんですよ。この人はこういう思想で、こうやっているとこういう人は、残念ながいまませんでした。

影山 この調査課は、初めは「如何に戦争をしないで済むようにするか」ということで、スタートしたわけですね。

伊藤 そんなことはないでしょう。この前、扇さんがおっしゃった通り、「戦争になった場合に、如何にして勝つか」という研究をしているんですから……。

影山 じゃあ、始まった後、「如何に早く戦争を終わらせるか」という発想は、どのぐらいから始まりましたか。

扇 着想ですか？

影山 着想です。どんな日本が勝っている時に、調査課の研究会で、そういう話が、もう始まっていたのかどうか……。

扇 私は海軍大学校時代から、そういう講義を聴いていますからね。アメリカは大原則で押して来る、と。それなら、海軍がそれに応じるような対策をやっていたかと言うと、そうじゃないんです。依然として、東郷艦隊の「二六点回転（回頭）」の思想ですよ。つまり、「単位」が違ふんです。戦闘能力というものは、決して抜けちゃおらんのです。私は、海軍大学校で長官の役をやったんですから……。得意の煙幕を張って、艦隊を隠したんですから……。つまり、目で見る戦争一本槍ですよ。

影山 この研究会は、学者先生を含めて、民間の方がたくさん入っています。その方々も含めて、戦争が始まったら、始まる前に比べて勢いがいいですけども、「早く終わらせよう」という意味で、対策というか、議論はあったんでしょうか。

扇 あそこに集まる人は、的確に、はつきりとは、そうは言わんですよ。そう思ったか、思っていなかったかは分かりませんが、極端な人がいて、議論で喧嘩別れなんかするんですから、どっちがどうやら分からんですよ。学者連中も、平生からそういう考え方はしちゃおらんのです。海軍が、本当の意味でどう考えているかというようなことを、反対側の立場に立って考えてくれるような先生はいないんです。

それなら、アメリカのことを知らないかと言うと、そうじゃないですが、アメリカの国力の大きいことや、資源など、あらゆる点において、原理的にずっと先を行っているということを知っている人は、いないですから。高木八尺先生なんか、アメリカ憲法のオーソリティー

ということ、私どもはアメリカを原則的に知る上において、学者として最初に目を付けた人なんです。アメリカの歴史上のことなど、ずっと深く研究しておられる。研究しておられるんですが、戦略という意味において、どの程度までやっておられるかということは……。アメリカの歴史を知っているだけであって、アメリカの戦略がどう移り変わってきたかというようなことには、踏み込んでおられないんですよ。

高木八尺については、第四回聞き取り（九〇頁）の註を参照。

◆ミッドウエーでの敗北

影山 じゃあ、次をお願いいたします。

「三 ミッドウエー海戦の事実、後日、どのような内容としてお聞きになりましたか。ミッドウエーの敗因は、どんな状況だったんですか」

扇 私がミッドウエーの敗戦が、どういう意味であつたかということ、直ぐ分かったかと言うと、そうじゃないですよ。分からんです。あなたのご研究によると、陸軍の何と言いましたか、真っ先に知った人がいるでしょう。

高橋 瀬島（龍三）さんではないですか。

扇 最後にインドのほうに逃げて行った……。

影山 辻政信ですか。

扇 辻政信。彼なんか、真っ先に知った。それは知るはずですよ、やられとるんだから……。私なんかは、そういうことは知らんですからね。

辻政信、陸士三六期。ミッドウェー敗戦時（昭和十七年六月）には、参謀本部員（作戰部長）（前掲『日本陸海軍総合事典』九五頁）。

伊藤 知らない？

扇 ええ。その時は、何も分からない。負けたということは、ずっと後に分かったんです。

影山 いつ頃、分かったんですか。

扇 負けたことが分かったのは、私が南方船を出して、暫くしてからですよ。高木さんも始終、一部長の所や、あるいはドイツから帰ったばかりの、私の上司の横井さんの所へ来て——私の直ぐ傍で話をしているから、内容がみんな分かるんです。高木さんと私とは、これだけ（五十センチぐらい）の間しかないから、話の内容は分かるんです。高木さんも、「どうもおかしい」と、私に言つとられたですよ。軍令部第一部の部屋に来て、「どうもおかしい、何かおかしい」と。その時はもう、きれいに負けているんです。高木さんも、それから後に、はつきり知ったんですよ。

私も、もちろん高木さん以上に知っているわけじゃない。高木さんは、「どうもおかしいぞ、臭い、臭い」というようなことを、私に言っていましたからね。それで私に、ちゃんと報道部部員の辞令を出したんですよ。軍務局長から高木さんを通じて、「君は、軍事普及部付という辞令が出たから、行って、別に何をせいということでもないけれども、平出（英男）さんを抑えて、『勝った、勝った』と言わさんようにしろ」というわけですよ。全く反対のことを言うんだから……。だから、ミッドウェーでも「勝った、勝った」で片付けるんですからね。

あの下に、もう一人、某という男がいたんですよ。それが、また大

ボラを吹くのが得意なんです。そういう状況だったから、抑えを効かすために、「君、あそこへ付にされたから、そのつもりでおれ」と、高木さんから言われました。

南方船。南方の重要物資輸送確保のために、大量建造が計画された船のことか。これについては、第四回聞き取り（一〇二—一〇三頁）の註を参照。昭和十七年五月に「計画造船確保に関する件」が閣議決定され、このうち木造船を対象とする乙造船計画は翌十八年四月以降本格化した。また、扇氏の上司である横井忠雄が伊八潜水艦で帰朝したのは、昭和十八年十二月（前掲『日本陸海軍総合事典』二四四頁）。以上から推測すると、扇氏らがミッドウェー海戦の敗北を知ったのは、半年から一年後ということになる。なお、扇氏の軍事普及部付の辞令は、この時期、「奉職履歴」では確認できない。昭和十二年十一月に大本営海軍参謀兼海軍報道部部員仰付、参謀部第一部兼報道部第一課勤務拝命、昭和十三年一月八日海軍軍事普及部委員拝命（同年十二月免ぜらる）となつていたので、辞令の出方が違うのか、あるいは時期について扇氏の記憶違いか。

平出英男、海兵四五期、ミッドウェー海戦前後の役職としては、昭和十五年七月軍事普及部第二課長・大本営報道部課長、十五年十一月軍務局四課長、十五年十二月兼大本営報道部一課長、十六年四月軍務局四課長、十八年七月軍令部三部八課長（前掲『日本陸海軍総合事典』二二六頁）。

影山 実際、効果はありましたか。

扇 それは、平出さんも抑えるようになりましたな。平出さんも、軍務局の四課長か何かですからね。何ら口にブレーキを掛けずに、ずっと「勝った、勝った」で来ているんですから、まるで嘘を言うて来たんですよ。

◆南洋群島の状況

影山 では、次です。

「四 実際に南洋群島が軍用飛行場建設に乗り出したのは、どのような方針の下、いつ、どの島から行ったのですか。対南洋方策研究委員会（「対南研」）の関係は、どうなっていますか」

先生は、太平洋戦争が始まる前に、「対南研」に、昭和十一年と十六年の二回行っておられますが、対南洋方策研究委員会の仕事そのものについて違いはありましたか。

扇 私の印象では、対南洋方策研究委員会というのは、南洋（群島）委任統治領というのをドイツから引き継いだ時に、連合国から条約文を突き付けられているんですよ。南洋（群島）委任統治領には、防備……。

影山 防備制限条約？

扇 はい。防備策を施してはならない、と。これを国際条約で突き付けられて、それに判子を捺しているんですから、やっちゃならないという事になってる。なっているんですが、もうその当時から、いざとなったら、不沈の航空母艦にするんだという考えはあったわけですよ。だから、こつちが先手を打って、そこに飛行場を造るという着意はあったわけなんです。あったけれども、ただそういうことであって、それ以上のことは何もしてはいません。だから、ずっと陸軍を守備のために送っているけれども、十分じゃないんですよ。十分じゃないから、アメリカ側が、まず機動部隊を中心にした高速航空母艦を送って……。その後、ブルドーザーを入れて、大きな所を地均しする。それ

はね、まず空襲して、陸軍を減らして、そしてブルドーザーを入れる。ブルドーザーが、直ぐワーツと大きな所を均して、直ぐそこへ飛行場を造ってしまうというやり方をしたわけですね。

日本は南洋群島について「同盟及連合国ト独逸国トノ平和条約」および「一九二〇年太平洋中赤道以北二位スル旧独逸国属地ニ対スル日本ノ委任統治条項」によって、委任統治することになり、日本の国際連盟脱退後も継続された（伊藤隆監修・百瀬孝著『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』吉川弘文館、平成二年、二頁）。

影山 昭和十一年に、先生が最初に対南洋方策研究委員会に入られた時は、まだ日中戦争も始まっていませんし、いま先生がおっしゃったように、基地を造ることも出来なかったわけですね。そこで行かれたのは、前にお話しなさった南洋興発の人たちを指導して、南のほうの兵要地誌を作ることが目的だったとおっしゃいましたね。それは十一年の話なんですが、十六年はそれとどう違うんでしょうか。

扇 私は、ずっと第一委員会というのに出て、幹事役をしていたんです。南洋興発も、いつも来まして、社長と直に、いろいろ情報交換をやって……。だから、南洋興発も飛行場を造るということは知っているわけですよ。まあ、それ以上に、何もやっちゃおらんです。だから、日本の必須の戦時物資を取るには、どうしてもインドネシアから商行為（貿易）によって取るよりほかはないわけです。もう、その時になると、オランダは米英側と一緒にあって、日本の言うことを聞かんです。（日本を）蹴って、やらないようにした。だから、軍艦を派遣して脅しを掛けたりして、小林一三さんという貿易のベテランをやったり、軍艦を派遣しているんです。

南洋興発株式会社は、大正九年の不況で倒産した西村拓殖（精糖業）と南

洋殖産（砂糖・マニラ麻）の二つの会社を吸収合併する形で、一九二二年に創設された、半官半民の国策会社。南洋における製糖事業の労働力として、沖縄からの移民を多数雇用した（『読谷村史』第五巻資料編四「戦時記録」上巻、読谷村史編集委員会編、読谷村役場発行。http://www.yontan.jp/sons/index.htm で公開）。

小林一三は阪急電鉄社長等を経て、昭和十五年七月から翌十六年四月まで第二次近衛内閣の商工大臣を務めた。この間、昭和十五年八月から十一月まで蘭領印度特派使節となっている（前掲『日本近現代人物履歴事典』二二頁）。

影山 そうすると、昭和十六年の時点で、南洋の島々では完全に指導して、もう飛行場建設をやらせていたわけですか。まだ、出来ないんですか。

扇 オランダが、言うことを聞かんですよ。オランダが（米英に）協力して、米英の後押しを受けて、日本の貿易を抑えよう、抑えようとして（物資を）出さなくなったんです。

ところが、ドイツは連合国の……。

影山 （ドイツ巡洋戦艦の）『グナイゼナウ』とか、『シャルンホルスト』ですね。

扇 あれ（連合国の輸送船）を沈めたりして、戦艦というものの評価をしているわけですよ。だから、日本の世界一と言われている『大和』『武蔵』『長門』『陸奥』、特に『大和』『武蔵』の設計図を、非常に欲しがったんです。ドイツ自身も、その設計図に従って、あれほど大きなものじゃないにしても、戦艦を造るつもりでいたらしいですよ。ヒットラーは、最大の望みとして、日本に非常に強く設計図を要求して来ていた。私は、その当時から軍令部に行っているんですよ。

影山 もう一度伺いますが、昭和十六年に対南洋方策研究委員会に行かれましたが、そこではどういう仕事をされたんですか。

扇 いま頭に残っているのは、その当時の貿易の、商行為のベテランである小林一三さんを軍艦に乗せて、派遣したんですよ。それで、脅し半分で、飽くまでも貿易をやろうとした。やろうとしたけど、頑として（オランダが）聞かないんです。

影山 分かりました。

扇 入れない。だから、もう手はないんですよ。

伊藤 南洋群島の飛行場は、造ったんですか。

扇 誰が？

伊藤 日本が……。

扇 日本は地均しをして、いつでも飛行場を造れるようなところまで行ったんです。

伊藤 実際には、造ったんですか。

扇 実際には、造った所もあるでしょうな。それは、飽くまでもサトウキビというゲージに隠れてやったんです。

◆平時封鎖作戦

影山 次に移ります。

「五 支那事変以後の海軍の平時封鎖作戦について」

1 この作戦の継続によって、海軍としては対米戦に備える演習・作戦が、どの程度支障を受けましたか。その対策は、どうでしたか。

2 平時封鎖作戦の海軍部隊としての現地の労苦は、どのようなも

のでしたか。海軍軍人の気持ちは？

3 航空作戦の甚大な損害（特に搭乗員）に対する当時の印象、回復策は、どのようなものでしたか。

扇 これは、私自身もジレンマに陥っているんですけどね。近藤信竹さんが第一部長で、我々はそれまで海軍省軍令部の政策決定の事務当局であった。それが、そっくり自分の所（第五艦隊）へ引っ張って行かれて、近藤信竹司令長官の幕僚になっているわけですよ。行って、涉外関係、封鎖作戦というのを受け持たされて、これでみなやったんですよ。やっているうちに、汪兆銘の引き出し工作になるでしょう。汪兆銘の引き出し工作になって、汪兆銘が飛行機でハノイに出て来るんですよ。

私は、そういうことは知らないけれども、ハノイから商船をチャーターして、その商船に（汪兆銘が）乗って、ずっとハノイから海南島の沖をずっと回って、上海に行く。「その行動を監視して、護送しろ」という命令が、中央の軍務局長から来ました。その時に、それが何者であるか、全然知らない。汪兆銘が乗っているなんていうことは、全く知らない。私は、その船を見てはおらんですよ。間接に、部下の駆逐艦や潜水艦なんか言って、「ハノイから出て来る商船を、上海まで監視して、護送しろ」というような命令を、私は出したんですね。自分は、それを見ちゃおらんのです。

影山 中国の海岸線は、非常に長いですね。それを平時封鎖で、日本の少ない艦艇を、常統的にそこに張り付けますと、対米戦に備える訓練とかは出来なくなるんじゃないですか。そういう心配はなかったですか。

扇 それは、もう出来ないんです。

影山 対米戦が出来ない？

扇 対米戦の訓練とか、そういうことはやらない。ただ、沿岸を封鎖するとか、蒋介石に対しての封鎖ですね。

影山 そうですね。ところが海軍は、いざという時のために、対米戦ということで訓練をずっとやっていましたね。支那事変が始まってからは、対米戦に対する年に一回の演習とかはどうなんですか。

扇 それは第五艦隊というのが、軍令部の一部長がそのまま行っただけです。その当時の事務ブレンを、ごっそりみんな連れて行っただけです。藤井茂とか、柴勝男とか、一年前までは海軍の最高政策を三人で、議論して決めていた、そういう連中なんです。それを、そっくり自分の所へ連れて行っただけです。

影山 軍令部としては、主力が中国問題に張り込んで、アメリカ力に対する対米戦の訓練というのは、どっちかと言うと……。

扇 それは、別に連合艦隊がやっているんです。

影山 その連合艦隊から、不満が出ませんでしたか。

扇 もう私は、連合艦隊とは関係ないです。支那方面艦隊の一部分に過ぎない。

影山 先生は、もう常統的にやられて……。そうすると、対米戦は、別の連合艦隊で、やるだけやったということなんでしょうか。

扇 そうそう。その連合艦隊の訓練というのは、佐伯湾とか、宿毛湾とか、志布志湾とかいう地域で、ずっとやっているんです。ますます、やっているんです。「一九三六年の危機」と言っていましたから……。影山 そうなりますと、その頃は艦隊決戦というのは、なかなか難しくなるんじゃないですか。

扇 艦隊決戦？

影山 ええ。中国に艦をいつも、ずっと張り付けていますから。

扇 ええ、そうです。艦隊決戦とは関係なくなる。関係ないとは言えないけれどもね。

影山 完全な形では出来なくなりますね。

扇 支那沿岸の封鎖に極限されて、やっているわけですよ。

影山 先生の印象としては、海軍全体兵力の、どのぐらいを支那のほうに注ぎ込んだんでしょうか。

扇 連合艦隊というのは、第一、第二、第三艦隊が支那方面艦隊ですね。第四艦隊というのは南のほうで、第五艦隊が私のいる海南島の方面ですから、対米戦争の準備としては、ますます一所懸命やっているわけです。

影山 やっているんですけど、やはり全体像としては、どこか欠けると思うんですね。その補填は、どうやったんですか。

扇 軍令部の第一部長直属でいた時、私の後任で戦争指導部に来た人は、私が言うのもおかしいけれども、頼り無い感じだったですよ。柴勝男であるとか、藤井茂であるとかは、何たって海軍でピカ一ですよ。

◆軍令部の権限拡大

影山 「六 軍令部の権限拡大について」

1 上海事変後から大角大臣によって断行された「大角人事」について、当時の海軍部内の印象や空気は、どのようなものでしたか。

2 軍令部令の改定が、昭和八年十月に完了しました。これは参謀本部並みの改定と言われますが、中心課題であった兵力量決定

案の起案権は、それまでの海軍省から完全に軍令部に移動したのですか。参謀本部並みになったとは言えないのではないですか。

昭和八年に軍令部の権限が強くなります。強くなった時に、今まで海軍省が実際の事変とかを指導していましたよね。例えば、上海事変のような指導を……。海軍省は実際、兵力量決定の起案権を持っていたんでしょうか。昭和八年頃までは、海軍省が本当に起案していたんでしょうか。軍令部は、単なる海軍省から商議されたものに応える（意見を述べる）だけだったんでしょうか。そして、八年になりますと、軍令部が実際に起案したんでしょうか。その辺を、お伺いしたいんです。昭和八年を境に、今まで海軍省が兵力量決定を起案していたのを、八年以降は軍令部が起案していたんでしょうか。兵力量決定の起案権が、どちらにあったのか。

大角岑生、海兵二四期、昭和六年十二月～七年五月犬養内閣・海軍大臣、八年一月～九年七月齋藤内閣・海軍大臣、九年七月～十一年三月岡田内閣・海軍大臣（前掲『日本陸海軍総合事典』一七五頁）。齋藤内閣時代に行われた、いわゆる「大角人事」は、海軍部内の条約派に対する肅正人事。

扇 私は、そこは十分に知り尽くしているとは言えないですけども、私と大学が一緒の吉田という男が軍務局の一課におりまして、兵力量なんか、全部決めていたんですよ。学者的な性格の、そんな若い人ではなくて、大佐です。私とは鎌倉で一緒に住んでいたから、非常に親しかったんですが、物資動員であるとか、数字的なものを、その配置によって握っていたんです。だけど、一つの確固たる兵術思想によって指導していたかと言うと、そうじゃないです。学者みたいに、ただ物資動員とか生産力とか、数字的なものを固めていたに過ぎないと思

うんです。私は長く付き合っているから知っていますが、鎌倉でも直ぐ近くに一緒に住んでいたんですよ。

吉田英三、海兵五〇期、昭和七年十二月〜九年七月海大甲種学生、十二年十二月軍令部三部七課部員、十四年十一月第二水戦参謀、十六年十月軍務局一課局員、十八年五月大佐、二十年二月軍務局一課付、二十年四月特兵部員兼軍務局員、二十年七月軍務局三課長（前傾『日本陸海軍総合事典』二四六頁）。

影山 そうしますと、軍務局が兵力量決定を起案しまして、軍令部に商議される。それで、海軍省が責任をもって予算要求するわけですね。ところが、先生が昭和十一年に軍令部に行かれた時は、軍令部で起案したんでしょうか。

扇 いや、兵力量は、今の三人で相談して決めていました。その当時、私の後任に来た人は、そう言っちゃ何だけど、次のクラスで頼りにならない人だった。それは、実感ですよ。能力的にね。確固たる兵術から編み出して、どうこうするというような性格の人じゃなかった。

「三人で相談」とは、軍務局第一課の藤井茂と、軍令部一部員の柴勝男、扇という組み合わせ。第二回聞き取り（四二頁）を参照。

影山 もう一回伺いますが、軍令部のほうで、兵力量決定の話を最初にするのは誰ですか。それと、起案する人は、誰なんですか。兵力量を起案して、予算要求しますね。その最初に起案する人は、軍令部でしょうか、海軍省でしょうか。

扇 私までの時は、海軍省が決めていました。

影山 起案は、海軍省ですか。

扇 ええ。吉田という、直ぐそこに住んでいました。私は、彼と大学も一緒です。ドイツで補佐官をやっていて、帰って来た男ですからね。

そこが決めて、軍令部に持ち込んだ。（私のあと）軍令部に来た担当の人は、自分で起案するほど光った人じゃなかったですよ。私は大学が一緒だったんだから、よう知つとるんですよ。だから、自分のことでおかしいけど、私は交渉規程によつて、その配置に付いたんですから。連合艦隊から、行つたんですから。

ここでの吉田氏は、先に名前の出た「吉田（英三）」と思われ、昭和四年四月〜六年四月までドイツ駐在も経験している。

影山 昭和八年に、交渉規程が改訂された前と後では、起案者が変わったと認識されていますが、先生のお話のように、昭和十一年も、やはり海軍省が起案していたということだと、あまり差がないように……。

扇 まあ、そのほうが強いですよ。（軍令部の自分の後任は）率先して権利を行使するような、それほどの意気込みのある人じゃなかったんだから……。

影山 そうですか、個人の能力もあるわけですね。

扇 私は大学が一緒なんだから、よう知っているんです。

◆総力戦体制に対する認識の違い

影山 私の質問の最後です。

「七 海軍の軍縮離脱の発想について」

1 当時、米国の巨大な国力・軍備を、どの程度知っていたのですか。

2 海軍の国家総力戦体制構築の考え方は、陸軍と比較の上で、どのようなものですか。

国家総力戦体制について、陸軍と海軍の認識は違っているんじゃないかと思いますが、先生はどうお考えですか。

扇 総力戦体制？

影山 陸軍と海軍の総力戦体制に対する認識の違いです。

扇 総力戦体制という問題に限って申しますと、陸軍は声が太いだけです。それで、がむしゃら。海軍は、理性は高いけれども、政治を引っ張って行く力がほとんどない。で、陸軍に引き摺り回されているというのが、現状なんですか。

影山 その原因は、どこにあるんでしょうか。先生は、どうして海軍が弱いとお考えですか。総力戦体制に対して政治力がないというのは、どういう所から来ているんでしょうか。海軍の力が弱い原因を、先生はどうお考えでしょうか。

扇 私の実感から言えば、一口に言えば、海軍は憲兵が怖いから遠慮がちになるんですね。引っ込み思案になるんですよ。そのことで強調したいのは、『増田屋』の女将は清水次郎長と称せられていたけど、この偉さですな（笑）。何と言ったって、大きな物を言うんです。この前も、お話ししましたね。

高橋 この間の話（第五回聞き取り）の中で、先生は最初から「アレン・ダレス工作」を考えて、藤村さんをスイスに遣わしたとおっしゃいました。また、その話の中で、先生は東京でアレン・ダレスと何遍も会っている、と。それから、藤村さんの別荘でも会って話をしたことがあるとおっしゃったんですけれども、これはいつ頃の話で、具体的に、どんなことを話されたのですか。

扇 アレン・ダレスの育ちや、日本との関係を話したかどうか知りませんが、彼は日本で生まれた男ですからね。それで、（ジョン・フォ

スター）ダレスの弟です。イタリアの駐在武官か補佐官かで長くいて、イタリアをよく知っているんです。

アレン・ウェルシュ・ダレスの履歴から、日本生まれということは確認できない。その他は、第五回聞き取り（二二二頁）の註を参照。なお、第五回聞き取り（二二二頁）で、アレン・ダレスに話が及んだ際、扇氏は中学時代に広島で、第一次世界大戦時に青島で捕虜になった当人と、直接会った云々と語っており、他の人物と混同している可能性がある。

高橋 アメリカ人の、イタリアにいた武官か武官補佐官ですか。

伊藤 ダレスのことじゃないですか。

扇 イタリアの政策を、引っ繰り返した男ですからね。アレン・ダレスは、イタリアのムッソリーニを引っ繰り返した男ですよ。

それで、藤村の話になりますが、藤村をスイスにやったのは、私なんです。「お前は、ここでやれ。私はスウェーデンでやるから」ということで、私と藤村の関係が阿川弘之さんの本に詳しく書いてあるんです。私は藤村を、東京にいる間に何カ月か掛かって研究をして、「こいつを使わなきゃいかん。これしかおらん」と思っていましたから。嫌いな男だけど、いざという時には行動力を持っている野心家です。……。

高橋 東京でダレスと、いつ頃お会いになったんですか。

扇 帰って来てからね。

伊藤 戦後の話だと、了解して読んでいましたが……。

扇 藤村がやった一切の仕事は——『プルスウルトラ』というアメリカがチャーターした船と一緒に帰って来たんですが——その船の中で藤村から詳しく聞いた。その中にも嘘がたくさんある。大嘘があるんです。大嘘があるんだけど、にも拘わらず、とにかくあそこまでやつ

たんですからね。藤村という男は、やる奴には違いないんですよ。

「海軍反省会」と「霞会」

高橋 話を变えます。「海軍反省会」には、先生は全く関係しなかったとおっしゃったと思いますが……。

伊藤 そんなことはないでしょう。「反省会」に参加しているでしょう？

高橋 「海軍反省会」には、参加していますか。

影山 参加しておられると思います。

高橋 「霞会」（虎の門会）のほうで……。

伊藤 「霞会」は分かりますが、先生は海軍の「反省会」も関係があるでしょう？

扇 うん、十九年間、ずっと出ました。

伊藤 あれは、誰がつくったんですか。

扇 誰がつくったかと言えば、高木さんですよ。

伊藤 「反省会」の中心になつていたのは、高木さんですか。

扇 うん。これはね、海軍と海上自衛隊との「申し継ぎ」のために、繋がりをつくらなきゃいかんと思って、そういう会合をね。

伊藤 先生、この前、それは「霞会」だと言いませんでしたか？

扇 ああ、「霞会」。「霞会」は、私が名前を付けたんです。

伊藤 そうじゃなくて、水交会で、ずっと「反省会」というのをやっていたでしょう。あれは、先生も参加していたでしょう。

扇 「反省会」をつくったのは、少将です。海軍で言えば、「両舷直」ですよ。ただ、せっせ、せっせと、艦隊勤務を一所懸命やる奴を、「両舷直」と言うんですよ（笑）。

伊藤 そうですか。それは、知らなかった。

高橋・影山 真面目一本槍……。

扇 それが言い出してつくったんです。そうじゃなくて、いわゆる中心で指揮を執る奴は「両舷直」じゃないんですよ。

伊藤 もちろん、そうでしょうね。

高橋 保科（善四郎）さんは、関係ないですか。

保科善四郎、海兵四一期、軍務局長として敗戦を迎える。あとで出て来る海大教官には昭和八年十一月就任、十年十月軍務局一課長（前掲『日本陸海軍総合事典』二三〇頁）。

扇 保科さんじゃない。保科は、むしろ中心におるあれですよ。

伊藤 保科さんは、指導者ですか。

扇 あれは、指導者のほうですよ。彼は、海軍大学の戦史の教官ですから。戦史の教官ですが、まあ癖のある人ですね。

高橋 新見中将じゃないですか。

扇 新見さんは戦史の教官で、戦史の専門家ですよ。

新見政一、海兵三六期、海大教官には大正十五年十二月〜昭和五年十二月、昭和九年十一月〜十年十一月の二回就任。その後、教育局長や海兵校長等を務め、十九年三月予備役編入と同時に、大日本学徒海洋訓練指導中央本部長となつて敗戦を迎える（前掲『日本陸海軍総合事典』二二〇頁）。

伊藤 その人も、「反省会」ですか。

扇 新見さんは「反省会」に、ずっと来ていました。彼は、真面目な学者ですよ。

伊藤 他に、どんな人がおられましたか。

扇 「反省会」には、四十人ぐらいおったんじゃないかな。

「第二回海軍反省会記録要旨」（昭和五十五年四月二十五日、於水交会）と題された手書きの冊子には、出席者として扇氏のほか、次の八名の名が記されている。野元為輝（海兵四四期、第九〇三空司令官）、山本親雄（海兵四六期、第七二航戦司令官）、佐藤毅（海兵五〇期、南東方面艦隊兼第十一航艦参謀）、寺崎隆治（海兵五〇期、呉鎮参謀）、三代一就（辰吉、海兵五一期、横須賀空副長兼教頭）、末国正雄（海兵五二期、人事局一課局員）、中島親孝（海兵五四期、海軍総隊参謀）、土肥一夫（海兵五四期、軍令部一部一課員兼参本部員）（役職は敗戦時、前掲『日本陸海軍総合事典』『陸海軍将官人事総覧（海軍篇）』による）。

また、野元為輝「昭和六十年をおくる」（「扇一登氏関係文書」九―二〇）は、反省会の結成に関して述べていると推測されるので、以下、引用する。

昭和六十年をおくる 野元為輝（六〇―一二―八起案）

一、はじめに

敗戦後の内外情勢を痛嘆する近いクラスの数名の方々と、今次の開戦と敗戦に到る経緯を海軍の立場から記録して、将来の参考として遺してはと相談を始めてから十年近くの歳月が流れてしまった。その間にこれら同志の方々は相次いで亡くなられたのは、年令上致し方ない次第だが、独りとり残された私は氣ばかり焦っても固より浅学非才、コンナ大仕事のスタートを切る柄ではなかったが、遂に意を決し、忘れもしない五十五年十一月十三日、寺崎（兵五〇期）、土肥（兵五四期）の両氏と湯河原の山陽館で会談し心中を打ち明けてご同意を得て発動を見るに至ったのである。

幸、旧部内優秀で参戦の経験豊富な方々二十余名のご同意を得、月一

回程度の研究会を開き始めたのである。各委員からは熱心なご発言を得、極めて適切な結論を得つゝあつた反面、海軍の特色である科学技術上の所見やら、これの運営上の術科関係の事が多く、恰もGFの戦技研究会の様な場面もあり、当初の期待が外れ勝であり、その方面の修正に苦心、老体は腎臓系の故障を生じて疲労が甚だしく、止むを得ず会の運営を少し若い元氣な方々にお譲りし、私は列外に在つて顧問的立場から傍観することとなつたのである。（後略）

伊藤 先生も、中心だったでしょう？

扇 私？ 「反省会」は、その三井グラウンドに住んでいた「両舷直」だ。

扇（暢威）ああ、私も名前を忘れた（笑）。

扇 この一年で、さっぱり忘れた。「あれ、あれ」と言うだけで……。

扇（暢威）「イ」の字が付きませんか？ ……ああ、私も忘れた（笑）。そういう人がいました。

伊藤 先生、最後に「反省会」のまとめみたいなことを書かれませんでしたか。

扇 ああ、私は、こんなの（五センチぐらい）を書いたんです。

伊藤 あれは、出版したんですか。

扇 出版はしないけど、初めは謄写版刷りみたいなものを書いたんですよ、一所懸命勉強して……。

伊藤 それを、みんなに配つたわけですか。

扇 その内容に——金科玉条の内容に惚れ込んだ奴がいてね。早稲田の司法をクラス・ヘッドで出た偉い弁護士ですよ。

伊藤 馬場正夫さんですか。

扇 そうそう。馬場はクラス・ヘッドで出た偉い奴ですが、全文を読

んで、それを金科玉条にして、早稲田の後輩を海軍式に指導して、今では立派なものになっています。

扇一登「国策を中心とした大東亜戦争反省録」(「扇一登氏関係文書」一一―一四三)は、全体の「まえがき」に当たり、平成十年五月十三日付の馬場正夫氏の手になる補注によれば、全体の構成は次の通り。

一、大陸政策に於ける日米対立の基調／二、一般情勢の概観(補注：満州国建設)／三、上海事変起る／四、満州事変と国際関係／五、自主独立と主要国際問題への対応(補注：昭七・七から昭十二・七までの推移概観)／六、北支処理の目標と国際関係／七、事変收拾の模索／八、参謀本部一部長石原少将の意見／九、その他の和平折衝の働き／一〇、船津上海派遣／一一、国交調整案の要点／一二、收拾の好機を逸す／一三、上海事変／一四、居留民現地保護の問題／一五、事変を繞る国際関係／一六、国際連盟／一七、事変收拾への動き／一八、トラウトマン調停／一九、国家総動員法成立(昭一三・三)／二〇、国策の変遷(近衛内閣改造)／二一、宇垣外相の活動／二二、張鼓峰事件／二三、東亜新秩序建設に関する政府声明／二四、汪兆銘工作／二五、防共協定の強化／二六、対外関係の概要／二七、平沼内閣と三国協定強化問題／二八、日米通商航海条約破棄通告／二九、日独防共協定をめぐる経緯大要／三〇、行き詰まる内外情勢／三一、対外施策方針要項／三二、桐工作／三三、松岡外相・錢永銘の線による対重慶和平交渉／三四、欧州戦局と国内情勢／三五、欧州情勢の急転と支那事変への影響／三六、援蒋ルートの遮断／三七、武力南進への動き

馬場正夫、昭和五十八年四月／平成元年三月東弁図書館長、平成十一年十月没(http://www.toben.or.jp/libra/pdf/2001_1_20.pdf)。

伊藤 「反省会」は、もうだいぶ前に終わったんですか。

扇 ああ、十九年間やった。

高橋 それは、「霞会」(虎の門会)。

伊藤 「霞会」と「反省会」は違うんでしょう。

扇 「霞会」ですよ。

伊藤 「霞会」と「反省会」は、同じですか。

高橋 「霞会」も、丸の内の水交会で開かれたんですね。

扇 「霞会」というのは、私が名前を付けたんだ。

伊藤 「反省会」というのは、別だと思うけどなあ……。

高橋 この間は、別だとおっしゃっていましたね。

扇 「反省会」というのは……。

影山 海上自衛隊をどうするかというのは、それは「霞会」とおっしゃったんです。「反省会」は、海軍そのものの反省で……。

伊藤 ちよつといま、混同を……。

扇 「反省会」に対するいろいろなあれば、みな、うちでやったんですよ。

伊藤 何をやったんですか。

扇 中山定義、それから……。

高橋 中村悌次さん。

扇 それから、三井グラウンドの管理人をやっていた、名前は……。

伊藤 「反省会」の記録はありますか。

扇 あるある、こんなにある。

伊藤 いやいや、先生の意見ではなくて、他の人の意見が載ったものがありますか。

扇 (暢威) 議事録。

扇 ああ、みんなあります。あるけれども、小さい所にこちゃこちゃ

入り込んでしもうて……。それぞれの委員が、「わしも、わしも」で意見を言うでしょう。それが、みんな書類になって、みんなあるんですよ。それが大事なやつと、そうじゃないやつが、糞味噌になつとるんだから……。それを分けなきゃならんと思つて、もう二年ぐらいになる（笑）。私の部屋に一杯あります。

「反省会」関係の史料は、「扇一登氏関係文書」の第七箱から第十二箱までの中に、議事録や会員のものと思われる諸論考が含まれている。

伊藤 それは、僕がやりますよ（笑）。

扇（暢威）じゃあ、あるんだ。

扇 あなたが手を掛けるほど、重要視されるようなものは、ないのよ。まとまっているのは、私が書いた「反省録」ぐらいなものでね。私は、国策を中心にして、ずっと書いたんです。

伊藤 一度、見てみたいですね。

扇 それは、いつでも見せて上げますよ。

伊藤 今度、ちゃんと整理しますよ。

扇 私は、その時に、本当に考えた。

伊藤 「反省会」というのは、いつ頃出来たんですか。

扇 これはね、海上自衛隊が出来て……。

伊藤 それは、「霞会」（虎の門会）の話でしょう。

扇 自衛隊が出来て、海軍の良き伝統を自衛隊に伝える、と。それを考えたのは庵原貢と……。

庵原貢、海兵五二期。戦前は第三艦隊参謀、南西方面艦隊参謀、海軍省教育一課長、鈴木貫太郎秘書官等を務める。戦後、海上警備隊に入り、海上幕僚監部総務部長、自衛艦隊司令等を務め、昭和三十三年八月海幕長、三十六年八月退官、三菱重工顧問（NICHIGAI/WEB Service）。

扇（暢威）（両舷直は）庵原さんだよ。「イ」の字でいいんだよ（笑）。
扇 ああいうものが出来る時の会議は、みな、うちでやったんだからみんな、そこらにおるんだから……。何と言ったか、また名前が出ない。陸軍中尉で、三井グラウンドの管理人をやっていた……。

扇（暢威）庵原さん？

扇 庵原とか、中山とか、皆うちと呼んで、海上自衛隊に訓示を出すと言つて、原稿をここで作ったんです。

扇（暢威）庵原さんは陸軍じゃない、海軍だよ。

伊藤 陸軍中尉ということはないでしょう。やつぱり、海軍でしょうね。

扇 ここへ呼んで、そこで原案を私が書いてやったんです。

扇（暢威）「霞会」のことを言っているんじゃないかと思ひます。

伊藤 「霞会」でしょうね。

影山 きつと、（三井グラウンドの管理人は）海上自衛隊の二尉の人でしょう。

扇（暢威）確かに、ごっちゃになっているね。

伊藤 書類を見れば、分かります。

戦後を生きる

高橋 先生は、海上自衛隊の幹部学校に呼ばれて話をしたようなことはございますか。

扇 私が？ あそこで講演したことはないですよ。

扇（和子）車でお迎えに来たことがありますが、あれは何ですか。

高橋 それは「防研」（防衛研究所、現・防衛研究所）だと思います。私が、お呼びしたんです。

伊藤 前回、川南さんの話が出ましたが、あの人とは戦後も、ずっと一緒に仕事をされましたか。

扇 戦後、私は真つ先に職を失って、食う道がなくなりました。一番真つ先に駆け込んで来てくれたのが、川南豊作です。「私の所に来てくれ」と。「船会社をつくるから、常務をやってくれ」と言つて、うちに来た。私に、飯を食わせてくれたな。

伊藤 でも、あの会社は東京じゃないでしょう。

扇 長崎の川南造船所という、大きな造船会社だった。

伊藤 そこへ行つたわけじゃないんでしょう？

扇 行つたですよ。何遍も行つたけど、それは、ただ見に行つただけで、東京で伏見宮の御殿（千代田区紀尾井町）の中に会社の事務所をつくつたんです。そこへ、私が真つ先に呼ばれて、食わして貰つたのは私と、飛行機の源田（実）と、藤井茂の三人が呼ばれたんです。それぞれの、みんな小さな会社ですよ。源田のやつたのは木造船の会社で、藤井さんも小さな船会社で、私も船会社……。私は、船会社の常務になつたんだ。

高橋 それは、聞いていないですね。

伊藤 ちよつと待つてください。川南造船じゃなくて？

扇 川南の中に、小さな会社があるんです。

伊藤 じゃあ、子会社なんだ。

扇 川南という奴は、なかなかの遣り手ですから。この三人が、戦争中も一所懸命やつたんだから……。それが食えんようになったから、

直ぐ迎えに来たんです。私は、そこに入った。彼が、そういう会社の東京の事務所を軍令部総長の宮殿下——伏見宮の御殿の中につくつたんだ（笑）。私は、そこに毎日通つておつたんです。

伊藤 それは何年か、しばらく続いたんですか。

扇 いや、長いことはないですね。二年ぐらいです。

伊藤 あと、自分の会社をつくつたでしょう？

扇 南米アルゼンチンとの貿易をやる会社をつくろう、と。アルゼンチン「専門屋」の二世ですが、それを呼んで、私の会社をつくつて、貿易をやつたんです。

伊藤 それは、この前お話しになつた「扇矢資材」とは違うんですか。

扇 「扇矢資材」とは違うんですよ。「第一商船」と言う……（笑）。

伊藤 いろいろなことをやつておられるんだ（笑）。

扇 だから、その頃は、川南とは毎日の如く会つていました。

伊藤 その会社は、川南と関係があるわけですか。

扇 川南の子会社です（笑）。で、毎日、御殿に行つていました。

伊藤 そのうちに「扇矢資材」をつくつて、そっちが主になるわけですね。

扇 これは、私が別につくつたんです。私一人でやつた、一人の会社。

伊藤 これは、資本主は誰ですか。

扇 資本主は、いない。

伊藤 資本がなきゃ、出来ないじゃないですか。

扇 要らんですよ、それが……（笑）。

伊藤 この前の話だと、矢部さんという木材屋さんが……。

扇 矢部は深川の材木屋で、私は他人のためにもやつたんだから。例えば、阿部中將が帰つて来て、食うや食わずでいるわけですね。それ

から、私のクラスの溪口、豊田……。

高橋 豊田隈雄さん。

扇 小島……。ああいう錚々たる奴が、能力がないんだから（笑）。「お前たち十万円出して、私がそれを預かって、矢部材木屋に使わせる。そうすると、月に一万円を矢部が配当してくれる。それで食え」と言って……。私は、人のためにもなっているんですから（笑）。みんな誘ってやっただけです。阿部中将も、家によく来ていました。

矢部の親父が深川で、清水建設の下請けをやっておった。材木を、あそこに納めていたんです。ちゃんとした立派な商人だったんですよ。だから、それから月一万円ずつ利息を取って、そういう人たちの暮らし向きにやっただけですよ。私が、みんなやっただけ。

伊藤 先生は、どうして矢部さんという人を知っているんですか。

扇 矢部さんは、清水建設に材木を納める下請けをやっていた。

伊藤 先生は、清水建設と関係があるんですか。

扇 私は、清水建設とは関係ない。矢部さんが、そう。

伊藤 でも、矢部さんと先生は、どういう関係なんですか。

扇 矢部さんを（私に）紹介したのは、スウエーデンのヨンチヨピンで、私が除け者にされて……。

高橋 和久田さん？

伊藤 この前、出ていた名前は、そうですね。

扇 和久田じゃない。

扇（暢威）矢部さんを、お祖父ちゃんに紹介した人は、誰ですか。

扇 陸軍武官よ、小野寺さん。

伊藤 へえ、小野寺さんが矢部さんを紹介したんですか。

扇 うん、そう。小野寺自身も狡いんですよ（笑）。もう、そうなる

と、どうして食うかということで、みんな……。小野寺さんは、矢部さんにたかって、あそこから小切手か何か引ったくったりしたんだ。悪いことをしてるんですよ（笑）。そこで御馳走させて、私を呼んだんです。

未公開の「日記」について

高橋 先生は戦後、海軍の大将や中将級の人とお会いしたことはありますか。例えば、米内さんとか、戦後、お会いして話をするような機会がありましたか。

扇 戦後？ 米内さんと一緒に写っている写真を持って来て……。

扇（暢威）それは、戦前の写真でしょう。ご質問は、戦後の話……。

扇 いやあ、幾らでも話がある。米内さんから、やられたんだから。

伊藤 アルバムですか。

扇 アルバムじゃない、額になっている。

扇（暢威）だから、戦前だよ。

高橋 昭和七、八年頃と書いてあります。

扇（写真を見て）これは、曰く因縁があるんですよ。米内さんとの関係は、幾らでも話があるんだ。

扇（和子）昭和二十年以降は？

扇 ……岡さんとは、子分だったですからね。岡さんとは今でも……。

扇（暢威）私の記憶では、戦後は米内さんとの関係はないです。

伊藤 岡敬純さんとは、戦後もずっとお付き合いがあったんですか。

扇 ああ、もう大変なあれです。私、遺言をされているんだから……。「岡日記」というか……。

伊藤 その話は、やっぱり先生ですか。あの遺言は、先生の？

扇 そうなんです。

伊藤 じゃあ、先生が押さえているんだな（笑）。それ、何とかありませんかね。

扇 「あの遺言の始末については、扇と相談せい」と言つて……。

伊藤 じゃあ、相談に乗ってください（笑）。「岡敬純日記」を出したんですよ。

扇 それでね、「岡日記」は、私に託されているんだよ。養子は、田村幸策という……。

伊藤 朝日新聞の記者でしょう。

扇 最後は、トルコか何かの大使をやった田村幸策という人がいるんですよ。あの養子は、その息子なんだ。

扇（和子）岡多摩雄さん。

田村幸策については、第六回聞き取り（一八四頁）の註を参照。トルコ大使ではない。

扇 それに、「百年間は発表してはいけない。これに関することは、全部、扇に相談せい」と遺言されているんです。だから、それを僕の所に持って来たんです。こういうものがあつて、こうなんだ、と。その時に、私はずっと読んで、「あつ、これは大したことは何にも書いてない」と（笑）。「百年とか、それほどもつたたいをつけるような内容じゃないな」と思つとつたんです。しかし、それは返しました。最後に、防衛庁の戦史部が「岡日記」というものがあることを聞いて、「何とか見せて欲しい」と言つて、ずいぶん働き掛けたんですね。私

の所にも来ましたよ。だけど、私は「知らん」と言つたか、「私には、どうにもならん」と言つたか……。

伊藤 何とかしてくださいよ（笑）。

扇（暢威）岡さんというのは、どういう方ですか？

伊藤 軍務局長。

岡敬純、海兵三九期、昭和十三年一月軍務局一課長、十四年十月軍令部三部長、十五年十月軍務局長、十九年七月海軍次官兼軍務局長、同八月出仕、同九月鎮海警備府長官、二十年四月出仕、同六月予備役（前掲『日本陸海軍総合事典』一七七頁）。

高橋 この「日記」は、大変重要なものですから。あともう一つ、小島秀雄さんの……。

伊藤 先生は、岡さんに「出してやりなさいよ」とアドバイスできるでしょう。小島秀雄さんも、そうですね。

小島秀雄（前出）、海兵四四期、昭和十一年二月～十四年五月ドイツ大使館付武官、その後軍令部三部七課長、軍令部員、臨時欧州戦争軍事調査部員等を経て、十八年九月ドイツ大使館兼フィンランド公使館付武官、十九年六月兼フランス大使館付武官、二十年十二月帰朝（前掲『日本陸海軍総合事典』一八九頁）。

扇 私は、だいぶやつたんですよ。小島秀雄は、関係ない。

伊藤 小島秀雄さんの史料は？

扇 ああ、あそこの史料は何も持つちゃおらんです。

高橋 「日記」がありますね。

扇 小島秀雄さんが書いたものは、何も持つちゃおらんですね。

伊藤 そうじゃなくて、関係ないですか。

扇 それは、関係ない。岡さんのものはだいぶあつて、防衛庁に「ぜ

ひ見たい」と言われて……。

伊藤 防衛庁じゃなくて、僕も見たいんです（笑）。何とかしてください。

扇 私が見て、何もありやせんじゃないか、と（笑）。「つまらんものをもったいづけて、何だ」と思ったね。

伊藤 今度、岡さんの養子に「出しなさい」と言ってください。

扇 そういので、目黒の海軍大学の後、富岡さんがやつとつたでしよう。

高橋 史料調査会ですか。

扇 あれと話をし、富岡さんの所にコピーを取らしたり、何か話を付けたです。そして、覚書を交換してね。

「扇一登氏関係文書」八一―三八（「岡覚書について」）は、昭和六十三年十二月頃のものだと推測される、海軍史編集関係者からの問合せに対する回答書の下書き。内容は、次の通り。

拝啓 六十三年十月二七日付御懇書ありがとうございます。岡覚書の取扱いにつきまして、これを貴会の御主旨に副うよう役立てることはやぶさかでありませぬが、戦後百年迄は門外不出とせよとの厳しい遺言がありますので、左記の条項が容れられるならコピー一部の保存を貴会に托しても差支えないと思います。重ねて貴意を承はり度いと存じます。

記

一、本覚書は貴会編集の海軍史執筆編集員以外への閲覧を許さぬように厳重管理していただくこと。

二、本覚書の纏った存在を殊更顕示するような記述や表現は避けられ度いこと。特にジャーナリズムの追求対象にされないように御願ひ致します。

三、以上のことは将来貴会管理責任者の交代ある場合も遺漏なく引継がれるようお願いすること。

右、御回答申し上げます。

（12/26 内田〇スミと書き込みあり）

この内田は、内田一臣と思われる。海兵六三期、戦前は『大和』分隊長や砲術校教官を務め、戦後海上自衛隊に入り、昭和四十四年七月～四十七年三月海上幕僚長。五十七年五月から六十一年五月まで、水交会会長を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』一七二頁）。富岡氏の話は別にあるのか、取り違えか。

伊藤 発表しちゃいけない、と。

扇 あとで養子が、みな私に言うて来るものだから。だからと言って、百年秘密を保つほど、何か大きなことでも中に書いてあるかと思つたら、何もありやせんよ。つまらんことばかり……（笑）。

伊藤 分かりました。

扇 そこは、富岡さんと話を付けたんですよ。

扇（暢威）富岡さんというのは、どなたですか。

高橋 富岡定俊。

富岡定俊、海兵四五期、昭和十四年十一月海大教官、十五年十月軍令部一部一課長、十八年一月『大淀』艦長、十八年九月南東方面艦隊参謀副長、十九年四月南東方面艦隊参謀長、十九年十二月軍令部一部長、二十年十月海軍省出仕（資料調査）、二十年十一月予備役、同十二月召集・第二復員省大臣官房史実部長、二十一年三月召集解除を経て、史料調査会理事長（前掲『日本陸海軍総合事典』二二三頁）。

伊藤 海軍の護衛船団の司令官でしょう。

高橋 開戦時に軍令部の作戦課長。

扇 むしろ「藤井日記」なんていうのは……。

藤井茂、海兵四九期の「日記」（未公刊）。

伊藤・高橋 見たいですね。

高橋 今日は、どうも有難うございました。

〈以上〉

扇 一 登 オーラルヒストリー

第8回

[2001 年 10 月 15 日 15:00～16:40]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

影山好一郎(防衛大学校教授)

扇 暢威(長男)

扇 和子(長男夫人)

(於：杉並区浜田山 扇一登氏宅)

「反省会」の趣旨

伊藤 この間、お借りした史料の仮目録を作ってみました。見てください。探すと、いろいろなものが入っていますね。

扇 (仮目録を見ながら) 初めに言っておきますが、私はこの人を信用しないんですよ。

伊藤 野元(為輝)さんという人ですか？

扇 ええ。これは、中央関係の機微に通じた人じゃないんですよ。兵隊で駆けずり回っただけなんです。それが、これを……。

伊藤 「反省会」を始めたんですか。

反省会の結成経緯については、第七回聞き取り(二〇〇頁)の註Ⅱ野元為輝「昭和六十年をおくる」を参照。

野元為輝、海兵四四期。昭和十五年以降は『千歳』艦長、『瑞鳳』艦長、筑波空司令、『瑞鶴』艦長、練習連合航空総隊参謀長、第一連空司令官、第九〇三空司令官等を務める(前掲『日本陸海軍総合事典』二二二頁)。

なお、野元氏の詳しい経歴は、野元為輝「黒潮の爪あとⅡ太平洋戦争反省録Ⅱ」(「扇一登氏関係文書」一〇―二七)末尾の年譜を参照。

扇 統裁したんですからね。私は、あの人に反対なんです。自分の思いの通りに言いますが、本当の気持ちをそのままに言っていると、評価するような人じゃない。あの人の言うことには矛盾もあるし、独断もあるし、ちつとも私は尊重しないんですよ。

ですから、私は私として、どうしてこんなことになったのかという

ことについて、国策を中心にして始終考えとったんですよ。ただ空に考えとったんですが、それを私はあの中で主任として作業して……。主任の仕事というのは、国策を中心にした検討ですよ。一切の国策を中心にした検討で、これが私が寝ても覚めても考えておったところなんです。

伊藤 それで、野元為輝という人は、中沢さんと関係があつたんですか。「故中沢佑中將を偲びつつ、海軍反省会の提唱」と……。

『水交』No.二九五、昭和五十三年三月、七頁(「扇一登氏関係文書」一一〇)。

扇 中沢佑……。

伊藤 先生は、中沢さんとは関係がありましたか？

扇 中沢佑というのは、軍令部の作戦課長をやった人です。

中沢佑、海兵四三期、昭和十二年十二月軍令部一部二課長、十四年十一月軍令部一部一課長、十五年十月『足柄』艦長、十六年七月第五艦隊参謀長、昭和十七年十一月少将出仕、同十二月人事局長、十八年六月軍令部一部長、十九年十二月第二航戦司令官、二十年五月高雄警備府参謀長(前掲『日本陸海軍総合事典』二二六頁)。

伊藤 親しかつたですか。

扇 私？ 同じ部屋ですから。軍務局長を中心にして、ちよつとした仕切りがあつて、私の調査課と軍務局とは続いているんですよ。いつでも小さい道で、行き来が出来るようになっていてね。

伊藤 個人的には、親しかつたんですか。

扇 中沢さん？ 同じ部屋ですから、それはもう親しいですよ、毎日毎日……。

伊藤 これ(「反省会」)は、昭和五十五年に始まっているみたいなん

ですね。五十五年が始まっているんですが、ここに先生が「反省会・昭和四十六年以来」と書いてあるので、どっちが本当なのかよく分からないんですね。もう分からないでしょうね。

第七回聞き取り（二〇〇頁）の註にあるように、「反省会」は昭和五十五年開始と思われる。

扇 こっちは、少々（老いが）来とるからね（笑）。

伊藤 この平塚清一さんという方は、どういう方ですか。

扇 これは、幹事ですよ。これが記録を作ったりした世話係……。

伊藤 昭和五十五年が始まって、既に開催回数は百二十一回を超えている、と。百二十何回なんていう「記録要旨」が、史料の中にあるんですよ。これは平成二年の「記録要旨」ですが、「もうまとめて、やめよう」という話なんですよ。

扇 もう枝葉末節に走ってしまつて、何もなんのですよ（笑）。戦争指導の大きな眼目から外れてももうてね。だから、私は野元さんを、ちつとも……。

伊藤 この時は、もう野元さんはいないんでしょう？

扇 途中で死んだですからね（昭和六十二年十二月逝去）。

伊藤 たぶん、そうでしょう。だから、「反省会は、元々これを目的として発足したと仄聞しており、今回の創始者である故野元先生は……」と書いてありますから、この時はもう亡くなっているわけです。「どうやって終結するか」ということを考えましょう」という話を、提案しているんですね。実際に、どうやって終わったのか、よく分からないんですけど……。

扇 野元さんは、死んだですからね。

伊藤 いやいや、それでまだ平塚さんがやっているわけです。

扇 これは、ただの事務局ですよ。

伊藤 ですから、「反省会」の最後は、どうなったんですか。

扇 結論的なことはなくて、終わったんじゃないですか。

伊藤 本にまとめるとか、そういうことは？

扇（海軍省）調査課の中山定義（海兵五四期）が、私の後任に来たんですから……。あれが、例の防衛大学校の、軍人でない人が入つて、最後の一番で卒業した人、何て言ったかな。

二一六頁の部分と併せて推測すると、「あれ」は中山であるが、「防衛大学校」云々以下は、人物を特定できない。

影山 阿南さんですか。

伊藤 メンバーにいますか？

扇 結論的なものがなくて、終わってしまったんですよ。

伊藤 これが、最後の頃の会員の名簿なんですね。保科（善四郎）さんから始まって、ずっと……。この中で熱心だったのは、誰なんですか。

昭和六十三年十一月二十二日付「反省会会員名簿」（「扇一登氏関係文書」一〇一六一）。メンバーは、以下の通り。新見政一、保科善四郎、松田千秋、久保田芳雄、黛治夫、三井再男、佐藤毅、寺崎隆治、曾我清、大井篤、扇一登、豊田隈雄、安井保門、牧野茂、末国正雄、泉雅弥、福地誠夫、中島親孝、今井秋次郎、藤村義朗、田口利助、千早正隆、鳥巢建之助、鈴木孝一、木山正義、長束巖、平塚清一、本名進、内田一臣、石隈辰彦、市来俊男、茂木明治、小池猪一、生出寿、高須裕三、幹部学校長、防衛部副部長。一番熱心だった人？

「扇一登氏関係文書」一〇一三二（昭和）五十七年九月までに受領の各委員所見」は、保科以下十九名の各委員ごとの、年月日入り報告（あるいは資

料作成) リストであり、委員の熱心さをある程度反映していると推測される。その内容は、次の通り。

保科委員 野元氏の随想片々(其四)に対する所見 五五―一二―二七
小島委員 ヒットラーと私

陳述要旨

五六―四―七

同右

五七―一二―一

野元委員 海軍大将沢本頼雄手記

海上幹部学校

海軍反省会の提唱

水交記事

これからの日本を考へる

五九―一―三

反省会打合会陳述事項

五五―三―二八

随想片々(その二)

五五―六―一二

”(その三)

五五―七―一〇

”(その四)

五五―八―一〇

太平洋戦争海軍反省録

五六―六―一七

第十八回反省会議題 人事、教育、統率、機関科問題

太平洋戦争反省録

五七―四

松田委員 太平洋戦争を省みて想う

戸田航空戦隊の足跡を省みて想う

太平洋戦争を省みて想う、の補足

五六―四―二七

大東亜戦争敗戦の責任者の人選について想う 五六―七―一四

潜水艦戦の失敗を考へる(鳥巢案)に対する所見

五六―八―二四

反省会各位宛(軍備計画について)

五六―九―一四

第二十一回反省会陳述資料

五六―九―一四

太平洋戦争開戦に至る我海軍伝統の

大艦巨砲主義の是非を検討する 五七―二―一八

太平洋戦争反省録(野元案)に対する所見 五七―四―二六

国家総力戦の見地において太平洋戦争の敗因を分析する

五七―八

時代の変遷と私の歩いた道

五七―七

昭和十八年七月戦艦大和の電探射撃に関する

松井宗明氏の記事

Big Man 記事コピ―

矢牧委員 野元少将の随想片々(その四)第一項戦争抑止力の問題について

いて

明治元年↓昭和十五年 内閣の年表

日米対照表 一六三九―一九三〇

大正二年↓昭和二十年

海軍大臣、次官、関係課長人名表

軍令部各課長、GF、2F、横鎮長官、参謀長 人名表

駐在武官、陸相、参謀総長、関東軍司令官 人名表

昭和十五年↓二十年 海軍主要事件年表

昭和十二年↓二十年 第二次大戦主要事件年表

一五六九↓一九三三 世界主要事件

昭和四年↓二十年 国内主要事件

大正二年↓昭和二十年 陸軍大臣、参謀総長、教育総監

高木少将の所見抜粹 コピ―

砲戦史談抜粹 コピ―

大正、昭和にわたる日米海軍主砲の命中率

薩摩安芸砲戦力の検討

戦艦主砲を重視する海上決戦に関する意見補遺

砲術史抜粋（大東亜戦争の海戦）

（矢野龍渓著）

NHK去年一〇—「歴史への招待」中に

有田委員

太平洋戦争に於ける水雷術関係反省事項

太平洋戦争反省録に対する所見

佐藤委員

野元先輩起案反省録第一編に対する意見

「海軍と日本」に対する所見

寺崎委員

第十八回反省会人事に関する野元論文について意見

大本営海軍部海戦経緯に関する考察に対する所見

潜水艦戦の失敗を考へる（鳥巢案）について所見

水中特攻作戦についての所見

松田委員軍令部伝統の作戦計画について

真珠湾攻撃について

大東亜戦争敗戦の責任者人選云々に関する所見

情報通信について所見

曾我委員

海軍反省会について

五〇八—二八

沢本頼雄大将の手記を拝読して

五五—一二—一八

反省会の纏め方に対する意見

五六—四—一七

太平洋戦争海軍反省録に対する所見

五六—六—一七

松田論文大東亜戦争敗戦の責任者の人選を拝読して想う

五六—八—二八

鳥巢論文潜水艦戦の失敗を考へるを読んで

五六—八—二八

大東亜戦争の反省 科学技術面からの考察

五七—一—二五

昭和十七年四月十八日の空襲について

五七—四—一五

太平洋戦争反省録第一編に対する所見

五七—五—一二

大井委員 軍令部伝統の作戦計画を読んで

一九八一—九—上

潜水艦戦の失敗を考へるを読んで

扇委員（表題のみ）

一、国家体制の問題

二、平時より準備すべき攻略戦略の問題

三、陸海軍の軍備と統帥

四、海軍々備

五、戦争実施

末国委員 昭和三年八月調整海軍々機第四三三三号乙

軍備制限研究委員会報告乙

昭和十五年七月二十七日連絡会議で

「世界情勢の推移に伴ふ時局処理要項」が決定された

昭和十五年八月二日海軍首脳部の戦備打合説明会

物動計画改訂に関する対陸軍交渉

国防方針と年度作戦計画

陸軍大臣の現役制と陸軍の態度

海軍予備員の種類区分

陸軍に於ける代理令

日本海軍、陸軍の体質とその教育（波濤）

鳥巢氏の潜水艦戦の失敗を考へるに対する所感

五六—八—二六

池田清著「海軍と日本」読後感

中島委員 鳥巢論文に対する所見

太平洋戦争反省録に対する所見

「海軍と日本」に対する所感

情報通信等に就て

棚田委員 海軍の反省について

鳥巢委員 潜水艦戦の失敗を考へる

野元さんの論文に対する参考意見

潜水艦作戦関係諸表

A 時期別保有潜水艦艦種艦型隻数

B 各潜水艦作戦行動一覧表

C 時期別原因別喪失潜水艦一覧表

D 潜水艦輸送実施一覧表

E 潜水艦竣工隻数と各種任務実施回数一覧表

F 艦隊戦闘名と参加潜水艦一覧表

G 交通破壊戦一覧表

池田清著「海軍と日本」を読む

鈴木委員 野元委員の人事教育統率問題所論に対する所見

五・一五事件について

海戦経緯に関する考察に対する所見

作戦計画とそれに伴ふ軍備計画に対する所見（松田委員の）

野元閣下の随想片々（その四）に対する所感

太平洋戦争反省録に対する所感

「海軍と日本」に対する所感

分担事項砲術関係

久原委員 「海軍と日本」の読後感

内田委員 大本営海軍部大東亜戦争開戦経緯に関する考察

別に本名委員より葉書多数

この実物に当たるものが、「扇一登氏関係文書」中に散見される。

伊藤 ええ、「反省会」で……。保科さんなんか、熱心だったですよ。

扇 うん、何遍も来たですよ。

伊藤 新見（政一）さんは？

扇 新見さんも、何遍も来た。

伊藤 熱心だったですか。

扇 ええ。新見さんは熱心なほうですよ。あの人は、元々「戦訓」というものを、ずっと専門にやってきた人です。

「反省会」の顔ぶれ

伊藤 この名前の中で、先生が非常に……。

扇 私、自分だけが一所懸命やった。国策を中心にして、自分で引き受けて……。

伊藤 それは、分かりますよ。

扇 中央で海軍の政策を立てると言ったって、三人しかおらんのですからね。その三人を中心にして、中山定義を引き立てて行ったんですよ。

伊藤 でも、この中には、中山さんは入っていませんね。中山さんは、早くに亡くなられたということはないよね。

影山 数年前に亡くなられました（平成七年一月逝去）。

扇 中山さんは、私を立ててくれたんですよ。

それから、あれは防大をオフィサーでなくて入って、海軍でなくて

入って一番で卒業した。後に幕僚会議議長をやって、戦後ずっとその道でアドバイス、戦史室長をやったりして……。

誰か？ 人物を特定できない。

伊藤 海軍関係の戦史室長って誰だろう。大体、陸の人だよ。

扇 あの人、この会に出る時に、「扇さんの言うことを聞いて来なさい」と、中山が言うて……。それは、私は戦争中の戦前から戦後にかけての「中枢」をやったんですから。三人で、やったんですよ、海軍政策の立案から何から、一切を……。私は、夢中でやったんですから。その三人でやったことを、中山さんが、海軍じゃなくて防大を一番で出た人に、「扇さんの言うことを聞いて来なさい」と言ってくれた。

伊藤 例えば、豊田（隈雄）さんという名前を見たら、何か思い出しますか？

扇 これは、私が高松宮妃殿下に推薦した人ですからね。

伊藤 『日記』の時ですね。

細川護貞「ほか」 編として刊行された『高松宮日記』（中央公論社、一九五〇―一九九七年）のこと。

扇 私が、これ（豊田）を推薦したんです。（彼は）細かい事務屋ですよ。感心するほど……。事務屋で細かいだけ……と言っちゃ悪いけどね。まあ、感心しますわ。だから、昨日の祭りなんかについても、彼は言うことを三十分ぐらい読んだんですよ。私は、七分間で終わらせとるんですからね（笑）。それで昨日、みんなに褒められた。

扇（暢威）昨日、会合があつたんです。

伊藤 何の会合ですか。

扇（暢威）（海軍兵学校）五一期の「五一会」の家族会ですね。

伊藤 「五一会」は……。

扇（暢威）本人が一人と、未亡人が五、六人、あとは僕ら子どもクラス。

伊藤 何故、そこに豊田さんの名前が出て来るんですか。

扇（暢威）豊田さんは、もう二、三年前に亡くなった（平成七年二月逝去）。その頃、豊田さんが挨拶すると、三十分になったということ言いたいわけです（笑）。自分は七分で終えた、と。

伊藤 そういう意味ですか。通訳が必要ですね（笑）。

扇 これに出て来ますけれど、三人でやったんですよ。私は大尉、それから私の海軍兵学校時代の伍長だった藤井茂と、もう一人が柴勝男で、この三人で海軍の政策は全部やったんです。その中で、いつでもこの二人が私の所に相談に来るんですよ。それで、私が海軍としての原案を書くんですよ。海軍としての方針、やり方、つまり海軍政策ですね。私が原案を書くんです。二人で、私の所に来るんですよ。それで、三人で相談して、海軍を引っ張って行つたんです。

伊藤 これは先生のノートですけど、例えば「五十七年七月七日、反省会。保科氏」と、メモしてありますね。会があると、毎回、こういう記録を作ったんですね。

扇 毎回、作った。そういう一切の雑務をやったのが……。

伊藤 平塚さん。

扇 はい。

伊藤 それから、これは「第一〇五回・一〇六回反省会記録」ですね。扇 最後に、「どうするか」と言つて……。こういう連中がたくさん来るんだけど、もうつまらんことばかり、小さいことばかり言ってるもんで、どうやっていいか分からんようになった。それなん

か、「反省会」の記録にも何にもならないですよ。

伊藤 最初の頃は、沢本（頼雄）大将の「手記」を、みんなで議論して……。

扇 ああ、議論した。

伊藤 あれなんか、扇さんは積極的におやりになったんですか。

扇 沢本さんは、（開戦）当時の次官ですからね。あの人も、細かい人ですよ。細かい人ですが、『沢本記録』というのは、その当時の海軍省の大臣の周囲を描いておるんですからね。

伊藤 今、「手記」の元になった沢本さんの「日記」を戦史部に貰いまして、僕らがみんなで手分けして本にするという作業をやっているんですよ。

当時、「反省会」で参照したと思われるのが「海軍大将沢本頼雄手記」（海上自衛隊幹部学校、一九八〇年、「扇一登氏関係文書」七一一、一二）。二部構成となっていて、幹部学校長による解説によると、第一部は沢本氏が豊田隈雄氏に話した際の原稿、第二部は沢本氏が『太平洋戦争に通ずる道第七巻』を読み、当時の海軍上層部の動向を明らかにするために、当時の「日記」の関係部分を摘記している。中山定義元海上幕僚長を通じて海上自衛隊幹部学校に提供され、印刷されたという。「手記」の元となっている「日記」の一部を紹介したのが、伊藤隆・沢本倫生・野村実「新資料・開戦か避戦か〈政軍首脳部の苦衷〉 沢本頼雄海軍次官日記―日米開戦前夜」（『中央公論』一〇三（二）一九八八年一月、四三四―四八〇頁、及び、伊藤隆・沢本倫生・野村実「沢本頼雄海軍次官日記―東条内閣崩壊の序曲」（『軍事史学』二五（二）一九八九年九月、五七―七二頁）。

扇 そうですか。あれは、非常に参考になるんじゃないですか。

伊藤 なると思います。嶋田（繁太郎）さんと、伏見宮の関係もよく

分かるし、非常に面白い本です。

扇 いいですよ、あれはね。あれを、この中で問題にして議論をしたことがあります。

伊藤 どんな議論だったか、覚えていらつしやらないでしょうね。

扇 いや、それはね、沢本さんには、みな敬意を表しておったですよ。大臣の周囲のことが、よく分かるんですね。右翼が入り込んで来て、暴れるでしょう。

伊藤 どこですか。

扇 海軍大臣室へ……。

伊藤 大臣室まで来るんですか。

扇 次官の所へ来るんですよ。右翼が次官の所に来て、暴力を振るわんまでも、机を叩いて暴れるんですよ。それを、沢本さんがグツと抑えて……。だから、あれは貴重な、その周囲のことがよく分かるんです。

前掲「海軍大将沢本頼雄手記」には、右翼云々の記述は見当たらない。別の史料によるものか。

伊藤 先生、「反省会」の研究項目というのがありますが、この番号は何の番号か分かりますか？

扇（暢威）飛び飛びですね。

扇 研究項目、番号……。

伊藤 順番になっていないんです。六番、八番、九番と……。

扇 各部門に分けて、番号を付けたんでしょう。

伊藤 これなんか、担当者でしょう、提出期限とあるんですね。だから、やっぱり何か書いて……。あの中（史料の中）に、少し他の人の原稿も入っているんですね。ということは、みんなが分担して研究し

て、何か原稿を書いたんじゃないですか。

扇 書いた。みんな出した。出したが、細かいことになって、いわゆる「反省会」の、大きな反省にはなっちゃおらんのですよ。だから、「最後をどうするか」と言つて……。私は、歯牙にもかけなかったです。そういう問題は、つまらんことだから。

目録作成済みの「扇一登氏関係文書」中には、反省項目を取り纏めたものが数種類ある。ここで聞き取り時に参照しているものとは異なるが、参考までに、同一〇一五一「反省会として反省事項を取纏めるべき題目及び担当委員(案)」の内容を、以下に掲げる。朱で「六三―四―二五鄧」と書き込みがあり、昭和六十三年四月時点のものと推測される。

番号	題目	担当委員
一	国策	扇
二	国防方針、戦争計画	佐薨
三	作戦計画	松田、佐薨
	兵術、用兵思想	寺崎、土肥
四	軍備全般	黛、三代
	水上、航空、潜水艦	大井、泉
	海上交通保護、防備、対空防衛	千早、鳥巢、鈴木
五	何故開戦したか。何故開戦を回避できなかったか。	大井、内田
六	作戦実施	
	第一段作戦・第二段作戦	佐薨
	第三段作戦	寺崎
	真珠湾作戦・ミッドウェー作戦	三代
	ソロモン作戦	千早

あ号作戦、捷一号作戦、沖縄作戦

寺崎

潜水艦作戦

泉、鳥巢

海上護衛作戦

大井

七 米国から見た日本海軍の作戦

佐薨

八 通信、暗号

中島、久原

情報、宣伝

田口

九 総力戦、総動員

牧野、三井、曾我

一〇 科学技術、資源、燃料、工業力

安井、中島

一一 人事、教育制度、行政、施設、機関科問題

末国

一二 軍人と政治

末国

陸海軍の体質

鈴木

一三 統帥権

佐薨、大井

大臣・総長兼務問題

末国、鳥巢

一四 特攻の本質

鳥巢

一五 終戦問題

大井

一六 敗戦の原因

全員

一七 海軍と哲学・美学

高須

一八 野元哲学、遺言、論文

一九 沢本手記処理問題

二〇 新見・保科中将の総括的御意見

伊藤 この中の寺崎(隆治)さんて、誰ですか。

扇 寺崎は上のクラスですが、お喋りで、喋りまくる男ですから、みんな重視しない。

寺崎隆治、海兵五〇期、海軍大学校では甲種第三二期で扇氏と同期。卒業後は海大に配属され、最終の官名は呉鎮守府参謀(前掲『日本陸海軍総合

事典』六二六頁。

伊藤 あと、末国さんが何回か話していますね。

扇 末国は、これの事務を一人で引き受けてやったんです。

伊藤 じゃあ、事務局長みたいな感じですか。

扇 いや、そうじゃない。末国は教育です。防大の先生をやった人ですから。

末国正雄、海兵五二期は人事局一課局員として敗戦を迎え、戦後は第二復員局、昭和四十一年十一月〜五十三年三月防衛庁戦史室調査員（前掲『日本陸海軍総合事典』二〇二頁）。

伊藤 「米国の対日態度と海軍の対応」という報告を書いているんですね。

「扇一登氏関係文書」九一五一。

扇 これは、だいぶ書いとるですよ。

伊藤 書いたものは、本にはしなかったんですか。

扇 しないですな。最後は、うやむやに終わってしまった。枝葉末節に走ってしもうて、收拾できなくなった。

伊藤 先生の書いたものも、活字にならなかったでしょう。

扇 私の？ 何遍も、活字になったですよ。

伊藤 活字にしようと思って、いろいろやって、結局、本にはならなかったでしょう。

扇 本にはならなかった。

伊藤 確か、私がお借りした時に、活字のものと原稿のままのものと両方ありましたから。

扇 そういうものは、これがやったんですよ。そういう雑務を全部引き受けてやったんです。

「これ」とは、末国氏のことか。

ネイビーを残すために

伊藤 でも、そういうものを作るためには、お金が要るでしょう。誰が工面して来たんですか。

扇 金はどうしたのかな。機密費を出したんじゃないですか（笑）。

伊藤 もう戦後ですから、機密費はないでしょう。やつぱり、誰かが出したんですね。

扇 機密費を使ったのは山本五十六さんの次官時代で、（戦後は）機密費は出さなかったですからね。

伊藤 もう、時期が全然違うんですよ。これは戦争が終わって、海軍がなくなつてからの話ですからね。だから、機密費はない。でも、その話をしてください。

扇 機密費は、高木（惣吉）さんに出したんだ。その当時としては、大きいですよ。七千円だったと思うんですがね。

伊藤 そういうのは、どうやって出すんですか。キャッシュですか。

扇 キャッシュですよ、海軍次官が……。沢本頼雄さんが……。その機密費を、高木さんは私に任せました。私は、いつでも戸棚へ機密費を入れたんですよ。

沢本頼雄は、昭和十六年四月から十九年七月まで海軍次官および次官事務取扱（前掲『日本陸海軍総合事典』一九八頁）。

伊藤 危ないじゃないですか（笑）。それで、総合研究会とか。

扇 研究会は、それでやるんですよ。本願寺の裏の『増田（家）』で……。

伊藤 『増田』の費用なんかは、そこから出すわけですか。

扇 ああ、全部私が払っていた（笑）。

伊藤 先生の後には、どなたでしたっけ？

扇 私の後は、中山定義。

伊藤 じゃあ、そのあと中山さんがやっていたわけですね。

扇 高木さんに、次官から直接来る。それを、中山さんはポコッと、戸棚に入れてある（笑）。

伊藤 金庫じゃないんですか。

扇 金庫じゃないですよ、戸棚ですよ。

伊藤 参ったな。

扇 その頃は『増田』に、ずいぶん費用が掛かるんですからな。

伊藤 やっぱ、大分掛かりますか？

扇 ええ、みんなそれで払うんです。

影山 週に一回ぐらいですからね。

伊藤 驚いた。じゃあ、『反省会』の始まりの所は、先生はあんまりよく分からないわけですね。

扇 「反省会」の始まり？

伊藤 何で、こういう会をやることになったか、と。

扇 そもそも「反省会」というのは、山本五十六さんが次官の時に始めたんです。

伊藤 いやいや、ずっと後の話、戦後の話ですから。

扇 何？

伊藤 （史料の中に）「反省会報告 目次並びに担当者」というものがあるんですね。

扇 「反省会報告資料並びに担当者等」（扇一登氏関係文書 一〇—一二）。

扇 こうやって、細かいことを、みな書いて出すんですよ。もう支離滅裂ですよ。反省には違いないんだけど、技術的な細かいことで、やれ通信がどうの、何がどうなって、こうやったとかいう細かいことで、本来の反省というものには、なつとらんです。支離滅裂ですよ。

伊藤 この中に、扇さんの名前がないんですよね。

扇 私は、自分で国策を……。私しか、おらんと……。

伊藤 「国策、国防方針、作戦計画、統帥権、戦争計画……」

扇 そうです、海軍政策全部ですよ。

伊藤 「……陸海共同を含む。佐藤毅、三代（みよ）……。ここに扇さんの名前がある。

扇 私一人でやった。佐藤毅というのは、航空幕僚長をやった男ですよ。私より一期上の五〇期ですね。

佐藤毅、海兵五〇期。海大では扇氏と同期の甲種第三二期、卒業後は航空本部に配属され、最終官名は南東方面艦隊兼第一一航空艦隊参謀。戦後、自衛隊に入り、昭和三十一年七月～三十四年七月航空幕僚長。四十五年五月～四十九年五月水交会会長（前掲『日本陸海軍総合事典』一九五頁）。

三代辰吉（のち一就と改名）、海兵五一期、海大甲種第三三期、卒業後は加賀飛行隊長、最終官名は横須賀航空隊副長（前掲『日本陸海軍総合事典』二三五・六二七頁）。

伊藤 これだと割り当てが、先生は二十頁なんです。でも先生が書いたのは、二十頁どころではないですよ。何百頁か書いている。

扇 それは、何ですか。

扇（暢威）頁数。「二十枚書いてください」という要求……。

伊藤 いや、二十枚じゃないんです。頁数だから、(原稿用紙の)紙数なら八十枚。

扇 そうして(テーマを)出したら、みな細かいことを書いて出して来た。こんなになるばかりだね。

伊藤 みんなの書いた原稿には、結構面白いのがあるんですけど、全部は揃っていないんですね。

扇 どうしていいか分からんのよ。

伊藤 最後のまとめが出来なかったということですね。分かりました。そういうことで終わりましたか。

扇 お喋りの寺崎が……。

伊藤 毎年、こういうものをおやりになっていたようです。というので、今日持つて来たんですが、「霞会」とあれの史料は持つて来られなかったの、ちよつと順番を変えますが、「五一会」の話です。

扇 これは、「連合クラス会」のあれ(記念誌)に、私が出したんですよ。

伊藤 「連合クラス会」というのは、何ですか。各期の会の、全部の連合ですか。

扇 海軍兵学校全部。

伊藤 「現況」というのは、それ(記念誌)に寄稿したものなんですか。

扇 ええ、「五十一期クラス会の現況」を、これ(記念誌)に出したんですよ。

「扇一登氏関係文書」二一六七として、自筆の「海軍兵学校五十一期級会の現況」がある。寄稿先は、『海軍兵学校連合クラス会 全国大会記念誌』(非売品)か。「現況」によると、「五十一期会」は残存一名だが、婦人会

である「鈴蘭会」が残存約八十名で、両会は昭和五十五年に合体して「五一鈴蘭会」となった。他に、この二世を主体とする「青葉会」が約五百名の会員を擁し、共に活動していた。

伊藤 「会の構成」という所を見ると、「五十一期会」は残存一名のみ」と(笑)。

扇 (暢威)だから、この二、三年でしょうね。

扇 それは、海軍の伝統を海上自衛隊に引き継ぐための目的だね。

伊藤 それは、「霞会」(虎の門会)でしょう。「五一会」というのは、同期会ですよ。

扇 「五一会」の頃、現状と目標を書いて出したんですよ。だけど、(記念誌では)これをもっと簡単に直しているでしょうが……。『連合クラス会』の刷り物には載つとるはずですよ。

伊藤 これで、大体分かる……。

扇 これが、私のクラスの内容ですよ。そういったあれで、現在に引き継ぐ伝統とか信念といったようなものを、私が縮めて文章にしたんですよ。

伊藤 最後の所では、「いま、我々が強調している主なこと」と書いてありますね。

扇 この通りですよ。

伊藤 「我々や遺族が、史料や事跡の片鱗でも、今のうちに拾い上げ、活字や形として残さねばならぬ。いま我々がやらなくて、誰がやってくれるか」と。行を変えて、「『ネイビー』は不滅。残さねばならぬ」と。

扇 そう、高らかに言うたんです(笑)。「ネイビーは不滅。残さねばならぬ」。

伊藤 お元気でしたね(笑)。

扇 私の大きな主張ですよ。これ、本になって出るでしょう。「連合クラス会」というのを、もっと簡単にしとるかも知れませんが。

伊藤 このノートは、「反省会」のことも書いてありますが、防衛庁の戦史研究発表会の記録も入っています。義井(博)さんとか、三宅(正樹)さんとか、野村(実)さんとか、大畑(篤四郎)さんとか、そういう人たちが「日独伊同盟問題」で奔走した時のメモを書いています、なかなか面白いです(笑)。

「扇一登氏関係文書」七一〇として、「昭和五七年度防衛研修所戦史研究発表会 発表要旨」がある。パネルディスカッションのテーマが「日独伊三国同盟の再検討」であり、早稲田大学教授の大畑氏が司会、第二戦史研究室長の野村氏、明治大学教授の三宅氏、名古屋市立大学教授の義井氏の三名が発表者だった。

影山 貴重ですね。

伊藤 これが、初めの頃の「反省会」の名簿ですね。

扇 これ、ミソもクソも一緒ですよ。

伊藤 黛さんというのは、どういう方ですか。

扇 黛治夫、これが曲者だ(笑)。

影山 砲術屋さんですね。

黛治夫、海兵四七期、砲術校教官等を務め、最終官名は横須賀鎮守府参謀副長。著書に『海軍砲戦史談』(原書房、昭和四十七年)がある(前掲『日本陸海軍総合事典』二三四・六二四頁)。「反省会」では「海軍巨砲主義」(「扇一登氏関係文書」九一九)等を執筆。

扇 これが、大艦巨砲主義ですよ。これでやったんですよ。

伊藤 先生だって、大艦巨砲主義だったじゃないですか(笑)。

扇 煙幕を張ったりして、視力を中心にした戦ですね。アメリカは、ずっと先に行つとる。電波でやつとる。雨の中でも霧の中でも、弾が当たるんですからね。

伊藤 ここ(初期の名簿)を見たら、確かに中山さんは入っていました。(会場は)横須賀ですね。あと、石隈(辰彦)さんとか、内田(二臣)さんとか、みんな参加しているんですね。

扇 うん。

伊藤 市来(俊男)さん、石隈さん、内田さん……。

扇 みな優秀なことから、みんな引つ張り込んでる。

伊藤 木山(正義)さんとか。最後の頃は、土井美二さん、実松さんですね。

市来俊男、海兵六七期、元駆逐艦『陽炎』航海長 (http://plaza13.nbn.or.jp/~konton/shiryu/rekishi/RG_INDEX4.HTM) 及び <http://www2b.biglobe.ne.jp/~yorozu/sub2-11.html>)。

内田一臣は、前出のように海兵六三期、最終官名は砲術校教官、戦後海上自衛隊に入り、昭和四十四年七月～四十七年三月海上幕僚長、五十七年五月～六十一年五月水交会会長(前掲『日本陸海軍総合事典』一七二頁)。

木山正義、海軍機関学校四〇期、日本燃料(株)会長など、第六代水交会会長。石隈辰彦、海兵六五期、戦後自衛隊に入り護衛艦隊司令官、横須賀地方総監など、第八代水交会会長(以上、<http://homepage3.nifty.com/suikoukai/>)

土井美二、海兵五〇期、昭和十四年十一月軍令部員(四課)兼海大教官、十六年十二月第三航戦参謀、十七年四月第八戦隊参謀、十八年四月佐鎮参謀、二十年六月西条空司令(前掲『陸海軍将官人事総覧(海軍篇)』二二七―二二八頁)。

扇 実松は、海軍大臣秘書官になったですからね。私の代わりに行っ
たんです。軍務局長が、「扇は出さん。官房調査課一人でやつとるん
だから、これは離すわけにいかん」と、人事局へ、がなり立ててね。

実松は第四回聞き取り（九八頁）の註にあるように、海大卒業後の昭和
十二年十一月〜十四年十二月海軍省副官兼海相秘書官になっている。

伊藤 誰が大臣の時ですか。

扇 僕の代わりに、実松が呼ばれたんです。

伊藤 大臣は誰ですか。

扇 あのパカ大臣……。

伊藤 嶋田（繁太郎）さん？

扇 嶋田（笑）。

前記・註の通り、実松氏が海相秘書官になったのは昭和十二年十二月〜十
四年十二月であり、この時の海軍大臣は、米内光政（昭和十二年二月〜十
四年八月）、吉田善吾（昭和十四年八月〜十五年九月）。扇氏の錯誤である。
嶋田繁太郎海軍大臣（昭和十六年十月〜十九年七月）の秘書官は、着任順
に杉江一三（海兵五六期）、麻生孝雄（同五五期）、岡本功（同五七期）の
三名（前掲『日本陸海軍総合事典』四〇五―四〇六頁）。

伊藤 ハッハッハ、扇さんにあつたら、何とも敵わない（笑）。

扇 バカ大臣の国会における戦況報告は、みな私が書いたんですから。
いつも完全に徹夜して書いた。その資料を、平生からずっと集めてお
ってくれていたのが、日銀総裁になった澄田智で、私の助手をしてお
った。それから、世良（晃志郎）だ。

伊藤 東北大学の……。

扇 東北大学の世良で、宇都宮大学総長で終わったでしょう。

世良氏は一九八九年四月没、「扇一登氏関係文書」五一五四の「追悼 世良

晃志郎先生」という小冊子中の「世良晃志郎先生略歴および主要業績」に
よれば、一九四〇年四月東京帝国大学助手（法学部）、同年五月同助手を休
職し、海軍勤務。翌一九四五年五月海軍主計少佐、同年十月東京帝国大学
助手に復職とある。

「我が党」の士たち

伊藤 話は変わりますが、松前（重義）さんの「思い出の対談」に先
生が出ていますが……。

「扇一登氏関係文書」一一三七〜四四として、扇氏が出席した「松前二等
兵召集の背景」と題する座談会記録がある（『松前文庫』三二〜四〇号、東
海教育研究所内松前文庫発行、一九八二〜一九八五年、途中欠あり、また
一部は抜刷）。

扇 しよっちゅう行つとった。

伊藤 松前さんとは、どういう関係ですか。

扇 もう深い関係ですよ。というのは、松前さんは「反東條」という
形が、はっきりしているんだよね。あれは、逓信省の技官局長だった
ですから。文官と……。

松前重義については、第三回聞き取り（六〇頁）の註を参照。

伊藤 技官？

扇 技官。技官というのは、その当時は非常に（地位が）低いんです。
ただ、全国的な生産力だとか、物資関係、それから戦争必需物資とい
ったようなものを、みな握っているんですよ。その総帥が松前だった

んですね。だから、松前自身はオフィサーじゃないんですよ。官吏じゃない。

伊藤 官吏は官吏ですが、技官の系統なんでしょう。

扇 そうそう、技官は全部握っているんだ。だから、松前の所には本当の数字が、全部出て来るんだ。その他の数字は、陸軍に出すんですよ。陸軍は、それを何倍かにして天皇陛下に上奏する。だから、みな陸軍が握つとつたんです。松前だけは、そうじゃないんだ。生のもので、日本の生産力なり実力なりを、一番握っていたのは松前なんだ。そういう特殊な存在だったんですね。

それで、松前は東條から睨まれて、「こいつを、おつぱり出せ。必ず死ぬ所へ、やれ」と、陸軍省の担当者の係長に直々に東條が命令した。他の人は、誰も知らん。「松前をフィリピン戦線の最前線に出して、殺しちまえ」ということなんですよ。それを、我々は……。その前から、松前と親しかったですからね。

伊藤 それは、研究会ですか。調査課におられる時、松前さんと親しくなったのですか？

扇 私は官房調査課におつて、松前さんと非常に親しかった。というのは、松前さんは陸軍には全く振り向かんです。陸軍の言うことは聞かんです。自分は技師の実力者で、実際の生ものを一番詳しく知っている、それを握っておるんだ、と。だから、松前さんは陸軍が大嫌い。大嫌いだから、私の所に来たんですよ。

伊藤 研究会なんかに、来たんですよ。

扇 ああ、来たですよ。私は信頼して、本当の数字はこれだ、と。陸軍の将校を通じて出して来た数字というのは、でたらめなんだ、と。陸軍は、その数字を何倍かにして、天皇様に報告したわけですよ。

「松前二等兵召集事件の背景」（「扇一登氏関係文書」四一四四、前掲『松前文庫』の抜刷と思われるが掲載号は不明）で扇氏が語るところによると、調査課主催の研究会に、ブレーンを集めて来る役を担っていた天川勇氏が松前氏に参加を依頼し、扇氏は特に南方からの石油輸送のための造船計画作成に当たって、松前氏とその紹介した財界関係者と関係を深めることになったという。

伊藤 マニラに送り出された松前さんを取り返すために、少し力を出したんですか。

扇 海軍は一所懸命やった。一所懸命やったけれども、出来なかった。伊藤 出来なかった？

扇 うん、出来なかった。私は、その場、その場で動いたですよ。松前を殺してはならん、と。陸軍は、高雄から出港してフィリピンに行く船の、一番先頭の輸送船に松前を乗せて、港を出た所で必ずやられるようにしておるんです。

伊藤 恐ろしい話だ（笑）。

扇 私は、どうしたらこれを断ち切れるかと思って、出港の直ぐ前にこつそり二番目の船に乗せたんですよ。そうしたら、高雄を出港したばかりの、港の入口で一番船はやられて、全員死亡ですよ。松前は、二番目に乗つとつたから……。これ、こつそり乗せたんですよ。

前の註で示したように、松前氏が召集されたのは、昭和十九年七月。「奉職履歴」によると、扇氏は昭和十八年十二月には、伊号第二九潜水艦に乗つてドイツへ向かつており、翌十九年三月にはフランスのロリアン港に到着していたので、この松前氏召集後の諸工作については、記憶違いと思われる。

伊藤 それで、松前さんは無事に帰つて来られたわけですよ。

扇 だから、陸軍の中にも、松前を分かる奴がおるんですよ。東條の秘書官をやった……。

伊藤 赤松貞雄さんですか。

扇 赤松。赤松とか、堀場（一雄）は、みんな私のあれですよ。あの時の一部長は、宇垣完さんと言いましたかね。

赤松貞雄については、第六回聞き取り（一八三頁）の註を参照。昭和十五年十一月陸相秘書官兼陸軍省副官、十六年十月首相秘書官を務める。同時期の陸軍参謀本部一部長としては、田中新一、綾部橘樹、真田穰一郎がいる。後で名前が出る宇垣一成の同職在任は、大正五年三月～大正八年一月（前掲『日本陸海軍総合事典』二九九―三〇〇頁）。また、その甥にあたる宇垣完爾は海兵三九期、南支海軍特務部長代理、海南警備府参謀長、支那方面艦隊参謀長、大湊警備府兼第一二航空艦隊長官等を務めた（前掲『日本陸海軍総合事典』一七一頁）。

なお、後述の宇垣纏（海兵四〇期）は、昭和十三年十二月～十六年四月軍令部一部長を務めたのち第八戦隊司令官、連合艦隊参謀長、第一船隊司令官、第五航艦長官を務め、二十年八月沖縄に突入・戦死している（前掲『日本陸海軍総合事典』一七一頁）。宇垣完は、錯誤であろう。

伊藤 海軍の？

扇 いやいや、陸軍ですよ。朝鮮総督の……。

伊藤 宇垣一成。

扇 そうそう、宇垣一成だ。あれは、私の同志ですから。堀場と、宇垣一成……。

宇垣一成は、昭和二年四月～同十二月朝鮮総督臨時代理、六年六月～十一年八月朝鮮総督を務める（前掲『日本陸海軍総合事典』二二三頁）。

伊藤 あれ？ 不思議な感じだな。

扇 堀場は、私の隣村の緑井という大きな村の婦人科の婿ですよ。あれは、私と意志が通じるんです。好きな男だった。

堀場との地縁に類する関係については、確認できない。堀場自身は愛知県出身（前掲『日本陸海軍総合事典』一二九頁）。

伊藤 そういう人たちが、松前さんを救うために動いてくれたわけですか。

扇 松前さんを救うためには、海軍武官が……。

伊藤 いやいや、陸軍の中で、そういう人たちが動いてくれたわけですね。

扇 そうそう、動いてくれた。それが、そのつもりで、決して松前を危ない所に出さなかった。

前掲「松前二等兵召集事件の背景」三八頁によると、中原茂敏、戸村盛雄らが、この件に関する功労者。中原は陸士三九期、東京帝大工学部電気工学科を卒業後、大阪造兵廠付（弾丸工場長）、造兵廠員を経て、昭和十四年一月軍務局課員（軍事課）、二十年四月第一五方面軍兼中部軍管区参謀。戸村は陸士四〇期、昭和十四年十二月参謀本部員（通信課）、十八年八月関東軍参謀を経て、十九年七月南方軍参謀（前掲『日本陸海軍総合事典』九八・一〇三頁）。

伊藤 先生は、赤松さんとは親しかったですか。

扇 ああ、赤松とは親しいんですよ。

伊藤 どういう人ですか。とにかく東條の崇拜者だと言われていましたけど……。

扇 いや、東條の秘書官になったかな。

伊藤 東條の言うことだったたら、何でも……という人のように聞いていますが、必ずしもそうではないわけですか。

扇 それは、高雄にいる海軍の駐在員を使つて、こつそり二番船に乗せたんです。

伊藤 赤松さんは、やっぱり仲間ですか。

扇 赤松は、フィリピンにおつたですからな。あれは、「我が党」の士（笑）。

前掲「松前二等兵召集事件の背景」三八頁によると、戸村氏がフィリピンにいて、松前氏の召集解除に向けた工作をしたという。この時期、赤松は昭和十九年七月軍務局軍務課長、昭和二十年二月歩一五七連隊長を務めている（前掲『日本陸海軍総合事典』五頁）。

伊藤 やつぱり、いろいろお聞きしてみるものだね。今のは、思いがけない話だった。ちよつと、びつくり……。

扇 「我が党」の士の宇垣一成には、私は宇垣纏さんと共に、京城で会っているですからね。

話の流れからすると、宇垣一成の朝鮮総督在任期間中（昭和二年四月～十二月臨時代理、昭和六年六月～十一年八月総督）のことか。この時期、宇垣纏は第二艦隊参謀（昭和六年十二月～七年十一月）、のち海大教官、『八雲』艦長等を経て、前出のように軍令部一部長を務める。扇氏は、『奉職履歴』によると、昭和六年五月～七年十二月第二艦隊参謀兼副官、のち海大甲種学生仰付となっている。ただし、両者が第二艦隊所属中に朝鮮に赴いたかどうかは不明。

私的な人間関係の中で

伊藤 あと、「南政会」という名前が出て来るんですけど、「南政会」というのは何ですか。

扇 これは、ややこしいんだ。待つて下さいよ……。

伊藤 南方政務部の人たちですか。

扇 南方政務部……。何という名前が付いたかな。丸亀の奥さんが名前を付けたんだ。

「丸亀の奥さん」とは誰か。

伊藤 南政会じゃないんですか。

扇 コクナン……。アルゼンチンを相手とした貿易会社をつくったんですよ。これが、ややこしいんだ。アルゼンチンの大統領の奥さん、エバ・ペロンさんの弁護士をやつて、非常に仲が良かった人がおりましてね。それで、アルゼンチンとの貿易を狙つて会社をつくったんですよ。実質的には、私がつくったんです。それを、丸亀の奥さんが難しい名前を付けて、コクナン……。

伊藤 名前はいいですよ。貿易をやったんですか。

扇 アルゼンチンと貿易をした、そういう会社を、私がつくったんですよ。

伊藤 それは、いつのことですか。戦争が終わつてから？

扇 戦争が終わつて直ぐのことで、これは相当儲けたですよ。

扇（暢威）今のご質問は、戦後の話ですか。

伊藤 戦後です。だから、たぶん南方政務部の人々の会だと思ったんですけど……。

扇（暢威） 日伯なんとかと言う会社はありませんか。

扇 ああ、それは貿易会社よ。

扇（暢威） それと、この「南政会」は同じですか、違うんですか。

扇 「南政会」……。

扇（暢威） いま、「南政会」の話をしています。

扇 それは、違うんだ。

伊藤 これは確か、南方政務部ですよ。

扇 「南政会」というのは、南方政務部。

前にも註で記したが、「霞会・南政会」名簿（「扇一登氏関係文書」五一）によると、南方政務部関係者の会が「南政会」で、調査課関係者の会が「霞会」。平成七年六月現在では、このなかに丸亀姓は見当たらない。

扇（暢威） いや、さつき昼食の時に、「日伯なんとか」という会社があつて、俺がつくつたんだ」と。それで、今の丸亀という名前が、ちょっと出て来まして、それと一緒にやつたんだ、と。話が交錯しているから、本当のことはよく分からない。

伊藤 分かりました。この前も貿易会社の話が出ましたので、確か、その話ですね。何を買ったり売ったりしたんですか。

扇 ええと……。貿易は何でもやつたんですよ。

伊藤 日本から輸出するものがありましたか。

扇 あつたですよ。よく売れて儲かつたですよ。

伊藤 おかしいな（笑）。扇さんは、社長になつたんですか。

扇 うん、私が社長。

扇（暢威） あんまり聞いたことがないな（笑）。

扇 私が社長で、海軍がなくなつて収入がないから、その月給を取つておつたんです。幾ら貰つとつたか忘れたけど、それで結構食つて来たんですよ。

伊藤 高木（惣吉）さんとは、戦後も、ずっとお付き合いがあつたんですか。

扇 戦後、ずっと……。

伊藤 でも、高木さんは「反省会」なんかには名前が出ていないですね。

扇 高木さんは、「反省会」……。

伊藤 ちょっと、系統が違うんですか。「反省会」に入っている人と、入っていない人がいますね。

扇 高木さんは、外務省の嘱託になつたですよ。

戦後、高木惣吉氏は外務省の非常勤嘱託を務めている。

伊藤 はい、はい。高木さんの手紙の中に、「虎の門会の出席を来年からやめたい」というのがあります。この「虎の門会」というのは、この前お話があつた「霞会」と同じですか。

扇 そうそう。「虎の門会」というのは仮の名前で、何か名前がなくちゃ、どうも話にならんからと言うので、私が付けたんですよ。「虎の門会」と言つてね。

伊藤 スタンプが、昭和五十年です。この中に、「始まつてから十余年」とありますから、昭和三十年代につくつていらっしゃるんですね。海上自衛隊の幹部と、先生たちの会なんですね。

扇 そうそう。月に一回やつたんです。

伊藤 それで、「自分が年長の故にて、諸賢の右に座する光榮に浴して参りました」とあるから、高木さんは一番の長老だったんですかね。

扇 あの人、病気がちで来られなくなったからね。

伊藤 やつぱり、病気がちということですかね。あと、あれ……と思ったのは、鈴木成高さんの手紙がずいぶんありますね。鈴木成高さんとも、戦後ずっとお付き合いがあったんですか。

鈴木成高、西洋史学者、戦前は京都帝大文学助教授等を務めるが、昭和二十六年十月教職追放。のち東京教育大学講師を経て、昭和二十九年四月〜五十二年三月早大教授（前掲『日本近現代人物履歴事典』二八二頁）。「扇一登氏関係文書」（二二―三四）に、昭和五十一年十月十一日付「鈴木書簡」がある。

扇 これは、京都の田辺元さんの高弟ですから、ずっとですよ。私は、京都に何遍も行つとる。京都学派を海軍に引つ張り込むというのをやったわけで、高木さんも行つとる、私も行つとる。東山の料理屋で、西田幾太郎先生のお弟子さんや教授など全部集めて――招待して、お願いしたんです。「京都学派を、海軍のほうへ頼む」と言つてね。

伊藤 戦後は、私的な関係ですね。

扇 戦後は、私的な関係になりました。

伊藤 お付き合いが、ずっと続いた？

扇（和子）鈴木成高先生は、たまたま私が大学の卒論を書く時の恩師なんです。それで、私が結婚した時に挨拶状を出したら、「扇」となっていたわけです。先生は、「さて、扇というのは、まさか、あの扇さんではないだろうな」と言つて調べたら、住所まで一緒だったので、直ぐ私に、「お舅様の扇一登さんとは、昔から懇意にしていただいています」というお手紙をくださった。そのこともあつて、逗子のお家に伺つたりして、かなり私も可愛がつていただいたんです。

扇（暢威）結構、プライベートになつちやつたんです。

扇 深い関係があるんですよ。（彼女は）鈴木成高さんの教え子ですからね（笑）。

扇（和子）偶然だったんです。私も、びっくりしました。

扇 卒業論文から何から、みんな鈴木さんに……。

影山 ご縁ですね。

扇（和子）まさに「猫に小判」で、その頃、そんな偉い先生とは思つていなかったで、もつと教えていただいおけば良かったと思ひました。

伊藤 谷川（徹三）さんなんかも、同じですね。

扇 同じ……。

伊藤 個人的には、ずっとお付き合いになった？

扇 非常に親しい。直ぐ、そこにおつたんですから。

伊藤 住所が書いてないな。

扇（暢威）確か、（杉並区）久我山か三鷹台だった。

扇 家に、何遍も来ました。

伊藤 藤村義朗さんは？

扇 これは、馬鹿ですよ（笑）。こないいい加減な奴は、おらん。私が、「スイス工作」をやらせた男です。これは、海軍兵学校を一番で出た男です。ところが、大阪人の狡い、嘘ばかりいう所がある。こいつの言うことは、半分は嘘なんです。これの悪口を言い出すと、もう切りがないです。

ところが、やる時には、やるんですよ、こいつは。そういう能力を持っているんだ。だから、私はベルリンに行く前から、志村という藤村の同級生で、一番、二番を争ってきた男から話を聞いて、研究したんです。志村が、軍務局の私の前隣にいたんです。これは、国策研究

会と言ったか、国防研究会と言ったか、陸海軍でつくったんですよ。そこへ、志村と藤村とが一緒に入った。

第五回聞き取り（二二―二二頁）を参照。

その当時から、藤村の言うことは半分は嘘です（笑）。そのことを、私は志村君から詳しく聞いていた。しかし、実行力があるから、非常に興味を持って研究していったんです。ベルリンに行く前に、とことんまで研究した。だから、それを覚悟の上で、実行力があるから、藤村を私の「筋」に乗せてやってやろうと思って、ベルリンに行ったんです。とうとう、それに成功したんですよ。これに「ダレス工作」というのをやらせたんです。

伊藤 中村悌次というのは？

影山 海上幕僚長をやられた方です。六七期じゃないでしょうか。

伊藤 記憶にありますか？

扇 あります、あります。これは、やっぱり海軍兵学校一番ですよ。非常に親しくしとった。

伊藤 さっきのお話で、ピンからキリまでの、キリのほうではなくて、ピンに近い？

扇 これ、この間、亡くなったです。

影山 それは、内田（一臣）さんですね。中村さんは御元気で、内田さんが、この間亡くなられました（平成十三年七月逝去）。

伊藤 内田さんと混同しているのかな。湯川さんが調査課の時でしょう。

扇 湯川盛夫さんは外務省の条約局二課の課長で、こいつとマカッサルに行ったんです。環境科学なんていうのを……。マカッサルに行つて、ずっと……。今もって、この人の奥さんから手紙が来ています。

今でも来とる。

湯川盛夫については、第六回聞き取り（二八一頁）参照。

環境科学については、第三回聞き取り（七八頁）の註を参照。

伊藤 この人は、調査課の時代にお知り合いになったんでしょう。

扇 そうです、そうです。

伊藤 調査課以来、ずっとお付き合いになるんですか。

扇 この人、軍令部へ勤めとった。「二年現役」で、外務省のピカ一ですよ。

伊藤 そういう関係とは知らなかった。……この方（伏下）は？

伏下哲夫は第五回聞き取り（一一六頁）の註を参照。

扇 これは私のクラス、同期（大正十二年七月卒業）ですよ。経理学校を一番の卒業で……。

伊藤 それから、この人も調査課でしょう。

扇 そうです。軍令部の英国課におった人でしょう。

伊藤 この人、「九五会」と書いているから、何だろう。

扇 「……九五会に出てみたいと思いましたが……」。「九五会」というのは、何だろうな。九五五年の卒業生というわけじゃないし……。経理学校を出ているんですから……。

伊藤 経理学校のほうか。伏下さんの名前は……。

扇 これの奥さん、まだ生きとるですよ。

伊藤 伏下さんは、調査課にもいたでしょう。確か、調査課のいろいろな書類の中に伏下さんの名前が出て来ますけど、扇さんより後ですか。一緒に調査課にいたことはありますか？

扇 伏下は、とにかく軍令部の英国課の課員だった。

伊藤 この人は、どういう人ですか。

扇 宮崎勇は、鎌倉で……。海軍とか——陸軍の関係もあるけれども……。坐禅の先生ですよ。

宮崎勇については、第六回聞き取り（二七九—二八〇頁）の註を参照。「虎の門会」の幹事。

伊藤 海軍の人でしょう。

扇（和子） 外務省の方でしょう。

伊藤 でも、海軍士官のようですよ。

扇（和子） その時は、そうですね。亡くなるまで、よくお電話くださったのは、外務省の……。

扇 これは、私の研究者ですよ。私を、とことんまで……。

伊藤 外務省ですか。

扇（和子） よく「外務省の宮崎です」って言い方で、お電話をくださったっていましたね。

影山 兵学校の名簿を調べてみましょう。

扇（暢威） 兵学校じゃないかも知れないね。外務省と聞いています。

扇 鈴木先生の、ね。

扇（暢威） 鈴木先生は関係ないよね。

扇（和子） 関係ないと思いますね。お誕生の時に、必ず祝電をくださったり……。

扇 今でも手紙が来とるです。百歳のお祝いを贈って来たから……。

扇（和子） いや、もう亡くなっていますね。「外務省の宮崎です」と。

宮崎勇、海兵五八期は、前記（二八〇頁）の註にあるように、戦後、外務省アメリカ局安全保障課防衛班長のポストにあった。

影山 鎌倉で、坐禅をやっておられた方ですね。

伊藤 この人の手紙に、「昭和三年、私は兵学校の生徒として京都へ

参り、昭和天皇のご祝典に参列いたしました」と書いてありますので、あれっと思ったんですが……。いや、宮崎勇って、別の有名な人がいるでしょう？

影山 石原莞爾の？

伊藤 いやいや、そうじゃなくて、経済企画庁の長官をやった人ですね。

扇（和子） その方ではないですね。

伊藤 如何にもありそうな名前ですからね（笑）。あれあれと思って、中を見たら、そんなことが書いてあったから。山梨（勝之進）さんの崇拜者みたいですね。

山梨勝之進、海兵二五期、海軍次官、軍事参議官等を経て、昭和十四年十月二十一年十月学習院長、二十一年十月二十三年十月東宮御教育参与（前掲『日本陸海軍総合事典』二四二頁）。

扇 そうそう。

伊藤 先生のお話の中には、山梨さんの名前は出て来なかったように思いますが、山梨さんとのご関係は、どうだったですか。

扇 山梨さんは、直接は関係ないですよ。

伊藤 でも、人柄とかについて、何か感じる所はありませんでしたか？

扇 ありますよ。山梨さんは、海軍にとっては良識の権化ですからね。そう思われているんです。私も、そう思っている。

伊藤 扇さんも、そう思っておられるんですか。

扇 ええ。

伊藤 それは、人格的なものですか。

扇 人格的なもので、あれは昭和天皇のご養育係をやった。学習院長

をやったり、偉い人ですよ。尊敬しています。だけど、私とは直接、
どうこうということはないです。

「日記」の評価をめぐって

伊藤 「五一会」のことですが、ああいう同期会というのは、卒業した時に直ぐに会が出来るわけですか。

扇 そうです、クラス会として発足します。同期会ですね。

伊藤 『五一』という雑誌を見たら、第二号が大正十四年なんですね。
「扇一登氏関係文書」二二一。

扇 「我々のクラス会を『五一』と称す」と。それは、私らの練習艦隊で、外国へ遠洋航海に行った時の司令官・斎藤七五郎——この人が「五一会」という名前を付けてくれたんです。五一期ですね。

斎藤七五郎、海兵二〇期、明治末期にアメリカやイギリスに駐在した後、大正元年十二月海大教官、三年五月人事局員、五年四月人事局一課長兼二課長、五年八月『八雲』艦長、六年十二月第三艦隊参謀長、七年十二月少将・呉鎮参謀長、九年十二月軍令部一班長、十一年十二月中将・第五戦隊司令官、十二年六月練習艦隊司令官、十三年四月軍令部次長、大正十五年七月死去（前掲『日本陸海軍総合事典』一九五頁）。

伊藤 大正十四年に第二号が出て、第九号が昭和二十七年に刊行されています。ずっと繋がっていて、最後の一人が先生ということで、さっきの「現況」という文章になるわけですね。

第九号は、「扇一登氏関係文書」二一八。

扇 そうそう。

伊藤 分かりました。『あの海あの空』という冊子は、この会の冊子なんですか。

「扇一登氏関係文書」二一九など。

扇 うん、みんなで書き集めた思い出なり何なり、何もかも、みんな載っています。

伊藤 最近の状態とか、そういうことを書いていますね。思い出とか、いろいろ……。

扇 何でも書いてある。

伊藤 先生も、何回か書いていますね。

扇 みんな書いとるですよ。

伊藤 今は、もう「五一会」自体はないわけですね、先生一人だから。だから、別な会に……。

扇（暢威）名前は残っている。「五一会」なんとか……。

伊藤 「鈴蘭会」とか「若葉会」とか……。

扇（暢威）「青葉会」かな。

伊藤 「青葉会」でしたか。……この前拝借した史料を見て、お伺いしたいと思ったことは以上です。

とところで、岡さんの遺言なんていうのは、見たこともないですよ。

扇 このことは、申し上げておきたいですよ。私は私で、この大戦争の歴史について、「岡日記」と「藤井日記」を、自分の歴史眼と言いますか、自分のものとして確認してみたい、追究してみたいと思って、その両方を写し取ったんですよ。

伊藤 「岡日記」も写しましたか？

扇 「岡日記」を写したんです。それから、「藤井日記」を写した。

伊藤 「藤井日記」は写したものをを見せて貰いましたが、「岡日記」は、未だ見つからないとおっしゃっていましたね。

扇 それが、物置の一番奥にあるんだ。

扇（暢威）探しますから。

扇 今日、それをご覧いれようと思っておったら、物置にいろんな物が一杯あって、そこまで届くのには容易じゃないんですわ。

伊藤 切れ端でも見付かったら、お願いします。

扇 私は私だけで、それを掴んでおきたいと思ってね。それは、私のために、私が密かに写し取ったんですからね。写してみたら、ろくなことは書いていないんだ（笑）。「岡日記」も何にも……。何があるかと思つたら、つまらんことを書いてあるんですよ。あの人の満鉄総裁時代のこととか……。鮎川義介の話したことを書いたものとか、そんなものがあるんですよ。「藤井日記」には、まだ見る所がありますが、「岡日記」なんか、何にもありません（笑）。どこが、歴史をつくつたあれかと思うぐらい、つまらんものなんです。

鮎川義介は昭和十二年十二月十七年十二月満洲重工業開発株式会社総裁を務めているが、満鉄の総裁は務めていない（前掲『日本近現代史人物履歴事典』二二―二三頁）。

伊藤 岡さんの遺言があるでしょう。百年間は非公開、と。

扇 そうそう、遺言があるんです。岡さんが、私に頼んだ。

伊藤 百年も生きているわけがないじゃないですか。

扇 内容はないんですよ。私が見たところ、何にもない。もう一遍、見直してもみたいですけどね。それを私は、きれいに写し取ったんです。

伊藤 「藤井日記」を見ても、非常に綺麗な字で、きちんと書いてお

られますよ。「藤井日記」は私がお借りして、コピーを取りまして、全部お返しに上がったはずですよ。ですから、先生が写されたものは、どこかにあるんです。

扇（暢威）そのコピーは、先生の手元にあるわけですね。

伊藤 コピーはあります。でもね、これは藤井さんの「日記」ですから、藤井さんのご遺族の許可がなければ、印刷したりは出来ない。ですから、藤井さんと岡さんのご遺族のアドレスを教えてください。

……ということで、インタビューを終わりにしたいと思います。どうも本当に、長い間有難うございました。

〈了〉

あとがき

私事に渉るが、扇一登氏との関わりについて、最初に述べておきたい。

私が東京大学での昭和五十年・五十一年度の講義を纏めた『昭和十年代史断章』（東京大学出版会、昭和五十六年九月刊）は、『矢部貞治日記 銀杏の巻』（読売新聞社、昭和四十九年刊）を中心に昭和十年代の政治史を略述したものであったが、矢部が海軍省調査課で高木惣吉が組織した海軍のブレーン組織に深く関わっていたことから、それについてもかなり触れることになった。その高木の下で実質的に組織の運営に関わっていたのが扇氏であり、杉並区浜田山のお宅に伺って、多くの懇切なご教示を得たのであった。

この時に、氏のご経歴をお聞きして、氏が調査課勤務の後、昭和十八年十月にドイツ駐在を命ぜられ、潜水艦によるドイツ行きという困難な体験をされ、その間に日記を記されていたことを伺った。そこで、当時『中央公論 歴史と人物』の編集に携わっていた故平林孝氏と相談して、改めてインタビュを申し込み、それを同誌の昭和五十二年八月号に「ドイツへの潜航一万五千方イリ」と題して掲載させていただいた。その時に、氏は七十六歳であった。この年には、また東京大学百年史編纂の関係で、鈴木（狐塚）裕子さんと一緒にお訪ねして、東大の南方自然科学研究所について、ご記憶のことをお教えいただいた（翌五十三年二月、共同で「南方・立地自然科学研究所の設立と廃止」という文章を、『東京大学史紀要』第一号に執筆した）。

その後、扇氏の縁で故藤岡泰周氏と知り合い、そこから高木惣吉の相続人である川越重男氏と連絡が出来、それが「高木惣吉関係文書」の国会図書館憲政資料室への寄贈となった。それがまた、多くの友人達との作業を経て、平成十二年七月に『高木惣吉 日記と情報』をみずす書房から刊行する出発点になったのである。以来、扇氏からは折に触れて、ご教示を得ていた。

平成十年十月に、軍事史学会が『大本営陸軍部戦争指導班機密戦争日誌』（全二巻、錦正社）を翻刻し、それに続いて軍事史の重要な史料の翻刻をしようということになった。そのことでご教示を得るために、平成十一年十二月に扇氏をお訪ねしたが、その時に、かつて氏が筆写された「藤井茂日記」等をお借りして、コピーさせていただいた。このことがきっかけになって、翌年、氏にオーラルヒストリーについてご説明し、ご承諾をいただいたのである。

インタビュは、影山好一郎氏（防衛大学校教授）、高橋久志氏（上智大学教授）のお二人と一緒に始めることになったが、実際に第一回を行ったのは、平成十二年十一月十七日であった。この日は広島県でのお生まれに始まり、高等小学校・修道中学・海軍兵学校を経て、海軍士官としての海上勤務や中央での勤務、そしてその間に海軍大学校を卒業されたことや、当時接触された提督の人物評などを伺った。氏は修道中学・海軍兵学校時代を通じて英語に親しんでおられたが、そのことが後年のご活動に大きな影響を与えていたことを、このあとのお話の展開の中で知ること

になった。この時、扇氏は九十九歳であった。お元気であったが、記憶にやや曖昧なところがあるという感じであった。また、多少耳が遠いということもあって、ご子息の暢威氏と、その奥様の和子さんが同席して助けて下さった。かつてコピーさせていただいていた「奉職履歴」を頼りに質問を進めた。

第二回は十二月二十二日で、この日は聯合艦隊参謀として二・二六事件に直面されたこと、軍令部一部長直属の乙部員として、海軍の国策・戦争指導・渉外に関わられ、海軍省の藤井茂・柴勝男と連携して陸軍の方針との調整に苦慮したこと、日中戦争下の昭和十三年から第五艦隊参謀として海南島攻略作戦に従事し、さらに上海海軍武官附として、海南島の対南方前進基地としての確保に当たって、汪政権と交渉して成功したことなどを伺った。第三回は翌平成十三年二月一日で、引き続き汪政権との海南島をめぐる交渉の話や、昭和十六年以降の高木課長の下での調査課の仕事について、そしてドイツ赴任のことなどをお聞きした。第四回は三月一日で、今一度「研究会」を中心に調査課の仕事や、その後の潜水艦でのベルリン行きのお話（潜水艦については、かつて伺っていたので簡略にした）や、ドイツでの語学研修のことなどを伺った。

第五回は四月十二日で、当時のドイツ大使館や海軍武官府の状況に始まって、昭和十九年九月にスウェーデンに旅行し、そこで小野寺信陸軍武官と意気投合した話、しかし二十年二月にスウェーデン公使館附武官に補されたが、ビザが受けられぬまま、ドイツの敗北に伴いスウェーデンへ脱出したことなどを伺った（この日、写真撮影を行った）。第六回は五月十五日で、スウェーデンで不法入国として抑留され（好待遇されたが）、任務に就くことが出来ぬまま敗戦を迎え、二十一年三月に帰国したこと、第二復員省で海軍の残務処理を行い、戦中期の木造船計画で関係した船会社に勤めたことや、自らが社長となって「扇矢資材」という会社を経営するなど、実業の世界に入られたお話、また海上自衛隊に戦前の海軍の伝統を伝えるべしとして組織した霞会（虎の門会）のことなどを伺った。そして、六月二十一日の第七回では、影山氏を中心になって、戦前の海軍について、総括的に色々と質問させていただいた。戦後のことや、海軍関係者の史料のことなども伺った。戦後については、もはや「奉職履歴」で追うことが出来ないの、お宅にある史料を出していただくことにして、それを若干整理した段階で、最終回を行うことにした。

平成十三年七月十六日に黒沢良氏と高橋初恵さんを伴い、お宅に伺って、史料をお預かりして、宅急便で政策研究大学院大学に運び込んだ。大雑把な整理を黒沢良氏にお願いして、それを材料に十月十五日に第八回を行い、海軍反省会や五一会（海兵同期会）などのお話を伺って、終了とした。この戦後のことについては、残念ながら、ご記憶の薄れているところが多く、結局曖昧なご返事で終ったところが少なくない。

明治三十四年生まれのお扇氏は、この年、満百歳になられたのであった。旧帝国海軍士官の最後の生き残りである。お付き合いの最初の頃、私を迎えて下さった幸子夫人は既にご病気で、老人ホームに入っておられ、お目にかかることが出来なかった。なお、暢威氏夫人の和子さんの尊父は、公安調査庁次長を務められた関之（せき・いたる）氏であった。扇氏のオーラルヒストリーが終ったら、是非、関氏にお話を伺いたいと申し入れてあったのだが、残念ながら平成十三年四月二十五日に亡くなられた。そこで、お願いして、関氏のご遺族から残された史料をお預けいただき、現在、政策研究大学院大学で目録を作成中である。

インタビュー終了後、扇氏には速記録の確認をお願いしたが、ご高齢の氏には大変な作業であったと思われる。それが終わったところで、お預かりした史料等を使って、差波（鈴木）亜紀子氏に丁寧な補註をつけていただいた。また、不明な箇所については、佐藤純子さんにも調査をしていただいた。その上で、最終的な編集作業は安田泉氏に託した。こうして、本冊子が出来上がったのである。

最後に、扇氏を始めご家族の方々、一緒に質問して下さった影山・高橋の両氏、史料の整理をして下さった諸氏、記録の整理の段階で手伝って下さった諸氏、それにスケジュール調整などを担当された三條薫さん、アシスタントの塩原有子さんに、心からのお礼を申し上げる。

平成十五年七月十五日

政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

本書には、近年は使われなくなった表現や記述が見られるが、大正―昭和前期の口述史料としての記録性を重視する観点から、修正することなく記載したことをお断りします。

平成 15 年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕

研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕

発行：2003 年 9 月 25 日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162 - 8677 東京都新宿区若松町 2 - 2

Tel : 03(3341)0458 Fax : 03(3341)0446

<http://www.coe-oralhistory.grips.ac.jp>